びらとり
平取町文化的景観解説シート

2007(平成19)年 7月26日選定　重要文化的景観(国文化財)
2016(平成28)年 3月 1日(二次選定)　G区域
2018(平成30)年10月15日(三次選定)　H区域

「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」



A：ピラウトゥルナイ区域
北海道日高地方における里山的景観



B：二風谷区域
アイヌの伝統を伝える山野と集落の景観

C：芽生区域
峡谷との対照が際だつ戦後開拓地の景観



D：宿主別区域
牧野・牧野林とスズラン群生地の景観

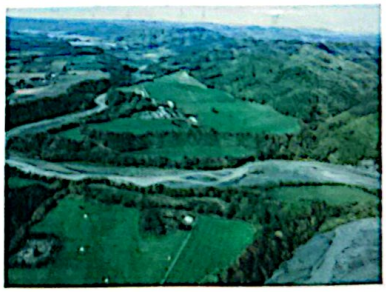
E：額平川区域
自然とアイヌの伝統、開拓の営為が織り成す多文化な河川景観

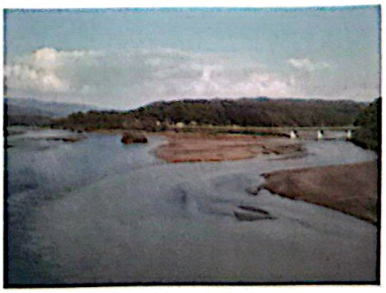
F：沙流川区域
自然とアイヌの伝統、開拓の営為が織り成す多文化な河川景観



G：三井沙流山林南区域
IWORを基層としたアイヌ文化伝承及び人々の営みを支えてきた里山的景観

H：アベツ・貫気別南区域
アイヌの生活用具など地域の文化と人々の暮らしを育み創造する森林景観





平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum

平取町文化的景観解説シート　一覧表

番外　アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観

1 「アイヌ文化の里」における生活・生業

2 沙流川の語源と景観

3 松浦武四郎がみた沙流川

4 沙流川の古道を知る

5 アイヌ語地名と景観認知

6 アイヌ語地名にみる植物利用

7 ポロシリ

8 チャシ

9 コタン（集落）立地の歴史的連続性

10 オキクルミの伝承について

11 フリの伝承地をみる

12 沙流川流域にみる災害の歴史

13 トパットゥミ（夜襲）伝承にみる沙流川の歴史

14 非文字による情報の文化的景観

15 アイヌ口承文芸の今日的継承

16 アイヌ民具に学ぶ
-博物館のアイヌ生活用具コレクション-

17 アイヌ古式舞踊

18 シシリムカアイヌ文化祭

19 平取地域イオル再生事業

20 食文化の継承と森林利用

21 寒冷寡雪な地方的特色とアイヌの伝統的季節感

22 沙流川流域の代表的な樹木

23 ハルニレをみる

24 基本的樹種構成の継承と林相の変化

25 モシリエルウシ

26 並木道を歩く

27 ニシパの恋人

28 びらとり和牛

29 軽種馬牧場

30 クロム鉱山の歴史を学ぶ

A：ピラウトゥルナイ区域
北海道日高地方における里山的景観

31 びらとりの語源について

32 オキクルミ伝承のなかのチノミシリ

33 義経神社

34 クリ（ヤムニ）について

35 イザベラ・バード

36 山林利用の今・昔

37 イオル水辺空間と水際の植物

73 ブロニスワフ・ピウスツキのみた平取

75 ジョン・バチェラーと平取聖公会

B：二風谷区域
アイヌの伝統を伝える山野と集落の景観

38 二風谷区域のアイヌ語地名を巡る

39 コタン（集落）の景観

40 旧マンロー邸

41 アイヌ工芸技術の継承　-男の手わざ-

42 アイヌ文様　-女の手仕事-

43 ウカエロシキ

44 オプシヌプリ

45 ポンカンカンチャシ跡とその周辺

46 二風谷の山林をみる

47 マカウシの滝　-ファミリーランド周辺散策-

71 二風谷アットゥシについて

74 沙流の動物相とアイヌ文化継承

C: 芽生区域

峡谷との対照が際だつ戦後開拓地の景観

48 芽生のアイヌ語地名

49 芽生の文化的景観とその魅力

50 芽生の開拓史

51 戦後開拓について

52 開拓農家の家屋

53 北海道の開拓建造物　-ギャンブレル屋根-

54 サイロのある景観

55 芽生の開墾と湿地性植物

56 段丘面に広がる耕作地

57 芽生の樹木をみる

D: 宿主別区域

牧野・牧野林とスズラン群生地の景観

58 牧野の今・昔

59 すずらん群生地について

E: 額平川区域

自然とアイヌの伝統、開拓の営為が織り成す多文化な河川景観

60 オキクルミのチャシとムイノカ

61 オキクルミ伝承にみる植物利用

62 ニオイチャシ跡とその周辺

63 オキクルミの投げ槍伝承

64 額平川のアイヌ語地名と河岸段丘

65 額平川中流域の農村景観

F: 沙流川区域

自然とアイヌの伝統、開拓の営為が織り成す多文化な河川景観

66 チプサンケ

67 ペテウコピの景観

68 物質循環のインターフェイス

69 流送の歴史　-沙流川流域の造材-

70 沙流頭首工

72 沙流の水辺とペカンペ(ヒシの実)

アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観

文化的景観とは

文化財保護法の中で「地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの」と定義づけられています。

文化的景観は日々の生活に根ざした身近な景観です。日本列島で培われてきた暮らしの類型として農村や里山、水郷といった地域の姿が重視されることから、一般庶民の文化財とも理解することができます。



写真１　二風谷区域の文化的景観。地域住民の暮らし(手前側)とアイヌ文化継承(奥側の博物館とチセ群等)において、地域の森林(背後の山林･河畔林)が果たす役割は大きい。今日においても食文化やもの作りの素材供給地として利用され続けている。近年は有用樹木の植栽や育成補助を通して、階層構造の複雑な森林植生への誘導が行われている。

平取町の文化的景観

平成16年度の文化財保護法の一部改正に伴って重要文化的景観の選定制度が始まって以降、平成18年1月の「近江八幡の水郷」(滋賀県)を皮切りに、令和元年10月現在で65件の重要文化的景観(国文化財)が選定されています。

平取町では文化的景観の特性・構成要素の把握に向けた調査を平成17年度から約２カ年にわたって実施しました。そして平成19年7月26日に「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」として、全国で３カ所目の重要文化的景観に選定されました。

選定申出にあたっては、沙流川流域で育まれてきたアイヌの伝統を基層とし、近代以降の生活、産業変遷・土地利用で形成された多文化な景観であることを特性とする保存計画が策定されています。



写真２　沙流川区域の文化的景観。沙流頭首工(1915年完成)は、沙流川中～下流域における農業用水の供給施設である(1997年に取水機能が二風谷ダムへ移行)。背後のペンケトコム･パンケトコム(こぶ状の山:アイヌ伝承地)と沙流川、頭首工が輻そうするこの場所(二風谷)は「アイヌの伝統と近代開拓」を象徴する視点場である。　mc 442 707 003

何をもって文化的景観とするか

日本の文化財保護法による重要文化的景観の選定基準(資料)をみると、現在も生きている景観地を対象とし、生業・生活の継続性に力点を置いていることが分かります。

平取町においては森林の利用(写真１)、沙流川の利水及び文化振興(写真２)、戦後開拓による農地景観の維持(写真３)、家畜放牧のための牧野の継続的利用(写真４)のほか、今日的なアイヌ文化振興の姿、旧マンロー邸の利活用などが特徴的に当てはまります。

一方、世界遺産で定義されている文化的景観は、現在、生業・生活が営まれている景観と合わせて、かつて形成されながらも現在は生業・生活が営まれていない景観も含まれています(参考：奈良文化財研究所景観研究室ＨＰ)。

平取町でいうと、自然的要素と宗教的、文化的な関連が深い

アイヌ伝承地やチャシなどがこれに当たります。これらは地域の暮らしの積み重ねの中で培われ、現在も住民の想いやアイヌ口承文芸に継承されています。こうしたアイヌ伝承地・伝統文化を景観特性の中に位置づけることで、沙流川流域の風土・環境をより深いものとして捉えていくことができます。

また、これらを日本の文化財体系の中で「名勝」「埋蔵文化財包蔵地」などとして保護していく仕組みもあり、こうした色々なカテゴリーを組み合わせながら文化的景観を保全することが、地域の未来を考えるうえで重要になってくると考えられます。

資料　重要文化的景観選定基準(平成17年文部科学省告示第46号)

一　地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された次に掲げる景観地のうち我が国民の基盤的生活又は生業の特色を示すもので典型的なもの又は独特のもの

(一)水田・畑地などの農耕に関する景観地
(二)茅野・牧野などの採草・放牧に関する景観地
(三)用材林・防災林などの森林の利用に関する景観地
(四)養殖いかだ・海苔ひびなどの漁ろうに関する景観地
(五)ため池・水路・港などの水の利用に関する景観地
(六)鉱山・採石場・工場群などの採掘・製造に関する景観地
(七)道・広場などの流通・往来に関する景観地
(八)垣根・屋敷林などの居住に関する景観地

二　前項各号に掲げるものが複合した景観地のうち我が国民の基盤的な生活又は生業の特色を示すもので典型的なもの又は独特なもの

※平取町の重要文化的景観は「二　複合景観」(一の二・三・五・七・八)に該当

今後の普及に向けて

文化的景観は地域の生活・生業の中で育まれてきた景観であるため、そこに住む人々にとっては見慣れた普通の景観です。しかし、郷土の歴史を客観的に捉えて再認識し、価値を見出すことができれば、地域資源として生かしていくことも可能になります。

現在、北海道の観光振興施策として「イランカラプテ」(こんにちは)キャンペーンや北海道遺産の普及活用が行われています。

平取町の重要文化的景観は、人々の暮らしの中で育まれてきたアイヌ文化や農産物、観光スポットなどを発信し、町をＰＲする大切な財産でもあります。

また、住む人々が町の歴史と文化を学び知ることで、郷土に誇りと愛着をもって生活し、先人が築きあげた財産を次世代に引き継いでいくことができるものと考えます。



写真３　芽生区域の文化的景観。1945年以降の戦後開拓によって大規模に開墾された農地が今日においても良好に残っている。当時のブロック製サイロや畜舎も点在し、四季折々の良い雰囲気を醸し出している。貫気別の水田地帯、額平川右岸の峡谷、宿主別の牧野といった周辺地域との対照も芽生の景観を際立たせる魅力である。



写真４　宿主別区域の文化的景観。戦前は軍馬を生産するための林間放牧が行われていたが、1959年以降の大規模な草地化によって現在の牧野景観が形成された。1962年以降の黒毛和牛の導入・生産を機に「びらとり和牛」が町の基幹産業へと成長し、夏山冬里方式の放牧が継続的に行われるようになった。

「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

■文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055-0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828
初　版:2015年7月
第2版:2020年3月

「アイヌ文化の里」における生活・生業

1

関連シート：16、17、39

アイヌ伝統文化の今日的継承

平取町二風谷は、アイヌの伝統が色濃く残る地域として国内外に広く知られています。

二風谷アイヌ文化博物館、平取地域イオル再生事業の施設群やアイヌ工芸品店などが建ち並び、地域の生活と結びつく文化継承が推進されています。

とりわけ博物館周辺で行われているチセ(家)の復元と活用は、地域におけるアイヌ文化の今日を象徴する姿でもあります。

平成20(2008)年度からは、平取地域イオル再生事業のコタン(集落)を拠点とした伝承活動が行なわれています。

順次、チセの建築も進められ、平成25(2013)年度現在で5棟が建ち並ぶコタンとして整備されています(博物館チセ群と合わせると9棟)。

かつては地域社会、家庭で継承されてきたものづくりの技・無形の伝承(口承文芸・舞踊など)も、今日的な生活の変容とともにそのスタイルを変えてきています。

カヤ葺きのチセについても、現在は住居として用いられることはありません。しかしアイヌ工芸の技術習得を目的とした講習会や、アイヌ語、アイヌ古式舞踊等の学習と披露などを通して、幅広く活用されるようになっています。



写真1　平取地域イオル再生事業で整備されたコタン(南側から撮影)。周辺には博物館チセ群、二風谷工芸館などがあり、地域住民によるアイヌ文化継承の拠点となっている。

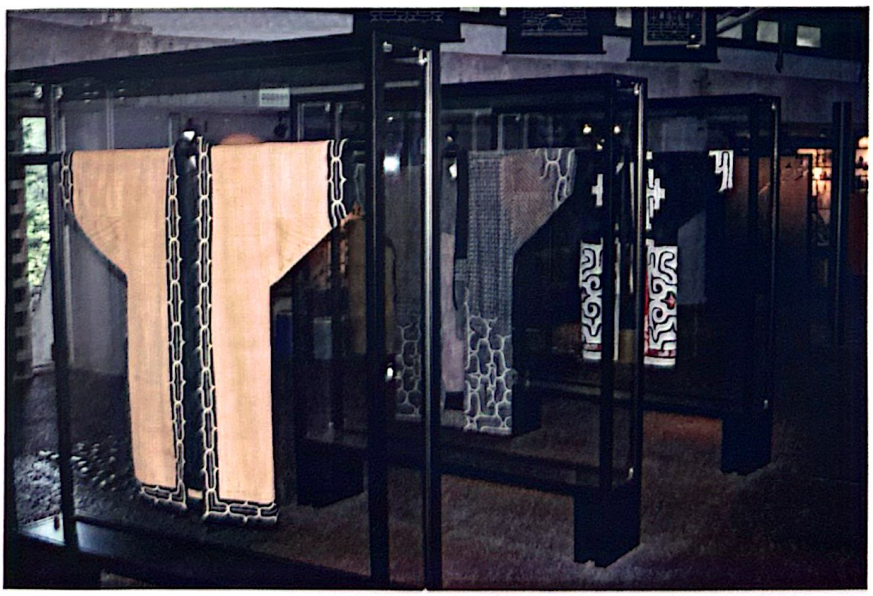


写真2　博物館の収蔵・展示品の一部は、平成14(2002)年に「北海道二風谷及び周辺地域のアイヌ生活用具コレクション」として重要有形民俗文化財に指定されている。

アイヌ文化研究の蓄積

近代以降、二風谷はアイヌ文化研究の主要なフィールドとして注目されてきました。

二風谷に居を構え、この地で生涯を閉じたN.G.マンロー(1863-1942)をはじめ、地元からも萱野茂(1926-2006)という著名な研究者を輩出しています。

博物館と萱野茂二風谷アイヌ資料館には、重要有形民俗文化財(国指定)「北海道二風谷及び周辺地域のアイヌ生活用具コレクション」(両館合わせて1,121点)が収蔵されています。地域の自然、歴史、生活とそれらの複合的関連性を示す貴重な資料群として広く活用されています。

付近には旧マンロー邸(国登録有形文化財)、沙流川歴史館、平取町アイヌ文化情報センター、平取町アイヌ工芸伝承館「ウレシパ」などがあり、徒歩圏内で移動することができます。こうしたアイヌ文化にかかる学術情

報の集積は、北海道内の市町村では類例がほとんどありません。

二風谷は沙流川流域に受け継がれたアイヌ文化を学ぶ拠点として、重要な役割を担う地域といえます。

アイヌの伝統と現代の生活・生業

二風谷に建ち並ぶアイヌ工芸品店は、平取町における観光振興の中心地であると同時に、技術を継承するための拠点でもあります。

そうした技は、野・山や水辺から調達した自然素材の加工によって築き上げられてきました。

オヒョウニレ(アッニ)やシナノキ(ニペシニ)などの繊維で反物を作るための技術、染色した樹皮を織り込むことによるアイヌ文様、山菜や魚を用いた伝統料理の講習会などが、地域の資源利用によって継承されています。

豊かな自然環境を背景に育まれた知恵や教えを活用し、今日の生活を営んでいく方法が模索され続けています。

アイヌ伝統工芸の今日

平成23(2011)年度からは、「匠の道」とするアイヌ工芸振興施策が進められています。

それに伴い新たな商品開発、販売促進にかかる資料作成、体験プログラムの施行、ツアーの誘致などが行われています。

沙流川流域に受け継がれてきた技は、幾つかの公的機会によっても習得・体験が可能になっています。

前述のイオル再生事業をはじめ、平取アイヌ文化保存会で技術を学ぶための講習、アイヌ文様の彫刻体験(木彫コースター：毎年夏休み期間中)などが行われています。地域住民によるものづくりの成果は、シシリムカアイヌ文化祭(毎年２月中旬開催)の会場及び平取町アイヌ文化情報センター、二風谷生活館で展示公開されています。

資料　二風谷のアイヌ工芸振興(概要)

明治26(1893)年	貝沢ウエサナシ、貝沢ウトレントクが、クルミ、カツラ材で盆や茶托を彫り、札幌で販売する。二風谷民芸品販売の始めとされる。
大正12(1923)年	カロプ(火打ち用具入れ)がアツシ織民芸品として、東京勧業博覧会で1個35銭で販売される。
昭和　2(1927)年	貝沢菊次郎がパイプを制作販売する。
昭和28(1953)年	貝沢ハギ、札幌方面にアツシ織反物販売ルートを開拓。二風谷地区女性に副収入の道をひらく。萱野茂、アイヌ木彫民芸品の盆など制作販売をはじめる。
昭和37(1962)年	二風谷生活館に旭川の千里敏美講師を招いて木彫講習会を行なう。二風谷木彫熊の始まり。民芸品生産開始により観光客が増え始める。
昭和39(1964)年	企業組合二風谷民芸設立(現二風谷民芸組合)
昭和40(1965)年	日勝道路開通と共に観光客が増加しはじめ、二風谷商店街、民芸品の店が建ち並び始める。
昭和44(1969)年	アツシ織物生産組合設立
昭和60(1985)年	二風谷商工観光振興組合設立(現二風谷観光振興組合)

※引用：二風谷部落誌編纂委員会編(1983)、平取町史編集委員会(2003)



写真３　地元の工芸家が直接指導するアイヌ文様の制作体験は、博物館の見学と合わせて人気がある。

「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055－0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話：01457-2-2892
FAX：01457-2-2828
初　版：2014年6月
第2版：2020年3月

沙流川の語源と景観

2

関連シート：5、6、37、66、68

沙流川について

沙流川は日高山脈を源に、日高町と平取町のほぼ中央部を流れながら太平洋へと注ぐ一級河川です。

源流から河口域までの高低差は約2,000mで、約104km弱の流路の中で多様な植生をみることができます。

源流域の日勝峠付近に所在するスンク(エゾマツ)やフプ(トドマツ)の原生林は、昭和45(1970)年に「沙流川源流原始林」として国天然記念物に指定されています。



写真１　沙流川の今日的な姿（平取町本町:南側から撮影）。かつては蛇行した流路の周辺に三日月湖と湿地帯が形成され、支流の多くは本流到達前に地中へと浸透していた。

沙流川の呼び名

沙流川はアイヌ語のシシリムカを元々の語源にすると言われています。多くの土砂が流れることによる河口閉塞と解釈される古いアイヌ語の表現です。この言葉の中には、元々土砂の流出が著しい河川であったこと、そのことにより流路が変わりやすかったという特性を見て取ることができます。

沙流地方に伝えられるカムイユカラ(神謡)には、たびたび「シシリムカ」という表現が用いられます。河川特性を巧みに利用した生活と、それによって培われた世界観が文芸作品の中に表現されています。

河川特性とアイヌの暮らし

定期的におこる土砂の浸食と堆積は、アイヌの有用植物を採取する環境を整える効果がありました。そのような場所はピクタトイ(川洲畑)と呼ばれ、アワの種を蒔いて秋に収穫されたと言われています(萱野 1978)。

遠い昔、沙流川に降臨した人文神オキクルミは、脛を割いてその中にヒエの種を隠して持ってきたと伝えられています。地域にとって重要なアイヌ伝承に登場するほど重宝されるヒエは、アワ、キビといった穀類と並び、アイヌの暮らしを支える最重要の食材といえます。主要な料理のひとつであるサヨ(かゆ)に用いられる外、儀式に欠かせないトノト(酒)の原料になります。ピクタトイで比較的容易に栽培でき、水害に遭わない限り秋に収穫が見込めます。収穫後はチセ(家)の横にあるプ(高床式倉庫)に保管し、冬期間に消費される大事な食材になります。

シシリムカの特性は、アイヌ伝統文化の形成を考える上で重要な役割を担っていると言えます。

資料　沙流川の語源一覧

シシリムカ　sisirmuka

吉田(1957)　シシリムカというのは、アイヌの方で沙流川の古名だ(明治44･5･21, ピラトリ, 平村ピカンチャリ)。

萱野(1996)　沙流川の古い名前。si･本当に sir･あたり mu･つまる,塞がる ka･させる。雨が降るたびに上流から土砂が流出し河口が門別の方へ寄ったり鵡川の方へ寄ったりした。それを河口がつまるとアイヌは考えて、あたりがつまる川と名づけた。

田村(1996)　沙流川筋
沙流川の昔の名称はシシリムカと言い、これが正式の名称であるとも言われている。

古地図にみる沙流川の特性

明治29(1896)年に発行された陸地測量部の地図は、当該地における最初の本格的な地図とされています。

今日的な河川整備と低平地の水田造成が行われる以前の自然環境を、広域に見渡せる貴重な情報でもあります。

当時は沙流川が著しく蛇行し、

その周りに広大な低平地が広がっていたことが分かります。支流の小河川は、その多くが本流に達する前に土地へと浸透していく様子をみることができます。所々に三日月湖の存在も確認できます。

こうした水辺の環境は、今日と比較できないほどアイヌ文化にとっての有用資源にあふれていました。サㇻキ(ヨシ)、シキナ(ガマ)の繁茂やペカンペ(ヒシ)、淡水生の二枚貝などが密生している様子が地図から伝わってきます。

地図記号から、河川沿いの低平地および荷菜(にな)村(現在の)あたりから下流の山林は、広葉樹林帯であったことが分かります。また、河畔はさまざまな道具の材料として重宝されるスス(ヤナギ)やケネ(ハンノキ)が多く自生する場所でもあります。

この地図からは、流域住民の支流に対する意識を読み取ることができます。沙流川および額平(ぬかびら)川流域においては、亜別(あべつ)川、貫気別(ぬきべつ)川、仁世宇(にせう)川により多くの支流名称(アイヌ語地名)が付けられています。このことは、土地を利用するためのしるしとして呼び名を付ける意図があったことを意味しています。明治前半代以前の暮らしにおいて、食材やものづくりの素材(樹皮、矢毒の原料等)を確保するための大事な場所でした。

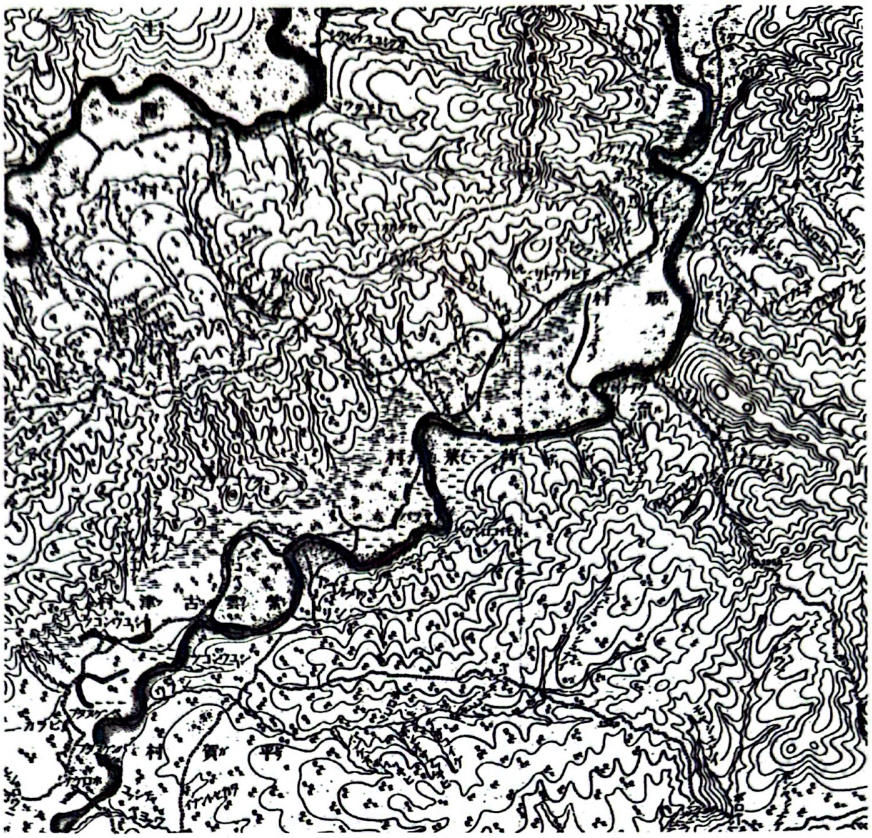
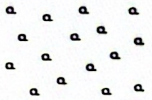


図　明治二十九年製版　陸地測量部　北海道仮製五万分一図「二風谷」の一部。

資料　沙流川の植生を示す地図記号



水で定期的に覆われる低地



広葉樹林

特に亜別川は、平取村からみて沙流川を挟んだ正面に流れ出ている支流ですが、この川の上の一段と小高い山の上にオイナカムイ(アイヌの人文神)が「ザーシコツ※」(城)を作って住まわれたという伝承があります(武隈　1918)。　※チャシコッ：筆者注

地域の人に受け継がれるシシㇼムカへの想いや領域概念、宗教観等を様々な情報に見出すことができます。

現在、流域に広がる低平地は、地域住民の居住域である外、多くの土地が水田やトマトのハウス栽培などの農地に利用されています。

堤防によって河川が管理される今日においては、かつてあったであろうシシㇼムカの様子をみることはできません。しかしアイヌの伝統的な暮らしをしっかりと読み解くことで、河川を取り巻く本来の自然特性とその利用を知ることができます。



写真２　にぶたに湖の水生植物(平成27年9月5日)。湖面にはペカンペ(ヒシ)の群生がみられる。

「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055－0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828
初　版:2014年6月
第2版:2020年3月

松浦武四郎がみた沙流川

3

関連シート：20、64、65、67

近世の北海道と武四郎

松浦武四郎(1818-1888)は、幕末から明治時代にかけて活動した探検家・地理学者で、蝦夷地を探査し「北海道」という地名を考案したことでも知られています(図１)。

18世紀後半以降、江戸幕府は積極的に蝦夷地(現在の北海道)探索や測量をすすめていました。武四郎は弘化二(1845)年から６回、蝦夷地を探索し、後年に日誌・紀行等を刊行しています(資料)。また、千島列島や樺太にも足を延ばし、各地の様子や人々の暮らしを克明に記録しています。

サル場所には弘化二(1845)年と安政三(1856)年、安政五(1858)年の３回訪れています。特に３回目の調査では、沙流川内陸部の沢名や地名、コタンの戸数や人名、年齢、続柄等について、スケッチも交えながら野帳に記録しています。後にはこれを清書して刊行しています。

６回目の蝦夷地探索の翌年である安政六(1859)年には、『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』を書き上げ、更に緯度・経度をそれぞれ１度を１枚とした地図を28枚作成しました(図２はその内の１枚を抜粋)。

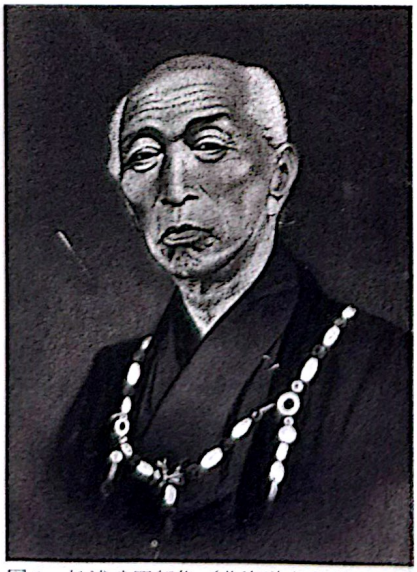


図１　松浦武四郎像（北海道大学附属図書館編 1992）

そこには河川や山脈、地名、道路、集落などが細かく書かれています。これにより伊能忠敬、間宮林蔵、最上徳内ら先人の測量によりほぼ輪郭の整った蝦夷地の地図が、内陸の地勢まで明らかになったのです。

武四郎の名は松浦武四郎源弘で武四郎は通称、諱名(実名)は弘となります。号は「北海道人」「子重」で、『竹四郎廻浦日記』に見られる竹四郎をはじめ「多気志楼」「多気四楼」等は遊び心から用いた当て字とみられます。

安政六(1859)年、幕府の御用を退職後、江戸に戻り『近世蝦夷人物誌』の出版を幕府に願い出ました。しかし函館奉行の「注意を要する書」という添え書き付きで却下されました。この本は武四郎が亡くなってから23年後の明治44(1911)年にやっと刊行されることになります。

明治２(1869)年、明治政府の開拓御用係となった武四郎は、蝦夷地に変わる地名を提案しました。候補は「日高見道」「北加伊道」「海北道」「海島道」「東北道」「千島道」の６つで、最終的には「北加伊道」を元にした「北海道」に決まります。

これは天塩川流域を探検したときに、音威子府の長老から「カイとはこの国に生まれた者のこと」と教えてもらったことから生まれた発想とされています。



図２　武四郎による詳細な沙流川流域図　高倉編(1983) に一部加筆。

武四郎がみた沙流川のコタン

安政五(1858)年に行なった沙流川内陸部の調査では、７月１日に門別川流域から山越えでヌケツベツ村(貫気別)に到着し、乙名(長老)であるシラウエンカのチセに宿泊します。ここから山越えをし「実に蝦夷第一の開け場所也」と感心

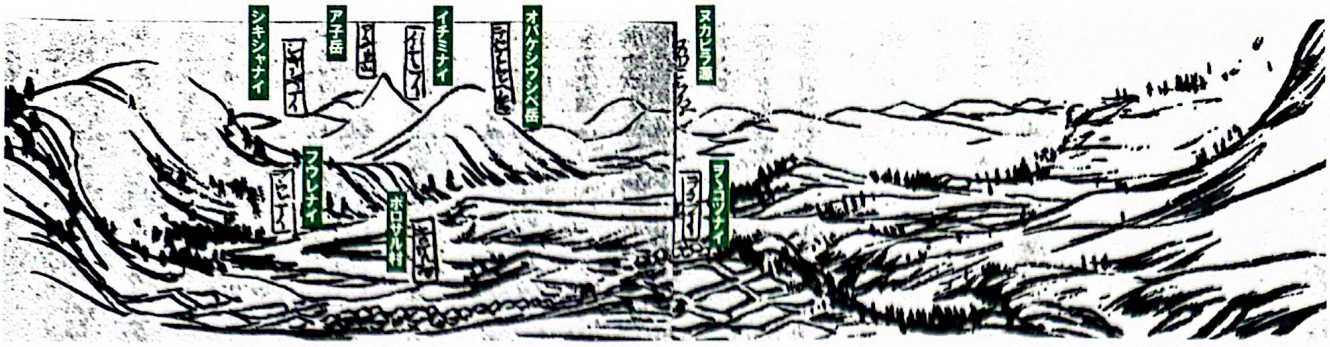


図３「武四郎の描いたホロサル村」（秋葉解読 1985）に一部加筆。

したホロサル村(幌去)に到着します。ここで言う「開け場所」は、文化が開けているという意味とみられます。箒で掃除する女性を見たのは蝦夷地では初めてのことで、「世離れし　保路さる山の　奥えみし　都の手ぶり　いつならひけん」という短歌を残しています(松浦 1869)。

また、ヌツケベツ村(貫気別)では「始て雪隠(便所)を見たり」と記しています。ポロサル村にも雪隠があったことを述べており、箒で掃除する様子と合わせ、和人の文化が浸透していることを感じたようです。

ポロサル村の脇乙名シユクンナの家は「凡十間(約18m)四方も有、家には行器を凡六七十、太刀の百振も懸たり。前に蔵有。年々雑穀凡三十余俵ヅヽとるといへり」と述べられており、当時の豊かな暮らしの一端をかいまみることできます。

23軒ものチセが立ち並ぶこの集落は、ヌツケベツ村10軒、ニヲイ村(南岸・北岸)14軒などと比べても、いかに大規模であるかが分かります。ここでもコタンの様子がしっかりと記録されています。

「粟･稗･菜･大根･眉豆･ニイシヤク豆と云て手なしさゝげ･胡瓜･烟草･蕪･呱ロ巴芋･南瓜等を作りたり」と、農作物の種類をあげています。

スケッチ(図３)にも、格子状に区画された畑とみられる様子が描かれており、当時すでにしっかりとした露地栽培が行われていたことが分かります。

沙流川のいたる所にあったとされる畑の記録は、武四郎の来訪から150年以上を経た今日において、当時の盛んな農耕を伝える貴重な資料になっています。

資料　松浦武四郎による蝦夷地探検とその記録

渡航年		年齢	主な日誌名
1回目	弘化二(1845)年	28歳	初航蝦夷日誌　十二巻 サル場所調査
2回目	弘化三(1846)年	29歳	再航蝦夷日誌　十五巻
3回目	嘉永二(1849)年	32歳	三航蝦夷日誌　八巻
以下、幕府御雇としての報文日誌（百十六巻）			
4回目	安政三(1856)年	39歳	廻浦日記 三十一巻　サル場所調査
5回目	安政四(1857)年	40歳	丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌　二十四巻
6回目	安政五(1858)年	41歳	戊午東西蝦夷山川地理取調日誌　六十一巻 サル場所調査（平取訪問）

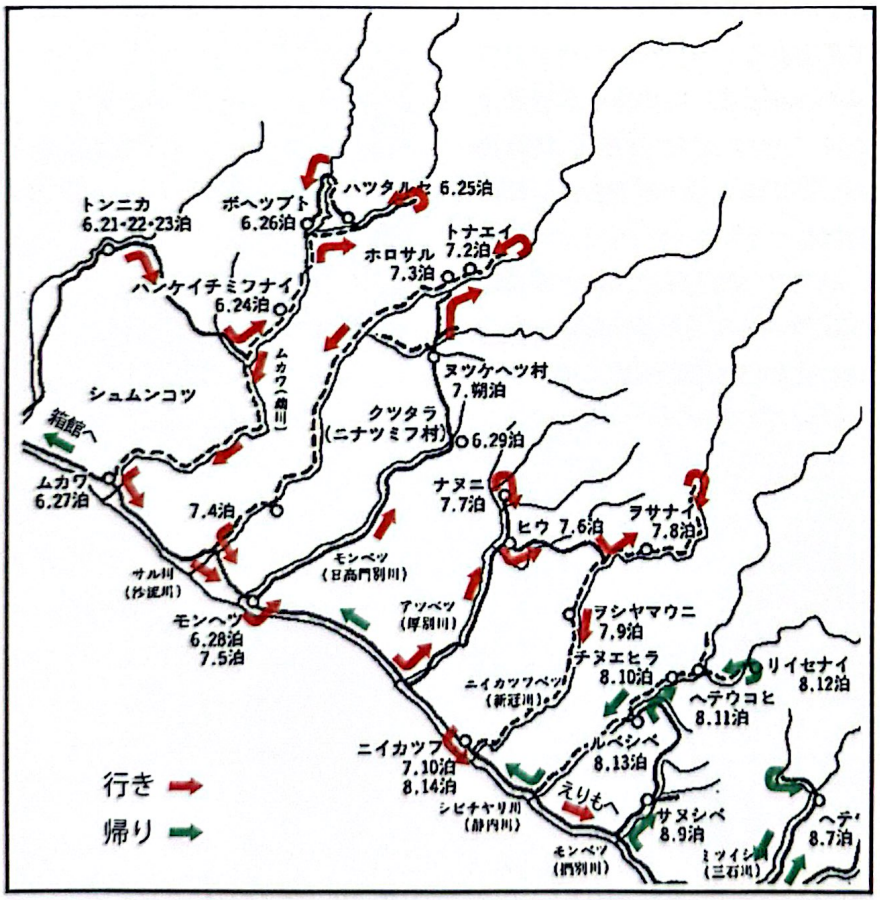


図４　武四郎６回目の探検のルート。現在の門別から、内陸を通って平取を進み、沙流川を舟で折り返している（高倉編 1983）。

「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

■文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055-0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828
初　版:2014年6月
第2版:2020年3月

沙流川の古道を知る

4

関連シート：33、35

『蝦夷日記』にみる沙流川の様子

近世後半から近代初頭に残された沙流川の記録の内、当時の「道」を窺い知ることができる資料が幾つかあります。

その代表的なものに、寛政十(1798)年の記録である『蝦夷日記』があります。

近藤重蔵の蝦夷地探検に医師として随行していた木村謙次によって執筆された文書で、幕府による蝦夷地(主に道東部)調査の詳細な記録です。その内、平取に関わる部分は、モンベツ運上屋(門別川の河口左岸)を出発して現在の平取町本町までの道のりとなります。この道筋を検証できる資料としては、明治29(1896)年製の「北海道仮製五万分一図」があります。近藤らの来訪から98年後の刊行になりますが、北海道の近代化に伴う社会基盤整備が行われる以前の状況が表されており、近世後半からの道が引き継がれている可能性が高い地図と考えられます。『蝦夷日記』と合わせて読み解くことで、地図上に描かれた古道がいつまで遡れるかの検証にもなります。

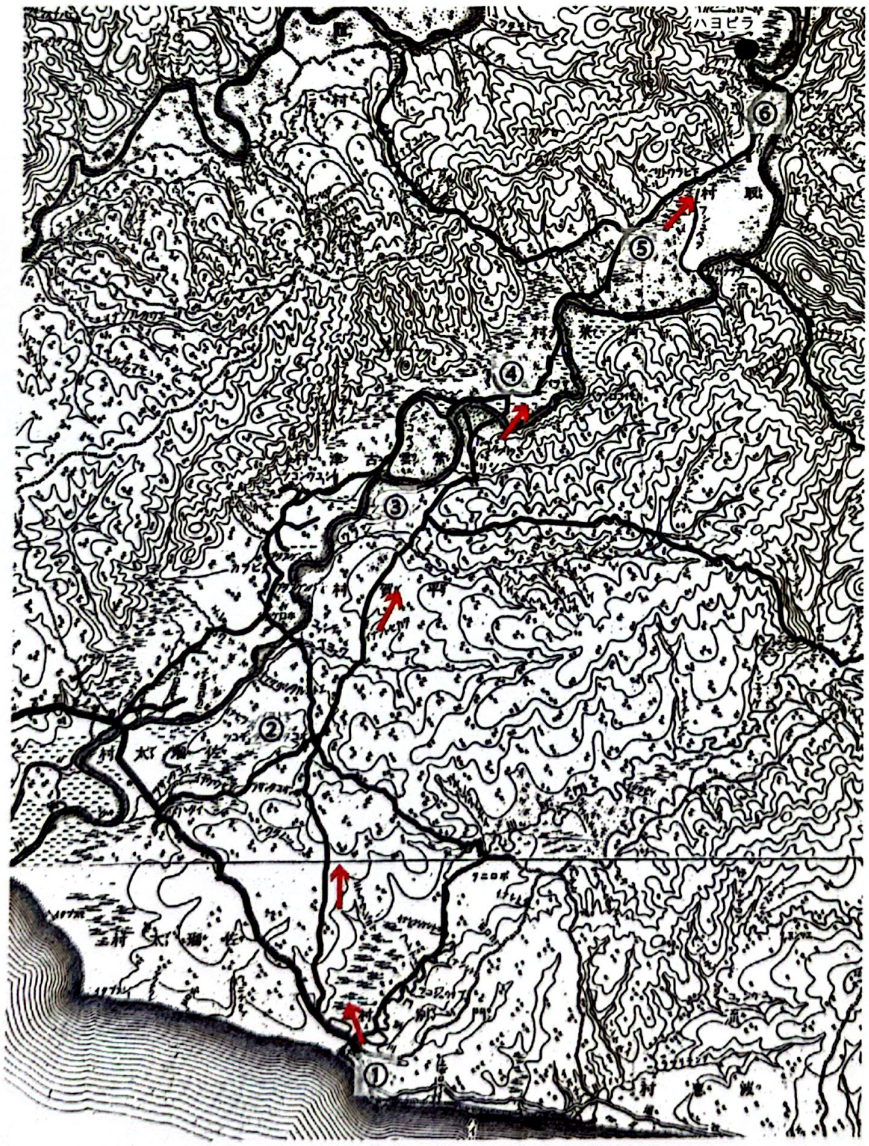


図1　近藤重蔵、木村謙次らの来訪ルート（明治二九年製版　陸地測量部　北海道仮製五万分一　二風谷、門別を合成して作図）。

木村謙次によるハヨピラ見聞記

木村らがピラトリへ向けて出発したのは、寛政十(1798)年11月11日の昼どきで、モンベツの運上屋が出発地点とされています(①付近)。

その後は“モンベツ川を渡舟で渡って、右の方の山へ上り、一里(約3.9km)ほど行くと、ピラカというところへ出る”とあります。また、“家の下の小流はイタタウシという”と述べれらていることから、集落は②のあたりかその付近に所在したと考えられます。

さらに、“沙流川の支流であるウコツヘヌ(ウヨッペ：現福満川)、シラウあたりから、沙流川を左に見て通り、…シユムンクーソ(シウンコッ)というところに着く。モンヘツ運上屋から２里(約7.8km)あまり”とされています。

このことから、当時のシウンコッの集落は③の辺りもしくはその近くであったとみられます。11日にシウンコッの家に泊まってから翌朝出発し、“沙流川を小舟で渡った”とされています。さらにその先の“ノヘルナイ(ヌペルンナイ：後のサルパコタンの辺り)のアイヌの家に立ち寄り、火で暖まった”ことが書かれています。

そしてここからは“沙流川を右に見て川岸を通る”と記録されていることから、トメルペシペのところで川を渡り、④の辺りにあった集落に立ち寄ったことが分かります。

その後、ニナの集落(⑤の辺りかその近く)を通ってヒラト(ビラトリ：⑥の辺りかその近く)に到着します。

木村らによる訪問の目的は「義

経の旧蹟」であるハヨピラの見分と祠を建てることでした。そのため、ハヨピラに程近い集落であるビラトリが終着地点とされました。

12日にモンベツ運上屋へ戻った後、近藤重蔵も加わって14日にはヒラト（平取）を再訪し、その翌日にハヨピラに祠を建立しています。

17日には舟で沙流川を下り、「ヒラカ」（平賀）でイオマンテ（クマ送り）をみたことが記録されています。

古地図からみた『蝦夷日記』

木村らが来訪した時の道すじと、明治29(1896)年の地図が完全に一致するとは限らないものの、双方に記載されている集落や沢の位置関係はおおよそ一致していることが分かります。

その一方で、地図に掲載されている義経神社は18世紀末の段階で存在していません。近藤らがこの時にハヨピラへ設置した祠が、義経神社の前身となったのです。

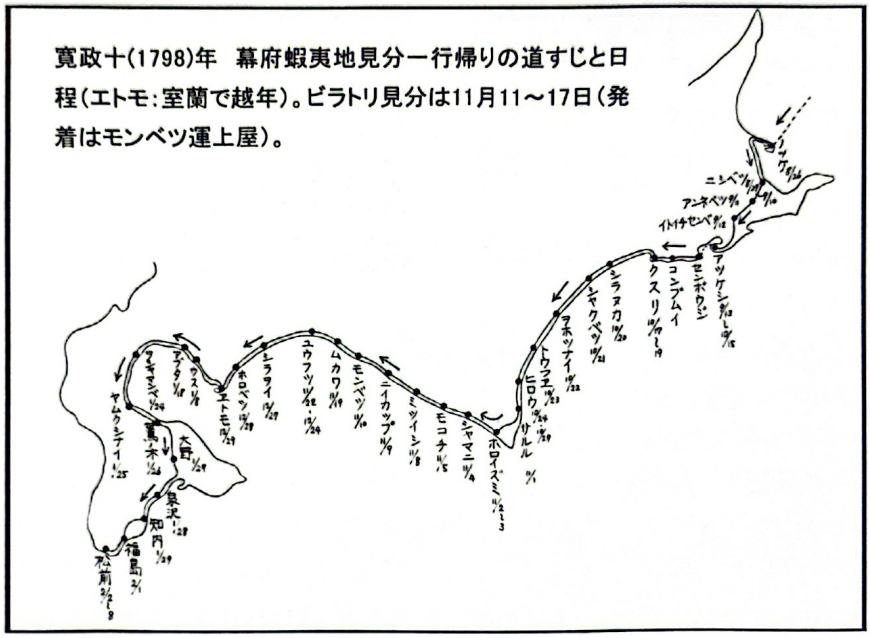
古道にみる人びとの暮らし

『蝦夷日記』と明治29(1896)年の地図で推定した集落(②ピラカ、③シウンコッ、④ヌペルンナイ、⑤ニナ)の位置は、いずれも交通の要衝付近に所在します。それぞれの場所で、様々な人と物流が交錯していたことが推定されます。

そしてその先(上流)にある大規模集落のビラトリ(⑥)と、地域住民にとって特別な崖であるハヨピラは、沙流川の神秘性を彩る象徴的な場所であったと考えられます。



写真　紫雲古津川向大橋からみた平取本町（下流側から撮影）。寛政十(1798)年当時は河畔林を縫うように道が続いていたと考えられる。



資料　木村謙次略歴

宝暦二(1752)年	常陸国久慈郡天下野村万城内(現茨城県常陸太田市)で生まれる。
明和四(1767)年	水戸の立原翠軒に儒学を学ぶ。
明和六(1769)年	京都の吉益東洞に医術を学ぶ。
寛政五(1793)年	水戸藩主徳川治保の許可を得て蝦夷地を視察。
寛政十(1798)年	幕命による近藤重蔵の蝦夷地探検に随行。国後島、択捉島を調査。翌年三月二十三日に水戸着。
文化八(1811)年	七月六日没、享年六十。



「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

■文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055－0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828
初　版:2014年6月
第2版:2020年3月

アイヌ語地名と景観認知

5

関連シート：2、12、31、38、48、64

アイヌ語地名を学ぶ

北海道および周辺地域のアイヌ語地名は、多くがその場所の地勢に基づいて名づけられています。

地名が付けられた当初は、去場(sar pa：ヨシ原・の上手)や貫気別(nupki pet：濁る・川)など、ある一定の意味合いがあったと考えられます。しかし、大半は長い年月を経る中で忘れ去られ、今日において一々意味を考えて呼ぶ人はほとんどいないと言っても過言ではありません。

地名は、もともとの場所からの移転や広域名への変化に伴って分からなくなるのが常といえます。「意味が分からないのが、むしろ地名の本質なのではあるまいか」(山田 1969)という見方もうなづけるところです。

アイヌ語地名研究において、地形地物に対するアイヌの古い考え方を重視した知里真志保の興味深い分析があります(知里 1955)。「川は海から陸へ上って村のそばを通って山の奥へ入りこんでいく生物」という解釈は、その中の代表的なものといえます。沙流川流域のアイヌ語地名も、知里が考える古い時代のアイヌの観念に当てはめることができる事例が数多くあります(資料１)。地名研究における数々の推定を裏付けるための、第一級資料であるといえます。



写真１　二風谷を流れるカンカン。腸のように曲がりくねった流路をみることで、アイヌ語地名の本来の意味を知ることができる。

地名の調査と継承

アイヌ語地名を正しく解釈するためには、様々な角度からの検証が必要になります。結果として、答えがひとつにならない場合も度々あります。

地域のアイヌ語地名を推定するための判断材料を次世代に残すことも、我々が今やるべきことのひとつと考えられます。

平取町内の難解な地名のひとつに「荷菜(にな)」があります。この語源としては、主に次のような解釈が考えられます(資料２)。

①荷菜には、ポロシンケプ(poro sinkep：親川・エゾヤマハギ)、モハシ(mo has：子川・灌木)※という沢があり、薪とりに適した沢沿いの環境を地名から窺うことができます。

資料1　アイヌの観念からみた河川名称の解釈(知里 1955をもとに加筆)

カンカン(二風谷)kankan：腸　幾重にも屈曲して流れている所。

オウコッナイ(振内)oukot nay：交尾している川　二つの川の合流部。

ポンニナㇻチミプ、ポロニナㇻチミプ(荷負：ペナコリ)
pon ninar chimi p：(子)台地・左右にかき分ける・もの
poro ninar chimi p：(親)台地・左右にかき分ける・もの
親は子を産み、親子連れで山野を歩くと考えられている。それで二つの川がある場合、大きい方を「ポロペッ」(poro pet：親川)、小さい方を「ポンペッ」(pon pet：子川)というのである。

ヌプケシクシナイ(荷菜) nup kes kus nay：野原の裾の方を通行している川。
川は生物だから、行くとか来るとか居るとか通行するとかする。

リコマンペッ(額平川の別称) rik oman pet：高いところへ登っていっている川。
川は人間同様山登りもする。

※親川、子川の関係で対になる沢名であろうと推察される。

資料2　荷菜の語源推定

ニナ(nina)　：①薪(まき)をとる
　　②ヒラメ
ニナラ(ninar)：③台地



写真２　平取町本町上空から荷菜方面を望む（沙流川上流：北側から撮影）。

②安政五(1858)年に来訪した松浦武四郎による地名の記録によると(資料３)、荷菜の語源はヒラメとされており、沙流川の地震伝承との関わりが述べられています。

同様の解釈として、明治期における荷菜の地名解(永田 1891)に以下のような興味深い記述があります。

「nina ニナー　ヒラメ魚　方言テツクイ　薪(まき)ヲ負フヲ「ニナ」と云ヒ「テツクイ魚」を「ニナー」と云フ。同語ノ如クナレトモ発音ハ異ナリ…」。

つまり、永田によるとヒラメを指すアイヌ語は「ニナー」であって、「ニナ」とは異なる発音と意味をもつとされています。明治29年製版の古地図でも、「ニナー」と記載されているのは、ヒラメを意図した表現であることが推定されます。

③かつてニナの集落は、沙流川を挟んで両岸にあったと言われています(松浦著・秋葉解読 1985、平取外八箇村(ひらとりほかはちかそん)小学校組合會編 1917)。集落の立地は、水害を受けにくい台地を選択するのが一般的です。沙流川両岸にある「ニナー」(明治29年製版古地図)は、ニナラチミプ(ninar cimi p：台地・分ける・もの)の省略形もしくは「台地」を現すアイヌ語地名で、後に荷菜村の地域名として一般化した可能性が考えられます。

現在のところ最も支持されている説は②といえますが、現地の地勢に基づいて名付けられることが多いアイヌ語地名の傾向に則してみれば、①・③の解釈も検討を継続すべきと考えられます。

現代に住む私たちによる解釈は、要するにどれも推定説です。しかし、その一方で上記①～③はいずれも地域史を学ぶための情報源でもあります。アイヌ語をもとにした地名は、漢字表記のものも含み、世代を超えて受け継いできたものです。その検討成果は今後一層、住民の景観に対する意識や情報(景観認知)を知るための手掛かりになっていくと考えられます。

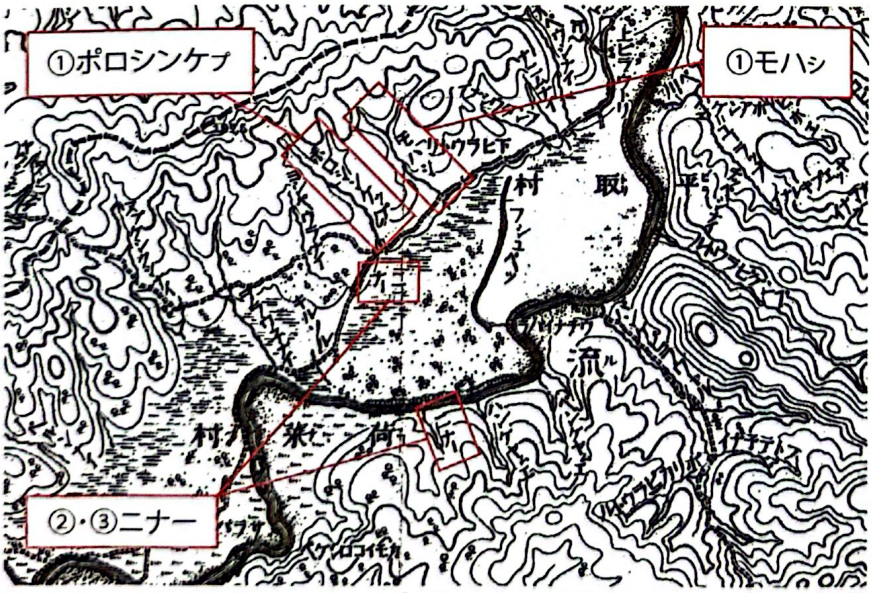


図　明治二十九年北海道仮製五万分一図「二風谷」の一部を抜粋。荷菜の地名を読み解くヒントを様々にみることができる

資料3　荷菜の地名に関わる古記録・ウパシクマ(言い伝え)

其名義は昔し海嘯の時テツクヒと云比目魚が此処まで上り来りしによって号とかや。テツクヒは松前方言なり。ニナは比目魚の夷言也。

(松浦著　秋葉解読 1985)

「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

■文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055－0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828
初　版:2014年6月
第2版:2020年3月



アイヌ語地名にみる植物利用

6

関連シート：2、22、23、34、61

アイヌ語地名の面白さ

地域住民による詳細なアイヌ語地名の記録が二風谷にあります(『沙流川沿いの地名』萱野 1984)。

内容は、地名解の基本である沢名だけでなく、樹木の分布やウパシクマ(言い伝え)を含んだ多岐にわたるものとなっています。場所の照合と語意解釈を深めていく中で、地域ならではの土地利用や想い、アイヌの世界観がみえてくる二風谷の教科書といえる本です。

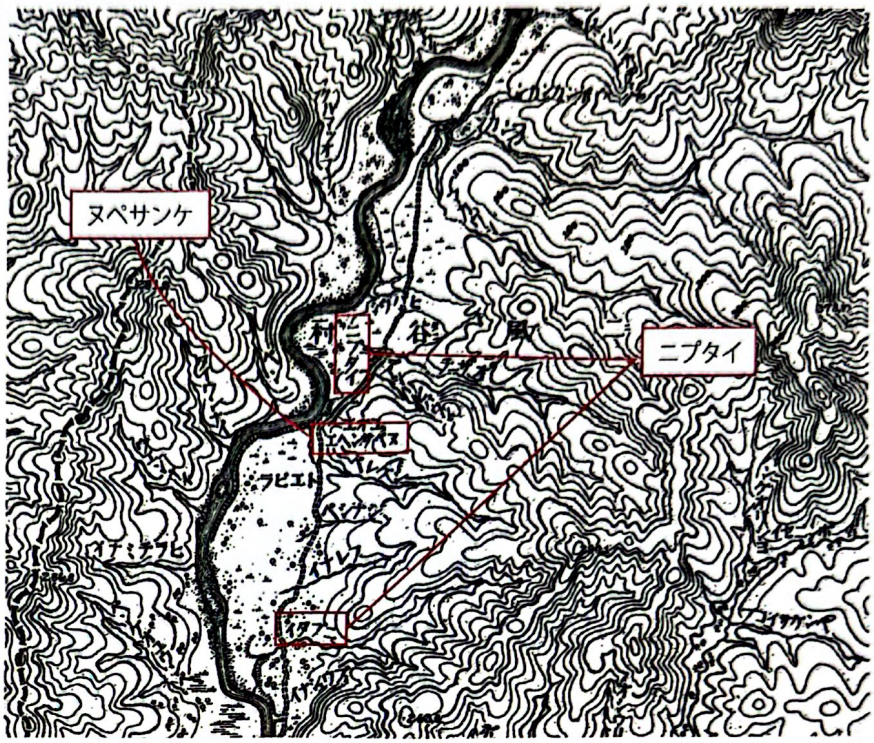


図　明治二十九年北海道仮製五万分一図「二風谷」の一部を抜粋。二風谷は樹木に関わるアイヌ語地名が多い。

「ニプタニ」について

二風谷の語意解釈は、幾人ものアイヌ語地名研究者によって行われています(資料１)が、解読困難な地名のひとつとして現在に受け継がれています。

そうした中、各説に共通するキーワードに「樹木」があります。

表１-①は木刀云々の解釈があり、②～④はそれぞれ「刀等の柄・取る・木」、「大森林」、「野の林」と分析されています。

明治29(1896)年の古地図をみると(図)、二風谷に２か所あるニプタイはいずれも沙流川の沖積地付近につけられており、低平地に広がる「ヌプタイ」である可能性が窺えます。

また、沙流川左岸に突き出す丘陵（現在の二風谷ダム管理所付近）にヌペサンケ(nup e sanke：野・自ら・出す)と名付けられており、地名と周辺環境の類似性を垣間見ることができます。

これに似たアイヌ語地名の事例に、沙流川河口域のシヌプタイ(si nup tay：親川ないし大きい・野の・林　シノタイ岬)、モヌプタイ(mo nup tay：子川ないしは小さい・野の・林　モノタイ：現在の富浜)があります。

いずれにしても、もともとの「ニタイ」、「ヌプタイ」等の意味から広域名の符号として「ニプタニ」と呼ばれるようになったと推定されます。そうした中、武四郎の日誌(資料１)を読み取る限り、近世後半の段階において既に本来の意味が忘れ去られていたと推定されます。

資料1 「ニプタニ」の語意解釈一覧

①松浦(安政五年：松浦著・秋葉解読 1985)
其名義木刀に金物を附て奉りし等古跡有て号く。

②平取外八箇村小学校組合會編(1917)
村の原名ニツプタニはニツプは刀等の柄、タは取る、ニは木にて、刀等の柄にする木を取る所の意なり。

③萱野(1984)
明治29年発行の古い地図に、「ニプタイ」と記されてあります。ニプタイ＝ニタイ＝森とか林。つまり大森林の意味であり、ニプタイ→ニタイ→ニプタニ→二風谷→とこのように地名が変化することは自然だと思われます。

④平取町教育委員会(2003)
現在の北島牧場付近からシケレペ農場の辺りを指してヌプタイ(野の林)といったものを、プの音を「風」と表記して二風谷となったのではないか。

アイヌ語地名の地域的特徴

二風谷のアイヌ語地名は、特定の樹木を示すものが多くみられます(資料２)。

この地域は「東西二方は山にして沙流川其間を流れ、平地乏しく濶葉樹(かつようじゅ)※に富み、山頂少しく針葉樹を見る」(平取外八箇村小学校組合會編 1917)という特徴をもつ土地柄として記録されています。

※広葉樹の旧称

今日的には沙流川右岸側の森林が「イオルの森」として活用されていますが、古くから生活道具の素材供給源として重要な意味をもつ山林・河畔林であったことが、地名から窺えます。

もともとは、ある一定の意味が付されていたであろう森林状態を示すアイヌ語地名も、今となってはそれが何を指し示しているのか分からない場合が多くあります。



写真　にぶたに湖右岸に広がる山林とアイヌ語地名(沙流川左岸の南東側より撮影)。

タイケシ(林・端)は何かに対しての「林の端」だろうし、タイウンナイ(林・ある・沢)も、考え方によってはどこの場所にも言える特徴とも受け取れます。

本来の意味がいつの日か忘れ去られたとしても、地名自体はその場所の符号として受け継がれていきます。

その他、可食性のある樹木を示す地名にシケレペ(キハダの実)があります。ラタシケプ(煮物)の具材として用いられる食料で、薬用効果のある実としても重宝されています。スルクウンコッ(毒・ある・ところ)は毒矢を射ってくる者のウパシクマ(言い伝え)がある一方で、スルクはトリカブトを指す植物名でもあります。一般にアイヌ語地名はその場所の植生を表すことが多いので、「トリカブト・ある・ところ」という語意も考えられます。

しかし、近現代とそれ以前の植生環境が同じであるとは限らないことから、今も良質ないしは多くのトリカブトがあるかどうかは検討を要します。

シケレペやスルクを現地で確認してみるのも、地名を学ぶ醍醐味の一つといえます。

資料2　樹木名を表す二風谷の地名

ヌタプケシ(別称　ランコタイ:カツラ・林)
　ヌタプ＝平原、はらっぱ、ケシ＝　残り、尻

ピンニ　ヤチダモ

トゥンニタイ　カシワ・林

オケネウシ　河口・ハンノキ・ある

シケレペ　キハダの実

ルウェペロ　太い・ミズナラ
　これは地名というより、そこで太いナラの木が立っていたので、その辺りをルウェ・ペロ＝太いナラの木という呼び方をしていた所です。そのナラの木が立っていた所は、貝澤耕一さんの家とヌペサンケの間で今の国道から沙流川より20mの位置です。
　直径2m位で木目が波形であったのが、昭和10年頃まで倒れた木が残っていました。
　筆者が子供の頃に祖母が聞かせてくれた話では、「ルウェペロは神であった。大洪水のときも両手をでっかく開けたように立って下のヌタプ(＝原っぱ)を守ってくれた。ルウェペロが伐られてからは、大水の度にヌタプヘネ(＝原っぱが潰れる)するようになった」と。
　だからお互いの家の周りを見まわして、できるだけ太い木を残し、自然を大事にしたいものだと思います。

(萱野 1984)

「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

■文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055−0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828
初　版:2014年6月
第2版:2020年3月

ポロシリ

7

関連シート：15

ポロシリと日本百名山

日高山脈の主峰で、平取町の北東端に位置するポロシリには、7～9月の3ヶ月間に3,000人を超える登山者が全国から集まります。1960年代以降は、深田久弥による山岳随筆である日本百名山にも選定され、より多くの愛好家で賑わうようになりました。

山体上部には、氷河期に形成されたカール(氷河の侵食作用によってできた広い椀状の谷)がみられます。その内、七つ沼カールは平成19(2007)年に「日本の地質百選」に選定されています。



写真1　荷負本村から貫気別の町並みとポロシリを望む（10月：西側から撮影）。

アイヌ伝承からみたポロシリ

ポロシリは、ポロシルンカムイ(ポロシリのカムイ)の住む山として祈りの対象とされています。またこの山は「カムイ　オリパク　モシリ(神様に遠慮する山)」でもあり、かつてはポロシルンカムイに遠慮して登らない山でもありました。キムンカムイ(山のカムイ：ヒグマ)が居たとしてもポロシルンカムイに悪いから獲ることはできないともされています。

資料1　ポロシリの伝承(一部抜粋)

①ポロシリは昔から不思議なおそろしい山であるといってある。いくら上った者でも、もどってきた者はない。よしもどって来ても山の実態をつきとめて頂上まで登った者はないという話である。山腹からモヤが深くて年中登れない。大沼が山上にあるという話であるからいつとなく風説となっていたが、見知ったという人はなかった。大昔、アッペッのオヤヂ1人この山に登ったら大沼があって岸には白熊も見えた。1人のおそろしい者があらわれていうのには、おまえはどこから来た、もし帰ってこんな所があるといったら殺してしまうぞといった。オヤヂは許して下さい。決していわぬといって家に帰りまた来ることを約して家にもどり、一らくを話してオヤヂも家に口どめしたがやはり言伝えが残った。この湖には海の物はなんでもおり、湖の主はサキソマエップ(蛇)というものなそうだ[明治44·8·8、ニプタニ、貝沢イヨの父]。

(吉田 1957)

②日高の幌尻岳には昔白熊がたくさんいたというが、白熊のことを白い神様といって獲るものは昔からなかった。この幌尻岳の頂には大きな沼があって、沼の中には幅の広い昆布が生えており、秋になると何百何千という海の鳥が、きれいな声で鳴きながら渡ってきて、この沼で冬を越し、春になるとまた海へ戻っていく。アザラシやトドも冬にはここへ越冬に来て、春になると雪解けの水にのって海に下るということである[鵡川町チン部落　片山カシンデアシ老伝]。

(更科 1955)

③カムイミンタラ kamuy mintar(神の庭)はポロシリ porosir(幌尻岳)のところにあると言う。カムイミンタラのカムイ kamuy(神様)はクマのことではなくて、目に見えない神様がいるのだと思う。カムイ　エワク　シリ kamuy ewak sir(神様が住んでいる場所)がカムイミンタラだ[貫気別　上田トシ氏]。

(北海道教育庁生涯学習部文化課編 1998)

ポロシリには「ト(沼)」や「カムイミンタラ(カムイの庭)」があるという伝承があります(資料１)。トは、ポロシリ山頂部附近の状況から七つ沼カールを指すとみられます。北カール、東カールも含めた山頂部周辺の神々しい雰囲気の中で育まれた伝承と考えられます。



写真２　山頂へ続く登山道と北カール(北西側から撮影)。カールを巻くように連なる尾根沿いにはたくさんの高山植物があり、点在する岩塊にはナキウサギも生息している。

ポロシリの伝承を発信する取り組み

ウエペケレ(散文説話)などのアイヌ口承文芸には、沙流川を上りきった先という具体的な場所として、ポロシリがたびたび登場します。

アイヌ口承文芸は、暮らしの中で育まれてきた世界観や教訓などが織り込まれており、アイヌ文化を学ぶ上で、とりわけ重要視されます。近年は、アイヌ語弁論大会(イタカンロー)やアイヌ文化祭の継続開催などを通して、幅広く発信されるようになりました。

ポロシリにかかるアイヌ口承文芸の内、『ポロシルンカムイになった少年』は、現在インターネットによって配信(アイヌ民族博物館公式ＨＰ)されており、誰でもみることができる絵本として活用されています。

また、「平賀の長者の話」はアイヌ語による語りがＭＰ３で配信(早稲田大学リポジトリＨＰ：資料２)されており、アイヌ語書き下し文、和訳文(ともにＰＤＦ)と合わせて学習できるように整えられています。

このように、単に伝承として登場するだけに止まらず、今日的なアイヌ語の普及やアイヌ文化学習に用いる教材にもなっています。

地域のウパシクマ(言い伝え)を継承していく

ポロシリは日高山脈襟裳国定公園内に位置しており、貴重な動植物やカール地形のほか、アイヌ伝承地の景観が変わることなく残されています。

ポロシリにまつわるアイヌの世界観には、先人によるたくさんの教えのほか、沙流川の頂にあるカムイミンタラの物語が表現されています。

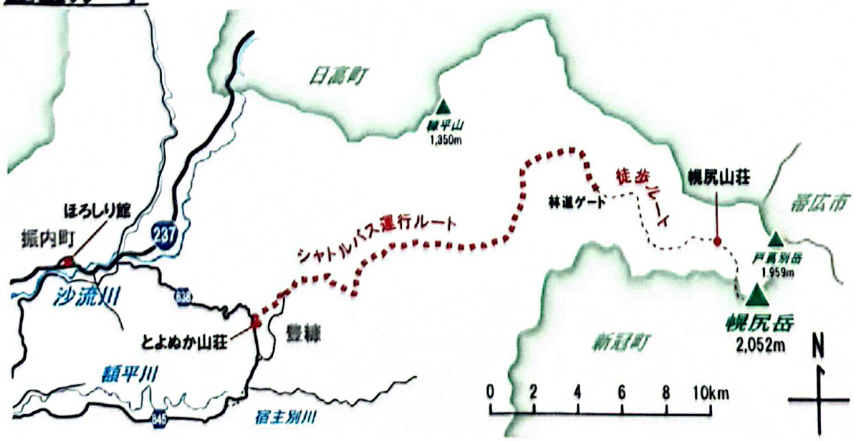
日本有数の登山スポットである一方で、地域住民が守り伝えてきたポロシリへの想いを伝えていくことも、山を大切にしていく上で重要なことであろうと考えられます。



資料2「平賀の長者の話」閲覧方法

①早稲田大学リポジトリ
②Institute of Language Teaching (語学教育研究所)1962-2004
③Learning Materials(教材等)
④アイヌ語音声資料02
⑤ワテケさんの昔話
:沙流方言:民話06
⑥A02-006.mp3(音源)
02-08.pdf(テキスト)

登山ルート



「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

■文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055-0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828
初　版:2014年6月
第2版:2020年3月



チャシ

8

関連シート：13、45、62

チャシの性格

チャシとは、柵、境の垣、家(ウポポや叙事詩の中で)、神の住む家、特別な人の館か大邸宅、城、砦などと理解されています(資料１)。

北海道全体では500カ所以上あり、その６割以上は道東部に集中しています。道西部では石狩川上流域、鵡川、沙流川、静内川流域に多く分布するという特徴があります。

平取町内には25カ所のチャシが確認されており、テラスや壕などの人工が加えられる「実在のチャシ」(23カ所：埋蔵文化財包蔵地として登録)と、地名や伝承のみが残る「カムイチャシ」(２カ所)があります(図１)。

チャシの用途

チャシのアイヌ伝承を分類すると、おおよそ資料２のようになります(宇田川 2005)。最も多いのが闘争伝承で、人文神、説話、聖地、見張り、談判などといった内容もみられます。

闘争の多くは、トパットゥミ(夜襲)からの防衛拠点として語り伝えられており、使用された年代における地域間抗争の緊張関係を表わすものと理解できます。

その一方、チャシの調査が進むにしたがって、造られた時期あるいは地域、場所、大きさによって機能や性格が異なり、特別な邸宅、金属加工等を行なう作業場、食料獲得に関わる場など、多用途に使われる空間とも考えられるようになっています。



写真　ポンカンカンチャシ跡（二風谷:南側から撮影）。カンカン川河口域に所在する丘先式のチャシ跡。

チャシの使用年代

具体的な実年代推定は、歴史学的研究の成果(海保1974)があり、慶安(1648年)以降のアイヌ民族相互の闘争、寛文・寛政の蜂起に使用されていることを古文献に見ることができます。また、天明(1781-1789)年間に記された『松前誌』『東遊記』には、チャシが依然実際に使われていると記されていたり、釧路のヘケレニセ、タサニセはチャシに拠って根室や厚岸のアイヌと戦ったとされています(寛政三：1791年の『東蝦夷地

資料1　チャシの性格

知里(1956)

砦、館、柵、柵囲い。古謡の中では英雄の常駐する館をさす。高い山の上にあって割木の柵を結いめぐらしたもののようにのべている。祈詞の中では家の意味に使うこともある。日常語では単なる柵または柵囲いの意になっている。…語源はアイヌ語起源説(金田一　1944)よりも、むしろ朝鮮語サシ、チャシなどとの関係が考えられる。

田村(1996)

①柵、境の垣②家(ウポポや叙事詩の中で)、神の住む家、また特別の人の館か大邸宅、「城」とも訳される③とりで

萱野(1996)

城、館、柵。ユカラの中で、登場人物が住んでいる大きな家として描かれる。和人の城もチャシと称されることが多い。

資料2　チャシのアイヌ伝承

①闘争(45.2%)　②人文神など(18.3%)　③説話(17.8%)　④聖地(9.6%)
⑤見張り(7.4%)　⑥談判(1.7%)

(宇田川 2005)



図１　平取町のチャシ

道中記』にクスリの乙名・脇乙名として出現）。

こうしたことから、17世紀頃に最も多く使用され、18世紀に入ると衰退し、18世紀末に至って消滅するという理解が一般的になっています。

現代では、チャシ跡の内外に「高い山の上にあって割木の柵を結いめぐらしたもの･･･」（知里1956：資料１）といった様子をみることはできません。本来、柵を立てた場所に土塁や壕などが残っていることで認識できる場合がほとんどといえます。

沙流川流域のチャシ跡はその多くが1667年降下の樽前火山灰に覆われており、出土遺物の年代推定と合わせ、17世紀前半～中頃に使用年代の主体があったと考えられています。

チャシの考古学的調査

昭和58(1983)年から３年にわたり行われたユオイチャシ跡・ポロモイチャシ跡・二風谷（にぶたに）遺跡の発掘調査では、チャシ研究において欠かすことのできない数多くの成果が得られました(財団法人北海道埋蔵文化財センター 1986)。

特にポロモイチャシ跡は遺跡自体が良好な保存状態にあったこともあり、空間利用、場の性格、本州との交流などといった情報の一端が解明されました。

発掘したことで、初めて壕で囲われた２つの空間の存在(A郭・B郭)が明らかになっています(図２)。A郭は炉がある建物があって、内部から鉄鍋や刀子などがたくさん見つかりました。一方でB郭は炉のない建物の中に加工された金属片が発見されており、作業場的な色合いの濃い場であることが推定されました。

A郭の建物は敷地の大半を占拠する大きなもので、恒常的な居住に十分耐えうる構造や設備をもっていたことが判明しています。壕の内側の土塁上には柵がめぐり、ユカラに謡われる英雄の居館を彷彿とさせるものといえます。

北海道の景観を読み解く

チャシは北海道における歴史の重層を読み解く上で、非常に大事な遺跡・アイヌ伝承地といえます。今後一層、地域の学習素材や道内を歴史探訪する楽しみとして、多くの人の知的好奇心を刺激していくものと考えられます。

平取町におけるチャシの情報発信施設に沙流川歴史館があります。ユオイチャシ跡・ポロモイチャシ跡・二風谷遺跡の出土遺物、発掘調査ジオラマなどを通して、沙流川の深い歴史を感じ取ることができます。

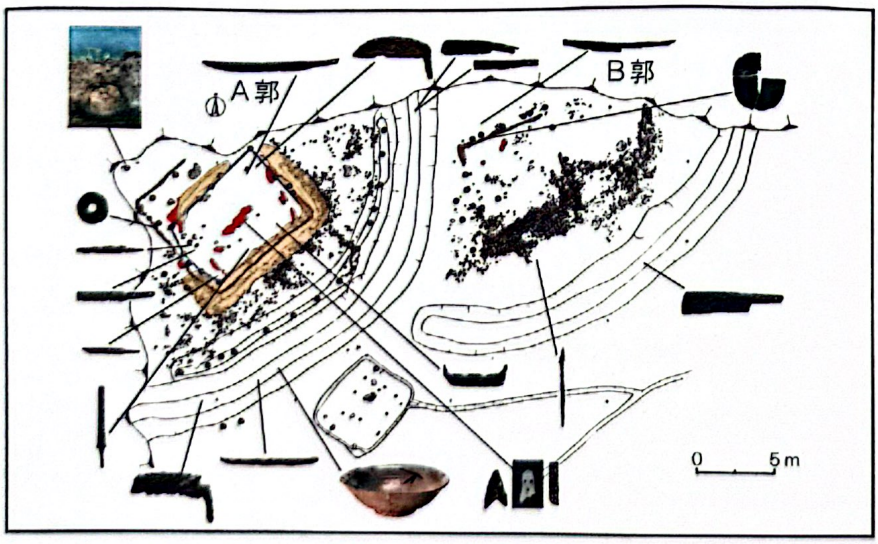


図２　ポロモイチャシ跡の発掘平面図。２つの壕で囲われた空間で、それぞれ石積みを伴う建物跡が発見された。

「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

■文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055-0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828
初　版:2014年6月
第2版:2020年3月

コタン（集落）立地の歴史的連続性

9

関連シート：39

先史時代の遺跡にみる住居構造

沙流川流域では旧石器時代以降、縄文、続縄文、擦文時代、中・近世アイヌ文化期を経て近・現代に至るまでの人の居住が確認されています。

遺跡を発掘すると土器・石器など、様々な遺物が発見されます。また、住居跡は考古学的調査における定住性の根拠ともなります。

平取町の遺跡において、擦文時代以降の住居が発見された遺跡は５遺跡です(資料１)。沙流川全域を網羅できるような遺跡数・分布ではないものの、少なくとも1,000年以上前から連綿と続く人の居住を示すものと考えられます。

近世アイヌ文化期(17世紀中葉以前)の住居跡は、その多くが平地式住居になります。直径10cm前後の打ち込み柱(先を尖らせて直接地面に刺す柱)を用いて家を建てるやり方が一般的で、今日伝承されているチセ(家)と比べて細身の構造であったことが分かっています。

こうした家屋が建ち並ぶ集落は、近代のコタン(写真１)とは趣が異なるものであったと考えられます。



写真１　義経神社のある丘陵上から平取コタンと沙流川を望む(近代:南西側から撮影)。手前に写る鳥居の周辺も含め、集落は清掃が行き届いて整然としている(仲摩編 1930)。

近・現代の記録にみる沙流川流域のコタン（資料2）

寛政十(1798)年、幕吏近藤重蔵による平取見分が行なわれ、医師として同行した木村謙次による日誌が残されています。この文書にはモンベツ運上屋(門別川河口域)からビラトリコタンまでの道すじが記録されています。

安政五(1858)年には、松浦武四郎による沙流川流域の詳細調査が行なわれています。翌年に執筆された『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』に、沢名や地名、コタンの戸数や人名、年齢、続柄等がまとめられています。

その他、『東蝦夷地各場所大概書』『入北記』といった近世後半の古文書に、沙流川流域のコタン名と人口統計の記録をみることができます。

明治時代以降の記録としては、明治11(1878)年に沙流川を訪れた紀行作家のイザベラ・バードによる旅行記があります。沙瑠太(現日高町富川)から平取に至る道程と、ビラトリコタンの暮らし、義経の祠(ハヨピラ)の様子などが記録されています。

吉田巌は荷負小学校の第二代校長で、明治44(1911)年４月から大正２(1913)年１月までの約１年９



写真２　義経神社参道から平取大橋方面を望む(南西側から撮影)。時代を経る中で建造物が移り変わっても、山稜の面影は今に受け継がれている。

カ月間、荷負で教員生活を送られました。その間、荷負(ポロサル、シケレペ、ペナコリ)を中心に、長知内、貫気別、二風谷、平取の生活・ウパシクマ(言い伝え)の記録を行っています。

泉靖一によるイウォロの分析(泉1952)は、沙流川流域で行われた民族学的手法による生活様式の復元です。調査は、当時の古老である鍋澤元蔵(ピラカコタン)、二谷國松(ニプタニコタン)、川上サヌクノ(ペナコリコタン)、木幡大六(シケレペコタン)、黒川八郎(ヌプキペッコタン)という5名からの聞き取りによっています。

こうした諸記録について、松浦武四郎による沙流川流域図、明治二十九年製版北海道仮製五万分一図などと照合することで一定程度、生活の様相(コタンの位置推定・植生・河川の様子等)を復元することができます。

近代以降の町外者移住

明治時代における沙流地方への本格的な移住政策は、明治3(1870)年正月に仙台藩の卒族146名が、現在の富川小学校北側に入地したことを嚆矢とします。当時の平取管内には、荷菜村2戸、平取村7戸の計9戸が移住しました。

その後、阿波(徳島県)、淡路(兵庫県)、滋賀県、岩手県、石川県、山形県や道内各地からの移住が相次ぎ、農業を営みながら地域に根付いていきました。

産業振興や国の政策に伴う人口増減も、近・現代史の大きな特徴といえます。

沙流川流域の山林における木材搬出・製炭業(明治後半代から昭和前半代)、クロム鉱山の操業(大正から昭和前半代)は、その最たる出来事であったといえます。

資料1　平取町で居住(住居・集落)の痕跡が確認された遺跡(擦文時代以降)

＊擦文時代(10世紀中葉降下　白頭山-苫小牧火山灰の下層)
カンカン2遺跡(二風谷:カンカン川河口域)　竪穴1軒
二風谷遺跡(二風谷:ユオイ沢河口域)　竪穴1軒

＊中・近世アイヌ文化期(1667年降下　樽前火山灰b層の下層)
二風谷遺跡(二風谷:ユオイ沢河口域)　竪穴1軒、平地式建物跡11軒
ポロモイチャシ跡(二風谷:ユオイ沢河口域)　平地式建物跡2軒
イルエカシ遺跡(二風谷:カンカン川河口域)　平地式建物跡20軒
亜別遺跡(川向:アベツ川河口域)　平地式建物跡2軒

資料2　沙流川流域におけるアイヌ集落の調査報告等(一部抜粋)

木村謙次『蝦夷日記』(寛政十:1798年)

松浦武四郎『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』(安政五:1858年)

イザベラ・バード『日本奥地紀行』(明治11:1878年)

吉田巌『日新随筆　東北海道アイヌ古事風土記資料』
『愛郷譚叢〈古老談話記録〉アイヌ古事風土記資料』(明治44:1911年)

泉靖一『沙流アイヌの地縁集団におけるIWOR』(昭和27:1952年)

※沙流川流域のコタン名と人口統計記録(近世後半)
著者不詳『東蝦夷地各場所大概書』(文化五:1808年)
玉蟲左太夫『入北記』(安政四:1857年)

また、昭和20(1945)年以降は、日本の食糧増産政策に伴う緊急開拓事業により全国からの移住者が平取へやって来て、農業に従事しました。

多文化な景観と今日の産業

沙流川流域は、道内有数のアイヌ文化継承にかかる諸記録の集積地です。そのことと同時に、様々な産業の隆盛が繰り返されてきた地域でもあります。近代以降の社会的経済的変化の中で新しく入ってきた国内外の諸文化は、結果として、沙流川流域に多文化圏としての特色ある地域性をもたらしました。とりわけ、社会の変化に適応させながら資源を持続して利用していけるように管理するアイヌ文化の伝統的な精神は、イオル再生事業や森林保全など、あらゆる分野に反映されています。

また、近世に記録された沙流川流域のコタンは、その場所と境界が今日的な集落と概ね一致します。明治以降の移住者にも影響を与えながら、アイヌの共同体による土地・資源利用が、連続性をもちながら移行してきたことを示すものでもあります。

「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055-0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828
初　版:2014年6月
第2版:2020年3月

オキクルミの伝承について

10

関連シート：32、37、43、44、60、61、63

沙流川のオキクルミ伝承地

地域のウパシクマ(言い伝え)によって受け継がれてきたオキクルミの伝承地が、沙流川流域に幾つも所在します。

オキクルミは、アイヌにさまざまな生活の方法を教えたカムイとされています。沙流川に降臨してこの土地に住み、いつの日かまたカムイの世界に帰っていったのだと伝えられています。

沙流川流域はオキクルミが降臨した土地ということで、この地域に住む人たちは大変誇りに思っているという考え方が近現代にも受け継がれています。

オキクルミの降臨地として主に伝えられているのは、ハヨピラ(平取町本町：写真１)とオキクルミのチャシ(荷負)です。

沙流川がアイヌ文化発祥の地という言われ方を一昔前はよくされました。その根拠になっているのがオキクルミの降臨伝承で、伝統的な世界観の影響力を窺わせるフレーズといえます。

近年においては、現代的な暮らしの中でアイヌのウパシクマ(言い伝え)が語られなくなってきています。こうしたこともあり、地域の大切な伝承が失われないようにすべきという機運が高まっています。



写真１　沙流川流域には人文神オキクルミの伝承が数多く残されている。写真中央が、オキクルミの降臨伝承地の１つとされる「ハヨピラ」(東側から撮影)。

沙流川流域における オキクルミ伝承の研究

オキクルミは新井白石による『蝦夷志』(享保五：1720年)を始めとした近世の地誌において、義経伝説を助長する形でたびたび登場します(『蝦夷漫筆記』『蝦夷記』『蝦夷随筆』など　金田一1914)。

近代以降は、アイヌによるオキクルミ認識が記録されるようにもなり、流域におけるオキクルミ崇拝が一般にも分かる形で鮮明になっていきます(バチェラー 1884、パラサムレック・鳥居 1895など)。

その後も当地域においては、吉田巌、金田一京助、久保寺逸彦、更科源蔵、山田秀三らのほか、地元住民でもある萱野茂、川上勇治などによる研究が継続的に行われ、多くの成果が蓄積されてきました。

比較的多くの文献資料が残されているという地域性もあり、今日においても多くのオキクルミ伝承地が残されています。

アイヌ口承文芸に登場する オキクルミ

オキクルミがアイヌ口承文芸に出てくるのは、基本的にカムイユカラの中です。

沙流川で伝承されているカムイユカラに、シシリムカ(沙流川)という名前が出てくる話がいくつかあります。

そのすべてがオキクルミに関係する話であり、偶然ではない関係性が窺えます。なお、カムイユカラには場所を特定した話があまりありません。

ウパシクマは、ものの由来、教訓、その土地の歴史などを語ったものを言いますが、ユカラやウエペケレの中で語られていることも、同じようにウパシクマだとい

資料1　ハヨピラの語源

①hay o pira　メカジキの吻・ある・崖(金田一 1914)

②hayok pe pira　武装する・崖(平取村開村五十周年史編纂委員会 1952)
～文中にあるハイエオピラはハヨクペピラの転化と説明されている。

③hay o pira　ツルウメモドキ・ある・崖(地域住民からの聴き取り)

われることがあります。

つまり、ウパシクマというのは特別な形式があるわけではなく、知識を教え伝えること一般を差します。ウエペケレやユカラというのは、特定の形式を持った物語で、それが教訓などを伝えるものであれば、ウパシクマとも呼ぶのだと考えられます。

アイヌラックルとオキクルミが同じ扱いになっているのは、ウパシクマにおいてであり、カムイユカラやオイナなどの物語では、出てくる話も役回りも別です。

オイナというのは、アイヌラックルが自分のことについて語る形式をとる物語です。オキクルミが自分のことについて語る話はごく稀にしかなく、久保寺(1977)の聖伝13「オキクルミの神の自叙」で、セミの由来譚(たん)をオキクルミが語るという形式になっているものがひとつ見られますが、オキクルミ自身の活躍を語ったものではありません。同文献の聖伝15は「小オキクルミの自叙」となっていますが、オキクルミという名前はどこにも出てきません。

ユカラにもアイヌラックルが登場する話がありますが、オキクルミはいまのところ見られないようです。



写真2　ハヨピラのふもとからみたチノミシリ(我ら・祈る・山：オキクルミの伝承地)。手前(沙流川右岸)の河川敷地は、現在イオル水辺空間として、ヒエ(ピヤパ：オキクルミが降臨する際にもってきたとされる穀物)などの栽培が行われている(北東側から撮影)。

資料2　オキクルミの降臨　～ハヨピラの伝承(一部抜粋)

沙流(さる)のワカルパの伝承に拠れば、初め国造の神が人間界を造り上げた時、川には魚が溢れ、陸には木の実が熟して、清らかな麗しい、天上界にも無い美しい国土を現出した。そこで誰を此国土の主に遣わそうなとなると、諸神の間に競争が起った。中でオキクルミが一番有望であったが、それを妬む諸々の神々は、相談をしてオキクルミを遣るまいとする。そこで色々の難題が設けられて、オキクルミが天の神の試験を受ける段取になる。まずオキクルミは極寒の目に逢わされる。

それで、若し『寒い！』と云ったら行けないという事になる。オキクルミは肉が裂け、指が落ちそうになっても、一言『寒い』と云わずに推通す。次に極熱の目に逢わされる。肌が爛れ、骨が熔けようとしたけれど、終に『あつい』と云わずに推通す。そこでこんな事ではいけないと云うので、諸々の神が相談をして何とかして、笑わす様にして、若し笑ったら、行けない事にしてやろうと、色々様々な可笑しい事を云うけれど、それもオキクルミは笑わずに悠え通した。すると神々は男女の色欲の話をし出し、恋に心を奪われて正体もなき男女の身振をして見せたら、オキクルミちょっと、一度笑った。その為に下界の新国土へ君臨することがならないと云われるので、オキクルミもとうとう『此れまで、ひどい寒熱の目に逢わされ折角皆悠えおおせたのに、今になって、こんな下らない事で除けられるというのは不法だ』と争って終に抜駆をして窃かに無理無理下界へ下りて来た。

此処に挿話がある。オキクルミが天国を抜出す時、『下界には魚や獣が沢山いても、穀物というものは無いだろう』と案じたから、行掛の駄賃に天上界の稗の種を一掴盗んで自分の脛を裂いて其の中へ推隠し、急いで天国を抜出した…。

オキクルミが君臨した都城の地は、即ち前にも云ったシシリムカ即ち今の沙流川の流に臨んだハヨピラという高崖の上である。其処には今五十余歳の老爽の父の若年の頃までは尚、角鮫(つのさめ)(即ち舵木鮪(かじきまぐろ))の口嘴(くちばし)(即ちハイ)があったものであるという。ハヨピラ(hai-o-pira)の名は其に基いている。ピラは崖のこと、ハヨ即ちハイオ(hai-o)のオは、「上に在る」の意、又は「乗る」の意があるから、ハヨピラは即ち、「角鮫の角(口嘴)が頂きにある崖」の義である。

(金田一 1925)



「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055-0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話：01457-2-2892
FAX：01457-2-2828
初　版：2014年6月
第2版：2020年3月

フリの伝承地をみる

11

関連シート：32

伝説の巨鳥が棲んだ崖

去場（さるば）の集落からみて沙流川（さる）の左岸側（現川向（かわむかい）地区）に、カムイエロシキヒという崖があります（図１・資料１）。

「伝説や古謡の中に出てくる巨大な魔鳥」（知里 1963）とされるフリがかつて棲んだ場所として言い伝えられており、コタンにとって大事な礼拝の場でもありました（資料２）。

カムイエロシキヒに雄のフリが棲む一方、雌のフリはサントゥヌプリ（現日高町平賀（ぴらが））にいたという伝承もあります（資料３）。雌のフリはピタルパに住む母子をさらった罪でサルパの首長カユシピンナにより退治され、その後、雄のフリもどこかへ去ってしまったとされています（資料４）。

地域にとって大事な場所を伝えていく

同じ巨鳥伝承でも人の助けとなったフリと、人に退治される末路を迎えたフリがいることは大変興味深いことです。雄のフリは善い行いをしたカムイとして崇められ、「フリが飛び去ってしまった後は留守番役のキツネがいて、何か異変が起こる前には騒いでコタンの人に教えてくれる」（山田 1984）、「チカッポイ峰には留守の神様を祀っている」（扇谷・島田 1988）として、サルバコタンにとっての特別な存在であり続けました。

そのことは幾つもわたって伝えられる、特別な呼び名（資料１）にも現されているといえます。



図１　フリの伝承地の位置。

資料１　カムイエロシキヒの呼び名

①kamuy e roski hi　カムイエロシキヒ（神が・そこに・立っておられる・処）
②ci=nomi sir　チノミシリ（我ら・拝む・山）
③sarpa rerke　サラパレルケ（去場の・向こう側の処）
④cikap o i　チカポイ（鳥・いる・ところ）
⑤kamuy ewak sir　カムイエワクシリ（神が・鎮座する・山）
⑥kamuy kor si ke pe　カムイコロシケペ（神が・領有する・本当の・処）

※①～⑤は山田（1984）に掲載、⑥は明治二十九年製版　陸地測量部　北海道仮製五万分一図「二風谷」に記載。

資料２　カムイエロシキヒの伝承

去場の部落から見て沙流川対岸の大崖のところの名。

たいへん尊崇されていたところで、あの辺から鵡川の川筋にかけてカムイノミをするときには、必ず献酒したとされている。

元来はフリと呼ばれる巨鳥がいて悪いクマを退治してくれたので、そのフリカムイを祭るようになったとのこと。フリが飛び去ってしまった後は留守番役のキツネがいて、何か異変が起こる前には騒いでコタンの人に教えてくれる。その時には年寄りの男がまじないをして、それが起こらないように頼んできたという。

（山田 1984）

アイヌ伝承にフリの姿にみる

「サルパのフーリの伝説」(資料3)をみると、フリのことを所々で「ワシ」と表現しています。もちろん巨大な魔鳥と伝えられるフリの大きさは、現在のワシと同じというわけではないでしょう。

オオワシ・オジロワシが舞う姿は、沙流川でもみることができます(主に冬季間)。フリの伝承は、大型猛禽類への畏敬の念といえるのかもしれません。

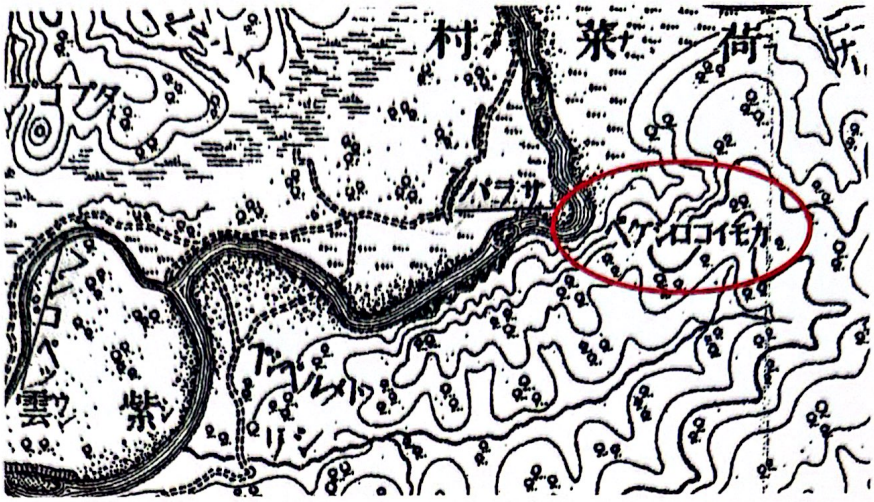


図2　○で囲んだところに、「カモイコロシケペ」とある（明治二十九年製版五万分一図）。

資料3　サルパのフーリの伝説

昔、フーリhuriという大きな鳥の雄がサルパsarpaの向かい(対岸、シウンコツよりも上だ)にいた。フーリの雌がピタルパのサントーヌプリsantonupuri(谷崎製材の裏、チップ工場の岬)にいた。ある時、そのピタルパの雌のワシが堤防でノマメ(アハ　aha)をおこしていた女を子供を背負ったままさらった。サルパの雄のワシがさらったという嫌疑をかけられ、ピタルパの人からチャランケcaranke(談判)された。おまえのとこでノミnomiをしているワシがメノコmenoko(女)をさらったということらしい。もし、応える気がなかったら、皆でトパットゥミtopattumi(急襲)してやるぞと言われたので、困っていた。

サルパの首長(カユシピンナkayuspinna)が賠償をすると言ったが、ピタルパの首長は話合いに応じなかった。雌が悪いことをしたのに雄のワシを殺せという。サントー山の雌を退治しなければ承知しないということになった。また同じ様なことが起きたら困るという。それも道理だと思い、サルパの首長が雌を退治しに出かけることになった。首長は一人で行くといったが、村人は、若い者を連れて行けと言った。村で祈っているものを退治するのは畏れ多いから、自分一人なら死んでもいいから、一人で行くと言った。

その時、オプタッテレケoptatterke(戦いの時に槍を持った6人の頭の上を飛んだのでその名がついた)という十勝から来た屈強な若者が一緒に行くと申し出た。二人は、ピタルパの首長からシカの皮40枚と槍2本、刀2本と若い者1人を借りてサントーヌプリに行った。

二人がフーリのいる穴に着いた頃を見計らって、このシカ皮を上から落とすようにと若者に言って降りて行った。二人がワシのいる穴の横に降り立ったところ、上からシカの皮が降りてきた。フーリは、穴から出てきて、そのシカ皮の上に羽を広げて降り立とうとした時、二人は両側から槍で突き刀で羽を切り落としてフーリを殺した(十勝の若者がなぜそこにいたのかは聞いていない)[門別 鍋沢強巳氏]。

(北海道教育庁生涯学習部文化課 1996)

資料4　雄のフリが最後どうなったか

…雌のフーリーが殺された日から7日間、チカッポイの雄のフーリーは自分の巣穴からsuop asike(箱の荷物)を毎日いづこともなく運び出し、そして姿を隠してしまった。このため、チカッポイ峰には留守の神様を祀っているのである。

(扇谷・島田 1988)



「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055－0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828

初　版:2014年6月
第2版:2020年3月

沙流川流域にみる災害の歴史

12

関連シート：5

記録や伝承に残る北海道の災害

沙流川流域における災害の記録・伝承は、主には津波と火山噴火があります。考古学的調査からも、有珠山や樽前山を起源とする火山灰層の存在が確認されています(写真１･資料１)。

この２種類の災害には、様々な規模の地震を伴うものであったことが推定されます。大きな災害発生後は、サケ産卵床や川州畑、森林環境等の荒廃の外、動物の生息環境の破壊を招いたと考えられます。

日本の火山灰はおおよその場合において、偏西風に乗って東側へ飛びます。噴火したときの風向きにもよりますが、少なくとも寛文三(1663)年の有珠山噴火と寛文七(1667)年の樽前山噴火については、平取町域内への大規模な降下が確認されています。

これらを含む17世紀後半に頻発した火山災害が人文環境に大きな影響を与え、シャクシャインの戦い(寛文九：1669年)の遠因になったとする論考もあります(徳井1989)。

資料２の伝承は、17世紀に起こった駒ヶ岳の噴火を意識した言い伝えとみられます。ただ、この中では「樽前山の火山灰だという人がある…」という文言もあり、沙流川流域の火山灰堆積に関して様々な起源が伝えられていたことが分かります。

様々に残る津波伝承

資料３をみると、津波の認識に二通りの見方があることが分かります。「オ・レプン・ペ」(o rep un pe　その尻に・沖に・ある・も



写真１　カンカン２遺跡(二風谷)の地層断面(南西側から撮影)。平取町の全域にわたってこのような数十センチの火山灰堆積がみられる。

資料1　北海道西南部における主な近世の火山灰層

火山名	噴火年代	火山灰名	備考
駒ケ岳	寛永十七(1640)年	駒ケ岳火山灰ｄ層(Ko-d)	
有珠山	寛文三(1663)年	有珠山b降下軽石(Us-b)	沙流地方へ大規模に降下
樽前山	寛文七(1667)年	樽前火山灰ｂ層(Ta-b)	沙流地方へ大規模に降下
駒ケ岳	元禄七(1694)年	駒ケ岳火山灰ｃ2層(Ko-c2)	
樽前山	元文四(1739)年	樽前火山灰ａ層(Ta-a)	

資料2　沙流の火山伝承

シシリムカ沿岸地一帯に沙丘をしているのは、樽前山の火山灰だという人があるが、そうではない。函館附近の火山駒ヶ丘(※ママ)から降らせた火山灰である。海岸からかけてシシリムカの上流イワチシから下の一帯皆砂地である。ウサップから上に降灰せず。さて降灰の年代、今知ってる老人がいない(明治44･6･24，ピラトリ，平村イコリアチ)。

(吉田 1957)

資料3　沙流川の津波伝承1

オ･レプン･ペは海嘯、コイ･プルケは海嘯に似て、急にはげしく来ず、緩慢に波がゆるく次第に押し来るものをいうと。海嘯の来るのを見るに、昼は白く、夜は赤くながめられるとのことだ。

昔、松前侯のトノ(使者)が来て沙流太にいた。平取からこのあたりのオッテナども皆ここに集合した時海嘯があったと伝えた。トノが来てオッテナに説教することをトノ･エレンカという。

太古海嘯あった時、シシリムカを海水が押し上って、沿岸のアイヌ溺れ死ぬ者非常に多く、今のペナ･コリの下、ニナツミのチャシにいたオヤヂのチタラベながらに溺れたという話があり、ムイの流れて海に下ったとさえいうから、家々の什具が浮いてただよったさまも知られる。

(吉田 1957)



写真２　長知内地区の地震伝承地であるロクンテウェトゥ(rokuntew　etu　弁財船・舳先)。角度によって３つの舳先をみることができるという(西側から撮影)。丘先式のチャシ跡として遺跡登録されている。　mc 567 164 055(視点場)

資料4　沙流川の津波伝承2

大昔、オ・レプンペがあった時、オホコツ・ナイ・コタンのこなたに、ペンザイセン(ユウカラなどにいるポロ・ロクンテ即ち大弁財船のこと)が押上げられ、つかえた所とて、ロクンテ・ウエトクという山がある。丁度川の中に、山の岬が三つ出ているが、舳艫船体(じくろせんたい)を備えておる。またその上(荷負土人学校から上5里ばかり)ムセウのあなたに、ポロ・モウタプ(下)ポン・モウタプ(中)シ・モウタプ(上)の三つの沢の名がある。これも同時に、カスベの流れよったあとで命名されたという。モウッタプはカスベである(明治44・8・23、ペナ・コリ、川上トモチカウク)。

(吉田 1957)



写真３　岩知志地区にある津波伝承地であるフンペセトゥル(hunpe　setur　クジラ・背中)。沙流川左岸にある山全体がクジラの姿にみえる(北西側から撮影)。
mc 811 707 124(視点場)

資料5　沙流川の津波伝承3

沙流川の洪水伝説

沙流川中流のオーコッナイと幌毛志との間の川向に、川に向って突出た岩はロクンデエトゥといって、昔洪水のとき弁財船がここまで押しあげられてひっかかり、それが岩になったのだ。

またモセウという流れの流域にフンベセトゥル(鯨の背中)というところもある。鯨が洪水でここまで押しあげられたのだ(平取町長知内　萱野利吉老伝)。

(更科 1971)

の：沖からくるもの)は海があふれて一気に来る波で、「コイ・プルケ」(koy puruke　波・沸きかえる)は海水が川をさかのぼって、どんどん水かさが増していく様子を現すものとみられます。

また、津波に関するウパシクマ(言い伝え)の所どころに、誇張表現がみられます。沙流川河口域から30km以上離れた内陸部にクジラが打ち上げられて山になった(資料５)というものや、北前船(弁財船)が岩になったという話(資料４・５)などです。

こうした様々な認識や表現は、地震後の津波がいかに恐ろしいものであるかを伝えるとともに、迅速な非難が大事だということの教訓でもあったと考えられます。

地域史から学ぶ災害への備え

平取町は北海道南西部を代表する活火山である有珠山・樽前山の東方に位置し、日高一の長流である沙流川沿いに居住域が形成されています。

様々な記録を掘り起こすことで、繰り返し起こってきた地域の災害史を解き明かしていくことができます。

火山災害は土中の火山灰堆積に、津波の襲来はアイヌ語の沢名や山・岩などの形に記憶されています。こうした様々な情報を後世に伝えていきながら、地域で暮らしていくための備えにしていく必要があります。弁財船(北前船)やクジラなどの形象に込められた先人のメッセージの検証は、郷土史を学ぶ大事な意義でもあるのではないでしょうか。

「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

■文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055－0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828
初　版:2014年6月
第2版:2020年3月

トパットゥミ（夜襲）伝承にみる沙流川の歴史

13

関連シート：８、62

沙流川のトパットゥミ伝承

アイヌのウパシクマ（言い伝え）の一つに、トパットゥミ（夜襲）伝承があります。全道各地で言い伝えられており、他地域の集団による略奪行為について述べられているものです。

その内容は、大河川の流域集団毎（資料１）の抗争で、沙流川への来襲は、十勝、釧路、北見、石狩からの武装集団であることが、幾つもの言い伝えとして残されています。なお、同一河川流域同士で夜襲を行う話はみられません（資料２）。

トパットゥミ伝承にはチャシ（砦、柵、囲い）がたびたび主要な舞台として登場します（資料３）。チャシの多くは、考古学・歴史学の研究成果から17世紀前後が主な使用年代であったと考えられています。

また沙流川のウパシクマに、トパットゥミの下限年代を推定できる逸話があります（資料２）。二風谷の二谷國松（1888-1960）による伝承で、五代前の祖父の話とされているものです。１世代を30年と単純に仮定した場合、1738年になるので18世紀前半頃に比定できると考えられます。

トパットゥミの規模を示す伝承

当時の軍事的緊張関係を考える上で、どれくらいの規模の来襲であったかが重要なポイントになります。

シウンコッチャシ跡の伝承（渡辺・河野 1974）をみると「夜盗の群はシリ川を下り、何十人何百人か大勢で、延々と列を作って、トゥミルペシナイ（※1）からタプコプ

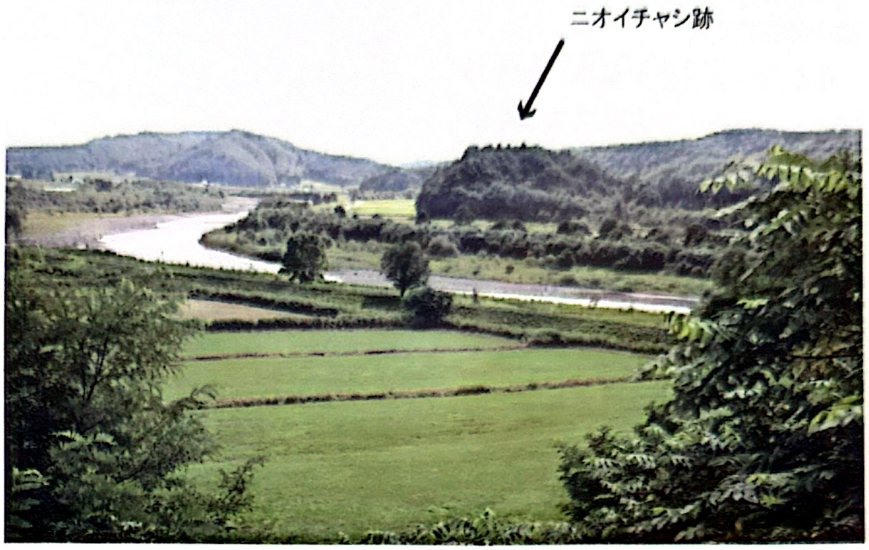


写真１　額平川左岸に所在するニオイチャシ跡（北西側から撮影）。十勝方面からのトパットゥミによって放火された伝承が残る。安政五（1858）年、松浦武四郎によっても描かれた。

資料1　河川流域毎の地縁集団について

同一河川の流域に住む者は己自らをその河川の名称で呼び、また外の集団の人びとからも、居住する河川の名称で呼ばれている。

例えば沙流川流域に住む人々は、Sar-un-kur（サル川の人）、門別川流域のアイヌは、Mopet-un-kur、厚真川流域のアイヌは、Atpechi-un-kurと己れ自らを呼び、また外の川筋のアイヌからも呼ばれている。…

そしてかかる領域は、其川筋の住民によって専有せられ、他の川筋の住民の無断の侵入は許されない。このような領域をiworと呼び、普通領域的意味にiworと云う言葉を使用するときには、前述の住民名を冠する。

（泉 1952）

資料2　沙流川のアイヌ伝承にみるトパットゥミの年代

領域としてのiworには、少なくともSar-un-kur-iworには、これを常時全体として規整する権威は存在しなかったもののようである。…しかし、他の地方との間に紛争が起ると、急に同一川筋の住民間に統一作用がおこり、そこに統率者が現れる。沙流川筋で記憶に残っている最後の統一は、二谷國松氏の五代の祖父Pikunの時代に行われた。

当時Nioi-kotanの無頼漢Yayoturiがkotanから追放を受けたのを腹いせに、十勝アイヌを沙流川筋には宝物が豊かであるからと誘い、山脈をこえて大挙侵入して来た。当時Niptaniのkotan-kor-kurであったPikunは口舌が立つため押されてSar-un-kurの総大将となり、Ikouwe（貝澤前太郎の先祖）に威勢を示すためおぶさって十勝軍陣に赴き猛烈なuko-charanke（公式論争）を行い、遂に勝利をえて、十勝軍を退却せしめた。

この時においては、Sar-un-kurを統率するものはPikunであり、非常事態の間はSar-un-kur-iworは彼によって規整され、交通・狩猟その他一切の行動は彼の統制に服したもののようである。

（泉 1952）

サラ(※2) まで続いた程であった」と述べられています。シウンコッチャシ跡からシリの河口までは直線距離で約1,500mあり、文中にある「トゥミルペシナイからタプコプサラ」もその位の距離感であったとみられます。

現地に行ってチャシから沙流川左岸側(シリ河口近辺)までの距離を体感することで、いかに大規模な列であったかを想像することができます。流域の地縁集団において、緊急的なまとまりができる程の非常事態(資料２)だけに、我々の想像を超える程の大変な抗争であったことが推定されます。

※1.現在の去場(さるば)からみて沙流川の対岸あたり

※2.紫雲古津(しうんこつ)と去場の境界付近にある地名・沢名

トパットゥミ伝承に北海道の歴史をみる

トパットゥミによる地域間集団の往来は、結果として遠隔地との血縁関係を結ぶきっかけになったと言われています(資料４)。こうした逸話から18世紀前半以前のアイヌ社会は、決して流域毎の閉鎖された集団ではなかったことがうかがえます。いろいろな交わりの中でアイヌ文化の地域性や共通性が育まれていったと考えられます。また、ウパシクマにみるコタン、チャシやその周辺の情報は、アイヌ語地名の照合と、その意味を学ぶことに繋がり(資料３)、地縁集団の統一作用は、かつてのアイヌ社会における危機管理を私たちに教えてくれます。

北海道の深い歴史を伝える「非文字資料」をしっかりと解き明かしていくことで、数百年前の生き生きとした住民の姿が浮かび上がってきます。



写真２　シウンコツチャシ跡遠景

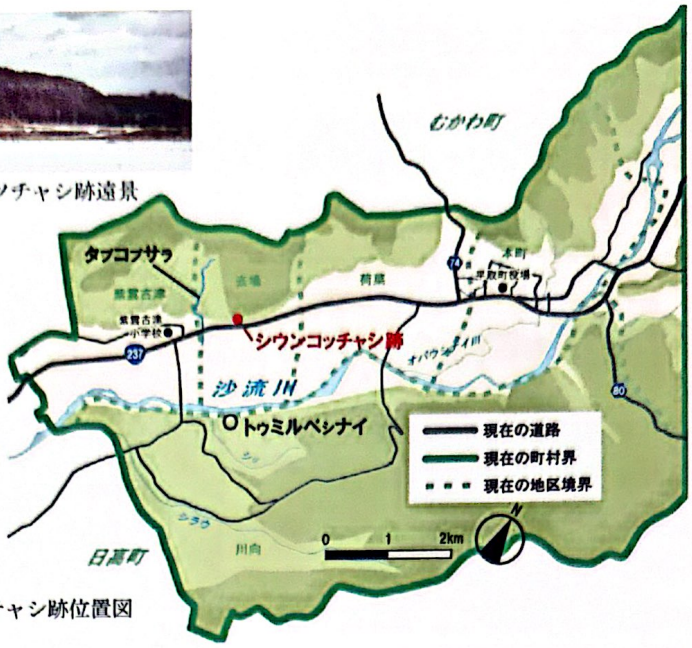


図　シウンコツチャシ跡位置図

資料3　平取町のチャシ跡にみるトパットゥミ伝承

名称(所在地)	襲来先
シウンコツチャシ跡(去場(さるば))	十勝・釧路方面
別称①:ヌペルンナイのチャシコッ	
別称②:タプコプサラのチャシコッ	
サルバチャシ跡(去場)	不明
ポロモイチャシ跡(二風谷(にぶたに))	不明
別称:ポンニナツミのチャシコッ	
スケレペチャシ跡(荷負(におい))	北見・釧路方面
別称:ウコレイのチャシコッ	
ウンチャシ跡(貫気別(ぬきべつ))	十勝
ニオイチャシ跡(貫気別)	十勝
オタリオマップチャシ跡(岩知志(いわちし))	十勝

資料4　トパットゥミの一側面

釧路のアイヌの旦那方も、この沙流の村へ夜襲に来たこともありました。それからまた、十勝からも、夜襲をしに大勢の人々が来たのですけれども、この沙流の村の人々が見破ったものですから、みんな負けて、生きて戻るものは戻り、殺されるものは殺され、それから女の人も男の人も、生き残って、この沙流の村の上流で、そこに住む人々と親戚になって暮している人々もいます。

それから鵡川の川上に、鵡川の上流にも、十勝の男の人が、夜襲の仲間に入ってやって来ました。けれども、その男の人も山で見つけられて、それから鵡川の上流に住む人々と親戚になって、その一族になって、暮らしています。ですから、鵡川の上流にも十勝の人の子孫がいるのです。

それからこの沙流の村、沙流の上流でも女の人、妊娠している女の人が見つけられて、それから、旦那方がかわいそうに思いましたので、村に仲間入りさせ、夫も与えてやりました。

それからというもの、十勝に始まりを持つ、起源を持つ人々もこの沙流の上流に、上流の村(＝貫気別)に、それ以来起源をもって、人の系統が、十勝に起源をもつ人々もいます。

(早稲田大学語学教育研究所編 1985)

「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

■文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055－0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828
初　版:2014年6月
第2版:2020年3月

非文字による情報の文化的景観

14

関連シート：15

非文字資料の重要性

非文字による情報の蓄積は、アイヌ文化の景観を読み解く重要なキーワードといえます。ウパシクマ(言い伝え)として語り継がれてきた様々な情報は、アイヌの民具やアイヌ伝承地を解釈する上で有益な内容を数多く含んでおり、地域の近代史を構築していく上で度々用いられます。

沙流川流域では、今日においてもアイヌ文化の聴き取り調査と地域史への反影が行われています。様々な内容を糸口に、実際に人々が暮らしを営んできた歴史情報を引き出すことが比較的可能な地域といえます。

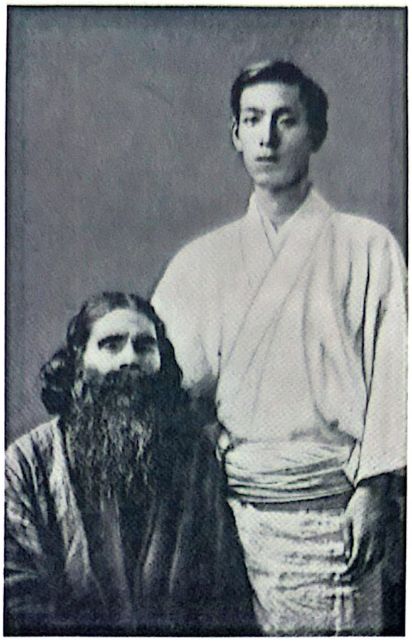


写真１　ワカルパと金田一京助(金田一1933より)。大正２(1917)年7月に上京し、金田一のユカラ採録に協力した。同年12月、51歳の若さで病没。

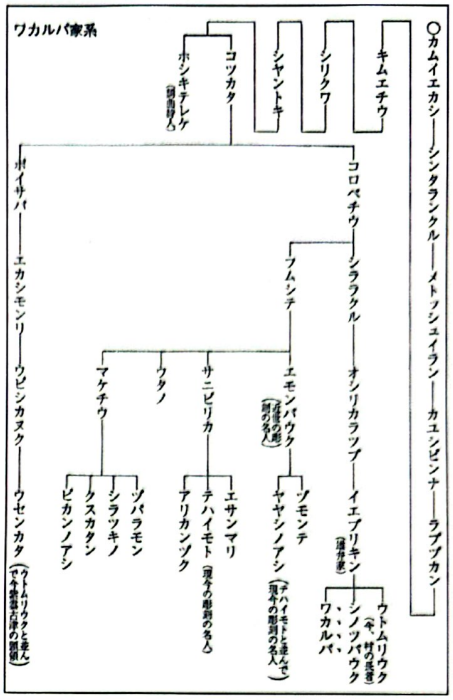


図１　ワカルパの家系図(金田一　2004)。家系をたどる際、初代は神だから本名をはばかって伝えないのだといわれている。

ワカルパの逸話

ワカルパ(1863-1913)はかつて「平取から下、沙流川の川筋に、この人の右に出るものがない」(金田一　2004)と言われた紫雲古津(しうんこっ)のユカラ伝承者です。

金田一京助によるアイヌ口承文芸の筆録(大正２：1913年７月)の協力者で、金田一から「アイヌのホメロス」とも評されました。ワカルパは突出した弁才・記憶力の持ち主で、「詞曲や神曲のことのみではなく、たとえば近郷在住のものはいうにおよばず、東方の奥地の果までも、名だたる名門数十家の家系おば、掌をさすようにそらんじている」(金田一　前掲)ほどの才覚をもっていました。何世代も前もの祖先の記憶は、古老のウパシクマが歴史的資料の役割を果たすことを示すものであり、アイヌ語・アイヌ口承文芸の大きな特質といえます。



写真２　ユックチカウシからみた紫雲古津市街(西側から撮影)。ワカルパのほか、幾人ものユカラ伝承者を輩出した由緒ある土地柄として紹介されている(金田一　2004)。

名工　エモンパウク

ワカルパが口述した家系図(図１)に「エモンパウク(近世の彫刻の名人)」の名があります。ワカルパの祖父であるオシリカラツプの従兄弟にあたります。

氏が制作したとみられるイタ(盆)が北海道博物館に収蔵されています(写真３)。

「裏面のラベルおよび旧蔵先である北海道拓殖館の作品解説には、日高のえもんぱが制作したものであると記されている。このえもんぱは日高の平賀に暮らしたイモンパウク(ママ)という男性と推定さ



写真３　エモンパウク制作のイタ。直径97ｃｍで、現存するアイヌの木製円形盆としては最大級の大きさをほこる。北海道博物館蔵。

れている。イモンパウクは明治９(1876)年に開拓史に雇われ、これ以降、主に博覧会出品のために各種の木工芸品の制作を行った人物」(北海道立近代美術館、アイヌ文化振興・研究推進機構編 2006)とされる作品です。

ワカルパが謡った「虎杖丸(いたどりまる)の曲」「蘆丸(あしまる)の曲」など14編２万行に及ぶユカラは、金田一による『アイヌ叙事詩ユーカラの研究』(1931)に収録され、広く世に知れ渡ることになりました。

一方であまり知られていませんが、芸術家肌を幾人も輩出したとされるワカルパの家系出身の名工エモンパウクによるイタが、北海道の財産として保管されてもいるのです。ワカルパによる口述は、死後100年を超えた今日において沙流川流域のアイヌ工芸にも一層の重みを与えているといえます。

エゾシカの狩猟を物語る景観

平取町の南端から日高町平賀にかけた沙流川右岸側に、サントゥ(san tu)とよばれる細長く伸びる丘陵があります。その根もとあたりにユックチカウシ(yuk kut ika us i)とよばれるシカ落としの伝承地があります(写真４)。

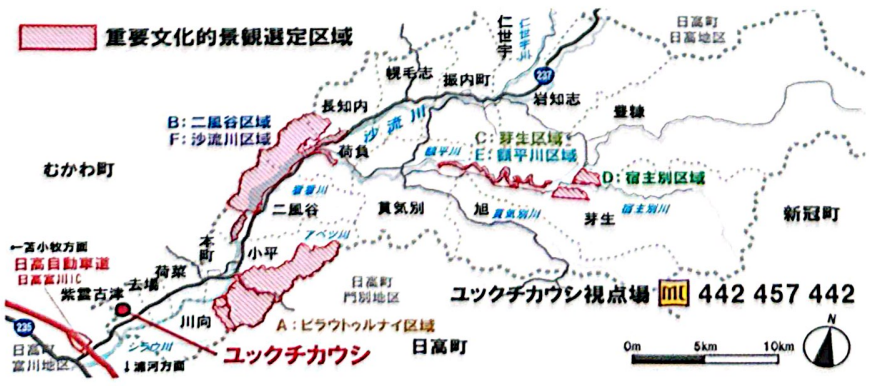
平賀さだも媼いわく「山がちね(尾根)なりに来たのが、どっと切れている。クッはけわしい山。イカウシはユㇰ(鹿)の落ちる処の意味だ。あすこの突き出したちねは、上は歩きやすいが、両側は崖で、その先が切れてクッになっている。今はだいぶ崩れたが、昔はもっとけわしい崖であった。」(山田 1969)とされています。

急峻な崖からの追い落としは、かつてエゾシカ捕獲の有効な方法であったと言われています(アイヌ文化保存対策協議会編 1969)。そうした場所を古老の記憶とともに、かつての狩猟場としてみることができます。

ユックチカウシは明治前半代のエゾシカ激減により、その役割を果たせなくなりそのまま使われなくなりました。現地の様子や狩猟道具の分析だけでは解明しえないシカ猟の姿を教えてくれる一事例といえます。



写真４　特徴的な岩塊ではあるが元々は繋がっており、昭和20年代の崩落で現在の形になった。写真の中央、丘陵の奥側から崖の頂に向かってシカを追い込み、落ちたところを捕獲したと伝えられる(南側から撮影)。



「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055－0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話：01457-2-2892
FAX：01457-2-2828

初　版：2014年6月
第2版：2020年3月

アイヌ口承文芸の今日的継承

15

関連シート：7、14、17、18

アイヌ口承文芸について

口演で語られるアイヌの文芸には、物語を始めとして伝説、歌謡、挨拶の口上、祈り言葉などがあります。聴き手と語り手による味わいや楽しみの中で育まれ、発展してきたものです。

様々な内容の内、物語については大きく３つに区分される考え方が一般的となっています。



写真１　物語のメロディーは謡い手によって様々に奏でられる。元々はチセ(家)の炉ぶちなどで謡う娯楽でもあった。

①英雄叙事詩

沙流(さる)川流域ではユカㇻとよばれています(道南方言)。その他、ヤイラㇷ゚(道南の一部)、サコロペ(道東北)、ハウキ(樺太)といった地域ならではの呼び名があります。

レㇷ゚ニ(拍子木)で炉ぶちを叩き、リズムをとりながら短いメロディーを繰り返す語りです。ポイヤウンペという超人的な能力をもった少年による冒険・恋愛物語がよく知られていますが、なかにはそれに当てはまらない内容の物語もあります。

一般に長大な物語が多く、語り尽くすのに、数十分から数時間以上かかるとされています。

②神謡(しんよう)

沙流川流域ではカムイユカㇻ(道南方言)で、トゥイタㇰ(道南の一部)、メノコユカㇻ(道南の一部)、オイナ(道東北・樺太)、マッユカㇻ(道東)とも呼ばれています。

サケヘと呼ばれる繰り返し言葉を挟むのが特徴で、様々なカムイの体験談や身の上話が多くみられます。

サケヘはカムイ自身の声という解釈がある一方で、はやし言葉だったり言っている意味がよく分からない場合もあります。



写真２　アイヌ口承文芸を伝えていくための今日的なスタイルが創りだされている。シシリムカアイヌ文化祭での成果発表は、その代表的な取り組みでもある。

③散文節話

沙流川流域ではウエペケレ(道南方言)と呼ばれ、イソイタッキ(道南の一部)、トゥイタㇰ(道東北、樺太)などとされる地方もあります。

日常会話に近い語り口、淡々とした語り、大きな抑揚をつけた口調などで語られます。

物語の内容は主人公もあらすじもバラエティーに富んでいますが、結論として「正しい行いをしたものには良い結果が訪れる」といった生活を営む上での教訓を込めているものが多いとされています。

口承文芸を伝える今日の姿

伝統的な暮らしの中ではチセ(家)のアペオイ(囲炉裏)や、コタン(集落)での儀礼の場で謡われたりした口承文芸も、現代社会の移り変わりの中でその形を変え続けています。

家庭の中で語り継ぐ従来の継承スタイルの一方で、録音機材の発達や文字による記録など、いろいろな方法が駆使されるようになりました。

その他にもアイヌ文化祭や弁論大会、アイヌ語を披露する口演会など、非日常の場を通して継承する努力が行われてもいます。

平取(びらとり)町は、昭和62(1987)年に「平取町二風谷(にぶたに)アイヌ語教室」が開設され、北海道各地にアイヌ語教室がつくられる先鞭となった地域です。以来、授業の一環としてもアイヌ口承文芸の学習に取り組み、毎年2月に行われるシシリムカアイヌ文化祭(第1回は平成2年度：以後継続開催)で成果発表が行われるようにもなりました。

時代の変化とともに歩みながらアイヌ文化を継承していくことは、沙流川流域の未来を考えるための、大事な取り組みの一つといえます。

「オキクルミ　トゥレシヒ　-大空に描いたコタン-」

沙流川流域を舞台にしたカムイユカラ(神謡)です。オキクルミの妹(妻)によるアイヌモシリ(人間の世界)への想いが表現されています

アンナホーレホレホレ	
アコロ　コタンポ	私の村が
アンナホーレホレホレ	
アネシカールン	懐かしく
アンナホーレホレホレ	
タンペクース	そのために
トゥイペ　ソモ　アーキ	二回食べること
トゥ　スイ　チエクーニプ	三回食べること
レ　スイ　チエクーニプ	それらの食べ物を
トゥカリーケヘ	口にしようと
アノテチユー　ワ	私はせずに
アンナホーレホレホレ	
アナナイネ	私はいたが
タネ　アナクネ	今になると
アンナホーレホレホレ	
ライ　クーニ　プ	死にそうに
アネ　キ　フーミ	私はなって
ウ　ネ　クーナク	いると思いながら
アラム　キー　コロ	ずーっと私は
アンナホーレホレホレ	
アナナイネ	いたのであった
アコロ　ユーピ	私の兄が
ソユンパー　ワ	外へ出て
アフプ　クーニ	戻って来るのが
カスノ　イーサム	遅くなり
カスノ　イーサム	なかなか戻らん
アンナホーレホレホレ	
キ　ルウェ　ネ　アイネ	ややあってから
アフプ　アークス	戻ってきて
エネ　イターキ	言った言葉は
アコロ　トゥレーシ	私の妹よ
アコロ　コタンポ	私たちの村を
エエシカールン	懐かしむあまり
タンペ　クース	それそのために
トゥ　スイ　チエクーニプ	二度の食べ物
レ　スイ　チエクーニプ	三度の食べ物
ソモ　エエー　ノ	食べようとせずに
エアン　アイーネ	お前がいて
エライ　ワ　ネー　ワ	死んでしまったと
ネ　ワ　ネー　ヤク	したならば
モシリ　エウェン　ペ	国土のために
コタン　エウエン　ペ	村のために
ネ　ルウェー　ネ	ならないこと
キ　ワ　クース	それがゆえに
ソイェネアン　ワ	私は外へ行き
アコロ　コタンポ	私たちの村の
トゥ　ノカ　オロケ	二つの形を
レ　ノカ　オロケ	三つの様子を
アヌイェ　ワ	描いてから
アフナン　キー　ナ	入って来たのだ
ヘタク　ソイェンパ	さあ外へ出て
インカラ　キー　ヤン	見てきてくれ
セコロカイ　ペ	そのように
アコロ　ユーピ	私の兄が
エタイェ　カーネ	言ってくれた
キ　ワ　クース	そこで私は
ソユンパーアン	外へ出ようと
イキヤーナイネ	どうにかこうにか
レイェレイェーアン	這うように
シヌシヌーアン	いざるように
ソイェンパアン　ワ	外へ出てから
インカラアン　ワ	やっとの思いで
ネ　ワ　ネ　チーキ	見てみると
アンナホーレホレホレ	
ニシコートッ　タ	雲の表面に
ソンノ　ポーカ	本当にも
アコロ　コタヌ	私の村が
アコロ　モーシリ	私の国土が
トゥ　ノカ　オロケ	二つの絵として
レ　ノカ　オロケ	三つの絵として
アヌイェ　キー　ワ	描かれている
シラン　カートゥ	その様子を
エネ　オカーヒ	言うならば
シシリムーカ	沙流川
アラパ　ルー　コ	その流れの
マクナターラ	清らかな様子
ケナシ　ソ　カー　タ	野原の所に
ノカン　ユク　トーパ	子鹿の群れや
ルプネ　ユク　トーパ	大鹿の群れが
チテッテレケーレ	追いかけ合い
アンナホーレホレホレ	
シシリムーカ	沙流川の
ペトンナイー　タ	川の中には
アンナホーレホレホレ	
ノカイ　チェプ　ルプ	小さい魚や
ルプネ　チェプ　ルプ	大きい魚が
チホユッパーレ	ひしめき合い
カンナ　チエープ　ルプ	水面の魚は
スクシ　チーレ	天日で背が焦げ
ポクナ　チェープ　ルプ	水底の魚は
スマ　シール	石で腹を擦り剥き
アンナホーレホレホレ	
チェプ　コイキ　クーニプ	魚を獲る者
アンナホーレホレホレ	
マレプ　ウコエタイーパ	回転銛を奪い合い
アンナホーレホレホレ	
ペッ　ケナシ　カー　タ	川原の方では
ルプネ　ユク　トーパ	大鹿の群れや
ノカン　ユク　トーパ	子鹿の群れが
チテッテレケーレ	追いかけ合い
ユク　コイキ　クーニ　プ	シカを獲る人
アンナホーレホレホレ	
オロ　チパスース	走り回り
トレプ　タ　クーニ　プ	ウバユリを掘る人
ノカイ　サラーニプ	小さい袋を
ウコエマクパ	皆が嫌がり
ルプネ　サラーニプ	大きい袋を
ウコエタイーパ	奪い合い
アンナホーレホレホレ	
スス　ニターイェ	ヤナギの林は
ホサオチューパ	川岸の方へ
ケネ　ニターイェ	ハンノキの林は
ホマコチューパ	山の麓に
スプキ　サーリ	ヨシの原は
ホサオチューパ	川岸の方へ
シキ　サーリ	オニガヤの原は
ホマコチューパ	山の麓に
アンラマース	それを見た私
アウウェスーイェ	爽快な気持ちに
アンナホーレホレホレ	
キ　ルウェ　ネ　アイネ	なった途端に
アシケトコ　ウシコサヌ	見ていた画像が
	ぱっと消えた
オロワノ　きもちよく	それから後は気持ち良く
アナン　セコロ	いたと

当作品は二風谷アイヌ文化博物館常設展示室カムイゾーンにて視聴できます

(萱野編1998)



「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

■文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055-0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828

初　版:2014年6月
第2版:2020年3月

アイヌの民具に学ぶ -博物館のアイヌ生活用具コレクション-

16

関連シート：1、22、41、42

重要有形民俗文化財（国指定）について

町立二風谷アイヌ文化博物館に収蔵・展示してあるアイヌ民具の一部は、「北海道二風谷及び周辺地域のアイヌ生活用具コレクション」として重要有形民俗文化財に指定されています。指定物件1,121点の内、919点は博物館、212点は萱野茂二風谷アイヌ資料館が所蔵しており、沙流川流域のアイヌ文化を学ぶための標識的な資料として広く活用されています。

多くの資料に残されたモノの来歴は、一品ごとに付けられた戸籍のようなものです。いつ、どこで、どうやって、誰に使われたかといった情報は、アイヌ文化の地域性を理解する上でとりわけ重要視されます。

指定資料の多くは昭和30～40年代を中心に収集されており、沙流川流域及びその可能性のあるものが92%を占めています。昭和期の収集年代であるものの、具体的な情報を伴った生活用具のまとまりとしては、国内随一のアイヌ生活用具コレクションといえます。

民具にみる人々の想い

女の手仕事は針仕事や機織り・ござ編みなど、男の手仕事には木彫が伝えられています。女が作る生活道具への想いは「心をこめて刺しゅうした晴着を着せて娘は恋人を祝宴にのぞませた」（萱野1974)という言葉でも表されます(写真２)。男の手仕事も同様で、さやと柄を彫って女性に贈るメノコマキリ(写真３)は、かつては求愛のしるしであったと言われています。



写真１　「アイヌ伝統文化の今日的継承」を運営理念として平成４(1992)年４月に開館。前身の町立二風谷アイヌ文化資料館から引き継いだアイヌの民具を主体に展示している。

美しい文様による造形の演出は、一人前の大人の証でもありました。アイヌの民具をみるとその多くに、モレウノカ(静かに・曲がる・形)の施文をみることができます※。

※「文様について、学者や研究者が、括弧紋だとか何だとか、いろいろ形式名称を付けているようですが、アイヌ語ではただモ・レウ・ノカ(静かに・曲がる・形)というだけです」（萱野1974)



写真２　チカㇻカㇻペ(切伏刺しゅうした着物)。貝澤シランペノ・貝澤あれんとく・貝澤清太郎が着用。



写真３　川上ヤユッコレ作のメノコマキリ(女用小刀)。川上てからん旧所有。

また、祭祀具を伝える逸話に「トゥキパスイはアイヌの願い事を忠実にていねいに神さまに伝え

資料　重要有形民俗文化財(国指定:アイヌ文化関連)　※2020年現在

1.アイヌのまるきぶね　昭和32(1957)年指定
　北海道大学北方生物園フィールド科学センター植物園所蔵
2.アイヌの生活用具コレクション　昭和34(1959)年指定
　函館市北方民族資料館所蔵
3.北海道二風谷及び周辺地域のアイヌ生活用具コレクション
　平成14(2002)年指定　平取町立二風谷アイヌ文化博物館、萱野茂二風谷アイヌ資料館所蔵

てくれます」(萱野 1974)という一節があります。トゥキパスイ(奉酒箸：写真４)はカムイノミ(カムイへの礼拝)を行う際の必需品で、アイヌ文化の今日的継承を支える重要な道具といえます。この文中には単なる祭祀具としてではなく、「アイヌの口から直接神さまにお願いするのはおそれおおいというような謙虚な考え方がある」(萱野同文献)という想いが込められています。

物に対する尊敬の念や気持ちを知ることで、様々な民具をみる目が厳粛なものになったり、あるいは微笑ましさを含むものへと変わっていくこともあります。アイヌの伝統的な世界観や知恵、教訓などが、道具の中に詰まっています。

民具の情報を読み取る

アイヌの伝統的な生活用具には、大きく分けて自製品(木製品や衣服・イナウなど)と外来産品(鉄器・漆器・ガラス玉など)があります。

外来産品の内、シントコ(行器：食べ物などを入れて持ち運ぶための容器)、パッチ(鉢：写真５)、トゥキ(杯：写真６)などの漆製品については、生産地調査の結果、東北、北陸、関西といった広域にわたる中で会津、輪島、京都、紀州が多いという傾向が判明しています。年代が分かる資料の中では、近世(江戸時代)が最も多く、中には中世相当(江戸時代以前)と推定されるものもあります。

かつての生活では、漆製品などの貴重品がチセ内のイヨイキリ(宝壇)に置かれ、大切に扱われていました。イコロ(宝物)として大事にされる道具類の中には世代を超えて受け継がれるものもあります。その結果、数百年前の交易品がたびたび良い状態で残されたりもします。

民具から歴史事象を解き明かしていく

北海道の歴史を物語る１組のトゥキ(杯)、オユシペ(天目台)があります(写真６)。

昭和15(1940)年頃に亡くなった貝澤シランペノが、厚岸で１年間強制徴用された報酬として持ち帰ってきたと伝えられている漆器です。

近世後半の蝦夷地で、和人によって行われるようになった漁業の操業は、18世紀初頭以降の場所請負制(交易権を商人に代行させて知行主は一定の運上金を得るという流通制度)へと移行していきます。

当時、沙流場所を請負った山田文右衛門は、ほかにも勇払、厚岸、根室場所も経営していました。沙流川流域のコタンから厚岸へ徴用された逸話が多いのもこのためです。

様々な情報公開

資料の収集年代とモノ本来の制作年代、そして個々に残る多様な来歴は、地域の歴史を学ぶための貴重な学習素材でもあります。博物館では、常設展で多くの指定民具を展示する一方、ホームページでもデータ化した資料の一部を公開しています。



写真４
貝澤シランペノ作のトゥキパスイ。沙流川流域で作られたものには、両側に３本線の筋彫りをする傾向がある。





写真５　プタウンパッチ(蓋付き漆鉢)。江戸中～後期の京都産と推定。



写真６　貝澤シランペノ旧所有のトゥキ(杯)・オユシペ(天目台)。一年間働いた報酬の椀。

「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

■文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055－0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話：01457-2-2892
FAX：01457-2-2828

初　版：2014年6月
第2版：2020年3月

アイヌ古式舞踊

17

関連シート：15、18

地域に継承される様々な踊り

アイヌが育んできた芸能に歌や踊りがあります。地域毎の特色が顕著で、日々の娯楽や儀式で演じられたり、作業の動きに合わせて行なわれるなど、様々な種類や意図があります。

これらは伝統的な暮らしの中で形成されてきた信仰と密接に結び付いており、多くは家庭やコタン(集落)で歌い踊ることによって継承されてきました。

踊りの種類は祭祀的な意味合いをもつ儀式舞踊、鳥や獣、自然の中にあるものを真似た模擬舞踊、遊びの要素を含んだ娯楽舞踊などがあります。

これらは様々なカムイの意志や儀礼動作、古語を色濃く伝えており、中には舞踊の発生を考察するに足る内容をも含んでいます(資料１)。

こうした多様な価値が認められ、昭和59(1984)年に重要無形民俗文化財、平成21(2009)年にはユネスコの無形文化遺産の代表的な一覧に登録されました。



写真　平取アイヌ文化保存会によるハラㇻキ(鶴の舞)の披露（南側から撮影）。集団が列になって一羽の鶴を表現している。チセ内外での古式舞踊は、アイヌ文化の雰囲気を一層際立たせる。

アイヌ古式舞踊の保存と普及

重要無形民俗文化財「アイヌ古式舞踊」の保持団体は、北海道アイヌ古式舞踊連合保存会を含む道内の18団体で、その中に平取(びらとり)アイヌ文化保存会も入っています。

現在、北海道内外で行なわれるアイヌ古式舞踊の披露は、多くの担い手による保存活動の一環にもなっています。

二風谷(にぶたに)アイヌ文化博物館が主催する体験学習でもアイヌ古式舞踊をメニュー化しており、団体旅行等の来館者に体験してもらう機会を設けています。

平取アイヌ文化保存会の発足

近代以降、アイヌの文化伝承を取り巻く環境が大きく移り変わりました。そのため、地域の歌や踊り、楽器などの演奏を正しく継承していくことが難くなっていきました。

しかし、そのような時代にあっても、儀式などの場でアイヌプリ(アイヌ式)の作法は受け継がれていましたし、生活の中で昔ながらの歌が口ずさまれることもありま

資料1　いくつもの歌と踊り

・座って数人で歌う歌
　数人の歌い手が漆塗りの器のふたを囲んで座り、全員で手で軽く叩いて拍子を取りながら歌う。平取地方ではウポポとよばれる。
・輪になって踊る踊り
　一同が中心を向いて円陣をつくり、歌いながら時計回りに進んでいく踊り。平取地方ではホリッパとよばれる。
・杵つきをしながら歌う歌
　穀物などをつくときに、その動作にあわせて歌う。
・動物の仕草をおり込んだ踊り
　動物の仕草を真似た動きをおり込んだ踊り。ツル、シギ、アマツバメ、ネズミ、キツネ、バッタなどの踊りがある。
・男性が舞うもの
　床をゆっくり踏みしめながら両腕を上下させおごそかに舞う。弓矢や刀を手にして踊る踊りなどもある。

※これらのほかにも様々な種類の歌や踊りがある。
（北海道立アイヌ民族文化研究センター 2001）

した。

昭和58(1983)年には平取アイヌ文化保存会が結成され、アイヌの精神文化、物質文化を単なる記録としてではなく、できるだけ生活の中で生きたものとして保存・伝承する取り組みが行われるようになりました。

平取アイヌ文化保存会子どもの部(当時)では、実際に見聞きした方に教えを受けながら、残っていた映像を研究して古い踊りの再現が行われたりしてきました。その成果は、町内で行われる「シシリムカアイヌ文化祭」を始め、北海道内外の催しで発表されています。

主な伝承曲目

アイヌ古式舞踊において、踊りの開始を知らせる役目をもつ座り歌があります。沙流(さる)地方では「ウポポ」と呼ばれるもので、シントコ(行器)のフタを叩いてリズムをとりながら、ウコウㇰという輪唱法を用いて同じ旋律を追いかけるように歌います(図１)。

舞踊の終わりに行なわれる「ホリッパ」は自由に踊り歌うもので、踊る人たちを囲んで大きく円を作ってはやします。最近では周りの円だけで踊られることも多く見られます。

様々な生き物を模した模擬舞踊には、鳥を真似たものが多くみられます。

平取町ではハラㇻキ、アンナホーレ、チャㇰピヤㇰなどがあり(資料２)、主要な披露演目にもなっています。

アンナホーレやチャㇰピヤㇰは、細かいリズムに合わせて小さく飛びながら円を描き、立ち位置を入れ替えながら踊られます。

小気味よい躍動感で空を舞う鳥が表現されており、とても踊りごたえがあります(図２)。
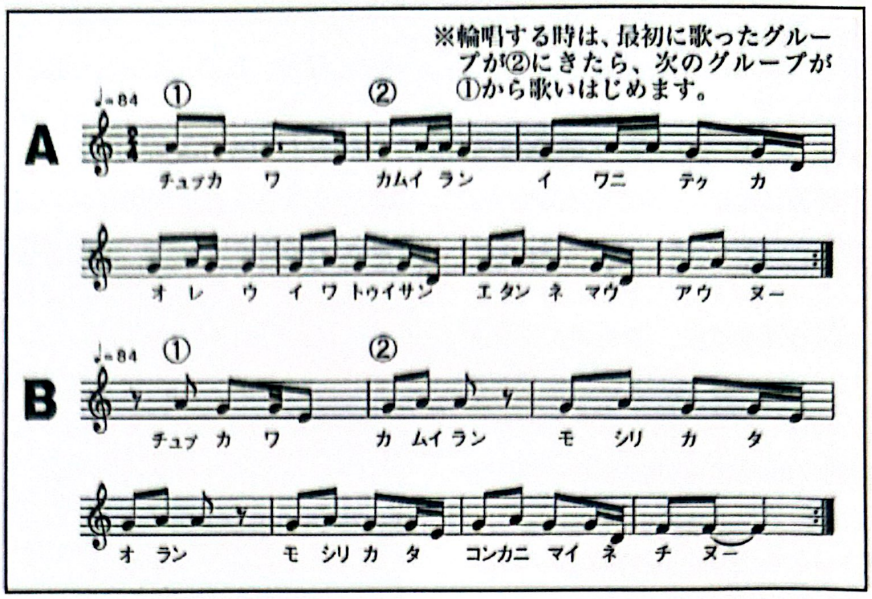


図１　Ａが平取地方、Ｂが釧路地方で伝承されているウポポ。歌詞やメロディーに違いがみられる(財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 2008)。

資料２　平取地方で伝承されている踊り

・チャㇰピヤㇰ(cak piyak:アマツバメの舞)
　アマツバメが空を飛び交う様子を表現した動きの激しい踊り。
・フントリフンチカプ(huntori huncikap:ワタリガラスの舞)
　ワタリガラスが水浴びをしたりしながら遊んでいるといわれる踊り。
・ハラㇻキ①(harark i:ツルの舞)
　場所が広くて踊り手の人数が多いときは3列になって踊る。真ん中の長い列がツルの胴体になり、両脇の短い列はツルの翼になる。
・ハラㇻキ②　ツルが湿原に遊ぶ様子を表現した踊り。
・ウフンペネレ(u humpe ne re:クジラの舞)
　海岸に上がった寄りクジラをお婆さんが見つける様子を表した踊り。
・アンナホーレ(anna hore:鳥の舞)
　すでに何という鳥なのか分からなくなってしまった踊り。

(平取アイヌ文化保存会『アイヌ古式舞踊解説』を改編、一部抜粋)

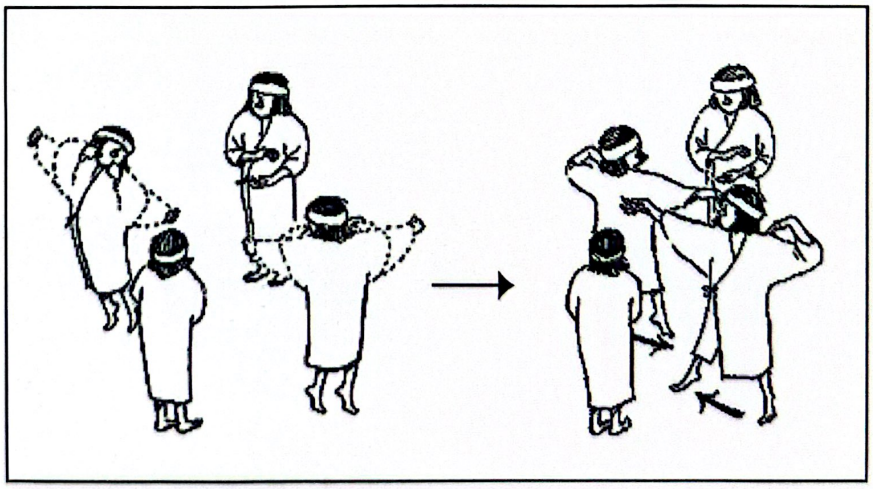


図２　アンナホーレ(鳥の舞)の動き方の一部。鳥が羽ばたき、舞い遊ぶ様子が表現されている(平取町 2004)。

「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

■文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055－0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828
初　版:2014年6月
第2版:2020年3月

シシリムカアイヌ文化祭

18

関連シート：15、17

シシリムカアイヌ文化祭の開催とその意義

毎年２月中旬の日曜日、平取町中央公民館を会場にシシリムカアイヌ文化祭が開催されています。平成２(1990)年以降、継続開催されている地域ならではのアイヌ文化伝承活動発表会です。

かつては日々の暮らしの中で育み、受け継がれてきたアイヌ伝統文化も、現代社会におけるグローバル化の中でその形を変えつつあります。平取アイヌ文化保存会や平取町二風谷アイヌ語教室、イオル再生事業の場での活動は、今日的な文化継承の代表的な姿といえます。

また、マンロー先生を偲ぶ会(６月)、チプサンケ(８月)などとならび、定期的な文化活動を披露する場でもあり、アイヌ文化に関心をもつ町内外の人たちが集う交流機会になっています。

地域の子どもたちによる発表

アイヌ文化の継承を考える上で、地域に住む子どもたちの育成は大事な課題です。

二風谷アイヌ語教室子どもの部による、手づくり絵本の朗読やお遊戯の披露が毎年行われています。アイヌ古式舞踊にもたびたび参加し、大人と一緒に楽しみながら学習しています。



写真１　平取アイヌ文化保存会による古式舞踊「エルムシノッ（鼠の踊り）」の披露。多くの観客の前での発表は、踊りを保存･継承する主要な場にもなっている。

アイヌ語劇

地域に伝わるアイヌ口承文芸を題材にしたアイヌ語劇を行うこともあります。今までに「子どもと遊んだ神」「キツネのチャランケ」などが発表されています。

「子どもと遊んだ神」は昭和36(1961)年に荷負本村の木村こぬまたんさんから聴き取られたウエペケレ(散文説話)をもとにしています。オキクルミカムイの子と遊んであげたヘビ神が、たくさんの土産をもらってカムイの国へ帰ることができたというお話です。

「キツネのチャランケ」は昭和43(1968)年に去場の鍋澤ねぶきさんから聴き取られたカムイユカラ(神謡)を素材として再構成されたものです。人とキツネの談判を通して、サケや木の実などの食べ物を共有し合う大切さを教えてくれる内容で、現在の千歳市を舞台としたお話です。

アイヌ語の学習は、和語になじんだ現代社会において非常に難しいものになっています。しかし、みんなで協力し合う劇という形をとることで、違った観点としてよい学習意欲につながっています。



写真２　二風谷アイヌ語教室によるアイヌ語劇の披露。舞台発表を通したアイヌ語学習を行うことで、会話のやり取りや表現方法の習得につながっている。

アイヌ口承文芸の披露

伝説、歌謡、祈り言葉など、ア

イヌ口承文芸のさまざまなジャンルの内、物語については英雄叙事詩(ユカラ゛)、神謡(カムイユカラ゛)、散文説話(ウエペケレ゛)の３つに区分される考え方が一般的となっています。※いずれも沙流方言

沙流川流域は、数多くのアイヌ口承文芸が残されている地域として知られています。

住民のなかには、幼少の頃に聞いたカムイユカラなどを習得したいと改めて思う方もたくさんいます。古老たちが残した音声資料を教科書として、日々の学習を行なっています。



写真３　道立苫小牧高等技術専門学院平取職業訓練校生が制作したイナウソ(模様つきのゴザ)の展示。作品の展示公開は、作り手にとってよい励みにもなっている。

アイヌ古式舞踊

沙流川流域に伝わるウポポ(座り歌)やハララキ(鶴の舞)、チャクピヤク(アマツバメの舞)などが、平取アイヌ文化保存会によって披露されています。また、特別講演として他のアイヌ古式舞踊団体も招聘されています。沙流地方は鳥を模倣した軽快な舞が多い一方で、他地域は農耕や昆布採り、乗馬などを表した踊りがあるなど、それぞれの地域性に根付いた舞踊が楽しめます。

また、アイヌ文化祭などの催しで披露されるアイヌ古式舞踊は、正装衣を身にまとって行うのが一般的となっています。地域性に彩られたアイヌ文様の躍動も、舞踊観賞の醍醐味といえます。

今後の文化継承に向けて

近代以前の暮らしではアイヌ語が日常会話として用いられ、カムイへの信仰が重要な生活の規範でした。その一方、近・現代以降は人とモノが一層頻繁に日本列島を往来するようになり、暮らしが大きく変容していきました。

そうした移り変わりの中、口承文芸や舞踊を家庭・地域社会で受け継ぎ、アイヌ文化祭や弁論大会、アイヌ語を披露する公演などといった非日常の場で継承する努力が行われています。

平成23(2011)年11月のアイヌ語弁論大会「イタカンロー」では、平取町の親子６人で出場した“親と子のアイヌ語学習会”による早口言葉「オンネパシクル(年寄りガラス)」が弁論部門の最優秀賞を受賞しました。

また、道内各地で行われているアイヌ文化フェスティバルでも、平取アイヌ文化保存会によるアイヌ古式舞踊がたびたび披露されています。

近年は札幌発着ツアーのシシリムカアイヌ文化祭への来場を通して、都市部の方々にも平取町のアイヌ文化継承を見て頂いています。今後も地域力を向上させる取り組みを継続しながら、住民の生き生きとした姿を発信していく予定です。



写真４　穀物のイユタ（杵搗き）体験。ピヤパ(ヒエ)やムンチロ(アワ)などの精白は女性の大事な仕事で、かつては複数人で作業唄を交えて行なわれた。

「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

■文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055−0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828
初　版:2014年6月
第2版:2020年3月

平取地域イオル再生事業

19

関連シート：20、37、39

アイヌの伝統的生活空間の再生について

アイヌの伝統的生活空間の再生事業は「自然と共生していたアイヌの人々の伝統的な生活の場(イオル)をイメージし、個別の伝承活動に必要な自然素材の供給を可能とする、自然を基本とする空間を形成する」(アイヌ文化振興等施策推進会議 2005)国のプロジェクトです。

平成18(2006)年度から白老地域で先行実施され、その２年後からは平取地域でも行われるようになりました(資料１)。今後、道内各地に拠点を設けて、地域の特性に根ざした再生事業が拡充される予定となっています。

アイヌ文化を伝承していくための素材確保は、今後一層重要性を増していくと考えられます。そのためには継続的に山林・水辺空間内における植物の多様性を再生・保持していく必要があります。

例えばチキサニ(ハルニレ)が繁茂する河畔林は、有用な草本類が生育する環境が作られると言われていますし、アッニ(オヒョウ)やニペシニ(シナノキ)はアットゥシ(樹皮で作った織物)の材料にもなります。

近代以降は北海道内の森林の多くで針葉樹が皆伐され、元々あった針広混交林から広葉樹のみの山へと変容してきています。

本来あった樹木の植栽もしくは育成補助を行うことで、アイヌ文化を育んできた森林の姿へ近づけていくことが可能になっていきます。



写真１　平取地域イオル再生事業による雑穀収穫体験。アイヌ文化の穂摘み道具であるピパを使い、説明を受けながらもぎ取っていく。

資料1　アイヌの伝統的生活空間の再生事業がまとめられてきた経緯

平成8(1996)年4月
『ウタリ対策懇談会報告書』で伝統的生活空間の再生について提言される。

平成17(2005)年7月
『アイヌの伝統的生活空間の再生に関する基本構想』がまとめられる。

平成18(2006)年度
基本構想に基づき、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構によって先行的に白老地域の事業が着手される。

平成19(2007)年7月
『アイヌの伝統的生活空間の再生事業の中期的展開方針に関する報告書』がまとめられる。

平成20(2008)年度
中期的展開方針に基づいて平取地域の事業が着手される。

平成23(2011)年9月
『アイヌの伝統的生活空間の再生事業の「新たな展開方針」に関する報告書』がまとめられる。

平成23(2011)年度
新たな中期的展開方針に基づいて事業が着手される。

平取地域での事業展開

平取町での取り組みは、沙流川の内陸部を拠点として行われています。再生事業の基本的機能(資料２)に基づいて、イオルの森(二風谷)、水辺空間(本町)、コタンの再現空間(二風谷)の整備が進められています。

資料2 「アイヌの伝統的生活空間の再生事業」の基本的機能

①アイヌ文化の伝承に必要な自然素材の確保が一定のルールの下で自由に行うことができる。

②空間において確保された自然素材を活用した、アイヌの人々の自然観に根差した工芸技術等の文化の伝承活用、自然と共生していたアイヌの人々の知恵を生かした文化の体験あるいは交流等の活動が行われる。

（アイヌ文化振興等施策推進会議 2005）

資料3 アイヌ語研究のなかの「イオル」

松浦(1850)「内 イヲロ テシケ」(オシケoske「～の中」の誤り：奥田氏注)

バチェラー(1889)「Iworo,a. The Whole. 皆」

バチェラー(1905)「Iworo,イウオロ、山」

磯部(1936)「イヲロiworo 奥地」

知里(1951)「iwor(-i) イオル 神々の住む世界。(＝「カムイコタン」)。具体的には狩や漁の場としての山奥又は沖合。キムン・イオル(奥の・狩場)「山奥」。レプン・イオル(沖の狩場)「沖合」。イオル・コル・カムイ【ビホロ】(山奥を・支配する・神)「熊」

服部編(1964)「山'iwor(生き物の住む所としての)」「ほらあな(kamuy)'iwor[敬]《熊の穴》」「中 'iwor(家・樽・箱・穴等の)」

北海道教育庁生涯学習部文化課編(1992：久保寺逸彦編 アイヌ語・日本語辞典稿)「狩又は生活資源採取の場」「神々の住む世界 部落の祖先の祭場のある山」

中川(1995)「イウォロ iwor【名】イウォロ。狩場；猟獣がいたり山菜がとれたりするところ。カムイが人間と直接出会うための場所ともいえる。」

田村(1996) iwor イウォロ 1【名】尾根と尾根の間の比較的平らな部分、山の谷間(たにあい)(熊狩りなどをする所、狩場)、山奥。

「iworイウォロ 2【位名】…の中(両側または周囲を仕切られた中を言うらしい)」

萱野(1996)「イウォロ【iwor】1深山、奥山。2狩場：狩に行く時の自分の持っている場所。行きつけの山のふところ。」

（奥田 1988）



写真２ 「コタンの再現空間」に建ち並ぶチセ（南側から撮影）。平取イオル再生事業の拠点として、多くの地域住民が集う場となっている。

とりわけイオルの森は、既存の町有林(旧平取町町民の森)を引き継ぐ形で事業化されています。地域における近代以降の森林が土台にあることから、階層構造の複雑な山へと誘導しやすい環境がすでにあるといえます。水辺空間は、主に沙流川の河川敷を利用して水生植物の植栽を行う場所です。ムンチロ(アワ)・ピヤパ(ヒエ)・シプシケプ(イナキビ)等の雑穀やサラキ(ヨシ)・シキナ(ガマ)等が繁茂する水辺を再生し、伝承活動に生かすことを目的としています。コタンの再現空間は、平取地域イオル再生事業の活動拠点となる場です。伝統的なチセの建築をはじめとした技術や儀式等の継承・普及を行っています。

地域住民との協働

事業の推進にあたっては、地域住民の参画が欠かせません。

自然素材の加工や儀式の習得にあたっては、次世代へ繋げていくための人材育成も行われています。

普及・啓発を充実させていくためには、イオル(資料３)という言葉も含めて事業内容を浸透させていく必要があります。

一般を対象とする主な取り組みとしては山菜・雑穀の収穫・調理、アシリチェプノミ(新しいサケを迎える儀式)、トマ(ござ)編みなどがあります。また、２月に開催されているシシリムカアイヌ文化祭でも、事業の内容が報告されています。

「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

■文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055－0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話：01457-2-2892
FAX：01457-2-2828
初 版：2014年6月
第2版：2020年3月

食文化の継承と森林利用

20

関連シート：３、19

地名に残る伝統的な食文化

地域のアイヌ語地名を見ていくと、食用植物に関わる名前がたびたび出てきます(資料１)。

このことは、沙流川流域における植生分布や周辺環境を推察する上で有益な情報となります。アイヌ語地名は、生活の中で必要な事柄が反映されることも多く、特定の植物の重要度合いを察し図ることもできます。



写真１　二風谷区域にある「イオルの森」で毎年春に行われている山菜採取体験。可食性植物の種類や採取時期などを学び、アイヌ伝統料理の継承に繋げていく。

森林利用と食文化の知恵

二風谷区域の沙流川右岸側に広がる町有林は、現在「イオルの森」としてアイヌ文化伝承のために活用されています。

この森林において年に数度、一般を対象にした山歩き・山菜採取体験が行われています。

森林における植生の多様性を保持し、資源が枯渇しないように気を配ることは、継続的な食材資源の確保にも繋がっていきます。山を守り育てることは、私たちの食事や動物類の生息環境を支えていくことにもなります。

アイヌ文化に受け継がれる植物利用は「根」を残す心得や貯蔵技術など、あらゆる面で高く評価されています。また、保存加工や薬効に関する知識を通して、身近な山野に可食性植物が存在することを改めて教えてくれたりもします。

調理の技を伝えていく

主要なアイヌ料理であるオハウ、ルル(汁)、ラタシケプ(煮物)の具材は、その多くが山菜です。

オハウ、ルルは、プクサ(ギョウジャニンニク)やプクサキナ(ニリンソウ)、ウクルキナ(タチギボウシ)などと一緒に鳥獣肉、魚肉などを煮て、魚脂や獣脂(クマやシカの脂)等で味付けしたものです。

ラタシケプは、シケレペキナ(ヒメザゼンソウ)やプクサ、ピットク(オオハナウド)、シケレペ(キハダの実)などの蔬菜、豆類を汁気がなくなるまで煮込み、オハウと同様に魚脂や獣脂等で味付けしたもので、鳥獣肉や魚類は入りません。

こうした具材を収穫期以外に利用するためには、保存技術が重要な役割を担います。アイヌ文化に伝承されている食料の保存は、天日乾燥、一度茹でてから干して乾燥、根を搗いてデンプンを抽出といった方法があります(資料２)。

このようにして作られた保存食は、かつてはトゥナ(火棚)の上に載せられるか、チセに隣接するプ(高床式倉庫)で蓄えられました。



写真２　水辺にほど近い低平地に繁茂するトゥレㇷ゚(オオウバユリ)とプクサキナ(フクベラ)。ハルニレの林床は、多くの有用植物が育まれる大事な場所である。

資料1　植物性食料を示すアイヌ語地名

1　シケレペ[二風谷、荷負、豊糠]　sikerpe　キハダの実
2　トゥレプシナイ[旭]　turep usi nay　オオウバユリ・が群生しているところ・沢
3　キキンニ[旭]　kikinni　エゾノウワミズザクラ
4　ペンケヤムエ(ペンケヤメ)・パンケヤムエ(パンケヤメ)[川向]　penke yam e・panke yam e　(上流側・下流側)・クリの実・食べる(ところ)

(明治二十九年製版　北海道仮製五万分一図)

資料2　山菜の保存方法(一部抜粋)

・天日で乾燥
　プクサ(ギョウジャニンニク)、プクサキナ(ニリンソウ)、プイ(エゾノリュウキンカ)、アハ(ヤブマメ)、ニヌム(クルミの実)、ヤム(クリの実)、ニセウ(ドングリ)など。

・一度茹でてから干して乾燥
　コロコニ(フキ)、ノヤ(ヨモギ)、ソロマ(ヤチゼンマイ)など。

・根を搗いてデンプンをとり、そのカスを円盤状に固めて天日で乾燥
　トゥレプ(オオウバユリ)、エシケリムリム(カタクリ)など。



写真3　アイヌ伝統料理の一例。①～⑥は鍋を用いて調理される。かつて暮らしではチセ内にあるアペオイ(囲炉裏)が、煮炊きや炉端焼きの場であった。
①チポロラタシケプ(つぶしたジャガイモのイクラあえ)
②チポロシト(筋子の団子)
③コンプシト(昆布だれの団子)
④コサヨ(粉粥)
⑤チエプオハウ(魚汁)
⑥チポロサヨ(筋子粥)
⑦シペ(鮭)の焼き物



写真4　収穫期のシプシケプ(イナキビ)。1年生のイネ科植物で、一度収穫したらまた種から育てる。ピㇰタトイ(川州畑)で育てられる雑穀の一つで、シト(団子)やコサヨ(粉粥)など、様々な料理の材料になる。

食文化の移り変わり

安政五(1858)年に沙流地方へ来訪した松浦武四郎の日誌には、ホロサル村において「粟(あわ)・稗(ひえ)・菜・大根・眉豆(いんげん)・ニイシヤク豆と云て手なしささげ(ササゲ)・胡瓜(きゅうり)・烟草(たば こ)・蕪(かぶ)・瓜吧芋(じゃがいも)・南瓜(かぼちゃ)等を作りたり」(松浦著・秋葉解読 1985)と記録されています。

この頃の沙流川流域において、本州で一般的にみられる多様な野菜栽培が行われていたことが分かります。これらの多くは、中・近世に日本列島にもたらされた栽培種と言われています。

また、一般にトウモロコシは江戸時代後半に北海道へもたらされ、近代の北海道開拓においてアメリカ式農業のもとで大量生産されるようになった作物です。沙流地方ではキミというアイヌ語(和語起源)で伝えられています。

武四郎の来訪以後、北海道の近代化の中で美味しく、利便性のよい食料として一般化していったとみられます。

「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

■文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055-0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828
発　行:2014年6月
第2版:2020年3月

寡雪な地方的特色とアイヌの伝統的季節感

21

関連シート：43、58

沙流川の気候特性と産業景観

北海道南西部の太平洋側に位置する日高地方は、比較的温暖な気候で、太平洋沿岸と内陸の２地域に大別されます。

積雪量、降水量は内陸地域で多く、沿岸地域で少ないという特徴があります。

日高地方最西部に所在する平取町は、概略東西に52.8km、南北は41.1kmに及び面積は743.09k㎡となっています。

気候の特徴として、６～９月の間に秒速10m以上の風が吹く月はほとんどなく、すこぶる平穏です。冬期にあたる12～２月の３ヶ月間の平均降水量は47mmで、比較的降雪量の少ない地域といえます。

寡雪で温暖な日高地方の気候は馬の放牧に適しており、近代以降、国内最大の軽種馬生産地として整備されてきました。平取町の近・現代史を解き明かしていく上でも馬との関わりは欠かせません。



写真１　町有牧野のびらとり和牛(宿主別区域)。５～10月に行われる放牧は沙流川のサㇰ(夏)を特徴づける産業景観といえる(北側から撮影)。

日高地方における農耕地の面積は41,000haで、その内水田は16.9%、普通畑6.9%、牧草地76.1%の利用割合となってます。

牧草地の利用は大部分が軽種馬生産に用いられています。

平取においては、日高町、新ひだか町、浦河町などに比べて馬産の規模は小さいものの、川向、本町、二風谷地区を中心とする軽種馬牧場、和牛生産を主とした芽生の町有牧野など、多くの牧草地が造成されています。



写真２　マタ(冬)の軽種馬牧場(西側から撮影)。寡雪で比較的温暖な気候は馬の生産に適している。背後の山は、小平地区に所在するアイヌ伝承地で、左からペンケトコㇺ(上流側の・こぶ山)・パンケトコㇺ(下流側の・こぶ山)と名付けられている。

アイヌ文化にみる季節の概念

北海道の山林、河川景観を理解する上で留意すべきものに「アイヌの伝説的季節感」があります。

知里真志保は自著の中で本来あったとされるアイヌの季節感に言及しています(知里 1956)。

アイヌ口承文芸の中にある季節描写に基づく分析として、もともとは１年をサㇰ(sak：夏)、マタ(mata：冬)に二分する考え方があり(資料１)、さらにそれ以前にはサㇰパ(sak　pa：夏の年)とマタパ(mata pa：冬の年)が交互にやってくるとみられていたことを指摘しています。

植生および降雪との関連でみると、広葉樹の芽生えから落葉、降雪前までがサㇰパ、積雪から融雪期位までがマタパになるとみられます。

1年を通して生業活動を行っていく上でパイカラ(paykar：春)とチュク(chuk：秋)を大別する必要性にせまられていなかったことが推定されます。植物性の食材採集期が女季(女性の季節)、冬山狩猟期が男季(男性の季節)という役割分担が明確化していた時代に応じた社会通念であったのでしょう(資料2)。

マタの景観に アイヌ伝承の姿をみる

沙流川流域のマタ(冬)は、地域のアイヌ伝承をより深く感じることができます。広葉樹が落葉し、河川沿いの森林に点在する特徴的な形象が姿をみせる季節です。日高地方の寡雪な気候とあいまって、住民によって何らかの意味が与えられた露岩が非常にみやすい状態になります。

アイヌ文化の重要な儀式であるイオマンテは、かつてマタに行われるものでした。キムンカムイの狩猟も穴グマ猟が主体で、捕獲したヘペレ(仔グマ)をコタンに迎え入れる季節もマタです。

伝統的な暮らしにおいては、男季(男性の季節)に行われる日々の狩猟の中で山をながめ、そこに様々なカムイの姿を見ていたことでしょう。

二風谷に所在する親子グマの形象であるウカエロシキは当地におけるマタの景観を象徴する場所です(写真3)。伝統的なカムイへの信仰観を感じ取れる貴重なアイヌ伝承地といえます。

語源である「互い・上・で・立ち上がる」(u=ka e roski)様子は、かつては落葉時期に全体像がみられるものでした。しかし現在は周辺の除間伐により、年間を通して3頭の親子グマが確認できます。

男季(男性の季節)特有の形象であるこの場所をみると、オキクルミが冬山を駆けめぐって狩猟する姿を想像することができます。



写真3　マタ(冬)のウカエロシキ。ペウレポッカ(pewrep okka:仔グマ・の上)などともよばれる(北東側から撮影)。平成30(2018)年9月6日の北海道胆振東部地震によって母熊(3頭目)の頭部相当部分が崩落した。

資料1　アイヌの伝統的季節感

今のアイヌの古老はわれわれ同様に1年を四季に分けて考えている。けれども古くはpaykar(春)もchuk(秋)もなかったらしく、古い地名の中にも、古い謡い物や語り物の中にも、春や秋は全く出てこない。そこでは、sak(夏)はもっぱらmata(冬)に対立するものとして出てくる。

(知里 1956)

資料2　サクパ(夏・年)、マタパ(冬・年)の解釈

古く、アイヌは春から秋にかけては海辺に住んで漁労生活をした。その際の住家をsak-chise(夏・家)と言い、夏家の在る所をsak-kotan(夏・部落)と言った。海辺の夏部落に在って夏家に住んでいる期間がアイヌの云うsakで、それを便宜上「夏」と訳してはいるが、われわれの考えている夏とは内容がいちじるしく異なっているのである。

また、秋の末には夏の家を引きあげて山の手の冬の家に移り、翌年の春まで穴居生活を営んだ。その家をtoy-chise(土・家)と言い、それのある所をmata-kotan(冬・部落)と言った。或はriya-kotan(越年する・村)とも言った。山の手冬部落に在って土家に住んでいる期間がアイヌの言うmataで、「冬」とは訳しているが、われわれの考えている冬とは内容が違うのである。

mataの語源はおそらくmak-ta(「奥・に〔いる〕」「山奥にいる」で、mak-ta→mat-ta→mataというように成立したものであろう。それに対してsakの方は、恐らくsa-ta「浜・で」というのが語源で、sa-ta→sat-ta→sak-taという風にmataとは逆な方向に類推を働かせて、そこからsakを取り出したのではないだろうか。

(知里 1956)

「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055-0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828
初　版:2014年6月
第2版:2020年3月

沙流川流域の代表的な樹木

22

関連シート：6、16、23、34、46

近世後半の樹木分布とその変遷

地域住民によって育まれた景観をみるときに重要な特性となるのが、暮らしの土台となった自然景観です。とりわけ基本となる植生の把握は、生活・産業の変遷をみていく上で欠かすことができません。

近世以前における日高地方沿岸の海岸段丘面はカシワ林、内陸ではペロ(ミズナラ)が多く混生するナラ林であったと推定されます。沙流川流域の場合は、海岸段丘の緩斜面から山地帯へ変わる辺りからフプ(トドマツ)が増加していき、落葉広葉樹林と針広混交林の移行帯が平取町本町付近にあったと考えられています。河川沿いの平地林は、ハルニレ林などの長期安定型河畔林とヤナギ低木林の短期更新型森林があります。

沙流川流域及びその周辺における近世の植生は、ほぼ森林であったとみられます。そうした原初的な森林の姿から今日に至る暮らしの変遷の中で、変わってきたことがいくつもあります。森林の農地化、針葉樹植林化、牧野林、針広混交林や針葉樹林の広葉樹化などです。



写真1　博物館敷地内のランコ(カツラ:西側から撮影)。長期安定型河畔林に分布する木で、チプ(舟)の材料として用いられる。樹木の多様性保持は、アイヌ文化継承の重要課題でもある。

アイヌ文化の森林利用

森林の利用、伐採は木材が商品としての価値をもつことで急速に進展します。近世から近代においても、日本海側のニシン漁による木材の多量消費で森林の消失がありました。

そうした中においても、沙流川の内陸ではそれほどの伐採はなかったと考えられます。

古記録には貫気別や幌毛志に大きな集落があることが記録されています。これは河畔林や河岸段丘面を伐採し耕地化していることを示していますが、それは流域全体ではごく小さな部分でしかありませんでした。当時の暮らしの中で森林を過度に伐採することはなく、隣接する森林の中から必要量を採取するだけで充分に足りていました。調理のための薪であれば生木の伐採は必要なく、流木、落枝や立ち枯れの木を採取するだけで充分です。

林内に生育する植物を再生産可能な範囲で採取していれば、またそれを採取できます。建築材、船材、器物用材といった樹木を単木的に伐採するだけで、森林の景観を変えるほど切り倒すことはありませんでした。



写真2　町有牧野(宿主別区域)で、日陰樹として用いられるチキサニ（ハルニレ）の巨木(南側から撮影)。近･現代における地域産業の変容によって、樹木の様態も移り変わってきた。

北海道開拓に伴う森林伐採

生活の主な糧を農業に求めようとすると、緩斜面の森林は皆伐されて耕地化されることになります。明治時代、開拓適地の「甲」にランクづけされたハルニレ林(河川蛇行源に存在)は真っ先に伐採をうけて耕地化していきました。

ハルニレ林の立地は排水良好で、豊かな沖積土となっています。この林は農耕の適地でしたが、アイヌ文化にとっても植物食料源の森林で、トゥレプ(オオウバユリ)やプクサキナ(ニリンソウ)といった大事な植物が林床に繁茂しています。

同様に河畔林のヤナギ林・ドロノキ林も農地化されて姿を失いました。過湿地に成立するハンノキ・ヤチダモ林も、排水を進めて水田化されていきました。

このように森林そのものが失われ、耕地化することが急速に進展しました。一方で、宿主別のように放牧地化し、家畜の日陰樹林として残された牧野林が新しい景観となった場所も存在します。

森林利用の今日

伐採を繰り返し受けることで森林の当初の姿が失われる一方、その構成要素を補充して文化伝承を促進する試みがあります。

例えば渓畔林に生育するアッニ(オヒョウニレ)は数量が減少したといわれますが、植え込みや生育促進の作業(周囲の刈り払いなど)を行うことで、文化を支えた森林の質を高め資源確保を行うことができるようになります。

また資源採取の場所以外でも、景観そのものに意味をもつ伝承地については、その復元努力をする必要があります。

にぶたに湖対岸の露岩の崖と尾根筋のフプ(トドマツ)が織り成す景観は、特に重要な地点といえます。露岩地は当初から変化しておらず、尾根筋や斜面にあったトドマツもあまり伐採が入っていないとみられます。しかし原初的な姿からは数が減っていることから、植栽や天然更新を補助していくことが求められています。

資料　沙流川流域の主な樹木とその利用

和名	アイヌ語名(沙流方言)	アイヌ民具での主な用途
ミズキ	ウトゥカンニ	イナウ(御幣のようなもの)
ヤナギ	ススス	イナウ(御幣のようなもの)
		トゥキパスイ(奉酒箸)
カツラ	ランコ	イタ(盆)、チプ(舟)、イタタニ(肉切り台)
ハルニレ	チキサニ	イキサプ(弓型火起こし)、センピ(くさび)
エンジュ	チクペニ	チセコロカムイ(家の守り神)、クワ(墓標)
ミズナラ	ペロ	イユタニ(杵)、ニス(臼)
オヒョウニレ	アッニ	アットゥシアミプ(樹皮衣)
シナノキ	ニペシニ	サラニプ(背負い袋)、タラ(背負い縄)
トドマツ	フプ	クマ(物干し竿)、サッテ(カヤそろえ)
エゾマツ	スンク	フプチャチセ(松葉葺きの小屋)
		フプチャイ(松ぶし)



写真3　アッニ(オヒョウニレ)の樹皮を剥いだ状態。アイヌ文化継承における重要樹木である一方、現在ではその数を著しく減らしている。近年、平取町内の森林において植栽・育成補助が継続的に行われるようになった。アイヌ工芸品の素材確保を安定的に図る試みとして注目されている。

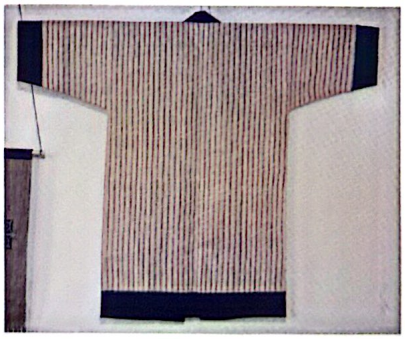


写真4　アットゥシアミプ。アッニ(オヒョウニレ)やニペシニ(シナノキ)などの樹皮によって作られるアイヌの衣服。かつてはチキサニ(ハルニレ)の樹皮も用いられたと伝えられている。

「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

■文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055−0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828
初　版:2014年6月
第2版:2020年3月

ハルニレをみる

所在地：平取町字芽生（めむ）など

23

関連シート：６、16、22、37、65

ハルニレの姿に地域の近代史をみる

近代以降の耕地化が進む以前、平取町本町付近の沙流川沿いは広い川原でした。たびたび起こる河川氾濫によって肥沃な土壌が堆積し、ヤナギやケヤマハンノキ、ハルニレ林が成立していました。

現在の水田地帯はもともと氾濫源で、サㇻキ(ヨシ)やシキナ(ガマ)、ペカンペ(ヒシ)などが生育する三日月湖、浅水域が存在していたとみられます。広い谷間をもち、川が蛇行できる広さをもった長知内、貫気別などにおいても、そうした状況があったと推察されます。トゥレㇷ゚(オオウバユリ)やハイ(イラクサ)といったアイヌの有用植物も、ハルニレ林内に群生していたと考えられます。

一方で芽生の集落が所在する額平川の高位段丘は、宿主別の牧野の日陰樹に見られるようなトゥンニ(カシワ)、ペロ(ミズナラ)、ピンニ(ヤチダモ)、チキサニ(ハルニレ)などの巨木が茂る森林地帯であったと推定されます。それが密林状態であったかどうかは判然としません。

樽前の軽石層の厚い部分はカシワの疎林でススキやシンケㇷ゚(ヤマハギ）の繁茂があり、ユㇰ(エゾシカ)が集まる草原であったとも想像されます。ハルニレは段丘面のうち、山地斜面より流れ出た沢水がつくる凹地形の部分に分布していたと思われます。

ハルニレ林は明治時代、開拓適地の「甲」にランクづけされていたことにより、次々と農地化されていきました。

従って、今日の景観の中でハルニレの群生地が良好に残っていることは稀といえます。



写真　町有牧野内（宿主別区域）に日陰樹として残されるハルニレの巨木。しなやかに伸びる樹形が牧草地・空との対照を美しく際立たせている（南東側から撮影）

ハルニレの伝承

ハルニレはアイヌの民具に欠かせない材料としても古くから重宝されてきました。そのことは地域ごとに様々な呼ばれ方があるアイヌ語名にも表されています(資料１)。主には発火器、樹皮の繊維といった意味の名称がつけられており、この双方の内容を含む人文神アイヌラックルの伝承が残されています(資料２)。

アイヌラックルの父は日の神とも雷神とも疱瘡神とも言われ、土地や人によって色々に伝えられていますが、母は常にハルニレ姫であるとされています。

また火の創造に関しても種々の神話が伝承されていますが(資料３)、そのいずれもハルニレが関係しており、樹木に対する認識の重要性を垣間見ることができます。

資料1　ハルニレのアイヌ語名

1. チキサニ　chi(我ら)、kisa(こする)、ni(木)　茎《全北海道》
2. チキサンニ　茎《美幌・屈斜路》
3. カラニ　kara(発火器)、ni(木)　茎《白浦・眞岡》
4. ニカㇷ゚　ni(木)、kap(皮)　樹皮《胆振・日高・天塩》
5. ニカパッ　nikap(樹皮)、at(樹皮から取った繊維)　内皮から取った繊維《幌別》
6. ポナッ　pon(小さい)、at(繊維)　内皮から取った繊維《美幌》　at(オヒョウの繊維)よりも品質が劣るのでpon(小さい)という限定詞を冠する。
7. ポナッニ〔ポナッをとる木〕　茎《美幌》

（知里 1953）

アイヌの民具にみられる素材利用

ハルニレの内皮から取った繊維は、オニカブンペ(そこに・ハルニレの繊維・入っている・もの：模様つきのゴザ)の材料として用いられます(胆振・日高)。また細く裂いて乾かした皮をかんで柔らかくし、ケルルンペ(沓・の中・に入る・もの)という沓下のようなものも作られました(美幌・屈斜路湖・天塩)。

一方、オヒョウニレと同様の工程によって背負鞄や手提鞄など種々の袋物が制作され、昔はこれで作られたニカパットゥシ(ハルニレの繊維の・厚司)もあったと言われています。

沙流地方に伝えられる民具に、イキサプ(弓型火起こし)があります。ハルニレをこすり合わせて火を起こすための道具で、チキサニの語源(資料１)そのものともいえる機能をもっています。

また沙流地方では「カラパシ(火口)に火だねができると、乾燥させたハルニレの根で吸って火を移し、この火を北海道でがんぴという、うたいかんばの木の皮に取って火をたく」※1(萱野　1978)というやり方も行なわれます。

根を乾かして火口にしたり、内皮を洗髪に用いる地方(十勝)もあります。なお、沙流地方における洗髪は、ラスパカプ(さびたの木の皮)を使う方法が伝承されています。

その他、沙流地方ではアレウェマタプリプ(熊手)の材料としても用いられます。手の指のような枝を利用して、ゴミや枯れ枝を集める道具です。

※1：「チキサニの根は髄が太く、乾燥させるとちょうどストローのようになっています」(萱野　同文献)

資料2　アイヌラックルに関するハルニレ姫の伝承

①ある神話によれば、ハルニレ姫は天界にも稀な美しい女神であったので、雷神はそれに見とれている内に、つい足を踏み外してハルニレ姫の上に落ちてしまう。そのためハルニレ姫は身ごもってアイヌラックルを生むが、ハルニレの梢は風当りが強く、子供を育てることが出来ないので、自分の皮で着物を作ってきせ、抜けば火の燃える剣を與えて、天界の造化の神の許で成人した後に、再び人間界に降って、人間生活の基を開いたとゆうのである。

②ハルニレ姫が自分の皮で子供に着物を作って着せたとある所に、この木の皮を衣料に用いた古俗の反映が見られる。また、父が雷神で母がハルニレでその間に生まれたアイヌラックルの服装が裾の燃えている厚司衣だとか、尻の燃えている刀鞘だとか、抜けば火の燃える剣だとか言うのは、雷神による地上の火の起源を暗示し、かつハルニレの木を用いて発火した古俗を反映している。

(知里 1953)

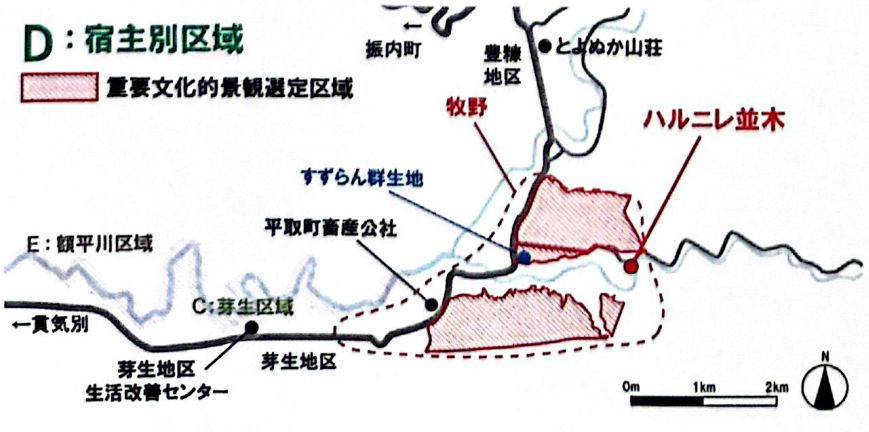
資料3　火の創造に関するハルニレの伝承

「コタンカルカムイ」※2が人間の国土を創造した際、草木の中で最初に生じたのは、国土の西方に於いてはドロノキとワラビであり、東方ではハルニレとヨモギであった。「コタンカルカムイ」は人間に火を授けようとして、先ずドロノキで火きり棒と火きり臺とを作り、もみにもんだが火は出なかった。そこで次にハルニレで試みたら、初めて火が生じた(沙流)。

この神話によって、私どもは第一にドロノキがなぜ「ヤイニ」yay-ni“ただの・木”とよばれるか、第二にハルニレがなぜ「チキサニ」chi-kisa-ni“我らが・もむ・木”とよばれるのか、の理由を知ることができるばかりでなく、第三にヨモギもまた、もんでほくちなどに用いられたらしいこと、およびヨモギを意味するnoyaと言う名称が、「もむ」と言う原義に於て、ハルニレのchi-kisa-niと連想されているらしいこと等を知り得るのである。

※2:知里はコタンカルカムイの伝承を分析した上で、その起源について「古代社会における巫者に他ならなかった」と結論付けている。

(知里 1953)



「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

■文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055-0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828
初　版:2014年6月
第2版:2020年3月

基本的樹種構成の継承と林相の変化

24

関連シート：22、46

近代以降の森林施業の姿

沙流川流域の主要な森林は、山地林と河川沿いの平地林、平原林によって構成されています(資料１)。

その内、山地林の主だった樹木を構成する針広混交林及び針葉樹林は、江戸時代後半の原初的な森林の姿からサイズの縮小と上層木の質的な変化が見られます。

もともとは、胸高直径１m、樹高30mを超える樹木もかなりあったとみられますが、現在は胸高直径80cm、樹高25mでも稀な存在となっています。

こうした針広混交林・針葉樹林は、皆伐の行なわれた民有林においては針葉樹を失い広葉樹化、拓伐の行なわれた国有林では針広混交林を維持しています。

また、近代においてはトドマツやカラマツの針葉樹植林地、宿主別に見られるような牧野林の形成という新しい植生の出現がみられるようになりました。



写真　二風谷区域の沙流川右岸に広がる山地林。ミズナラ・コナラ・イタヤカエデ等が繁茂する広葉樹林で、現在「イオルの森」として有用樹木の生育促進や草本類の採取が行われている(南東側から撮影)。

近代の林業における山の変化

近代における沙流川の造材は、明治39(1906)年、佐瑠太(日高町富川)に奥山製軸工場が設けられ、マッチの軸木材として白楊樹(ドロノキ)が伐採されたのが始まりとされています(大正２:1913年まで)。

また、明治43(1910)年には王子製紙苫小牧工場が設立され、製紙原料として右左府（日高町千栄方面）から針葉樹が伐採されるようになりました。昭和12(1937)年以降は日中戦争の長期化に伴い、軍需用材の増加が図られました。国内におけるパルプの自給自足化に伴う針葉樹、飛行機・船艦用材としてエゾマツ・トドマツ・ナラ・ヤチダモ・マカバ・シナノキ・オニグルミを多量に供給する必要に迫られました。

こうした造材の一方で、当時の平取は軍馬生産にも力が注がれていました。馬の生産は、経費がかからず山林の管理にもつながる林間放牧が盛んに行なわれました。その方法はバラ線を張った山林に馬を放牧し、徐間伐(直径五寸：15cm位のまっすぐな木だけを残して悪いものは伐る：混牧林育成ともいう)を行なうものでした。

資料１　平取町の主要な森林

① 山地林：地域の主要な森林
- 針広混交林と針葉樹林：山地の大部分を占める。針葉樹植林地と広葉樹林(民有地)、針広混交林(国有林)がある。
- 渓畔林：山間の支流沿いに細長く存在する。

② 河川沿いの平地林：河川沿いに限られた湿潤地に成立する森林
- ハルニレ林などの長期安定型河畔林：河川沿いの主要な森林であるが、面積的には僅少となり規模も縮小する。
- ヤナギ低木林：河川沿いに存在する短期更新型森林で、農地利用や治水工事で面積的には小さくなる。

③ 平原林：海岸段丘面あるいは山地間の河岸段丘
- 広葉樹林(カシワ林)：海岸段丘面の主要な森林だが、農地化により規模が縮小する。
- 広葉樹林、針広混交林：海岸段丘面に分布する。針葉樹植林地、牧野林という新たな景観が出現する。

(三木 2007)

平取町本町から見て沙流川対岸のピラウトゥルナイ区域の山林は、現在でも平均径が30ｃｍ近い通直なコナラの群生を見ることができます。

日高地方の民有林は数度の伐採を受けており、こうした良好なコナラ林は珍しいとみられます。森林内部は広葉樹林改良と称する下層林の皆伐を行い、通直な上層冠をなすコナラばかりを残存させています。こうした自然状態からみていびつな状況は、地域住民が近現代に行なってきた混牧林育成の結果と考えられます。

アイヌ文化を育んだ山林の姿

明治29(1896)年の古地図を見ると、荷菜あたりを分岐点として下流側の山林が広葉樹の記号で埋め尽くされています。そしてその上流域の山林にその記号がみられなくなります(図及び資料２)。

つまり、この辺りが広葉樹林と針広混交林の分岐点であったとみられます。また、アベツ川流域にあるフプカリオマナイという沢名は、トドマツの自生を特徴づけていると考えられます。荷菜にあるペンケヤメ、パンケヤメという地名はクリの存在を私達に教えてくれます（ いずれも図の□印参照 ）。パンケピラウトゥル右岸の山林はクリが多いと言われていたり（ 平村 2006)、義経神社の境内には今も樹齢数百年のクリが自生しています。

平取町本町付近は、近代前半頃まで広葉樹林とクリ自生の北限辺りに位置していたとみられ、沙流川流域の森林景観の分かれ目であったことが窺えます。

今日的な森林保全

二風谷区域の沙流右岸は、現在

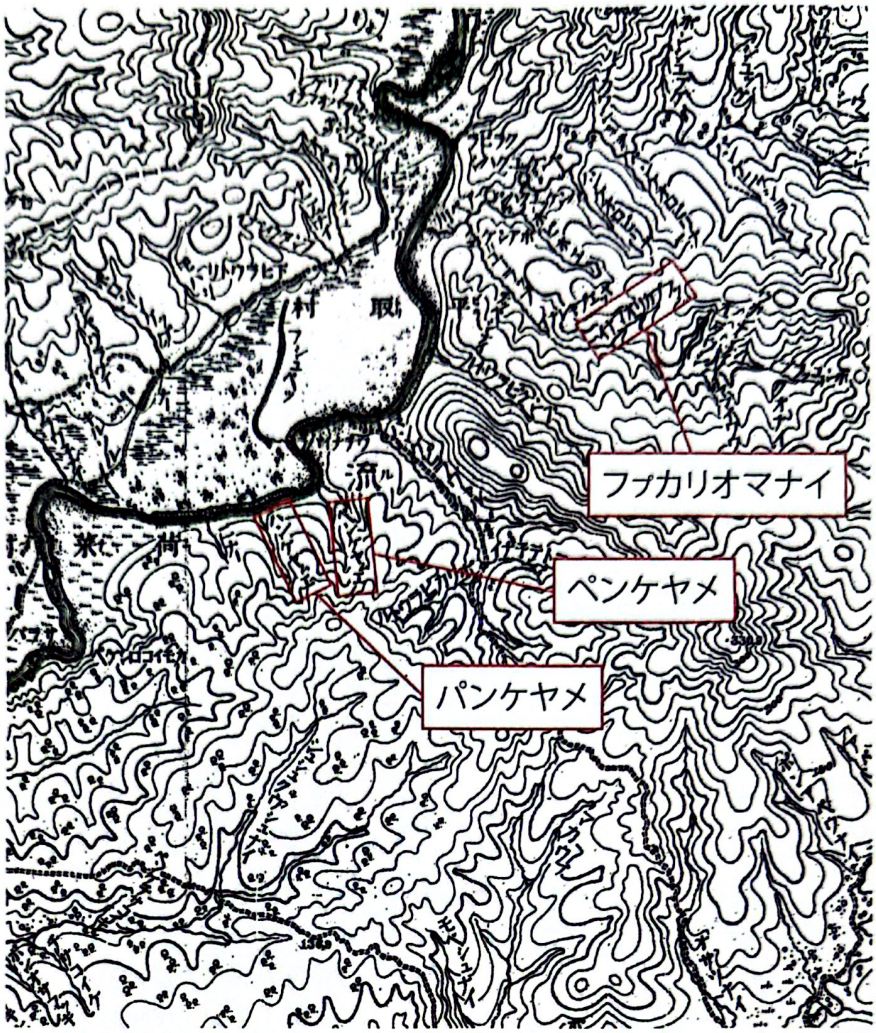


図　明治二十九年製版　陸地測量部北海道五万分一図「二風谷」の一部を抜粋。荷菜近辺の上流側･下流側が山地林における広葉樹林帯（ ）の境になっている。

資料2　本町～荷菜近辺の樹木地名（一部抜粋）

古地図記載名	アイヌ語読み（ローマ字）	語意
パンケヤムエ	パンケヤメ(panke yam e)	下流側･クリ･(ある)所
ペンケヤムエ	ペンケヤメ(penke yam e)	上流側･クリ･(ある)所
フップカリオマナイ	フプカリオマナイ (hup kar i oma nay)	トドマツ･を採る･所･にある･沢

イオルの森として山づくりが行なわれています。一帯の町有林はかつて針広混交林でしたが、近代の造林業によって広葉樹林へと変容しています。

現在、約210ヘクタールの山林内で、計画的な択伐と木本類の植栽を行い、階層構造の複雑な森林へと誘導する施策を進めています。

例えば渓畔林に育成するアッニ(オヒョウニレ)は数量が減少した樹木と言われていますが、植え込みや生育促進の作業を行なうことで必要量を確保することができます。

また、二風谷湖右岸の露岩と尾根筋のトドマツは、アイヌの暮らしを育んできた美しい森林景観です。こうした場所の植栽や天然更新の補助も、文化伝承にとって大事なことといえます。

「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

□文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055-0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828
発行:2014年6月
改訂:2020年3月

モシリエルウシ

25

関連シート：2、23、37、65

アイヌ民族誌にみる「モシリエルウシ」

昭和27(1952)年、民族学者の泉靖一により「モシリエルウシ（moshir eru ushi）」という沙流川流域における飢饉現象の理論が発表されました(泉 1952：内容は資料１のとおり)。

要約すると、河川沿いの低平地においてアイヌの有用植物が枯渇し、動物もいなくなってコタンの暮らしを維持できなくなる状態を差します。こうした現象が「昔から部分的にしばしば生じたもの」とも述べられていることから、流域が元々もっていた顕著な河川特性であると考えられます。

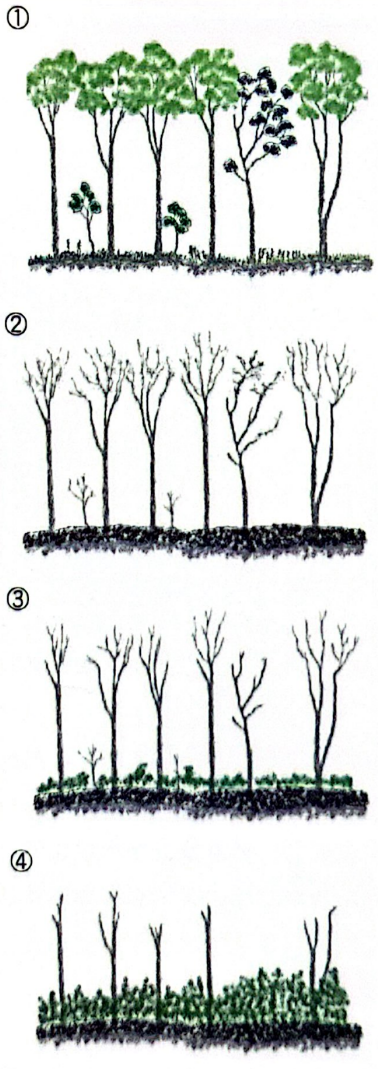
泉による理論構築はピラカコタンの鍋澤元蔵、ニプタニコタンの二谷國松、ペナコリコタンの川上サヌクノ、シケレペコタンの木幡大六、ヌプキペッコタンの黒川八郎の５氏による意見に基づいています。戦後間もない頃に古老であったこうした方々が、自ら体験ないしは伝え聞いた河川の荒廃を示すアイヌ語表現ということができます。

また、モシリエルウシの理論説明が二風谷の事例を用いたものであるから、二谷國松の教示を色濃く反映した整理であることが推定されます。

モシリエルウシの語源解釈は、泉の聴き取りによる「moshir eru ushi」に基づいた分析を更に深めていく必要がありますが、氏の提唱した飢饉現象(資料１)から「mosir e rewe us」(土地・それが・曲がる[たわむ]・とき[ところ])という意味にとることもできそうです。



写真　河川沿いの低平地に広がるハルニレ林。(宿主別川右岸に所在)この樹木が繁茂する林床は、多くの有用植物を育てる食料庫でもある。



①ハルニレ林
沙流川流域には樹高30m、夏には昼なお暗い森があった。

②土砂に埋もれたハルニレ林
数十年に一度の豪雨で深く埋もれたハルニレは枯死していく。林床は川原とかわりない新しい地面となる。

③再生を始めたハルニレ林
土中から多少の植物の再生はあるがわずかである。それよりも風散布の柳類が芽を出し林床を覆い始める。

④柳林化していく
柳林内にはハルニレが低木として存在するが、最初の外観としては柳林である。林内が暗くなるとともに、将来のハルニレ林床を構成する植物の侵入も進行している。いずれ柳類は枯死してハルニレと世代交代する。

⑤短寿命の柳類は二十年を待たず枯死が始まる
林床にあったハルニレが枯死した上層木の部分で生育を始める。二百年もすればまた元の樹高30m近いハルニレ林となる。しかし、これに至るまで土砂量の多寡はあるが、数度の林床の埋没を経験することもあり、この基本パターンで変化することはない。むしろ枯損した森林、再生する森林、それも若齢、中齢というようなものがモザイク状に川沿いに展開する。

図　植物学からみたモシリエルウシの理論的復元(三木 2007)。多くの有用植物を育むハルニレ林床が再生する過程を模式化している。

沙流川にみる河川の特徴

沙流川は古名をシシリムカともいいます(資料２)。土砂の浸食と堆積による有用植物の繁茂を想起させる地名です。

アイヌ文化の雑穀農耕であるピクタトイ(資料３)も、河川際の氾濫源を巧みに利用する知恵といえます。額平川(ぬかびら)の支流である貫気別(ぬきべつ)川(nupki pet：濁る・川)の語源も、そうした特性の一端を含んだものと考えられます。

泉はモシリエルウシの発生要因にまでは踏み込んでいませんが、河畔林への土砂堆積が関わることは沙流川の諸特性から窺うことができます。

植物学からの解釈

植物学者の三木昇により、モシリエルウシの再構築が行われています(図：三木 2007)。このキーワードになるのが、川沿いや広い沢筋に成立するハルニレ林です。ハルニレ群生地の林床は、トゥレプ(オオウバユリ)、プクサ(ギョウジャニンニク)などといったアイヌの有用植物が生成する場所でもあります。

そのような低平地が稀に発生する洪水で埋まり、有用植物が消滅します。多量に土砂が溜まると根は呼吸できなくなり枯死します。結果として、緑の景観の中にその部分だけ穴の空いたような景観が生れます。

これは地域住民にとっての食料庫が消滅することでもあります。

そして明るくなった裸地状態の地表にさまざまな種子が入り込み、次の世代の植物を育て始めます。

周囲からハルニレの種子の散布もあり成長を始めますが、まず成長の早いヤナギ類が生育します。この後20年を待たずヤナギ類は枯死し、ハルニレと世代交代します。

河原に沿った長い距離にわたって存在するハルニレ林のある部分が枯死し、ある部分が再生していることが流域の有用な植物を長期に利用できる状況を作っていきます。

この現象は日高地方沿岸でも、この地域独特のものです。流域各所にある小規模な崖と相まった文化と景観の一致といえます。

資料１　泉靖一による「モシリエルウシ」

iworで採集される主なる食用植物は、久保寺氏の調査によると、turep(オオウバユリの球根)、pukusakina(ギョウジャニンニク)･･･中略･･･等である。食用野草の採集にあたっては特別な地域が特定家族によって占有されることはない。球根類はitaniと称する木の棒で掘る。女の仕事である。これらの植物のなかで最もよく多量に食べられたのはturep(オオウバユリの球根)で、二谷國松氏の話によると、Niputani-kotan-un-iworでよく女たちが野草掘りに行ったのは、kenash沢のnaipar-kot(沢口の窪地)で、それらは大木の下に多量にあった。ところが大木がいつの間にか枯れて、小樹が密生するようになってから、急に野草が全然なくなった。

このような現象をmoshir-eru-ushiと云って、昔から部分的にしばしば生じたものらしく、獣類もこれにともなって移動を開始し一種の飢饉現象を呈する。このような場合一つのiworはその主体たるkotanの人びとの生命を維持するに足る資源を持たなくなる。iworの荒廃のためにkotanの移動が行われたこともしばしばあったと云う。

(泉 1952)

資料2　沙流川の語源と河川特性

サラ sar 葦原、よしはら、湿地
シシリムカ sisirmuka 沙流川の古い名前。si･本当に sir･あたり mu･つまる、塞がる ka･させる。雨が降るたびに上流から土砂が流出し河口が門別の方へ寄ったり鵡川の方へ寄ったりした。それを河口がつまるとアイヌは考えて、あたりがつまる川と名づけた。

(萱野 1996)

資料3　ピクタトイ(川州畑)について

前の年の夏に洪水が出て、柳原の下の方とか、あちこちに川砂と粘土が流されてたまり、草の生えない洲のような場所ができます。

そのようなところをピクタトイ(ピクタ＝洲、トイ＝畑)というのですが、一、二年はあまり草も生えず、畑にもしやすいので、五月早々トンカ(窓のあいた鉄鍬)か角鍬、それにイヨッペ(鎌)くらいを持って出かけ、トンカで荒草を削り、うねを切ってあわ種をまきました。

六月はじめに一度うねのあいだの草を削り、七月末ごろに根草といってうねの中に生えている草を抜いて秋を待つのです。

(萱野 1978)

「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055-0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828
初　版:2014年6月
第2版:2020年3月

並木道を歩く

26

関連シート：22、40、59

並木道の魅力

雰囲気の良い並木道は、その多くに地域の深い歴史を反映しています。その一方で、周辺環境を含めた雰囲気をしっかりと作り上げることで、大きな観光資源になるほどの魅力を秘めています。

北海道大学構内(札幌市)のイチョウや二十間道路(新ひだか町)のサクラ、トラピスト修道院(北斗市)のスギ・ポプラ並木など、樹木に関わる見どころが北海道内には幾つもあります。

平取町内にもそうしたお勧めのスポットが幾つか所在します。



写真１　旧マンロー邸の並木道(北西側から撮影:図１)。植樹後数十年が経過し、道を覆う大木へと成長している。景観保全にあたっては、除間伐による管理が欠かせない。

並木道にみる住民の想い

旧マンロー邸は人類学者・外科医であったN.G.マンロー(1863-1942)が、晩年に過ごした住宅兼診療所です。

地域の生活道路から建物までの並木は、出身地のスコットランドの在来種であるヨーロッパトウヒや地元のトドマツなどの針葉樹が植えられ、異国情緒あふれる雰囲気を醸し出しています(写真１、図１)。

邸宅は昭和８(1933)年に建てられ、同時に並木道と庭園の整備も行われたとされています。当時の二風谷ではめずらしい洋館でもあったことから、敷地内への植樹は一定程度の目隠しの意味もあったといわれています。

並木の存在は、チセが建ち並ぶ日常的な集落から洋風の邸宅へと抜ける大事なアプローチでもありました。

今日においても当時と変わらない雰囲気を保ち続け、マンローを慕う地域住民や町内外の来訪者か

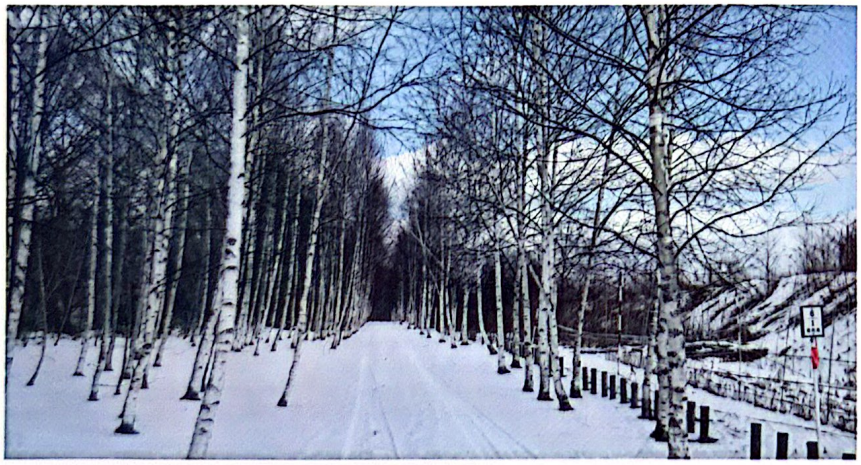


写真２　にぶたに湖畔の「歴史の散歩道」に整備されているシラカバ並木(南西側から撮影:図１)。北海道らしさを演出する樹木として人気が高い。

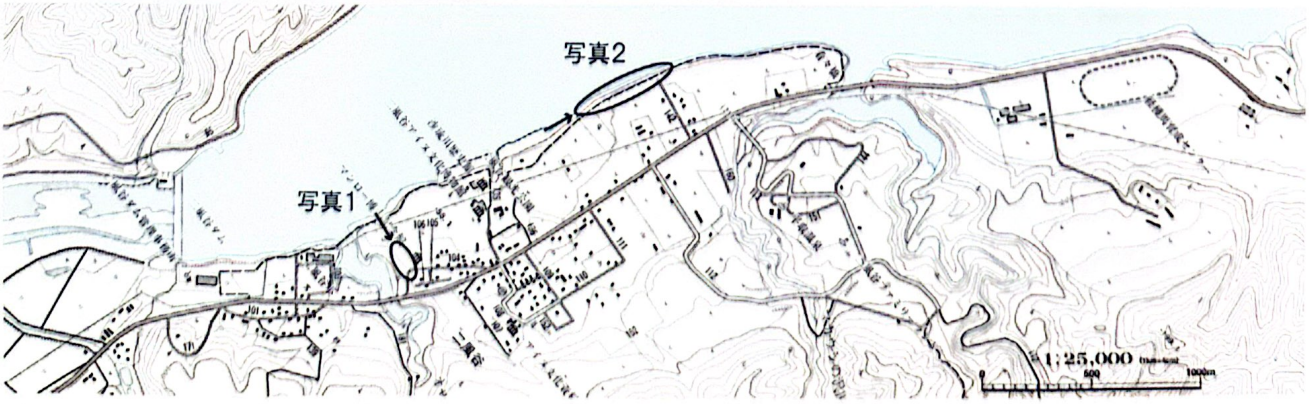


図１　並木道の位置(矢印は撮影方向)。１・２ともに徒歩圏内に所在するため、二風谷散策の一環として立ち寄ることも可能。

ら親しまれています。

北海道らしい樹木による並木道の演出

にぶたに湖の左岸側に整備されている「歴史の散歩道」の一部に、シラカバの並木道があります(写真２、図１)。

シラカバの白い幹は北海道の景観に良く映えることで知られています。アイヌ文化の中でも重宝される木で、樹液が飲料(タッニワッカ：樺木・水)となるほか、樹皮が容器(ヤラィタンキ：樹皮の椀)の材料としても用いられます。

林間放牧の面影を並木道にみる

宿主別(しゅくしゅべつ)区域のすずらん群生地脇を走る「町道芽生(めむ)すずらん線」は、在来の広葉樹による回廊のような空間になっています(写真３、図２)。

すずらん群生地は平取町天然記念物に指定されており、保存状態にある範囲内でもともとの樹木構成をみることができます。周辺は広大な町有牧野として草地化され、黒毛和牛の放牧が行なわれていることもあり、すずらん群生地との対照を一層際だたせています。

戦前、この場所を含む付近一帯は大規模な軍馬生産が行われていました。地域の植生をそのまま利用する林間放牧という方法がとられ、人為的な草地空間が作られることはありませんでした。



写真３　町道芽生すずらん線(西側から撮影:図２)。在来種(表参照)に囲まれた並木道には、かつて行われていた林間放牧の雰囲気がよく残っている。

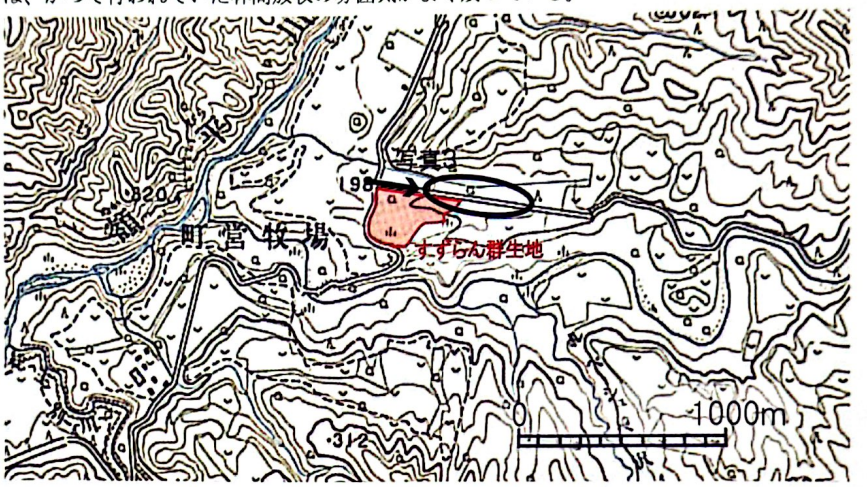


図２　並木道の位置(矢印は撮影方向)。周辺には町有牧野の牧野林・日陰樹、すずらん群生地など、植物観賞を楽しむスポットがある。

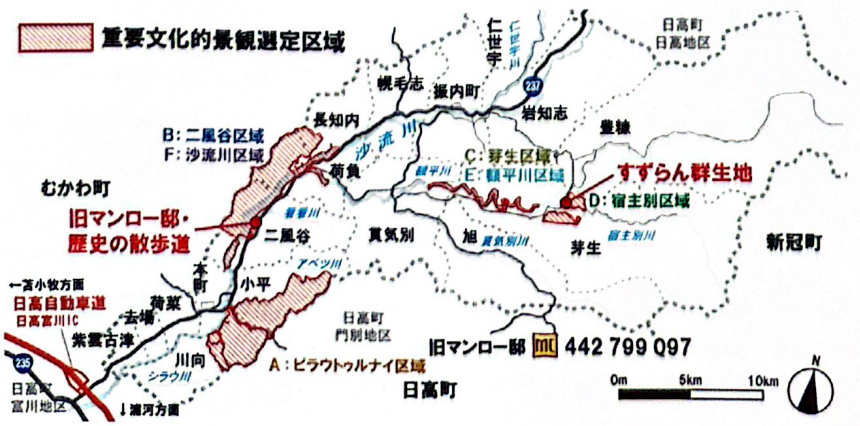
資料　並木道の樹木(カッコ内はアイヌ語名)

①旧マンロー邸
ヨーロッパトウヒ(外来種:アイヌ語名なし)、トドマツ(フプ)

②歴史の散歩道
シラカバ(レタッタッニ)

③スズラン群生地
ミズナラ(ペロ)、コナラ(チカッポペロニ)、イタヤカエデ(トペニ)、カツラ(ランコ)、ハルニレ(チキサニ)、シナノキ(ニペシニ)、ヤチダモ(ピンニ)、オニグルミ(ネシコ)、ケヤマハンノキ(ケネ)、ヤナギ(スス)

現在、木の間を縫うように草を食べる馬の姿は見られませんが、当時の雰囲気をそのまま感じ取れる場所でもあります。



「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

■文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055-0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828

初　版:2014年6月
第2版:2020年3月

ニシパの恋人

27

関連シート：28

平取町らしい農村景観

平取町（ひらとり）の河川沿いに広がる低平地に、トマトを栽培するためのビニールハウスが数多く建てられています。昭和40年代後半から本格栽培され始めたもので、今では町を代表する農産物として全国に出荷されています。近代以降、移り変ってきた地域の農業の今を伝える景観といえます。



写真１　平取町内に点在するトマト栽培のビニールハウス群（平取町荷菜：北西側から撮影）。町の基幹産業として多くの住民が生産に携わっている。

トマト栽培の現代史

平取町におけるトマトの本格栽培は、昭和45(1970)年に始まった米の減反政策に端を発します。

地域で転作作物の導入が検討された結果、昭和47(1972)年に２千坪のビニールハウスでトマトが生産され、初めて市場出荷されるようになりました(資料１)。

町を挙げてのトマト栽培が成功した背景に、２つの大きな転機がありました。１つ目は昭和57(1982)年の共同選果施設の設置です。これにより共販体制が確立され、選果作業の省力化を促しました。結果として作付面積の倍増へとつながっていきました。２つ目は平成２(1990)年に行われた「桃太郎」品種への全面変更です。日もちの良い品種への転換により道外市場への出荷が急増しました(資料２)。



写真２　平取町で栽培される桃太郎トマト。果実として出荷されるときは通常、熟していない状態で箱詰めされる。規格外品はトマトジュース等の原料として利用される。

トマトはもともとメキシコが原産で16世紀にスペイン人によってヨーロッパに持ち込まれたといわれています。日本へは江戸時代後期に渡来し、更に明治時代にはアメリカからいくつもの品種が導入されました。しかし、日本人の食生活にはなかなか馴染まなかったようです。

昭和になってポンテローザという品種の導入や福寿１号、福寿２号という品種が発売され、栽培が急速に増えていきました。その後も大型福寿、強力福寿、黄寿等の品種が次々と登場します。

昭和56(1981)年には、完熟果で収穫できて果肉の品質が長く保たれる桃太郎が発売されました。その後瞬く間に広がり、今では日本全国の栽培シェアの78%を占める

ようになりました。

現在のトマト生産量は１位が熊本県で13%、次いで北海道と茨城県の７%となっています。

「ニシパの恋人」ブランドの設立

昭和40年代後半から急増したトマトの全道出荷のイメージ戦略として、昭和61(1986)年、ＪＡ平取町により「ニシパの恋人」の販売が開始されました。平取トマトとその加工品のブランド名称で、ニシパ（nispa：紳士、旦那、お金持ち）というアイヌ語を混じえたユニークなネーミングです。「ニシパが健康な体を保つために真っ赤に熟れたトマトを毎日食べて、恋人のように愛してしまった」という創作ストーリーにより名付けられました。

「ニシパの恋人トマトジュース」(写真３)は、ネーミングの面白さと味の良さ、飲みやすさにより消費者の好評を得、道内トップクラスの地位を確立するに至っています。この外、同ブランドのトマト製品として、トマトケチャップやゼリー、ジャム、ミートソースなども販売されています。

ブランド農産物の出荷をとおして町の景観イメージを発信

生トマトやトマトジュースを代表とする「ニシパの恋人」はびらとり和牛と並ぶ町の農産物ブランドで、全国各地に出荷されています。

そのことは同時に地域の農村景観のイメージが日本各地に発信されていることでもあります。

トマト生産のビニールハウスや黒毛和牛の放牧は、現在における住民の暮らしの姿そのものでもあります。活気に満ちた地域産業の姿は、出荷される食べもののおいしさにもつながっていきます。

資料1　平取町のトマト栽培年表

昭和 47(1972) 年
2･3戸の試験栽培農家が中心となり 2000 坪のビニールハウスでトマトが生産され、初めて市場出荷される。

昭和 48(1973) 年
試験栽培農家が周辺の農家を説得し、21 戸の同意を得て本格的なトマト栽培がスタート。

昭和 57(1982) 年
共同選果施設が設置。選果作業が大幅に省力化されて作付面積が一挙に倍増。

昭和 61(1986) 年
規格外品の付加価値を高めるためにトマトジュースの試作に取り組み、「ニシパ（紳士）の恋人」とネーミングして販売を開始。



写真３「ニシパの恋人」トマトジュース

平成2(1990) 年
市場価格が非常に高かった桃太郎へ品種を全面的に変更。

平成4(1992) 年
トマト専用の共同選果施設が設置される。
（平成8年、同 10 年にそれぞれ追加設置）

平成8(1996) 年
予冷貯蔵施設が新設され、鮮度保持や出荷調整が強化された。道外移出の拡大で、予約相対取引が増加することにより、価格水準が高位安定化した。

資料2　平取町におけるトマト出荷の推移

年次	販売金額（千円）	品種
昭和 48(1973) 年	4,671	福寿2号
昭和 58(1983) 年	102,644	強力旭寿
平成 4(1992) 年	518.093	桃太郎
平成 7(1995) 年	1,027,958	桃太郎
平成 12(2000) 年	2,161,508	桃太郎
平成 24(2012) 年	3,901,000	桃太郎

こうした商品は、ＪＡ平取町の店舗(平取町本町)や直売店(同荷菜)で購入できるほか、ＷＥＢや町外のスーパーなどでも広く販売されています。

「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

■文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055－0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828
初　版:2014年6月
第2版:2020年3月

びらとり和牛

28

関連シート：27、58

和牛のいる景観

宿主別(しゅくしゅべつ)区域には312.5ヘクタールに及ぶ町有牧野が整備されおり、町の基幹産業であるびらとり和牛の放牧が行なわれています(写真１)。

５～10月にかけて放される黒毛和牛は東京ドーム67個分に相当する草地でのびのびと育ち、平取町が誇る食用肉として全国に出荷されていきます。



写真１　町有牧野(宿主別区域)に放牧される黒毛和牛。「夏山冬里」方式で多くの時間と手間をかけて育てるため、大量生産が難しい。

びらとり和牛ブランド

戦前に軍馬生産の牧野として林間放牧されていた宿主別区域一帯は、昭和34(1959)年以降の大規模な草地開発整備事業によって牧草地への転換が図られました。

昭和37(1962)年から黒毛和牛が本格導入されるようになり、牧野の家畜は肉用牛が中心になっていきました。肥育牛は屠場(とば)及び市場へ出荷されています。

びらとり和牛は、夏山冬里方式(※1)で育てられることを特徴としています。肥育素牛(※2)の大半が平取町内で生産されており、びらとり和牛を一頭を生産するためには、妊娠期間を含めて約40ヶ月もの時間と労力を要します。

※1　雪に閉ざされる冬は牛舎の中で育ち、春になると広大な放牧地に母子で放牧され、秋には里に下りてくる方式。東北や北海道で主に実施されている肥育方法で、長期の放牧に耐える豊かな牧草地が条件となる。

※2　主に食品用として、肉質の向上を重視して飼育されている牛を「肥育牛」という。一方で子牛を出産させ繁殖させるために飼育している牛を「繁殖牛」という。



写真２　一般販売されているびらとり和牛（ロースすき焼き肉）。最高級の和牛肉として全国に出荷されている。

和牛とはもともと農耕用に飼われていた牛を、明治時代に品種改良し、誕生した日本が世界に誇る肉専用種です。その和牛の９割が黒毛和種で、びらとり和牛もその一つです。

牛肉の格付けは、(社)日本食肉格付協会によって定められた基準に基づいて検査されます。その際、歩留(ぶど)まり等級(※3)と肉質等級(※4)の２種類の等級が使われます。この組み合わせは15段階あり、格付けの等級が高いほど美味しい牛肉ということができ、A-5が最高ランクとなります。びらとり和牛は多くがA-5に格付けされており、柔らかく、旨みが凝縮された味の濃い肉として、通もうならせる逸品とされています(写真２)。

※３　生体から皮、骨、内臓などを取り去った肉を枝肉という。このとき生体から取れる枝肉の割合が大きいほど等級が高くなる。同じ体重の牛でもたくさんの肉が取れる方が良いとされる。等級はＡ・Ｂ・Ｃの３段階でＡが最も良い。

※４　「脂肪交雑」（霜降の度合い）、「肉の色沢」（肉の色と光沢）、「肉のしまりときめ」（見た目）、「脂肪の色沢と質」（白またはクリーム色を基準に判定され、さらに光沢と質を考慮）の４項目について評価が行われる。そして４項目の総合的な判定から最終的に肉質等級が決定する。等級は５～１の５段階に分けられ５が最も良い。

その他、びらとり和牛の加工品として、びらとり和牛カレーやミートソースなどが開発されており、地域を代表する贈答品として人気を博しています。とりわけ、ミートソースは平取町の主要農産物である和牛とトマトの合作商品でもあります。

これらの商品はびらとり温泉のほか、町内外のスーパーやＷＥＢ販売で購入することができます。

町有牧野の造成

昭和34(1959)年以降に進められた牧野の草地化は、林間放牧から今日的な家畜生産への転機でもありました。林間放牧は主に軍馬や農耕馬の生産に用いられていました。その名残は、現在、町の天然記念物として保護されているすずらん群生地にみることができます。ハルニレやカシワなどの巨木が点在する疎林の中に馬が放される景観がもともとは広がっていました。

今みることができる大規模な草地への転換は、戦後の畜産振興策の一環として行なわれ、結果として、後のびらとり和牛ブランドの形成につながっていくことになりました。

なお、宿主別区域特有の巨木は草地化の際にも意図的に残され、牛の日陰樹として用いられ続けています（写真３）。孤立的に佇む巨木は、人工構築物がほとんどない草地と空、岩壁を背景にすることで、その大きさと美しい樹形を際立たせます。寄り添うように休む和牛とともに「絵になる景観」として私達を和ませてくれます。



写真３　町有牧野内に立つハルニレ（宿主別区域：北から撮影）。地域の産業景観を彩る大木で、牛を放牧する際の日陰樹として欠かせない。

資料１　びらとり和牛生産の歴史

昭和37(1962)年	島根県から黒毛和牛54頭を初めて導入。
昭和43(1968)年	平取町肉牛生産振興会設立。
昭和48(1973)年	有限会社平取町畜産公社設立。 島根県から県共進会グランドチャンピオン種雄牛「第三滝尻」を導入。これが現在の繁殖牛の基礎となる。
昭和53(1978)年	平取町和牛生産改良組合に名称変更。
平成５(1993)年	びらとり和牛13頭が東京枝肉市場に初出荷される。

資料２　肉用牛の飼養数推移

年次	戸数	頭数
昭和38(1963)年	13	23
昭和45(1970)年	98	619
昭和50(1975)年	107	1,321
昭和53(1978)年	99	1,642
平成３(1991)年	80	2,220
平成11(1999)年	60	3,590

「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

■文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055-0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828
初　版:2014年6月
第２版:2020年3月



開設までさかのぼります。

後の明治17(1884)年以降は、軍馬の資質向上に向け馬匹改良を推進し、海外から優良馬を導入してきました(資料２)。

平取町においても日露戦争が開戦する明治時代後半以降、宿主別(しゅくしゅべつ)牧場(現在の町有牧野)などにおいて、軍馬の林間放牧が大規模に行われました。現在の町指定天然記念物であるスズラン群生地はその当時の様子を色濃く残す景観でもあります。

(2)競走馬

昭和20(1945)年の終戦後、軍馬、農耕馬の役割が低下する一方で、本格的競馬の開始に伴い競走馬の需要が高まっていきました。特に日高地方では軽種馬生産への転換、特化が顕著に進展し、国内最大の軽種馬産地となっていきました。

平取町においては、昭和30年代から川向地区を中心にアラブを主体とした飼養が行なわれており、昭和40(1965)年の２歳馬生産頭数はサラブレット16、アングロアラブ39の合計55頭でした。また、同年11月には、生産者の組織化等を目的として平取町軽種馬生産振興会が設立されました。

振興会員による生産馬の活躍はめざましく、全国各地の競馬におけるアラブの重賞制覇があり、中央競馬では数々のＧＩ制覇の優駿が出現しています(資料４)。

平取町に隣接する日高町の門別(もんべつ)競馬場では、ホッカイドウ競馬が開催されています。４月から11月までの期間、ナイター競馬が開催されており、迫力ある馬の姿を間近で見ることができます。

資料3　平取町における軽種馬生産数の推移

年度	繁殖雌馬飼養頭数（生産頭数）	
	サラブレット	アングロアラブ
昭和 40(1965) 年	45(18)	74(47)
昭和 55(1980) 年	184(119)	173(137)
昭和 60(1985) 年	187(106)	204(154)
平成 2(1990) 年	284(197)	152(118)
平成 7(1995) 年	287(194)	169(117)
平成 12(2000) 年	281(212)	36(28)
平成 17(2005) 年	240(198)	5(2)
平成 22(2010) 年	230(144)	0(0)

（北海道日高振興局 2012）

資料4　町内生産馬のＧＩ制覇

年度	レース名	馬名	生産牧場名
昭和 55(1980) 年	第 21 回宝塚記念	テルテンリュウ	稲原牧場
昭和 60(1985) 年	第 26 回宝塚記念	スズカコバン	稲原牧場
平成 3(1991) 年	第 8 回マイルチャンピオンシップ	ダイタクヘリオス	清水牧場
平成 4(1992) 年	第 9 回マイルチャンピオンシップ	ダイタクヘリオス	清水牧場
平成 8(1996) 年	第 26 回高松宮杯	フラワーパーク	高橋啓
平成 8(1996) 年	第 30 回スプリンターズステークス	フラワーパーク	高橋啓
平成 10(1998) 年	第 39 回宝塚記念	サイレンススズカ	稲原牧場
平成 11(1999) 年	第 16 回フェブラリーステークス	メイセイオペラ	高橋啓
平成 12(2000) 年	第 34 回スプリンターズステークス	ダイタクヤマト	雅牧場
平成 19(2007) 年	第 37 回高松宮杯	スズカフェニックス	稲原牧場
平成 23(2011) 年	第 134 回中山大障害	マジェスティバイオ	清水牧場
平成 24(2012) 年	第 14 回中山グランドジャンプ	マジェスティバイオ	清水牧場

（JA平取町ホームページ）

資料5　馬を知るための専門用語

軽種馬	一般的にはアラブ、サブレット、アングロアラブ、アラブ系種、サラブレット系種を指し、競走馬や軍用馬などに使用される。
重種馬	農耕を目的に品種改良された馬を指す。
アラブ	馬の品種名。日本ではサラブレッドなどと配合したアングロアラブと呼ばれる雑種のアラブ馬のことを指すことが一般的。
サラブレット	競走馬用の品種改良された馬の品種。主にアラビア半島や北アフリカのアラブ種にイギリスの在来種と掛け合わされた馬が祖アングロアラブ雑種のアラブ馬のこと。主に競走用に使役されている。
競技馬	馬術競技用に育成された馬を指す。
競走馬	競馬競技のために育成される馬。サラブレッド種やアラブ種などがある。ばんえい競馬ではばんえい種が活躍している。

「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

■文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055-0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828
初　版:2014年6月
第2版:2020年3月

クロム鉱山の歴史を学ぶ

所在地：平取町振内(ふれない)町、字仁世宇(にせう)外

30

関連シート：47

クロム鉱山について

平取町の地質の多くを構成する蛇紋岩体の中には、様々な形態でクロム鉱床が含まれています。高品位鉱石として大正時代初めごろより採鉱された沙流川内陸部のクロム鉄鉱は、全国産出額の95%といわれる生産がありました。

クロム鉄鉱の用途は軍艦、兵器、鉄かぶと等の軍需品、航空機や船舶の重要部分、自転車、自動車の要部等極めて広範囲にわたります。とりわけ昭和初期以降、戦時体制へと向かうに従い「時局産業」として発展していきました。



写真１　操業当時の日東鉱山（仁世宇：平取村開村五十年史編纂委員会 1952）。クロムの鉱床は国内でも限られており、その約８割は平取・穂別で産出されてきたとされる。

昭和初期のクロム鉱山

沙流川流域におけるクロム鉄鉱の採掘は、昭和初期の戦時下において最盛期を向えていました。その頃は平取村域内で８つの鉱山が稼動(資料)し、多くの従事員とその家族で賑わっていました。

昭和６(1931)年、日本国内の失業者は40万人を突破し、社会全体は依然として昭和恐慌の影を引きずっていました。しかし、平取のクロム鉱山はそれとは無縁の好景気を謳歌していました。昭和11(1936)年当時、日東鉱山(仁世宇)の従事員数は66名ほどでしたが、昭和16(1941)年には120～130名にまで増加していました。

鉱山周辺の繁栄も著しく、仁世宇には平取村で最初の映画館ができたほどです。また、この頃は平取村でも三分の一くらいしか電灯がない時代でしたが、仁世宇の山中には電気が晃晃とついていたといわれています。



写真２　操業当時の八田鉱山（振内町：振内郷土史編集委員会 2010）。初期の採鉱は露天掘りによって行われた。写真左上は採掘されたクロム鉱石。

資料　昭和初期のクロム鉱山

鉱山名	創業	場所	閉山
日東鉱山	大正6年	仁世宇	昭和38 年
新日東鉱山	昭和8年	岩知志	不明
八田鉱山	昭和2年	振内	昭和42年頃
糠平鉱山	昭和11年	豊糠	昭和29年
東部鉱山	大正末期	仁世宇	昭和32年
本倉鉱山	(昭和19年頃稼行)	仁世宇	昭和25年
千露呂鉱山	(昭和19年頃稼行)	千露呂	不明
宇野クロム鉱山	(昭和19年頃稼行)	幌毛志	不明



図　仁世宇に整備されたフットパスコース。クロム鉱山の歴史を学べる場としても人気が高い。



写真３：A　日東鉱山ズリ山跡
休憩ポイント近くに、ズリ山跡をみることができる。

※鉱山で採掘された鉱石のうち、廃棄する岩石等の部分の俗称をズリという。



写真４：B　日東鉱山選鉱場跡
上の段から順に５段構造でズリを水で流し、ふるいにかけて選別。

戦後のクロム鉱山

平取における戦後のクロム生産は、朝鮮戦争(1950～1953)の開始に伴う特需景気によって増加していきました。昭和27(1952)年当時は、少なくとも４つの鉱山が稼業していました。朝鮮戦争の休戦や格安の輸入鉱石の増もあり、道内の金属鉱業はしだいに優位性を失っていきました。さらに昭和36(1961)～39(1964)年にかけてクロムを含む一般鉱業の輸入自由化が試されたことから、道内鉱業は苦境に立たされることになりました。

昭和38(1963)年には八田鉱山を残すのみとなり、従業員もたった９人に減少しました。このように、平取を代表する産業の一つであったクロム鉱業は、資源の窮乏と輸入鉱石の圧力によって昭和30年代末には完全に衰退していきました。

歴史を受け継いでいくために

現在、ニセウエコランドの周辺にフットパスコースが整備されています(図)。「けもの道コース」と名付けられたコースは約６km、３時間の道のりでニセウ川流域の雰囲気を味わいながら日東鉱山の産業道路を巡ることができます。

日東鉱山は昭和26(1951)年当時、259人の従業員が働いていました。家族や関係者を含めると1,000人以上の人たちで賑わった町でした。そうした当時の様子を想いながら散策することで、近代遺産の価値を再認識することができます。

「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

■文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055－0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話：01457-2-2892
FAX：01457-2-2828
初　版：2014年6月
第2版：2020年3月

びらとりの語源について

31

関連シート：５、36

どの場所を指す地名なのか

平取の意味(資料１)は、ピラウトゥル(pira utur：崖・の間)をもとにするという見解が有力となっています。その一方で「崖の間」がどこを指すかについては、幾つかのの見解が伝えられています(資料２)。

資料２-①は沙流川左岸のペンケピラウトゥルナイ、パンケピラウトゥルナイの間にコタンがあったというものです。「地名のもとになった対岸の川名」(山田1986)が語尾のナイ(川)が省略された形のピラウトゥルであったと分析されています。

また、パンケピラウトゥルナイは、門別川流域へ抜ける重要な交通路でもあったと言われています。かつては交通の要衝へ必然的に生活拠点が築かれたものと考えられます。

資料２-②は沙流川に突き出る両岸の崖がもともとの語源であるというものです。右岸側はハヨピラ、左岸側はチノミシリと呼ばれる大崖で、いずれもオキクルミの伝承地として地域住民に崇められる場所でもあります。沙流川の下流数kmの方向からこの場所を眺めると、大河を両側から挟む門構えのようにも感じられます。

資料２-③は現在の小平地区から沙流川へ突き出た崖とハヨピラを指す語源説です。クオピラの崖は既に削られて消滅しているため、今日では現地で確認することができません。

沙流川内陸部の情報発信地

近世の文献には、「ヒラト」



写真　ハヨピラから見た平取本町市街とペンケ・パンケピラウトゥルナイの位置(北側から撮影)。もともとのコタン(集落)は、現市街地からみて沙流川の対岸にあったといわれている。

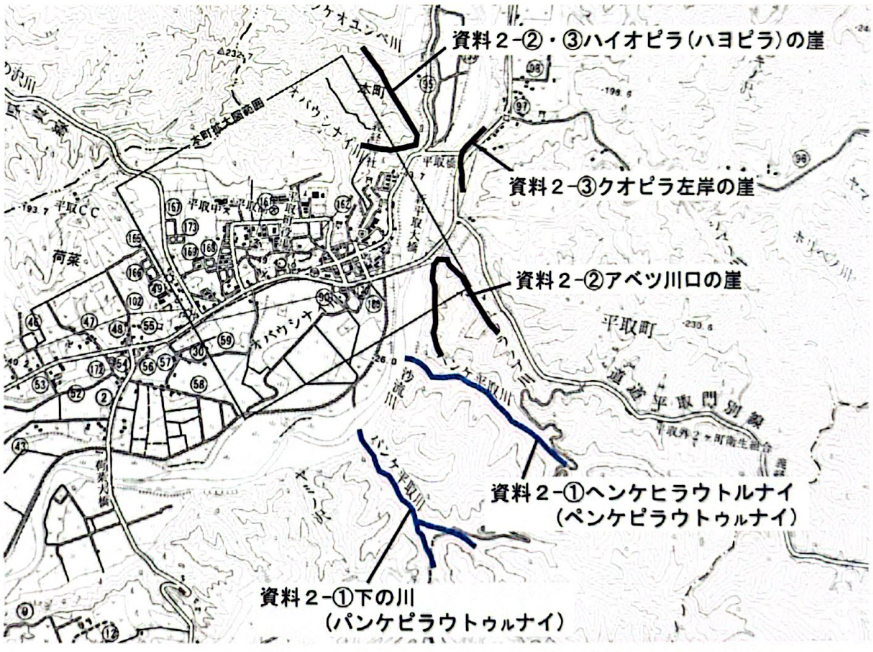


図　資料2の文中説明にある場所の位置関係。①は地域の河川名称として、②の両崖は人文神オキクルミの伝承地として、それぞれ住民と深く関わってきた。

資料1　平取の語源について

①村の原名ピラウトルはピラは丘陵の急斜面ウトルは間にして両崖の間の意なり。　(平取外八箇村小学校組合會編 1917)

②Pira utur'i＝Pira uturu-i　ピラウトゥリ　両崖ノ間ノ処　平取村　(永田 1891)

③昔は、ピラウトゥル、ピラは崖、ウトゥルは間、崖と崖の間にあった村と言う意味。　(萱野 1984)

④さだもさんに、平取はどんな風に発音していたのでしたかと聞いたら、ことも無げにピラトゥル(piratur)でしたよと云われる。…pira-uturは母音が二つ続くので、よく使われる地名のくせで、その一つを省いてピラトゥルとなり、そして平取となったものらしい。　(山田 1986)

資料2 ピラウトゥルコタンの位置について

①ヘンケヒラウトルナイ 是は小川のよし也。昔しは此川と下の川との間に人家有りしが、当時は皆西岸に引移りたりと。然るが故に今畑多分に東岸に有る也。扨また西岸ヲハウシナイの少し上の方に、人家三十一軒有。是を今はビラトリ村と云り。 (松浦著・秋葉解説 1985)

※語尾のナイ(川)は省いて呼ばれたことが多いようである。そしてその二つの川の辺の土地がもともとのピラウトゥルと呼ばれた処なのであった。 (山田 1986)

②平取創業時代の部落はアベツ川口付近にありたるを以て、ハイオピラの崖とアベツ川口の崖とを指したるものなりと。部落は其後パンケ川口附近にも移り、又ケナシにも転じ、其他幾分宛の異動ありて、終に現今の如くなりたるなり。 (平取外八箇村小学校組合會編 1917)

③(平取本町の位置について)…ハヨピラ平取大橋右岸の崖と、クオピラ左岸の崖があるからだともいわれています。 (萱野 1984)

「ピラトリ」「ヒラトリ」といった記載をみることができます。いずれも、ピラウトゥルを語源とした呼ばれ方とみられ、本来の意味合いは同じと考えられます。

平取は沙流川内陸部における最大の集落として知られた土地柄でもありました。オキクルミの降臨地(ないしは義経伝説の地)として伝えられるハヨピラの存在も、コタンの神秘性を高めるものであったと考えられます。

近藤重蔵の見分(寛政十：1798年)やイザベラ・バードの紀行(明治11：1878年)も、平取コタンが最終目的地でした。イギリス人宣教師・人類学者のジョン・バチェラーも明治12(1879)年に平取コタンを訪問し、３ヶ月間にわたってアイヌ語を学びました。

当時、面識やゆかりのない者が沙流川内陸部を訪れるためには住民の協力が不可欠でした。近藤はリチンマ、武四郎はチヤリアマ(当時56歳)、バード、バチェラーはペンリウク(当時45歳)といった歴代のコタンコロクル(村おさ)を窓口とすることで、見分や記録保存を円滑に行うことができたのです。

平尾鳥について

秋田市を流れる雄物(おもの)川の東岸に平尾鳥(ひらおとり)という地名があります(山田1986)。ピラウトゥルと考えられる語源は、雄物川に流れ出る平尾鳥川の河口域で確認することができます。

平取から遠く離れた秋田市で、同じアイヌ語を語源とする地名を確認できることは、それぞれの地域における文化変遷を考える上で興味深いことといえます。「ピラ pira：崖」はアイヌ語地名の典型事例の一つであることから、今後更に南方で見出されることがあるかもしれません。

資料3 集落名称の変遷と戸数・人口

年代	名称	戸数	人口	文献
寛政十(1798)年	ヒラト	22		『蝦夷日記』
文化六(1809)年	ピラトリ	17		『東蝦夷地各場所大概書』
安政三(1856)年	字ヒラトリ村	28	151	『竹四郎廻浦日記』
安政四(1857)年	ヒラトリ村	33	158	『入北記』
安政五(1858)年	ピラトリ村	31	160	『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』
明治11(1878)年	BIRATORI			『日本奥地紀行』
明治30(1897)年	平取(ピラトリ)村	77	342	『平取外八箇村誌』
明治40(1907)年	平取(ピラトリ)村	104	453	『平取外八箇村誌』
大正 4(1915)年	平取(ピラトリ)村	148	762	『平取外八箇村誌』
大正 8(1919)年	平取(ピラトリ)村	183	833	『平取外八箇村誌』
大正 9(1920)年	平取(ピラトリ)村			『平取外八箇村誌』
昭和48(1973)年	本町[字名改正]			『平取町百年史』



「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

□文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055-0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828
初 版:2014年6月
第2版:2020年3月

オキクルミ伝承のなかのチノミシリ

32

所在地：平取町川向　アベツ川口左岸側の丘陵

関連シート：10、11

オキクルミ伝承のチノミシリとその重要性

沙流川は人文神オキクルミが降臨した地として言い伝えられており、流域の各所に伝承地が所在します。

そうした場所の内、平取町本町(ピラウトゥルコタン)からみて沙流川の対岸(写真１)に、オキクルミがつくったノヤイモシカムイ(写真２)が安置されたと言われるチノミシリ(ci=nomi sir：我ら・祭る・所)があります(別称ピラウトゥルレレケ pirautur rer e ke：平取・を沈める・[イナウを]作る)。

平取町本町周辺は流域の中でも、とりわけオキクルミの伝承地が多く点在する場所です(図・資料１)。また、近・現代においても石像や墓碑が建立されており、地域におけるオキクルミ信仰の継承をみることができます。

チノミシリのノミ(nomi)は「いうまでもなく、神様を拝むの意」(山田 1990)とされています。地域のウパシクマ(資料２)をみると、ピラウトゥルコタンの住民にとって、オキクルミを崇拝する対象の山であったことが分かります。

かつての大病であった疱瘡(天然痘)のほか、ケガ・病気等の防備・治癒を祈願をする場所で、重い祭儀を行なう際には「平取沢口の礼拝」が行なわれるとされています。

地域にとっていかに大事な所かを伝えることも、アイヌ文化継承の重要な意義といえます。アイヌの宗教観はチセノミ(家の新築祝い)、チプサンケ(舟下ろしの儀式)、シンヌラッパ(先祖供養)など、あらゆる場で重視され、伝承活動が行われています。こうした儀礼と同様、オ



写真１　国道237号の新平取大橋手前(南西側)からみたチノミシリ。沙流川とアベツ川の合流部付近に伸びる丘陵先端あたりを指す。　MC　442 587 870(視点場)

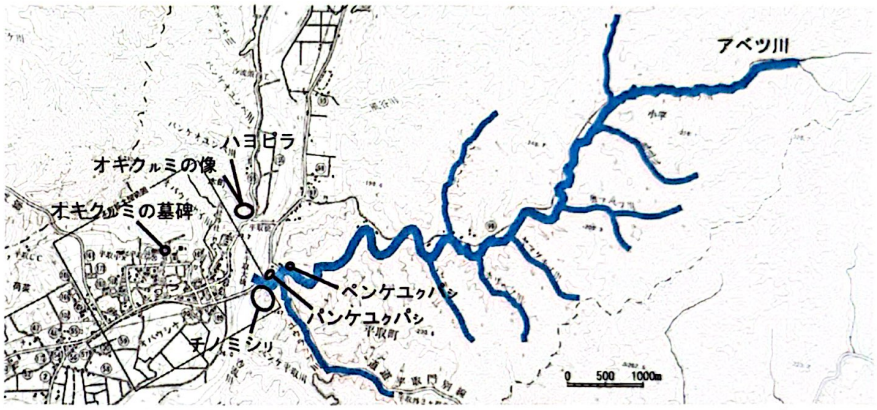


図　平取本町および周辺におけるオキクルミの伝承地・関連建造物。

資料1　平取本町周辺のオキクルミ伝承地及び関連建造物

ハヨピラ(本町)　オキクルミが降臨してチャシを築き、アイヌに様々な生活文化を授けた地と伝えられている。

チノミシリ(川向)

ペンケユクパシ(小平)　オキクルミとサマユンクルが投槍をしたとされる孤島状の丘陵地。アベツ川河口域のペンケ(上流側)とパンケ(下流側)にそれぞれ１箇所ずつ所在する。

パンケユクパシ(川向)

アベツ川(川向～小平)　この川を遡った上に「オキクルミのチャシ」(ハヨピラとは別の伝承)があると伝えられる。河口域周辺も伝承地の集積がみられ、地域住民のオキクルミ信仰と深く関わる小河川といえる。

オキクルミの像(本町)　昭和10(1935)年に室蘭市輪西の立雲寺の林舜祥住職が私財を投じて建設した像で、1964年にハヨピラのふもとへ移築された。日本神話とオキクルミ伝承を結びつけた氏の歴史観に基づいて建てられたと言われている。

オキクルミの墓碑(本町)　昭和58(1983)年にオキクルミの礼拝を目的として、地域住民有志により建設された墓。



写真２　ノヤイモシカムイ（二風谷アイヌ文化博物館蔵：重要有形民俗文化財）

キクルミ信仰の継承も沙流川流域のアイヌ文化を理解する上で欠かすことはできません。

チノミシリとは

チノミシリは「神がアイヌの人々に火事・水難・病気の流行等の吉凶を教える場所である。またアイヌの人々がそこにいる神に対しお祈りをする場所」（萱野・田中編 1999)とされています。

特徴的な山や崖、露岩地がカムイのいる処として尊崇されることが多く、沙流川流域では、アベツ沢尻のチノミシリ(オキクルミの伝承地)とカムイエロシキヒ(フリカムイの伝承地：去場の対岸である川向地区に所在)が広く知られています。

ただ、本来は「アイヌ民族以外の人に漏らしたり、汚したり、傷つけたり、地形を変えたりしてはならない」（萱野・田中編 前掲)場所であることから、一般の人が分からない場所も相当数あると考えられます。近年においては、文化享有権の観点から、聴き取り調査によって正しく把握する努力が行われるようにもなっています。

草人形の役割と意味

アイヌ文化における重要な神体のひとつである草人形は、ノヤイモシカムイ等、様々な呼び名があります(資料３)。

資料2　アベツ沢尻のチノミシリにかかるウパシクマ(言い伝え)

①アエオイナカムイ(アイヌラックル)は、現在の平取市街の川向かいにある亜別沢尻に聳えるチノミシリ(「われら遥拝する山」の意)の山頂で、沙流川河口に押し寄せる疱瘡神(pa-kor-kamui)の船団をみて、その場でヨモギの草人形神を作って戦わせた。大船団を撃退した草人形の神も疲労して諸だおれとなり、化生して河童の神(mintuchi kamui)になったという。…サルンクルの信仰によれば、アベツ沢尻のチノミシリには草人形神の総大将がいるものと信じているので、今日でも重い祭儀を営むときにはNai-o-putun-onkami(平取沢口の礼拝)といって、そこへ木幣を捧幣献酒する習俗が行われている。

(久保寺 1971)

②オキクルミカムイという神が神の国へ帰られる前に、ノヤイモシ＝ヨモギ神を作って、今の平取町本町の向かい側の台地に安置した。場所は、ピラトゥルレレケ＝アペッ沢が沙流川に合流している地点からやや富川寄りの台地で、そこへ留守を守る神として作って置いて、神の国へ戻られた。

(萱野 2003)

資料3　ノヤイモシカムイの呼び名

①ノヤイモシカムイ(noya i mosh kamuy)
ヨモギ・それを・目を覚ます(霊力を与える、 呪力を付与する)・カムイ:ヨモギに魂を入れた神

②チシナプカムイ(ci shina p kamuy)
我ら・縛る・もの・カムイ:我らが結び縛った神

③ムンチシナプカムイ(mun ci shina p kamuy)
草・我ら・縛る・もの・カムイ:草を我らが結び縛った神

④アイヌテケカラカムイ(aynu teke kar kamuy)
アイヌ・手・作る・カムイ:人間の手をもって作った神

⑤アイヌモンカエヌプルカムイ(aynu mon ka e mupur kamuy)
アイヌ・手・の上・で・神力で守る・カムイ:人間の手をもって呪力を与えた神

⑥キナストゥイナウカムイ(kina sutu inaw kamuy)
草・棒幣・カムイ:草の棒幣の神

⑦レウアレワックル(rew ar ewak kur)
曲がって・ひとつ・居る・人:神体が細くシナシナした・人

(久保寺 1971)

胴体と両手足の５ヵ所に心臓となる石粒を入れて、流行り病のときなどに緊急で作るヨモギのカムイです。「心臓が五つもある神は、さぞや強かった神であり、どんな流行病を運ぶ神をも撃退できると信じたのであろう」（萱野 2003)と言われています。アベツ沢尻のチノミシリでオキクルミによって作られたと伝えられています(資料２)。不治の病を未然に防ぐ祈願に用いられるカムイとして、重宝されていたことが分かります。

「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

■文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055-0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828
初　版:2014年6月
第2版:2020年3月

義経神社

所在地：平取町本町119-1

33

関連シート：4、35

義経神社の設置

義経神社の起源は、幕吏近藤重蔵による祠の設置と御神像の奉祀とされています。築造年代は寛政10(1798)年とされ、当初はハヨピラの崖に築かれた祠であったことが木村謙次による『蝦夷日記』(木村著・山崎編 1986)に記載されています。

ハヨピラへの場所選定にあたっては、寛政10(1798)年11月、エトロフ島巡見の帰りに門別運上屋を発着点として調査隊から選ばれた木村謙次らが見分に来ています。

ハヨピラ見分の記述には「アヨヒラ義経の旧跡あり　川岸より南向シテ岸壁の上を古蹟ト云」(木村著・山崎編 1986)とあり、地域に伝わるオキクルミ伝承と義経を同一視する認識をみてとることができます。

このような見解は、元文年代(1736-40)の記録である『蝦夷商賈聞書』といった近世の文書が根拠になっており、義経は生存していて蝦夷地に渡ったという義経伝説がたびたび記されます。近藤重蔵はアヨヒラの旧跡のほかにも、義経に関係した伝説などに関心を示しており、蝦夷地巡検の道中、クナシリ北端のアトイヤにも義経の祠を安置したと伝えられています(平取町史編集委員会 2003)。

ハヨピラにあった神社の様子については、松浦武四郎やイザベラ・バードによっても記録されています(表)。険しい崖に立つ簡素な社は、今日、私たちが抱いている義経神社のイメージと大幅に異なる姿といえます。

ハヨピラへの祠の設置と義経像が寄進された1800年初頭前後は、幕府による蝦夷地直轄が段階的に行われ、蝦夷地を取り巻く対外的な緊張関係が高まっていた時期といえます。そのような時代背景の中、平取に義経崇拝の一拠点が築かれていきます。



写真1　現在の義経神社。現社殿で6回目の造営(表参照)となる。神社の位置は、ハヨピラからポンスマウンコを経て、現在の地へ移築されてきた。 mt 442 616 713



写真2　明治後期～大正時代の義経神社の社頭（二六堂 1919)。ポンスマウンコから丘陵上に移築した明治34(1901)年以降、大正8(1919)年までの間に撮影されたものとみられる。

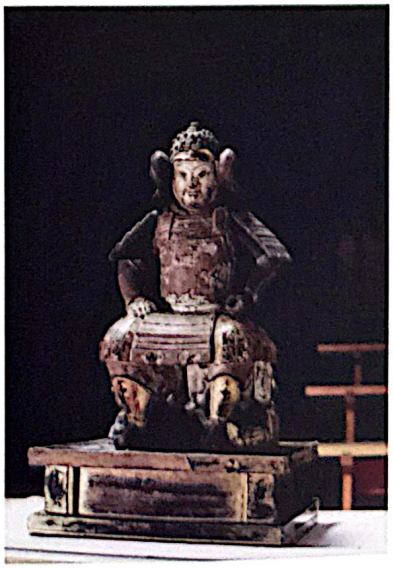


写真3　義経の木像

義経像の移動

武四郎の日誌(1858年当時)では、ハヨピラの御神像が平取ではなく門別の会所で祀られていたと述べられています。一方でバードの紀行文には、氏の見た義経像が詳しく述べられており、明治11(1878)年当時は確実に存在していたことが分かります。

門別神社史によると、義経像が併祀されていることが明治6(1873)年に北海道開拓使へ報告されています。つまり、門別の会所に移されていた御神像は門別稲荷神社を経由して明治6～11年の間に本来の地(ハヨピラの祠)に戻ったと考えられます。

平取を代表する名所

義経神社が平取の名所・旧跡として広く知られていくようになるのは、主には現在の神社が丘陵上に移された明治34(1901)年以降とみられます。

北海道内の観光地化が進む大正時代には、神社の改築(大正9:1920年)も行われ、以降、ペンリウク頌徳碑(昭和9:1934年)や馬頭観世音の像(昭和12:1937年)、松前ピリカ顕彰碑(昭和63:1988年)などが建立されるようになります。

昭和36(1961)年には現社殿の新設と、結婚式場などに使う義経会館が開館しました。平成2(1990)年には義経会館が改修され、義経資料館として再オープンしています。



写真4　明治34(1901)年、ハイラム・ヒラーによって撮影されたピラウトゥルコクン(北東側から撮影)。写真右端に義経神社の鳥居を確認することができる(財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 2008)。

義経神社年表

寛政10(1798)年

11月、幕府による蝦夷地巡検の調査隊から選ばれた木村謙次らによるハヨピラ見分が行なわれる(モンベツ運上屋が発着点)。一度モンベツ運上屋に戻った後、近藤重蔵らとともに平取を再訪しハヨピラに祠を建立する。

後年、近藤重蔵ハヨピラに源義経の木像を寄進する。台座の背面には制作日とみられる「寛政十一年己未四月二十八日」という日付が記されている。

安政5(1858)年

松浦武四郎による沙流川流域の見分が行われる。「義経大明神の社」について「三尺計の小社、数十丈の懸崖の上に立たり。五十年前迄は甲冑の尊像といへるもの有し処、今其を会所え下げて祭り、此処は其形計の社有也。」ということが記録される。

明治9(1876)年

村社となる。

明治11(1878)年

イザベラ・バードがハヨピラを訪れる。そのときの義経神社と御神像の様子が『日本奥地紀行』「第36信」に記録される。

明治20(1887)年頃

暴風雨により祠・御神像ともに沙流川に落下、流出する。後に無事発見、再建されたが、建て直した祠が再び落下する。

明治26(1893)年

ハヨピラと現今の敷地との中間辺りのポンスマウンコに祠が建てられる。

明治34(1901)年

ハヨピラより数町下流の丘陵上に社祠が建てられる。

大正9(1920)年

現在の場所に神社が改築される。

昭和36(1961)年

現社殿を造営し、遷座する。



「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

■文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055－0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828
初　版:2014年6月
第2版:2020年3月

クリ(ヤムニ)について

34

関連シート：６、22

クリの渡来とその分布

北海道のクリは最終氷期の頃(約１～３万年前)、寒さに耐えきれずに姿を消した落葉広葉樹のひとつと言われています(山田・柴内 1997)。その後、縄文時代前期後葉(約5,200年前)には道南に、同後期中葉(約3,500年前)には石狩低地帯周辺にクリの実がみられるようになります。また、縄文時代の竪穴住居の用材にもクリが使われ始めることから、クリの上陸と分布拡大は人間が関与したものとみられています。

縄文時代から近世に至るクリの分布は、基本的(孤立的な植樹以外)には道西南部であったと考えられます。沙流川流域においては、平取町本町周辺から下流側の広葉樹林帯に分布していたようです。

平取町のクリは、近世以前から山林に生えていたものと、それ以降の開拓記念樹ないしは庭木として植えられたものがあります。前者は森林の中で世代を重ねながら自生しており、後者は人里で孤立的にみられます。

なお山林にあるクリの多くは、近現代の牧場管理において牧柵の材料にするため伐採されてしまいました(平村 2006)。ピラウトゥルナイ区域の尾根付近に行くと、今でも半世紀以上前の牧柵をみることができます。

また、義経公園に樹齢数百年のクリが現存しています(昭和49:1973年、道記念保護樹木に指定)。近世以前の森林の名残を残す貴重な木といえます。



写真　開拓記念樹のクリ(芽生:南から撮影)。人里で孤立的にみられるクリは、大半が近代以降に植樹されたもの。森林構成樹木としての分布は平取本町以南でみられる。

アイヌ伝承とヤムニ

アイヌ伝承にはクリを題材にするものが度々みられます。資料１のウパシクマ(言い伝え)をみると、クリの実が食料として重宝されていたこと、和人の国からポロシリへ行く道中でクリを蒔いて増やしたということ、義経神社の辺りにクリが多かったことなどを読み取ることができます。ポロシルンカムイへの畏敬の念に折り込まれたクリの逸話は、地域の暮らしにおける重要性を伝えるものでもあります。

アイヌ語地名にみるヤムニ

平取町内にあるクリの地名は、紫雲古津、本町、川向に分布しています(資料２)。近代開拓に伴って大量伐採される以前の山林の特徴を示すものでもあります。

紫雲古津のペンケ・パンケヤムニウシ周辺は、地域住民がヤムニタイ(クリ・林)と呼ぶ山林で、今日においても森林構成樹木の中にクリの自生をみることができます。

ヤメは平取町本町の市街地辺りの沢名で、もともとこの周辺から義経神社くらいにかけてクリが多い土地柄であったことが分かります。

川向のペンケ・パンケヤメ周辺には、現在クリの木がほとんどないといわれていますが、隣の沢であるパンケピラウトゥルナイの右岸側の山林でみることができます(平村 2006)。かつて多く群生していたことを示す地名といえます。

開拓記念樹としてのクリ

近代以降の北海道開拓において、クリの植樹が積極的に行われたと言われています。その年によって実り方にばらつきがあるものの、農産物の供給が安定しなかった時代においては身近にある貴重な食料資源でした。

平取本町以北においても、農家の庭先などに立派なクリをみることができます。普段何気なく見ている木であっても、その背景には世代を超えた住民の想いが詰まっているのです。

資料1　ポロシリ(幌尻)の神のウパシクマ

ポロシルンカムイには奥さんがいたが、まだ子供のできないうちにポロシルンカムイがきれいな女の人を二号さんにしたので、奥さんは怒ってイケスイikesuy(「腹あんばい悪くて家を出る」)した。川伝いに下って行ってピラトゥルンpiraturun(今の平取の義経神社のあたり)の一番偉い神、平取の神に訳を話すと「パセカムイpase kamuy(尊い神)の奥さんが家を出たらだめだ」と諭されたが、言うことを聞かずにシサムコタンsisam kotan(和人の国)に行った。そこには、クリばかりが生えているヤムニタイyam nitay(栗林)の村があって、そこに住むようになった。ヤムyam(クリ)をサラニプsaranip(小出し編袋)に入れて取っては、明けても暮れてもクリばかり食べていた。ある日、急に腹を病んだ。よく考えてみたら妊娠していた。やがて、男の子が生まれた。生まれた男の子と二人でクリばかり食べて暮らした。男の子が大きくなったとき、パセカムイpase kamuy(尊い神)であるポロシルンカムイに男の子だけでも返さないと申し訳ないと思ったので、このように息子に言った。

「お前の父は、ポロシルンカムイである。自分の孫爺さん、孫婆さんがいるからポロシリに戻ってきたと言って戻れ。途中クリをばらまきながら帰れば、クリがそこからおがる(はえる)だろう。平取に着いたら平取の神に訳を話せばよい。そうすれば平取の神がポロシリに連れて行ってくれるだろう。」

男の子が言われたとおりにポロシリに行くと山の上に大きな沼(トー to)があり、そのそばに大きな部落があった。コタン ノシキ タ kotan noski ta(村のまんなか)ある大きな家の前で、平取の神がシムシシカsimsiska(案内を請う咳払い)をした。「入れ、入れ」と言うので、入ってみると大勢の人がいて、横座に平取の神より年上と思われる男が座っていた。その男に平取の神が「自分の言うことを聞いてくれ」と話しかけた。「あんたの奥さんがシサムコタンで暮らしていたところ生まれたのがこの子供だ。子供をカムイに帰さなければカムイに申し訳ないことだから戻すことにした」と訳を話した。

ポロシリの神は「自分に子供がいたのか」と泣きながら「こんなに大きくなったのか。妻がいなくなってからは二号のところにも行かないで悩んでいた。立派な妻だ。自分は年老いてここにいられなくなった。明日、自分の本当の国へ(天へ)オリキンorikin(のぼる)するつもりだ。そのあとは、自分の跡継ぎとして、ここらへんをずっと守って行くようにしろ」と息子に抱き付いて泣いた。その夜はみんなでホリプパhorippaしたりヤエサマyaesamaしたりして遊んだ。

うすうす夜明けになると、ポロシリの神は、つま先から頭まで立派な服を着て家とヌサの間を通っていく。すると大きな鳥になって天に上って行った。男の子は涙をバラバラ落としてころげ回って泣いた。平取の神は「しかたがない。お前の父はカムイになって天に上った。お前はカムイだからいきなりおとなになって、ここを守って生きなさい」といって慰めた。「ここの人らもお前に協力するから最後まで守れよ」と言い聞かせた。

平取の神と言うのは、ピラトゥルンカムイpiraturunkamuyという。義経神社のあたりにいた神で、今も神社の上がり口は全部クリの木だ[貫気別　黒川セツ氏]。

(北海道教育庁生涯学習部文化課編 1997)

資料2　平取にあるクリの地名

パンケヤムニウシ　panke yam ni ush i　川口に・クリの木が・群生する・ところ　武四郎日誌　エソロカンの源流部付近　紫雲古津(しうんこつ)

ペンケヤムニウシ　penke yam ni ush i　武四郎日誌　エソロカンの源流部付近　紫雲古津

ヤメ　yam e　クリ・食べる(ところ)　武四郎日誌　平取町本町市街地辺り

ペンケヤメ　penke yam e　M29　川向

パンケヤメ　panke yam e　M29　川向

※武四郎日誌＝『戊午東西蝦夷山川地理取調(ぼご　とうざいかせんさんせん　とりしらべ)日誌』(安政五：1858年)

※M29＝明治二十九年製版北海道仮製五万分一図





「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

■文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055－0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話：01457-2-2892
FAX：01457-2-2828

発行：2014年6月
改訂：2020年3月

イザベラ・バード

35

関連シート：4、33

バードの日本列島訪問

イザベラ・バード(1831-1904)はイギリス出身の女性旅行家、紀行作家です。幼少の時から病弱だったため、転地療養のために世界各国をめぐり、その記録を旅行記として出版しました。

明治11(1878)年に初めて来日し、同年６月に東京を出てから日光、東北、新潟方面を回ったのち、北海道へ渡り９月に横浜へ戻るまで、３か月に及ぶ大旅行をしました。車のない時代に馬や徒歩で旅を続け、北海道では函館から室蘭経由で白老、平取(びらとり)などの集落を訪れ、平取では当時の集落で指導的立場にあったペンリウクの家に滞在しています。

その旅行記である『日本奥地紀行』は、近代初頭のアイヌ文化研究において広く活用されています。

バードのみた沙流川の道すじ

バードが沙流(さる)川の内陸部を訪れたのは、８月23日から４日間とされています。

「明治二十九年製版北海道仮製五万分一図」をみると、バードの歩いた道すじの概略をつかむことができます。氏の来訪から18年後の地図であるものの、明治時代前半の様子が色濃く表されており、近代の社会基盤整備が行われる以前の古道も載せられています。

平取訪問の出発地点は、沙流川下流左岸にあるサルプト(現在の日高町富川)であったとされています。平取へ出発する少し前には、同地の訪問を終えたハインリッヒ・フォン・シーボルトらと面会する機会を得ます。氏からは「いろんな困難はあっても、山アイヌを訪れることは、長い旅行をするだけの価値はある」というアドバイスを受けています。

サルプトから平取へ行くための道路は、出発してすぐに森林に入ります。「森林の中は暗く静寂そのもので、道路は糸のように森林を縫って走っている」状態で、さらに「道中時々ひどく険しい坂道にさしかかることもあった」こともあり、馬に乗っての移動にはすこぶる不向きであったことが分かります。

サルフト川(沙流川)にたどりつくとアイヌの少年を雇い、「丸木舟に乗って川を渡してもらった。それから私たちは平賀(ビロカ)、去場(サルバ)、荷菜(ミナ)を通り過ぎた」(高梨訳 2000)という道筋をたどります。

この記述からバードは、サルプトを出発後沙流川左岸側の丘陵地帯を通って間もなく渡船場へ出たことが分かります。また、こうした道中の村々に対して“びっくりしたのは家の外が非常に清潔であることだった。この点ではこれらの村々は「模範村」である”(神成訳1977)と述べています。その後、彼女は平取から去り海岸線を函館に向かいましたが、どの地でも沙流川流域で見たような村はなかったように書いています。



図１　イザベラ・バードの肖像

地元の人々との交流

バードが滞在した平取コタンのペンリウク邸は、奥行(縦軸)が約10.6m、間口(横軸)が約7.6m、屋根までの高さが約６mの大きさであっ



写真１　『日本奥地紀行』(高梨訳)平凡社

資料　イザベラ・バード略歴

1831　10月15日に英国ヨークシアにて生まれる。
1854　幼少期からの病気療養のため、外国旅行を志す。初めに訪れたのはアメリカとカナダ(23歳)。
1878　初来日。横浜から東京、日光を経て東北、北海道を訪れる(47歳)。その後、1894年から1896年にかけて5回、日本を訪れる。
1880　『日本奥地紀行』(原題『日本の未踏の土地』2巻)を出版。
1904　10月７日病没。享年72。

たとされています。床面積が80㎡を超える程のポロチセ(大きい家)であったことが記録によって分かります。

ここでベンリウクや地域住民から聴き取りを行い、日常の暮らしや生活道具に関する知識のほか、約300種のアイヌ語を記録しています。バードは聞き取り調査の感想を「彼らには真実を語りたいという気持ちがありありと見えた。彼らがその数少なく素朴な風俗習慣について述べた言葉は、信頼に足るものだと私は思う」と述べています。

バードが滞在したチセの中はかなり暗い印象があったらしく、「私たちの集いは、大きな丸太を燃やした明りがちらちらする中で開かれた」とされています。

とりわけ夜は独特な雰囲気があり、「たいまつのような焚火は赤く燃えて強い光を投げ、部屋の奥や屋根は暗い闇夜となっている。部屋の片隅からは星空が覗いている」と述べられています。

こうした電灯がない頃の生活を伝える描写が、紀行文の端々に折り込まれています。

平取では地域住民から幾つかのアイヌ民具を購入しています。煙草入れ、煙管入れ、弓、三本の毒矢、菱形模様の葦草を赤く染めた二枚の葦草製の席、鞘のついた小刀、樹皮製の衣服、奉酒箸です。

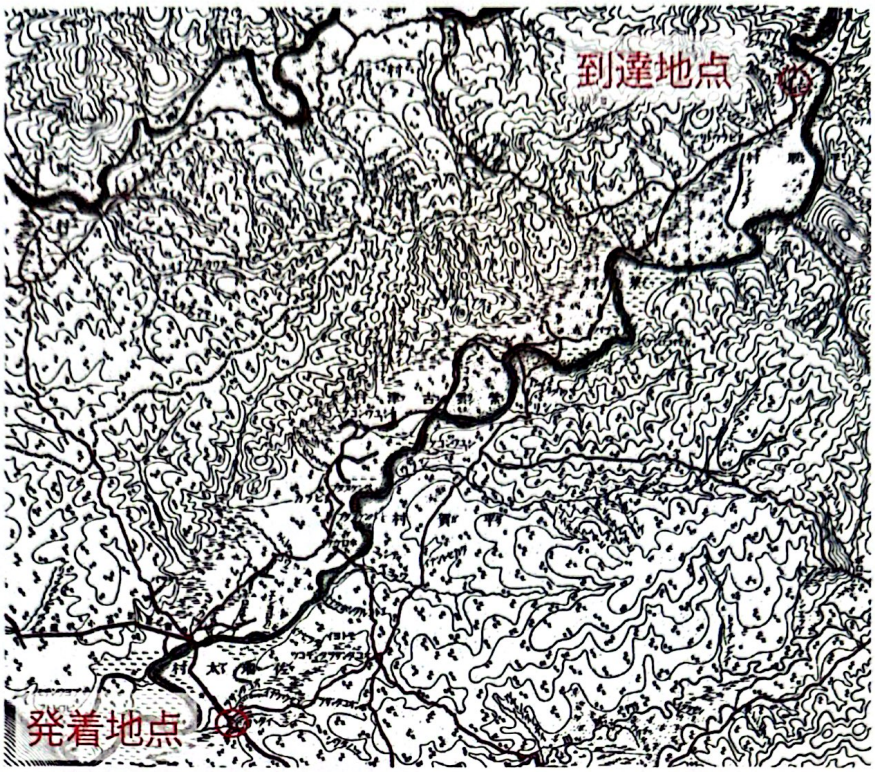


図２　バードが歩いたサルプトからピラトリへの道すじ（明治二十九年製版　陸地測量部北海道仮製五万分一　二風谷に加筆）。

これらの民具は現在スコットランド国立博物館に収められており、明治11年の平取を知るための貴重な資料となっています。

外国人で初めて義経神社へ

ペンリウク邸に滞在中、けがや病気の人に薬を分けたりしていると、副首長がお礼として、外国人が今まで誰も訪れたことのない彼らの神社へ案内したいと申し出てきました。

神社は「ジグザグ道の頂上の崖のぎりぎりの端」に建っており、社は「漆を塗っていない白木の簡素な神社で、奥の方に広い棚がついていた。その棚には歴史的英雄義経の像が入っている小さな逗子がある。像は真鍮象眼の鎧をつけていた」とあります。

この場所は現義経神社の前身であるハヨピラとみられます。義経神社が現在の場所に移される前の様子を示す貴重な記録でもあります。

バードの足跡を辿るポイント

平取町の川向紫雲古津大橋の川向側と義経神社鳥居脇に「イザベラバードが歩いた道」の説明看板が設置されています。看板の設置により、沙流川の歴史や文化を伝え、かつ地域住民に親しまれる場になることが期待されています。同様の看板は、バードが訪れた七飯町、森町、白老町、日高町などにも立てられています。



写真２　バードが滞在したペンリウク（写真中央に座っている老人）の自宅付近。明治28(1895)年頃の撮影（北海道大学附属図書館 1992）。

「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

■文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055-0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828
初　版:2014年6月
第2版:2020年3月

山林利用の今・昔

所在地：平取町字川向、字小平（こびら）

36

関連シート：29、31、69

ピラウトゥルナイ区域の山をみる

本区域の山林には平均径が30cm近い通直な上層冠の広葉樹林が広がっています。林内における高木の樹種構成はほぼコナラの純林で、わずかにエゾイタヤが混生します。

日高地方の民有林では数度の伐採が行なわれており、平均径が30cm近いところは稀とされています。

尾根筋にはクリ材による牧柵が残置しており、かつて行われていた林間放牧の雰囲気を感じ取ることができます。クリの幹は腐りにくいため、牧柵の材料として選択的に伐採されてきました。近代以前は主要な樹種構成種であったとみられますが、現在付近の山ではパンケピラウトゥルナイ右岸側にみられる程度となっています。

近代の森林利用の中で行われてきた大径木のコナラ林育成とクリ材活用は、本区域独特の文化的景観といえます。



写真１　沙流川左岸側に広がるピラウトゥルナイ区域の山林（北側から撮影）。近代産業における森づくりの姿（コナラ林）を、良好な状態でみることができる。

近世後半から近代における林相の変化とその要因

アイヌ文化の樹木利用は基本的に生活必要量の伐採であるため、樹種構成が変わるほどの皆伐を行うことはありません。

しかし、オヒョウ、シナノキ、ハルニレは樹皮が衣服の原料となる貴重な木で、とりわけ上質な繊維が得られるオヒョウは採取される頻度が高かったと考えられます。

樹皮を剥ぎ切らないで木を残す方法もありますが、もともと大量に自生しておらず、成長も遅い木であることから、人里近辺から徐々に数を減らしていったとみられます。

近代産業における樹木利用は商業的に大量伐採するもので、皆伐が行われた民有林などでは在来種の針葉樹が消失します。その一方で、ピラウトゥルナイ区域の山林は林業的な伐採が行われながらも、皆伐をしない管理が行われてきました。

平取（びらとり）町内の山をみると、部分的

資料1　近代産業における山林利用の姿①　～山神信仰

毎年12月12日と1月12日は「山の神」の日で、山の神を祀るための儀式が行われます。働いている山で3本立ちの形の木を「山ー」と呼んで、伐らずに御神木とします。

「山の神」の日の前日である12月11日には、昼から御神木にしめ縄を飾り、新しい小さな鳥居を置きます。12日には木札と御幣、お神酒、餅、メヌキ・キンキなどの鯛に似た魚、大根、人参などの供物を捧げます。儀式が終わったあとは、飲み食いを楽しみます。1月には11日に御幣の紙垂（白い紙で作られた部分）だけを変えて、同様に行います。

近年では、経営者が働いている人にお神酒と弁当を配ったり、12日に仕事が休みになるだけのところもあるようです。



写真２　ヌタップ林道脇（ピラウトゥルナイ区域）に設置されている鳥居。

に単一樹木になるような針葉樹の植林も度々みられます。とりわけカラマツは成長が速い木で利便性もよいため、伐期を待って収入源とされます。

平取の近代産業と地域の山

ピラウトゥルナイの山林では近代以降、混牧林(木材の生産と同時に牧畜も行う林地)の育成が積極的に行われてきました。

下層木を伐って町の財産である素性のよいコナラを残存させていく林業振興施策の一方で、ホルスタイン、農耕馬などの林間放牧を行って山を有効活用していくものです。

牛馬による林床の採餌は下草の管理となり、除間伐で排出される小径木は製炭材として利用されます。

近代後半の頃は「当時何センチ以下の材木利用に限るというような製炭材としての利用制限をつけました。それで大きな木は残せました」(平村 2006)とされ、大径木のナラ・カツラ・センなどの効率的な出荷を行うことができました。とりわけセンの大木(直径60cm位)は、特殊材として高額で扱われており、家具材として重宝されていました。

こうした自然状態から見たいびつな状態は、地域住民の山林利用の循環によってもたらされたもので、平取らしい山の姿をつくりあげてきました。



写真３　農耕馬の林間放牧(幌毛志にて:昭和60:1985年、寺嶋芳郎氏撮影)。山と馬の管理を同時に行う効率的な方法として、かつては盛んに行われていた。

資料2　近代産業における山林利用の姿②　～材木流送

流送はかつて林業が盛んであった頃に行われていた、河川を利用して木材を流す運搬方法です。

近代の沙流川においては明治37(1904)年頃から行われ始め、昭和29(1954)年には上流域の支流以外は終了し、昭和42(1967)年には姿を消しました。

伐採された樹木は、枕木などの用材としてセン・ナラ・カツラなど、製紙原料としてトドマツ・エゾマツなどがありました。



写真４　沙流川の流送（寺嶋芳郎氏提供）

資料3　近代産業における山林利用の姿③　～炭焼き

木炭生産は小径木を利用して行われます。主には巨木搬出後の山を買った地元業者が、「焼子」と呼ばれる人を雇って山裾の谷あいに送り込みます。そして現地に仮小屋、掘立小屋を建て、焼き窯を作ります。焼き窯の内部は3坪程(1坪3.3㎡×3=9.9㎡)の広さです。

原木の伐り出し運搬、着火から仕上がりまで家族の労働力だけを頼りに、針葉樹以外の雑木がなくなるまで働きづめたのです。

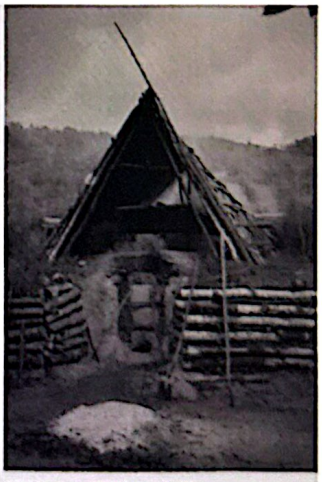


写真５　平取の炭窯



「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

■文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055－0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828
初　版:2014年6月
第2版:2020年3月

イオル水辺空間と水際の植物

所在地：平取町本町親水公園隣接

37

関連シート：2、10、19、23、65

イオル再生事業について

平取町では平成20(2008)年度から、平取地域イオル再生事業の取り組みを行っています。国のプロジェクトである「アイヌの伝統的生活空間の再生事業」を先行実施する地域としての事業展開です。

沙流川流域のアイヌ文化環境をしっかりと再生・保全していくための施策として「イオルの森」「コタンの再現」「水辺空間」の３つの柱を軸とした検討・実施が行われています。



写真　イオル水辺空間の位置(南西側から)。平取本町市街地横の河川敷に整備され、雑穀栽培のためのピクタトイ(川州畑)や水生植物の育苗などが行われている。

なぜ水辺空間が必要なのか

水辺空間整備の主目的は「水生植物の生成環境」と「川州畑」の再現にあります。

とりわけ沙流川流域においては、アイヌの食生活になくてはならない雑穀の栽培場所として、川州が度々用いられたと言われています(資料１)。そうした場所に積もった土を利用して栽培することで、優良な作柄になるとされています。

台風などによって流される危険を伴う場所である一方、定期的な浸食と堆積の繰り返しによる肥沃な土地の形成は、地域の暮らしを支えてきた重要な河川特性でもあります。

アイヌ文化の雑穀栽培は、様々な食料獲得の中でも重視されている方法のひとつです。ピヤパ(ヒエ)、ムンチロ(アワ)、シプシケプ(イナキビ)、ソバなどの雑穀は、気象や土質など栽培する環境が悪い場所でもよく育ち、種子は長期間保存できる食材です。

とりわけピヤパとムンチロは「ウヌレㇰ・ハル・カムイ」(夫婦の・食料・神)として神聖視される存在(資料２、３)であり、沙流川に伝えられるオキクルミの降臨伝承には「“下界には魚や獣がたくさんいても、穀物というものは無いだろう”と案じたから、行きがけの駄賃に天上界の稗の種を一つかみ盗んで自分の脛を割いてその中へ推し隠し、急いで天国を抜け出した」(金田一　1914)という一節も語られています。

川洲畑がつくられる水際には三日月湖や定期的に水で覆われる低地なども形成されます。アイヌのものづくりに欠かせないサㇻキ(ヨシ)やシキナ(ガマ)などが繁茂し、ペカンペ(ヒシ)や小魚・水生昆虫がいる環境が流域のいたるところにあったと考えられます。

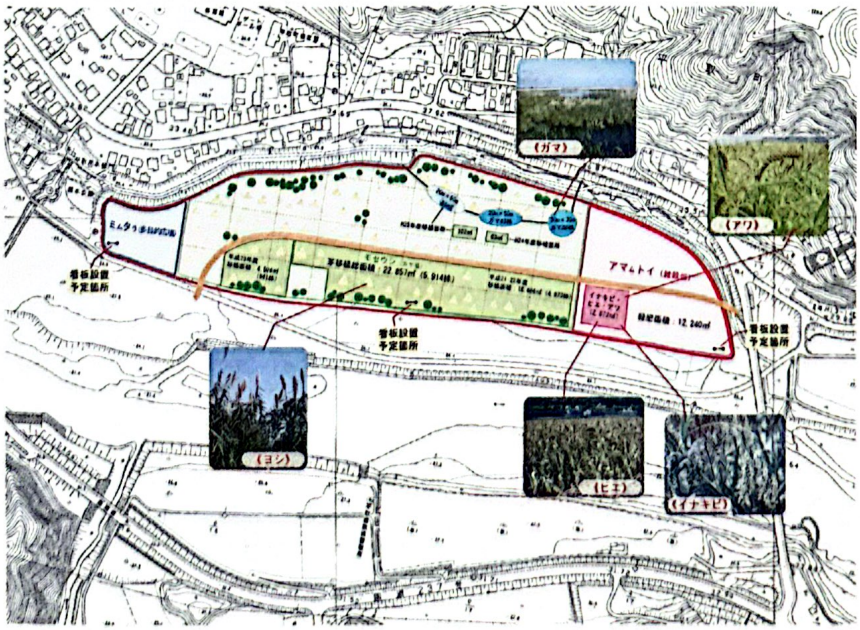


図　水辺空間の栽培等実績。収穫した雑穀は食文化体験等に、サㇻキ(ヨシ)やシキナ(ガマ)はアイヌ民具制作の材料として活用されている。

「アイヌの伝統的生活空間の再生」において、衣・食・住の全てにおいて深く関わる水辺空間は、とりわけ重要性の高いエリアということができます。

水辺空間の整備とその活用

平取町本町にある親水公園の隣(沙流川右岸)に、水辺空間が整備されています。

本来の水辺環境に近い河川敷で有用植物の植栽が行われており、オキクルミの降臨伝承地であるハヨピラから一望できる場所でもあります。

現代の河川整備によって、空間内に自然堆積の繰り返しを再現し難い状況があります。しかし、広大な河川敷を有効活用するという、今日的な水辺管理・土地制約に見合ったイオル事業の展開が可能になっていきます。

様々な方法を駆使して、アマムトイ(雑穀畑)・モセウシ(カヤ場)を整えることは、将来的にイオル水辺空間を全道展開するモデルケースにもなっていくと考えられます。

資料1　川州畑のウパシクマ(言い伝え)

①沙流川は、川上から流木をさげてくれたり、大水で川原を埋め尽くすので水がひいたあと泥の上にヒエ・アワを巻くと農作物がよい。新平賀では、大洪水の水がひいた後に柳原に水がたまって、その水がひくとそこに泥がたまる。その泥の上にアワ・ヒエをばら蒔いて農作物を作っていた。柳を払って日当たりを良くすると作柄がよい。アイヌには楽な農法だった。ソバもよくできる。この粘土の上で作物をつくる農法をコポンチカル koponcikae(粘土作)という。コポンチ koponciは、「粘土」の事だ。自分は大正時代にこの農法をよく見た[門別　鍋沢強巳氏]。

(北海道教育庁生涯学習部文化課編 1996)

②前の年の夏に洪水が出て、柳原の下の方とか、あちこちに川砂と粘土が流されてたまり、草の生えない洲のような場所ができます。そのようなところをピクタトイ[ピクタ＝洲、トイ＝畑]というのですが、一、二年はあまり草も生えず、畑にもしやすいので、五月早々トンカ(窓のあいた鉄鍬)か角鍬、それにイヨッペ(鎌)くらいを持って出かけ、トンカで荒草を削り、うねを切ってあわ種をまきました。六月はじめに一度うねの間の草を削り、七月末ごろに根草といってうねの中に生えている草を抜いて秋を待つのです。

(萱野 1978)

資料2　アワ・ヒエに対応するアイヌ語　※沙流方言を抜粋

【ヒエ】ピヤパ(piyapa)、アイヌアマム(aynu amam:アイヌの穀物)
*ヒエの祈詞
モシルコルハル(mosir kor haru:国土を・支配する・食料)、チランケハル(chi ranke haru:天降った・食料)、ハルカッケマツ(haru katkemat:食料・婦人)

【アワ】アイヌアマム(aynu amam:アイヌの穀物)、ムンチロ(mun chi ro)、エペッケムンチロ(e pet ke mun chi ro:頭・穂先・割れている・アワ)、プシタンネムンチロ(pu si tan ne mun chi ro:その穂・長い・アワ)　種子

(知里 1953)

資料3　アワ・ヒエに関する説話

①アイヌの信仰によれば、アワとヒエは、「ウヌレㇰ・ハル・カムイ」unurek-haru-kamuy「夫婦の・食料・神」で、ヒエは女性である。

②人間の始祖オキクルミ(okikurmi)が天界のヒエの種を盗んで、自分の脛を切り割き、その中へ隠して天降ったのが此の世のヒエの起源であるとする神話もある通り、アイヌはヒエを以って太初から存在するものと考えている。従って、あらゆる穀物の中で最もこれを尊び、晴の日の食料として粢(しとぎ)や酒に造り、また遠く旅する際は、身の守りとして少量でも靴の中へ携える習いである。

③米をsisam-amam"日本人の・穀物"という。それに対して、アワおよびヒエをaynu-amam"人間の・穀物"とゆうのである。

(知里 1953)



「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055−0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828
初　版:2014年6月
第2版:2020年3月

二風谷区域のアイヌ語地名を巡る

38

関連シート：5、45

アイヌの暮らしを地名にみる

地域住民によるウパシクマ(言い伝え)は、アイヌ語地名を解き明かしていく上で重要な情報になります。

沙流川流域は、古老のウパシクマが重点的に収集されてきた地域として知られています。明治～昭和初期のJ.バチェラー(平取町本町)、N.G.マンロー(二風谷)、吉田巌(荷負)、金田一京助(紫雲古津)などをはじめ、その後も著名な研究者の研究フィールドになってきました。もちろん、貴重な研究成果の中には、地域の地名に関する情報が多分に含まれています。そうした中、萱野茂によって二風谷のアイヌ語地名が体系的にまとめられています(萱野　1984)。自身の体験談と古老からの聞き取りを交え、地名のもつ本来の意味に踏み込んだ労作といえます。



図　二風谷のアイヌ語地名（一部抜粋）。沢自体の特性や動植物・交通路など、様々な観点で名付けられている。一方、すでに意味が忘れ去られ、符号化している地名も多い。

沢の特性(資料1)

二風谷を代表する沢であるカンカンとオサッは、それぞれ特徴的な河川特性を沢名にしています。曲がりくねった沢は、トゥレプ(オオウバユリ)やプクサキナ(フクベラ)などが繁茂しやすい洲が形成されます。河口付近で水が浸透していく河川特性は、ピクタトイ(川州畑)をやりやすい環境でもありました。

沙流川で受け継がれてきた暮らしの知恵は、生活域により密着した沢の様子からも窺うことができます。

動植物利用(資料2)

ピパ(カワシンジュガイ)は雑穀の穂摘み具として用いられる淡水性の二枚貝で、幼生はヤマメのエラに寄生して成長します。今日ではみられなくなった生物が、かつてたくさん生息していたことを示す地名と言えます。シケレペはラタシケプ(煮物)の具材になるほか、煎じて飲めば風邪薬にもなると言われています。樹皮は傷薬に使われたり、黄色味をつけるための染料としても用いられます。幹はいろいろな木製品の材料になります。多様な用途がある樹木であるため、この木がよくみられる場所には度々「シケレペ」と名付けられます。

資料1　沢の特性によるアイヌ語地名

①カンカン＝腸

人間ばかりでなく鹿や熊その他の動物の大腸小腸をカンカン＝腸＝はらわたと言います。このように名づけられたのは、流れている様子が、カンカンが動物の腹の中にある時そっくりに曲がりくねって流れているからです。

②オサッ＝尻の乾いた沢

小学校の東側二風谷大橋の東袂から東の方へ向かって入っているのが、オサッ沢です。オ＝尻・サッ＝乾く。昔は大川が現在のように左岸を流れず、もっと向こうを流れていました。それで、あまり水量の多くないオサッ沢は沙流川本流まで届かないで、途中の砂利原へ吸い込まれてしまいました。大雨の降った後でなければ、川まで流れていかないで、いつでも川尻が乾いていたので、オサッ沢＝尻の乾いた沢と名付けられたものです。

(萱野 1984)

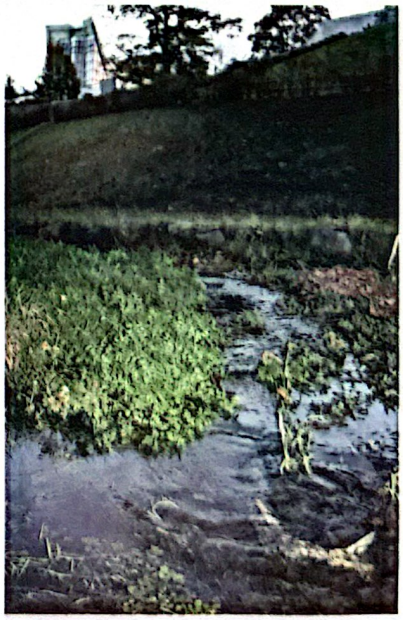


写真１　ピパウシに遡上するサケ（10月中旬：北西側から撮影）。丘陵上の建物は二風谷アイヌ文化博物館。

交通路(資料3)

ルオマナイは鵡川流域へ抜ける交通路として、住民の暮らしを支えていました。「日高沿岸に鉄道のない頃は、この沢から鵡川へ出て早来から汽車に乗って札幌まで出たのだそうです。有名な日高豚も早来までこの道を歩かせて運びました」(萱野 1984)という逸話も紹介されています。

苫小牧軽便鉄道の苫小牧・佐瑠太間(現日高町富川)の開業が、大正2(1913)年とされていることから、それ以前の逸話であろうと考えられます。

ルペシポンナイは、集落のある段丘上から沙流川の低平地へ下りていくための生活道路です。かつては小沢を利用した細道がいたるところにあり、このように呼ばれていたと推定されます。

２つのルペシポンナイは、貝澤とぅるしのさん(1890-1982)から萱野氏が伝え聞いて記録した地名とされています。

資料2　動植物利用に関するアイヌ語地名

①ピパウシ＝貝ある所

ピパ＝穂ちぎり用貝殻、沼貝・ウシ＝ある所。今の場所でいえば二風谷観光センターの東側を流れている沢をピパウシと言います。この沢は二風谷村に住んでいる人々が持っている苗字、貝沢姓の生まれる源になった沢でもあります。

②シケレペ＝しころ

貝澤正さんと貝澤耕一さんの家の間を、西から東の方へ入っている沢をシケレペと言います。シコロの実のことをシケレペといい、シコロの木のことをシケレペニと言うのです。たぶんシコロの木がたくさん生えていたので、このように名づけられたのでしょう。　(萱野 1984)

資料3　交通路のアイヌ語地名

①ルオマナイ＝道入る沢

ル＝道・オマ＝入る・ナイ＝沢。この沢沿いには、西隣の鵡川川の枝沢、イナヤップ沢へ山越えする道がありました。それで、道のある沢と名づけられたものです。

②ルペシポンナイ＝道たどる小沢1

場所は、マンロー館の入口からオサッ沢へ下りて行く細道になっている沢です。昔は二風谷川向いへ行くのにも、アキアジ(鮭)獲りに行くときにも、この沢を道代わりに通っていたので、いつのまにやら、ル＝道・ペシ＝たどる、に沿って下へ行く・ポン＝小さい・ナイ＝沢と名付けられたわけです。

③ルペシポンナイ＝道たどる小沢2

もう一つのルペシポンナイは松崎牧場の北側、沙流川へ斜めに下る沢も、そういう名で呼ばれていました。　(萱野 1984)



写真２　マンロー坂（昭和30年頃：南東側から）。地域の生活道路として住民に親しまれていた。故宮北禮蔵氏撮影。



道の愛称に住民の想いをみる

国道237号線からオサッ右岸側に入る地域の生活道路は、いつの日か住民から「マンロー坂」と呼ばれるようになりました。現在の国道敷設以前の幹線道路で、旧マンロー邸に向かって緩やかな坂となり、カーブした左右に住宅街が広がっています。

昭和17(1943)年にマンローが亡くなった後も、氏を慕う住民によって呼ばれ続けたことが話題となり、マンローの業績が再評価されるきっかけにもなりました。

「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055-0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828
初　版:2014年6月
第2版:2020年3月

コタン（集落）の景観

所在地：平取町字二風谷（にぶたに）

39

関連シート：１、９、19

二風谷における チセ（家）の建設

二風谷アイヌ文化博物館には、野外施設としてアイヌのチセが復元されています。地域のアイヌ文化学習・観光振興の拠点として、昭和60（1985）年度から平成15(2003)年度にかけて４棟のチセ群が整備され、現在に至っているものです。

更に平成20(2008)年度からは隣接する町有地に平取地域イオル再生事業の一環としてチセが５棟建設され、アイヌ文化継承の空間として一層の賑わいをみせるようになりました。

伝統的なチセは自然素材を用いて建てられます。沙流川流域ではサㇻキ(ヨシ)で壁と屋根を葺くやり方が一般的となっており、出来たてのチセは黄金色のような美しい色合いをみせます。しかし年数の経過につれて自然素材ゆえの傷みが出てくることから、定期的に改修・改築していかなければなりません。現在は伝統的なチセを住宅利用する時代ではありませんが、定期的にアペオイ(囲炉裏)に火入れしていく必要もあります。



写真１　二風谷に復元されているチセ(南側から撮影)。平取町におけるアイヌ文化振興の拠点として活用されているほか、二風谷への来訪者を迎える施設にもなっている。

ヨシの段葺きによる三角屋根をなるべく良い状態で維持することは、地域の景観を保全していく上でも非常に大事なことといえます。

チセが何棟も建ち並ぶコタンと今日的な住宅街・アイヌ民芸品店・旧マンロー邸・林業的に整備された美しい森林等が隣り合う景観は、二風谷ならではの高い価値をもっています。



写真２　チセの建設に伴うチセノミ(家の新築祝い)。チセで行われる様々な儀式は、地域に受け継がれる祈り詞や作法を学ぶ場にもなっている。

チセ群整備の目的

チセを実際に建てることは、素材採取や部材の組み方といった経験が必要な技を、次世代へ継承する意味合いがあります。

カムイノミ(カムイ・祈る)の祈り詞には、カムイへの畏敬の念と古くからの世界観が織り込まれており、厳粛な作法を学ぶ大事な機会になります。

チセの建設に伴う最大の行事に、チセノミ(家・祈る:新築祝い)があります。一連の儀式の中で、チセチョッチャ(家・射る:ヨモギの矢を射る儀式)やカムイノミ、ハルランナ(穀物・降った・よ)などが行われます。

チセを建てるためには、いかに多くのヨシを確保していくかも考えていかなければなりません。サㇻ(ヨシ原・湿地)という地名にも表されているように、かつては生活域

の周辺に建築素材があふれていました。しかし、現在は低平地において水田耕作が行われていたり、堤防の設置により水場が形成されにくい環境があります。そうした空間づくり(イオル水辺空間)の連動も、コタンの景観を維持するためには必要になっていきます。

チセの利用にみる アイヌ文化の継承

地域一体となって作り上げたコタンは、平取町におけるアイヌ文化伝承の拠点として活用されています。

近年では、チセを会場としたトマ(ござ)編みなどの制作体験講座が頻繁に行われるようになりました。アイヌ語・アイヌ口承文芸の学習でも度々用いられており、多くの人が行き交う活気ある空間として定着してきています。また、チプサンケに伴うカムイノミ(毎年８月)のほか、ウトムヌカラ(結婚式)などの会場にも使われ、１年を通して多様な文化継承の姿を見ることができます。

チセはアイヌ文化を発信する空間としても大切な役割を果たしています。屋外展示施設として学習効果をもたせているほか、アイヌ古式舞踊、語り部による講話、アイヌ工芸の実演披露なども行っています。また、海外の少数民族や留学生、研究者など、国内外のゲストを迎えた交流の場としても度々利用されています。

二風谷には、春から秋にかけてアイヌ文化学習を目的とした多くの団体旅行者が訪れます。地域住民にとって見慣れたチセも、来訪者にとっては新鮮な景観として映っていることと思います。

コタンの整備を 未来へ繋げていく

近年のグローバル化であらゆるものが画一化されていく中、古い暮らしの知恵や技をどう伝えていくかが日本列島の各地で問われています。

近代以前から地域の暮らしを支えてきたカヤ葺きのチセも、居住の場からアイヌ文化を継承・発信する場へと主な役割が移り変わっています。平取ならではのコタン活用の取り組みは、北海道の多様性を伝える魅力になっていくのではないでしょうか。

自然素材を主としたチセの復元は、決して一過性のものではありません。経過をみながらの補修も必要になります。住民が手を取り合って維持を継続していくことで、より大きな地域力に繋がっていくと考えられます。



写真３　日本聖公会平取祈祷所（荷菜に所在）。



写真４　沙流川流域とみられる（写真左側の大柄な女性はE. M. ブライアント）。

写真３、４は、バチェラー（1901）によって紹介された明治時代のチセ。



写真５　下ビラトリの沿道景観(遠藤裕昭氏旧所有:撮影年代不明)。チセの壁材が板材へと変容する様子をみることができる。



「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055−0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828
初 版:2014年6月
第2版:2020年3月

旧マンロー邸

40

所在地：平取町字二風谷(にぶたに)54番地1

関連シート：26

日本での暮らしと二風谷への移住

二風谷(にぶたに)を流れるオサッ川の河口を望む段丘上に、ヨーロッパの古民家を想わせる邸宅があります

昭和８(1933)年４月に建てられたニール・ゴードン・マンローの住宅兼診療所で、完成以来数十年を経た今日でも、二風谷の近・現代史を伝える貴重な建造物として多くの人に親しまれています。

マンローは1863年６月16日、スコットランドのダンディー市生まれで、明治24(1891)年５月に来日して以来、外科医として活躍した方です。横浜市に32年、軽井沢町に５年、二風谷に11年それぞれ在住し、明治38(1905)年には日本に帰化しています。その間、人類学研究者としてアイヌ文化を調査・研究し、晩年の二風谷ではアイヌの人々への医療奉仕を行っています。昭和17(1942)年４月に二風谷で亡くなり、軽井沢に墓を建立して分骨しています(遺骨の一部は、二風谷共同墓地に埋葬)。



写真２　マンローとアイヌの古老。20世紀初め頃の撮影(マンロー著 小松訳 2002)。



写真１　旧マンロー邸(北海道大学大学院文学研究科・文学部二風谷研究室)。手前は庭園内にある顕彰記念碑(南側から撮影)。

二風谷への移住にあたっては、昭和４(1929)年秋に米国ロックフェラー財団に人類学研究のための資金助成を申請し、翌年に交付されたことが大きなきっかけとなっています。昭和５(1930)年５月には英国・王立人類学研究所の地方通信員に発令され、道内に在住してアイヌ文化研究を進めることが可能となりました。

居住にあたっては、アイヌの古老が多く住む静内と二風谷が候補地とされましたが、故郷スコットランドの景観に似ている二風谷を永住の地に決めました。

昭和６(1931)年７月、自宅建築のために二風谷の土地を購入し、同年秋から自宅完成までの間、木村チヨ(1937年結婚・入籍)を同伴して二風谷の仮住まいに居住しました。その後、昭和８(1933)年４月に、コンクリート造の書斎兼診療所を付した自宅が完成しました。自宅周辺には、ヨーロッパトウヒなどの成長の早い樹木を、畑には梨・ブドウ類を植えました。

アイヌ文化研究の成果

二風谷におけるアイヌ文化研究において特筆すべきは、３本の無声映画を撮影し、地域の文化伝承を動画で後世に伝えていることです。

昭和５(1930)年から３年にわたり「イオマンテ(熊送り)」「ウエポタラ(悪魔払い)」「チセノミ(新築祝い)」が相次いで撮影されました。

特に「チセノミ」を撮るにあたっては、マンロー邸の前庭にチセの屋根半分のオープンセットを設置し、しっかりとした臨場感のもとで行われました。また、地元住民の方々をはじめ、道内各地からアイヌの古老達を自宅に招へいし、儀式・宗教関係の伝統習慣等に関する知見を記録に収めました。

旧邸宅の保護と没後の再評価

マンローの没後は、旧邸宅の所有権が幾度も移り変わった末に、昭和40(1965)年、英国大使館参事官らによって故国出身の研究者顕彰のために購入されました。

その後北海道大学に寄贈され、

昭和42(1967)年６月に文学部二風谷分室として開所式が行われています。更に昭和50(1975)年には、マンローの顕彰記念碑が建立され、誕生日である６月16日に除幕式が挙行されました。近年においては、平成12(2000)年に「登録有形文化財」、同19(2007)年に「重要文化的景観の形成に重要な建造物」となり、手厚い保護が図られるようにもなりました。更に平成21(2009)年からは、北海道大学の協力による一般公開も行っています（５～10月：詳細は博物館ＨＰ参照)。

資料　N. G. マンロー年譜

1863 年6月16 日	スコットランドのダンディー市に生まれる。
明治24(1891) 年5月	来日。以来、医師として活躍する傍ら、人類学研究者として日本文化・アイヌ文化の研究を行う。
明治38(1905) 年2月	日本に帰化。
昭和 5(1930) 年5月	英国・王立人類学研究所の地方通信員に発令。
昭和 6(1931) 年7月	自宅建築のために、二風谷の貝澤シランペノ所有地の一部を購入。木村チヨ(昭和2:1937 年結婚・入籍) と仮住まいを始める。
昭和 8(1933) 年4月	コンクリート造の書斎兼診療所を付した三階様式木造の自宅が完成。
昭和12(1937) 年5月	研究助成費の支給期間満了。
昭和17(1942) 年4月	二風谷で死去。軽井沢に墓を建立して分骨した。(遺骨の一部は二風谷共同墓地に埋葬)
昭和40(1965) 年	英国文化振興会トムリンと英国大使館参事官フィゲスが故国出身の研究者顕彰のために邸宅を購入。その後、北海道大学に寄贈。
昭和42(1967) 年6月18 日	北海道大学文学部二風谷分室開所式挙行。
昭和50(1975) 年6月16 日	マンローの顕彰記念碑(二風谷アイヌ文化保存会建設) の除幕式挙行。

二風谷から発信される国際交流

平成23(2011)年10月16日(日)に開催された「第10回マンロー先生を偲ぶ会」に、ドイツ在住のアイリーン・マンローさん(マンローのお孫さん)が招かれました。

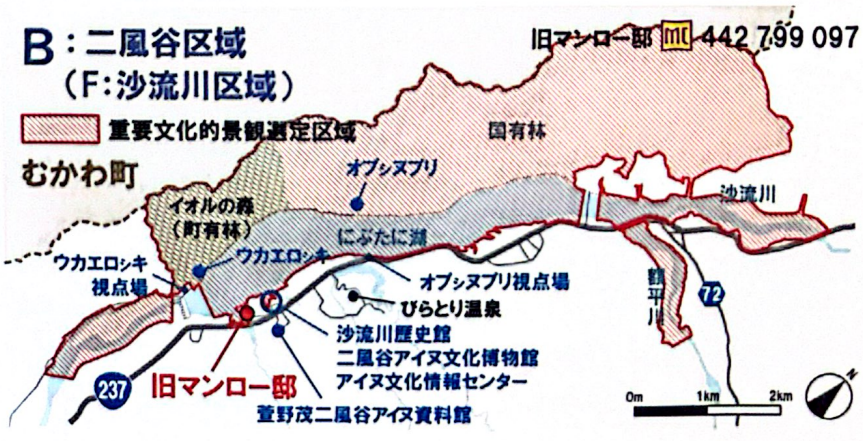
マンローは明治28(1895)年、横浜在住の貿易商を父にもつアデレー嬢(ドイツ国籍)と結婚し、５年後に横浜で次男のイアンをもうけました。その後、ドイツで結婚されたイアンのご令嬢がアイリーンさんになります。

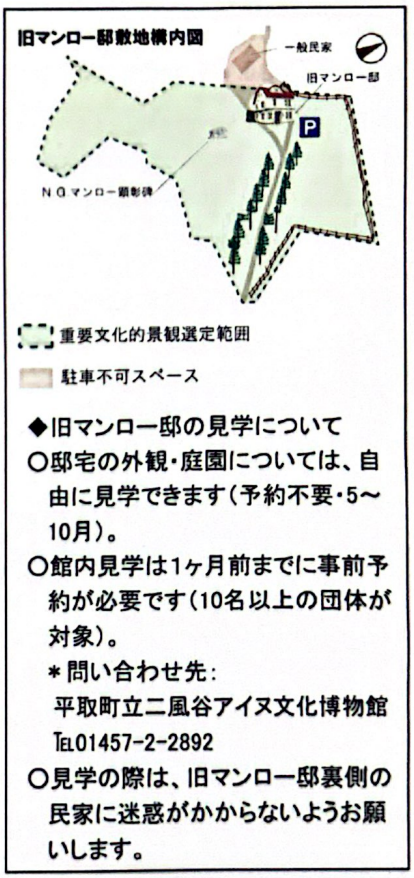
アイリーンさんにとっては祖父と父の人生に深く関わる国に来て二風谷で歓迎を受けたことは、大きな喜びに満ちたものであったと思います。

「偲ぶ会」の活動は、今後もスコットランドやドイツ、そして北海道大学と二風谷を結ぶ懸け橋になっていくことと思います。多くのアイヌ文化研究の成果を発信したマンローの功績は、二風谷の近代史を彩る象徴的な存在であり続けています。



写真３　マンロー先生を偲ぶ会でのアイリーン・マンロー氏のスピーチ(平成23：2011年10月16日)。





◆旧マンロー邸の見学について

○邸宅の外観・庭園については、自由に見学できます（予約不要・5～10月)。

○館内見学は1ヶ月前までに事前予約が必要です（10名以上の団体が対象)。

＊問い合わせ先：
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
TEL01457-2-2892

○見学の際は、旧マンロー邸裏側の民家に迷惑がかからないようお願いします。

「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055－0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828

発行:2014年6月
改訂:2020年3月

アイヌ工芸技術の継承 -男の手わざ-

41

所在地：平取町字二風谷(にぶたに)

関連シート：16、42

沙流川のアイヌ工芸技術を読み解く

アイヌの実用品にみるものづくりの美しさは、江戸時代後半以降、あらゆる場で注目され続けてきました。

アイヌ工芸品が贈与・交換あるいは販売用に制作され始める年代は、少なくとも18世紀(西暦1700年代)まで遡ることができます。その後、明治・大正・昭和と移り変わる中で、農閑期の収入手段、博覧会への出品(1873年のウィーン万国博覧会など)、道内各地の観光地形成などといった経済活動とも結びついていきました。

沙流川流域はとりわけ、名工を数多く輩出している地域として知られています。イザベラ・バード(明治11：1878年)、吉田巌(明治44：1911年)らによるアイヌ工芸の称賛や、ハインリッヒ・フォン・シーボルト(明治11：1878年)、ハイラム・ミリケン・ヒラー(明治34：1901年)ら欧米の人類学者による収集民具など、1世紀以上前からの実証資料が今に伝えられています。



写真1　二風谷アイヌ文化博物館所蔵のイタ(重要有形民俗文化財　254×332mm)。貝澤ウエサナシ作(1860-1939)。

培われてきた技とイタの魅力

イタは盆と訳されることからも分かるように、物をのせて運ぶために用いられるアイヌの生活用具です。日常生活で使う道具である一方、近世後半以降は次第に販売・交換用として制作される工芸品にもなっていきました。また、ウエペケレの中で皿として使われる表現もあることから、もともとは盆というよりも「直接その上に食べ物を盛って出すもの」(萱野1978)とも解釈されています。

工芸品としてのイタの魅力は、木彫によるアイヌ文様が一面で完結していることにあります(写真1)。そこには、マキリ(小刀)やトゥキパスイ(奉酒箸)とは異なる、施文の面的な広がりがダイナミックに表現されています。

制作にあたっては、彫刻技術もさることながら、デザインのバランス感覚が問われます。北海道・樺太・千島を含む広大なアイヌ文化圏のなかで、それぞれ規則的な文様配置がみられることから、アイヌ文様の地域性を考える上で非常に興味深い民具であるともいえます。



写真2　二風谷工芸館での展示販売。地域のアイヌ工芸技術を継承していくための拠点施設にもなっている。

イタの文様と地域性

今日的なイタ制作の標本となるアイヌ民具の多くに、沙流川流域に来歴をもつ資料が残されています。彫刻される文様はモレウ(渦巻き)やラムラム(ウロコ)で、無文部分(間)も巧みに組み合わされます(写真１参照)。

その一方で、樺太や千島の盆は、からみ文や幾つかの直線による交差、三角形の列点など、北海道(特に道南地方)と異なる表現法によって彫刻されています。

正しく伝えることの意義

貝澤ウトレントク(1862-1914)は、明治・大正期の二風谷(にぶたに)を代表するアイヌ工芸師です。現在でも子孫にあたる方が地元でアイヌ工芸品店を営み、受け継いできた技術を守り伝えています。氏は、同時代に活躍した貝澤ウエサナシと共に、明治26(1893)年にイタや茶托を制作し、札幌で販売を始めたとされています。二風谷における工芸品販売の先駆けともいえるウトレントクのイタは、アイヌ工芸師の貝澤徹氏が所有しているほか、大正元(1912)年にロシアの民族学者ヴィクトル・ニコラエヴィッチ・ヴァシーリエフによっても収集され、現在ロシア民族学博物館に収蔵されています。

時代を経ても変わらない技巧は、手づくりの品に一層の深みを与えます。

イタの一面に彫刻されるアイヌ文様のデザインは、工芸師が育んできた創意の賜物といえます。工芸品としての美的感覚が高まっていく中で、時間をかけて沙流川らしさが編み出されていったものと考えられます。

伝統的工芸品の指定

平成25(2013)年３月８日の官報告示により、「二風谷イタ」と「二風谷アットゥシ」が伝統的工芸品になりました(経済産業大臣指定)。

全国で235品目(令和元年11月現在)ある中の２品として、北海道初の指定となります。指定後は「伝統マーク」を使用した地域ブランドとして、幅広く展開していくことが可能になります。

またこのことは、北海道の深い歴史を伝えていくための付加価値にもなっていきます。工芸品の歴史を更に探求していくことで、新たな魅力の発見も期待できます。

現在、二風谷では「二風谷コタン」周辺のアイヌ工芸品店が建ち並ぶエリアを「匠(たくみ)の道」と名付け、アイヌ工芸振興の拠点としています。地元の工芸師の創作熱意をより良く発信していけるよう、博物館を含む地域一帯で振興施策を進めています。



写真３　貝澤ウトレントクの作品を模刻したイタ(貝澤徹作)。二風谷アイヌ文化博物館蔵。

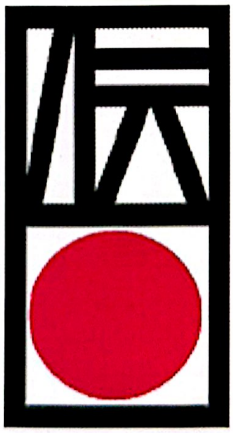


図１　伝統的工芸品指定の証「伝統マーク」





＊チセは家をさすアイヌ語です。二風谷では文化伝承のための建設及び利活用を進めています。

図２　「匠の道」周辺の地図。徒歩数分圏内にアイヌ工芸品店が所在する。博物館、資料館、歴史館の見学と合わせることで、よりアイヌ工芸の理解を深めることができる。

「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055－0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828

初　版:2014年6月
第2版:2020年3月

アイヌ文様 -女の手仕事-

42

関連シート：16、41

衣服（アミプ）の制作

アイヌの衣服として伝承されている種類は多岐にわたります。獣皮衣、魚皮衣、鳥羽衣、樹皮衣、草皮衣、木綿衣、外来の衣服などがあり、その内の幾つかは今日においても各地域で制作・着用（主に晴れ着や文化伝承の場）されています。

沙流（さる）地方で伝えられている着物には、獣皮衣、樹皮衣、木綿衣があります（資料１）。今日において主に制作・着用されているのは、アットゥシアミプ、チカラカラペ、カパラミプの３種類です。アットゥシアミプは単にアットゥシとも呼ばれ、アッ（オヒョウニレ皮）やニペシ（シナノキ）などの内皮を素材にした着物です。

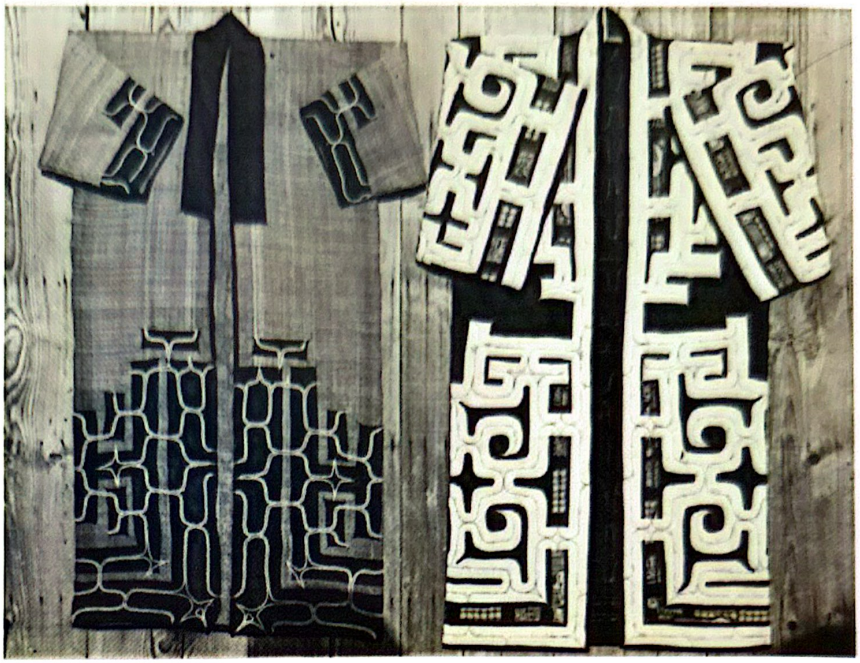


写真１　沙流地方の礼服として伝えられる衣服。“左方　チカルカル…刺繍を施した「アツシ」地着物、右方　カパラアミプ…木綿地に白布にて模様をかたどり簡単な刺繍をなす。襟・裾・袖口に青・赤等の別布を配する”（平村編 1951）と紹介されている。

地域の資料をみると（平村編 1951、萱野　1974）、アットゥシに刺しゅうが施されたものは、アットゥシアミプの外、チカラカラペ、チニンニヌプ、カパリミといった名前が付けられています。つまり、この３種類の衣服はもともと礼服づくりの技法に対する呼び名であり、素材に規定されるものでなかったことが分かります。

しかし次第に樹皮衣はアットゥシアミプ、木綿衣はチカラカラペ、カパラミプ（カパリミ）という呼称に統一されていきます（萱野 1978）。

２種類の木綿衣はともに普段着ではありません。チカラカラペ（チニンニヌプ）は、美しい刺しゅうが施される晴れ着として伝えられています。カパラミプは「ふだんはあまり着ることがなく、ウェンペウシといって不幸があったときなどに礼服としておもに老人たちが着ました。死者の衣装としても用います」（萱野　1978）とされていますが、今日では礼服や死装束以外にも文化継承活動の場など多

資料1　沙流地方で伝承されている着物

名称	アイヌ語名（沙流方言）	和名
獣皮衣	ユクウル（yuk ur）	鹿皮衣
	カッコロ（katkoro）、セタウル（seta ur）	犬皮衣
樹皮衣	アットゥシアミプ（attus amip）	あつしの着物
木綿衣	チカラカラペ（ci=kar kar pe）	我ら・刺しゅうする・もの（切り伏せ刺しゅうした袷の着物）
	※別称チニンニヌプ（ci=ninninu p）	我ら・縫う・もの
	カパラミプ（kapar amip）	薄い・着物　※カパリミともいう（切り伏せ刺しゅうした単衣の着物）

萱野（1978）

資料2　刺しゅうに込めた女性の想い

明治初期に木綿の布が手に入るようになってくると、アットゥシ織りの着物はすたれていって木綿の着物が晴れ着として使われるようになってきます。明治25年に小学校が開校したころには、針も糸も自由に手に入るようになっていましたから、女たちは思い思いにていねいな刺しゅうをほどこして美しい着物を縫っては夫に着せました。男性に着せる着物には胸の方までも刺しゅうをして、女性の着物よりも多く手間をかけてあります。多くの人たちが集まるイヨマンテ（熊送り）の酒宴の席などは、その刺しゅうの腕の見せ場でもあったわけです。

（萱野 1978）

※小学校は二風谷小学校を指す。

様に着こなされるようになっています。

刺しゅうや切り伏せの文様が入ったアットゥシを別称にするという意識は、もともと普段着に刺しゅうがないか少なかったことを示しています。博物館資料としては少ないものの、洋服や和服の普及以前は、無地のアミプ(着物)が日常着であったとみられます。

アイヌ文様の刺しゅう

刺しゅうの技法が洗練されてきた背景には、鉄製針と木綿の安定供給があったと考えられます。近世後半から徐々にアイヌ社会に普及し、多くの女性が携われる素地が出来上がっていきました。「江戸の中ごろに国内生産が盛んになると木綿の古着の売買取引が広がり、大阪や江戸を拠点として全国に売りさばかれたという。古着がアイヌ社会にも流通するにつれ、毛皮の利用が減少し、木綿衣が作りだされるようになった」(津田　2006)という生産や物流の変容を背景にしながら木綿素材が一般化していったとみられます。

アイヌの木綿衣制作・刺しゅうと女性の想いを伝える逸話があります(資料２)。夫のために美しい刺しゅうを施すという妻の気持ちは、現代の着物づくりにも受け継がれ各地のアイヌ文化振興を担っています。

アイヌ文様の意味や捉え方は、地域や個人によって様々です(資料３)。規範なし(道教委編 1985)、意味が伝わっていない(道教委編 1991)ということのほか、縄をめぐらすことから着想を得た魔よけ(萱野　1974)、虫の食痕から得たデザイン(道教委編 1988)、対和文化の発想(道教委編 1993)など幾説にも及んでいます。



写真２　受け継がれる主な刺しゅう技法。オホカラは鎖のような小さな輪を作っては糸をかがっていくやり方で、イカラリは糸を置いて布をおさえながらかがって文様を作る。

資料3　アイヌ文様への想いとその意味

1. 自分が思う通りに線を走らせて行けばよく、特に文様の規範はなかった。文様の名称としては、トモイノカ(うずまき)しかわからない(織田氏は、時にうずまきのことをモレウmorewとも言われる。モレウ　オアミプ　morew o amip「うずまき文様のある着物」)[静内　織田ステノ氏　明治35年生まれ]。

(北海道教育庁社会教育部文化課編 1985)

2. マタンプシや着物につける刺繍の模様をモレウ　morew　ということを母から聞いた。モレウは、丸くうずのような形をいう。どんな意味があるか聞いていない[千歳　白沢ナベ氏　明治38年生まれ]。

(北海道教育庁生涯学習部文化課編 1991)

3. 皮をむいていない家の柱の皮をむくと、虫(キキリ　kikir)がすじをつけていることがあるが、その跡からししゅうの模様を考え付いたというテエタ　ウチャシコマ(むかしの言伝え)がある。kikir　noka　kae　pe　キキリ　ノカ　カルペ(虫が模様をつくったもの)を研究したのだ[本別　沢井トメノ氏　明治42年生まれ]。

(北海道教育庁社会教育部文化課編 1988)

4. この模様について、学者や研究者が、括弧紋だとか何だとか、いろいろ形式名称をつけているようですが、アイヌ語ではただモ・レウ・ノカ(静かに・曲がる・形)というだけです。うんと古いアットゥシでは、模様は袖口と衿まわり、裾まわりだけだったようです。そして私にはその模様が縄を象徴しているように思えてなりません。古い時代のアイヌの生活に、縄は重要な必需品でした。しかも縄は驚くほど強い。おそらくそういうことから縄に特別な力を感じたのだと思います。縄を身体の衿まわり、袖まわり、あるいは裾まわりにつけることによって、どんな化物も身体の中に入ってこないと考えた。私にはそう思えてしかたがないのです[二風谷　萱野茂氏　大正15年生まれ]。

(萱野 1974)

5. アイヌの着物の刺繍の模様は、侍の殿方のいるお屋敷までどう行くか、屋敷の中がどうなっているのか、道すじを表したものだそうだ。それを見て攻めて勝った話もあるそうだ。孫ばあさんがいっしょうけんめいやっているのをみて、どうしてそんな刺繍するのか聞くと、そう答えた。刺繍の糸は、一色ではだめで、色を変えなければならない。裏口はどうで、横がどう、というのに従って、糸の色を変えたのだそうだ[白糠　菊地カヨ氏　昭和2年生まれ]。

(北海道教育庁生涯学習部文化課編 1993)

「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055-0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828
初　版:2014年6月
第2版:2020年3月

ウカエロシキ

所在地：平取町字二風谷（にぶたに）

43

関連シート：10、43

オキクルミと親子グマの伝承

沙流川流域には人文神オキクルミにまつわる伝承地が数多く所在します。その中にウカエロシキという親子グマの形をした岩があります。二風谷ダム管理所からみてにぶたに湖対岸に見ることができます（写真１）。

幾人かの古老によるウパシクマ（言い伝え）が記録されていますが、オキクルミが親子グマを追うという大筋は共通しています（資料１）。なお、このアイヌ伝承地は、多くの住民によって語り継がれてきた結果として、幾つもの呼称が伝えられています（資料２）。

こうした記録を理解した上で岩塊を見ると、本当にクマが走って逃げているような形に見えます。ウカエロシキは、にぶたに湖右岸側の二風谷ダム堤体付近からは比較的どこからでも見えます。オキクルミ伝承に想いを馳せながら、自分なりに角度を変えてみるのもおすすめです。

二風谷ダム管理所の横にはウカエロシキを紹介するサインが設置され、地域のアイヌ文化を学び、体感するスポットの一つとなっています。



写真１　元々は広葉樹の葉が落ちる晩秋から春にみられる景観であった。現在は、周辺の除間伐が行われ、年間を通して見学できるように整備されている（北側から撮影）。平成30（2018）年９月６日の北海道胆振東部地震によって母熊（３頭目）の頭部相当部分が崩落した。

にぶたに湖右岸の森林

二風谷の沙流川右岸に続く山地林は、急斜面のレキ岩層に当たる部分が浸食されず崖になっています（写真２）。そのうち、特徴的な崖面や奇岩には、昔から住む人たちによって多くの意味合いが与えられ、北海道有数のアイヌ伝承地として今日に語り継がれてきました。

ウカエロシキはオプシヌプリ（穴があく・山）とともに二風谷地域の特徴的な景観地で、双方ともオキクルミの姿を想わせる神秘的な雰囲気に満ちています。

周辺の林相は、町有林と国有林で違いがみられます。町有林は現在、イオルの森として整備された落葉広葉樹林で、地域住民が利用し育んでいくための森として活用されています。近代以降、沙流川流域で行われてきた林業の中で樹木が皆伐され、針葉樹が消失していったという歴史的背景がある森です。

一方で国有林の方は落葉広葉樹とトドマツによる針広混交林になっています。森林伐採が皆伐ではなく、抜き伐りによって行われたため、本来の林相が損なわれませんでした。アイヌの伝統を育み、物語の舞台となってきた元々の森の姿といえます。



写真２　ウカエロシキがあるにぶたに湖右岸側の山林は、度々急斜面のレキ岩層が露出している。そうした場所の多くがアイヌ伝承地として語り継がれている（南東側から撮影）。

沙流川流域における
オキクルミ伝承の研究

オキクルミは新井白石による『蝦夷志』（享保五年:1720）を始めとした近世の地誌において、義経伝説を助長する形でたびたび登場します（『蝦夷漫筆記』『蝦夷記』『蝦夷随筆』など　金田一1914）。

近代以降は、アイヌによるオキクルミ認識が記録されるようにもなり、沙流川流域におけるオキクルミ崇拝が一般にも分かる形で鮮明になっていきます（バチェラー1884、パラサムレック・鳥居1895など）。

その後も当地域においては、吉田巌、金田一京助、久保寺逸彦、更科源蔵、山田秀三らのほか、地元住民でもある萱野茂、川上勇治などによる研究が継続的に行われ、多くの成果が蓄積されてきました。

比較的多くの文献資料が残されているという地域性もあり、今日においてもウカエロシキをはじめとした多くのオキクルミ伝承地が忘れ去られずに残っています。

沙流川のオキクルミ伝承地

オキクルミは、アイヌにさまざまな生活の方法を教えたカムイとされています。沙流川に降臨してこの土地に住み、いつの日かまたカムイの世界に帰っていったのだと伝えられています。沙流川流域はオキクルミが降臨した土地ということで、この地域に住む人たちは大変誇りに思っているという考え方が近現代にも受け継がれています。流域のアイヌ伝承を調査した文献の所々に、そうした情報をみることができます。資料１で紹介した内容も、近代以降に地域の古老から聞き取られた記録です。

資料1　ウカエロシキの伝承

1. オキクルミ親熊と当歳と二歳との児熊三頭を追躡した。射止めていふやう。汝等所詮我に及ばざるにさとられて逃げ延びしは心得ぬ事だ、いで多くのものの戒めにかくしてくれんと、そのかたをかたはらの岸にえがきのこした。沙流川の上流のニプタニのあなたの沿岸岩にペウレップといつてあるのは則それである。（明治四十四年六月十五日　ニプタニ、貝沢某談）

（吉田 1913）

2. 沙流川筋の二風谷部落川向にウカイロシキプ（いくつも重なっている）という岩がある、文化神オキクルミカムイに追われた親子三頭連れの熊が、逃げて逃げてどうしても文化神に獲られることをこばみつづけたので、腹をたてた文化神はその三頭を岩にしてしまった。一番上のが二才熊で、次が当才、一番下のが親熊であるという、昔はその後ろにそれを追う猟犬の姿もあったが、欠けおちて今はなくなった。（平取町二風谷　二谷一太郎老伝）

（更科 1971）

3. 二風谷小学校から沙流川対岸を見て、左斜めの所に、ウカエロシキあるいは、ペウレプオッカ、通称「熊の親子岩」というのがあります。逐語訳してみるとウ・カ・エ・ロシキ（互い・上・そこに・立つ）あるいはペウレプ・オッカ（小熊・上）となります。この岩の横手にまわって、二〇〇メートルぐらい離れてみると、本当に三頭の熊が山を登っている姿にそっくりであります。昔々、オキクルミカムイが弓矢をつがえ、狙いをつけました。しかし三頭の熊はどんどん逃げ出して、いくら追いかけても矢が届く距離まで近づくことができません。怒ったオキクルミは「カムイクネワ　クコロアイ　エウッコパン　シリネヤクネ　ス　マネ　エチカラクスネナ（神である私が矢を向けても獲られるのがいやで逃げるのなら岩にしてやる）」と言うと、今まで生きて走っていた熊がそのままの姿で岩になってしまったということです。

（萱野 1975）

資料2　ウカエロシキの語意及び別称

名称（読み）語意	文献
1. ウカイロシキヌプリ　互い・重なり合って・立ちあがる・山 (u ka i roski nupuri)	（松浦武四郎『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』）
2. ペウレプ(pewrep)　仔グマ	（吉田 1913）
3. ウカイロシキプ　互い・重なり合って・立ちあがる・もの (u ka i roski p)	（更科 1971）
4. ウカエロシキ　互い・上・で・立ちあがる (u ka e roski)	（萱野 1975）
5. ペウレポッカ　仔グマ・の上 (pewrep okka)	（萱野 1975）



「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007（平成19）年7月26日、重要文化的景観（国文化財）に選定

■文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055−0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828
初　版:2014年6月
第2版:2020年3月

オプシヌプリ

44

所在地：平取町字二風谷（にぶたに） 沙流川右岸 国有林内

関連シート：10、43、44、47、63

地域の山に住民の想いをみる

オキクルミが弓矢ないしは投げ槍で貫いたと伝えられる山が、にぶたに湖右岸にあります(写真１)。山の尾根が丸く欠けた特徴的な形態から、沙流川の神秘的なイメージを象徴するアイヌ伝承地として知られています。



写真１　にぶたに湖右岸の山林にあるオプシヌプリ（南東側から撮影）。元々は丸い穴であったが災害（地震説・大雨説あり）により崩れてしまい、半円状になったと伝えられている。

オプシヌプリの伝承

記録に残っている伝承(資料１)の共通項に、オキクルミが貫いた山という表現があります。その伝承の形成時期を探る情報は、今のところ見出すことができません。最も古い情報は明治29(1896)年の「プイヌプリ」（図１･資料２）です。その後、明治31(1898)年の大雨(地震説もあり)によって丸かった穴が崩落したと伝えられています(資料３)。

後の記録に表れる「オプシヌプリ」もプイヌプリと同様に山の状態を表す名称です。その語源だけをみてもアイヌ伝承との結びつきは判然としません。

吉田巌による「オキクルミのチョッチャした跡という穴」という明治44(1911)年の記録は、今のところオプシヌプリとオキクルミを結びつけた最古の文献情報です（資料２）。

それが矢なのか槍なのかは不明ですが、明治後半代には資料１にあるような伝承がみられることになります。

オキクルミは新井白石による『蝦夷志』（享保五年:1720)を始めとした近世の地誌において、義経伝説を助長する形でたびたび登場します。特徴的な山や岩塊に対して、いろいろな観方や言われ方をする中で、オキクルミの伝承が徐々に語られるようになっていったと考えられます。

記録されている２つの伝承(資料１)は、それぞれ特徴的な内容をもっています。１は額平川流域を含めた広域でのストーリー展開であり、２は沙流川の伝承で度々みられる十勝方面からのトパットゥミ（群盗･夜襲）を題材にしています。このことは流域住民がオプシヌプリに対して、いろいろな観方や想いをもっていたことを示しています。

沙流川流域は、北海道の中でもアイヌ伝承記録がとりわけ多い土地柄といわれています。今後、資料を掘り起こしていく中で新たなオプシヌプリ伝承が見出されることがあるかもしれません。

資料1　オプシヌプリの伝承

1. 文化神オキクルミが沙流川の支流貫気別川の奥のエマニチヌプリ(焼串山)の上を居城にしていたとき、そこから額平川の支流トゥレプンナイ(うばゆりある沢)の山を目標にして、投槍の練習をしていると、槍がトゥレプンナイの山にあたらずにそれて、沙流川の川向いのオプシヌプリ(そこを破った山)という山を突き抜いて大穴をあけてしまった。その穴は地震のために上が崩れ落ちて、今はへこみにしか見えていない。[二風谷　二谷一太郎伝]　（更科 1971）

2. 昔、十勝の方のアイヌが沙流川に攻めてきた。その時オキクルミカムイ(アイヌに生活文化を教えた神)が、互いに血を流すことを避けるために、技比べをしようということになった。最初にオキクルミがヨモギの矢をつがえて川のむこうのあの山を射た。一本の矢で見事に岩山に穴が開いた。十勝アイヌはそれを見て度肝を抜かれて逃げ帰った。それだから、あの山の向こう側、山の後ろへ行ってみると、よもぎがいっぱい生えているのだよ、と。この穴あき山のことをオプシヌプリというのです。　（萱野 1975）



図１　明治二十九年製版　陸地測量部　北海道仮製五万分一図「二風谷」の一部。中央付近にプイヌプリのアイヌ語地名表示をみることができる。



図２　地域住民による手づくり絵本。子供たちへの読み聞かせも行なわれている。



写真２　オプシヌプリに沈む夕日（夏至前後：南東側から撮影）。

オプシヌプリ観賞会

夏至の日を中心に数日間、オプシヌプリのくぼみ部分に夕日が沈む様子をみることができます(写真２)。平取町二風谷(にぶたに)アイヌ語教室では、毎年この時期にオプシヌプリ鑑賞会を行っています。この夕日を一目見ようと、国道237号沿いのカンカン待避所(二風谷)には、町内外からたくさんの人が集まります。

オプシヌプリは地域のアイヌ伝承地というだけでなく、幻想的な姿を見せてくれる自然の造形という側面をもっています。

地域住民による手づくり絵本

地元の有志が集まり、多くの人にオプシヌプリを知ってもらい、地域のウパシクマ(言い伝え)を後世に残していくための絵本が作られました。

『オプシヌプリの伝説』(伝えたい物語実行委員会 2010)という版画の冊子で、平取町立図書館、博物館、アイヌ文化情報センター等で閲覧することができます。

町の子育てサークル、読み聞かせボランティアなどの団体がこの絵本を活用し、沙流川のオキクルミ伝承を紹介しています。

資料2　オプシヌプリの語源及び別称

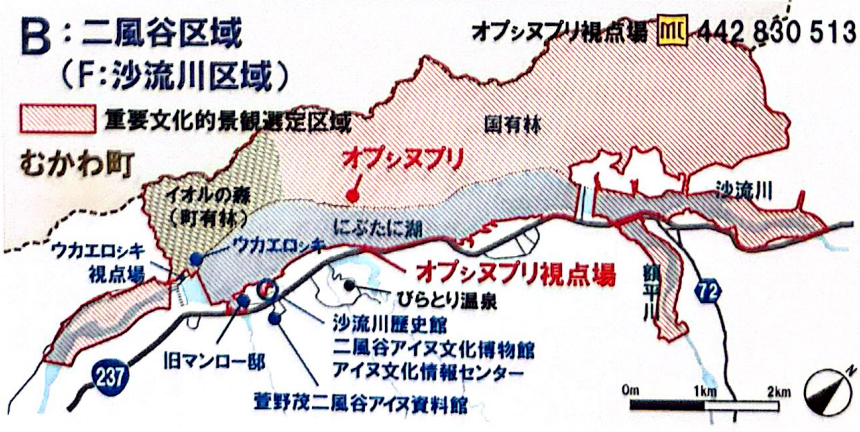
オプシヌプリ	opus nupuri	穴があく・山	(更科 1971、萱野 1975)
プイヌプリ	puy nupuri	穴・山	(明治二十九年製版北海道仮製五万分一図)
オキクルミのチョッチャした跡という穴	cotca	刺す、射る、(弾丸・矢を)当てる	(吉田 1957)

資料3　オプシヌプリの崩落

明治31年の大水害までは、今のくぼみの部分の上がつながっていて、本当に穴であったそうです。それが、大水害をもたらした大雨のときに、上のつながりが落ちてしまったと子どもの頃に聞きました。

昭和20年代に写した写真と、現在の姿を比べてみると、今の穴は、当時よりかなり上の方が広がっているように思います。あの付近の岩石は砂岩なので、ひょっとするとその昔は本当に上がつながっていたのかも知れないし、また、そのくぼみはこれからも広がり続けることでしょう。

(萱野 1984)



「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

□文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055－0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828
初　版:2014年6月
第2版:2020年3月

ポンカンカンチャシ跡とその周辺

45

所在地：平取町字二風谷（にぶたに）

関連シート：8、38、47

遺跡と伝承の密集地

カンカン川の河口域及びその周辺は、沙流川の中でも有数の遺跡密集地帯です。

右岸側にはポンカンカンチャシ跡、シラッチセチャシ跡、イルエカシ遺跡、左岸にはカンカン２遺跡があります。また、アイヌ伝承地として、イルエカシの伝承地（イルエカシ遺跡と同じ場所と推定）、オプシヌプリ（カンカン河口から見て沙流川対岸にある半円状にかけた山）も所在します。

カンカンは「腸」の意味で、幾重にも屈曲して流れている川に対するアイヌ語地名です。こうした特徴をもつ河畔には、アイヌの有用植物のトゥレプ（オオウバユリ）やプクサキナ（ニリンソウ）などが繁茂しやすい環境が形成されます。奥深い沢は様々な食材や生活用材の採取を可能にし、交通の要衝にもなります。

この場所がいかに利便性の高いところであったかを、多くの情報から知ることができます。

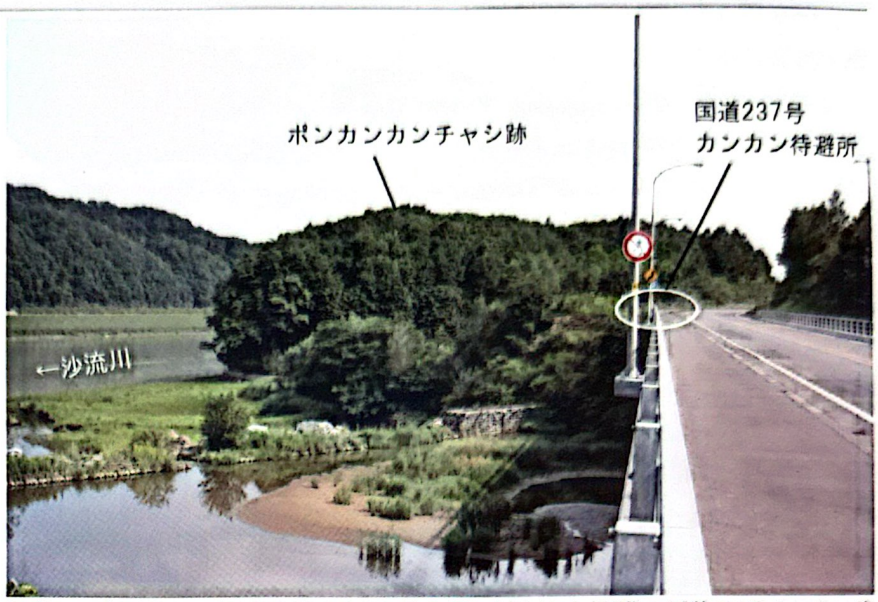


写真１　看々橋からポンカンカンチャシ跡を望む（南側から撮影）。国道237号カンカン待避所周辺はイルエカシ遺跡として発掘調査が行われている。

ポンカンカンチャシ跡

沙流川の下流側へ向かって伸びる丘先式のチャシ跡で、現況で４本の壕を地表から確認することができます。依存状態が良く未発掘のチャシ跡であるため、主体部の形はチャシが用いられていた当時とあまり変わっていないと考えられます。

今のところ、チャシに伴う伝承は確認されていませんが、イルエカシ遺跡で発見された建物跡と同時期（17世紀前～後半位に相当）位に用いられていたことが推定されます。

ほど近い場所にシラッチセチャシ跡も所在していますが、両チャシ跡とも考古学的調査が行われていないため相関関係は不明です。

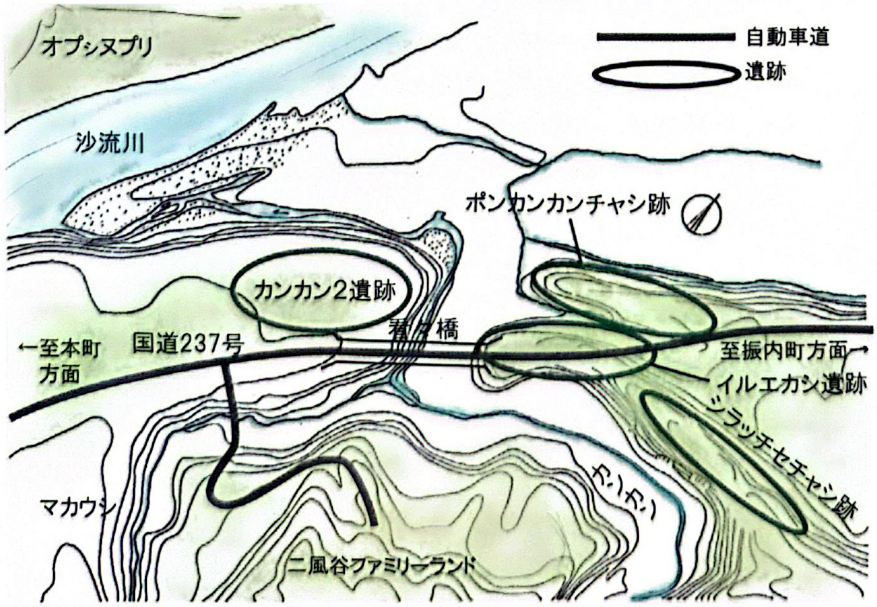


図　カンカン河口域は沙流川有数の遺跡とアイヌ伝承の密集地である。２カ所のチャシ跡の存在は、地域にとって当地が重要な防衛、交易拠点であったことを示している。

イルエカシ遺跡、カンカン２遺跡の発掘調査

カンカン２遺跡からは、擦文時代（10世紀中葉から11世紀代）の竪穴住居、周溝を掘って内部に盛土した隅丸方形の構造物（周溝盛土遺構：約8×5.7m）などが見つかっています。

周溝盛土遺構の盛土上からは、多量の鍛造剥片と炭化材（この場所で鋼が加熱され、鉄器が造形されていたと推定）のほか、佐波理鋺、大刀（全長60.9cm）といった多くの金属製品が発見されています。その他、遺構外から青森県五所川原産とみられる須恵器が出土しています。

大刀は上古刀と呼ばれる反りの

ない直刀で、平安中期以前の伝製品とみられます。この大刀の類例としては、古墳から発掘されるものと、奈良時代の正倉院御物の刀剣類があります。佐波理は銅にスズ、鉛を加えた合金のことで、朝鮮半島産の製品です。

擦文土器が主要な生活用具であった約1,000年前に、人とモノの盛んな往来が沙流川流域で展開されていました。五所川原産の須恵器は、東北地方北部を介在した物流があったことを示唆しています。

一方、イルエカシ遺跡からは近世アイヌ文化期(17世紀前～後半位に相当)の建物跡20軒、アイヌ墳墓１基のほか、フイゴの羽口(金属に熱を加える作業が行われた物的証拠)などが発見されています。

近世アイヌ文化期の建物跡は平地式で、多くのチセ(家)にみられる前小屋構造も判然とせず、柱の径も10～20cmとやや細身であることが分かりました。また、上座の窓の外側とみられる場所からはシカ頭骨の集中もみつかっています。チセの多様性を考古学的調査から裏付ける一事例となりました。

カンカン河口域の調査成果

考古学的調査からは、長い年月をかけた人とモノの交流の中で暮らしや信仰観が変容していくことが分かります。

チャシの存在は、カンカン河口が重要な防衛拠点、交易の要衝であったことを示しており、地域に伝わる天然痘のウパシクマ(言い伝え)は、集落に大きな被害をもたらす大病であったことを今に教えてくれます。



写真３　カンカン２遺跡発見の大刀。須恵器(写真２)と同時期に当地(カンカン河口の左岸段丘)へ持ち込まれたと推定。刀自体は上古刀(平安中期以前の刀)の伝世品である。須恵器、大刀を含む平取町内の遺物は沙流川歴史館に収蔵してある。

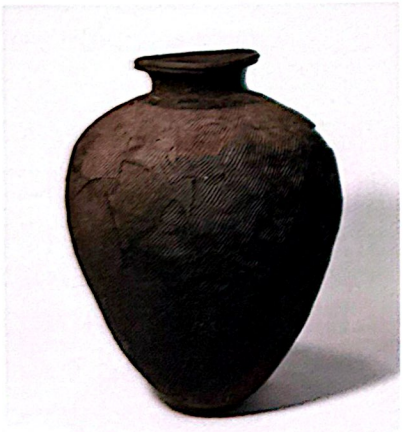


写真２　カンカン２遺跡で発見された須恵器(窯で焼いた陶質の土器)。産地は五所川原窯群(青森県)で、年代は10世紀中葉～11世紀代と推定される。

資料　イルエカシの伝承

昔、二風谷村のカンカンという所に、少ないけれどコタン(村)があってアイヌが住んでいました。

ある日のこと疱瘡が流行して、カンカンのアイヌたちも次から次と罹り、死ぬ者は死んでしまって、今にも村が全滅してしまいそうになりました。その中にただひとり、イルエカシというお爺さんだけが病気にも罹らずに、村中の者の面倒を見て歩いていましたが、そのイルエカシもついに病気に罹ってしまいました。

今は全く助かる見込みがないと、自分のことを知ったイルエカシは、子供や孫を呼んで「エカシのほうを向かずにあちらを向いて聞きなさい」と言いながら、ゆっくり話をはじめました。

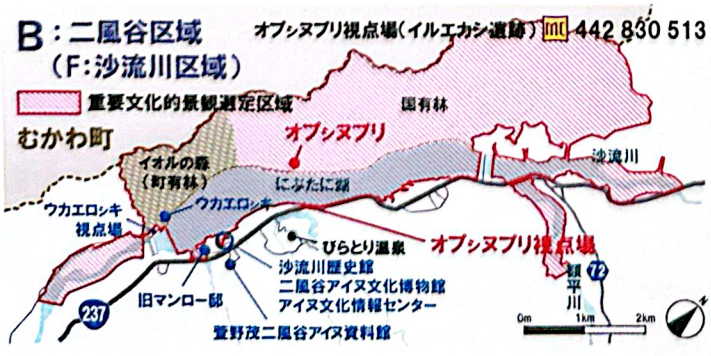
「こうしてほうそうという病気で死んだ者は、普通の病気で死んだものとちがって、アイヌの先祖のところへ行くこともできず、病気をまきちらす神の仲間になって、国中を歩き廻るということです。この病気で死ぬのはエカシだけにして、後は絶対病気にならないように私が守る。

だからもしも、どこかでほうそう病が流行ったという話が聞こえたときはイルエカシサンミッポアネナ(イルエカシの血統は私たちだ)と言いなさい。それを聞いたら病気をまきちらす神たちは避けて通るはずだ」

こういいながらイルエカシは死んだのです。そのせいでしょうか、その後はこの二風谷村には疱瘡が流行らなくなったということです。

疱瘡という病気は、日本国土から持ち込まれた病気なので、アイヌ語では特に名前はなくて、ただ「パヨカカムイ(歩く神)」という呼び方をしていました。

(萱野 1975)



「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055－0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828
初　版:2014年6月
第2版:2020年3月

二風谷の山林をみる

46

所在地：平取町字二風谷（にぶたに） 沙流川右岸

関連シート：22、24、43、44、47

林業史を反映した森林景観

にぶたに湖右岸側の山地帯は、もともと針葉樹と広葉樹が混在した針広混交林であり、江戸時代後期から明治にかけて価値の高い大径の針葉樹を選んで伐採（抜き伐り）されていました。

その後、近代化により急速な伐採が進み、民有林では効率性を重視して針広混交林全体を伐採（皆伐）したことにより、針葉樹は切り株から再生することなく消失していき落葉広葉樹林へと変容していきました（写真１）。

それに対して、国有林では皆伐ではなく抜き伐りで森を壊すことがなかったことから、樹木が小型化したものの針広混交林の景観が現在も維持されています（写真２）。

イオルの森は、町有林となる以前は民間が所有し、樹木を伐採して販売する林業が営まれていました。そのことから現在は広葉樹林となり、隣接する国有林とは異なる景観となっています（図１）。

山林に点在する露岩地

にぶたに湖右岸は全体にわたって新第三紀層の堆積岩地帯で、崖をなしているのは上流側（国有林）、二風谷層中の礫岩層です。

イオルの森（下流ダムサイト）側では、比較的急な斜面の尾根部と急に落ちる山脚部、そして広い谷間で構成されています。部分的には地すべり性の緩斜面も存在します。

上流側の地域は国有林であり、それゆえにフプ（トドマツ）が皆伐されずに残ったとも考えられます。尾根上部が急になり切り立った崖や岩峰をも含む地形です。緩斜面を一部に含み、この斜面はトドマツ植林地として利用されています。特徴的な露岩地には度々アイヌ伝承が残されます。イオルの森に隣接する崖面はウカエロシキ（u ka e roski：互い・上・で・立つ



写真１　「イオルの森」側の山林景観。近代以降の林業による影響で針葉樹が消失している。現在、平取地域イオル再生事業によって、階層構造の複雑な森林への誘導が行われている。



写真２　国有林側の山林。二風谷の山林構成樹木（資料２）の中にフプ（トドマツ）が混在している。本来は平取本町辺りから上流側に、このような針広混交林が広がっていたと考えられる。

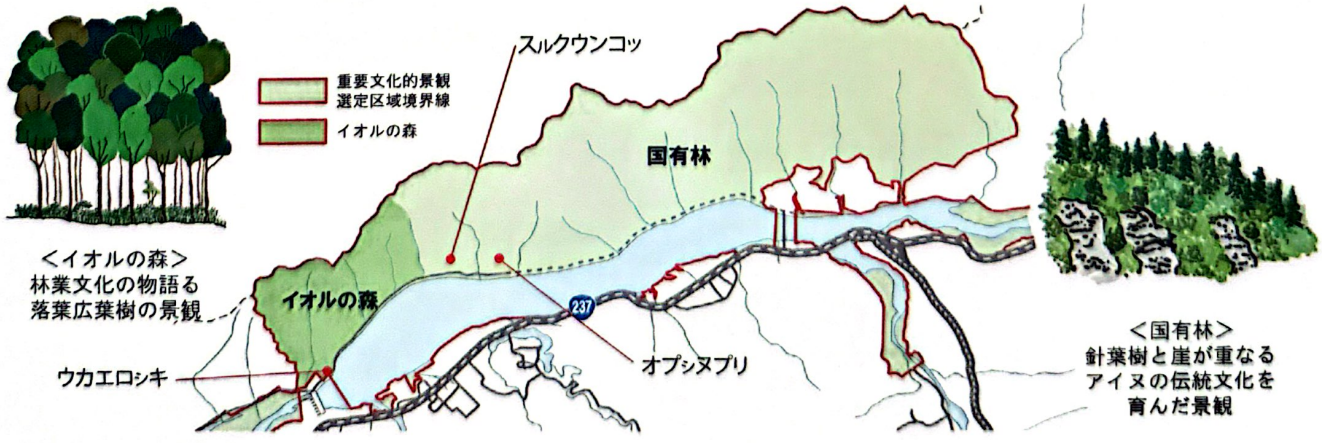


図　にぶたに湖右岸の山林は、広葉樹林（イオルの森）と針広混交林（国有林）が鮮やかな対照になっている。特徴的な露岩地も度々みられ、その多くはアイヌ伝承地として地域に語り継がれている。

通称クマの姿岩)と名付けられ、人文神オキクルミが活躍する舞台として言い伝えられています(シート43)。国有林側にもオキクルミの伝承地であるオプシヌプリ(opus nupuri：穴があく・山：シート44)やスルクウンコッ(surku un kot：毒・ある・跡　図、資料１参照)が所在します。

地域の生活を支えてきた山

民有林側(イオルの森含む)はコナラ、ミズナラが多い森林で、急斜面以外は手入れが行き届き気持ちの良い広葉樹林です。山脚部の地すべり面ではカツラやオオバボダイジュの森林もあります。いずれも林床はエゾミヤコザサとなっています。沢の沖積地では低木のナガバヤナギ林、ケヤマハンノキ林があり、斜面下の崩積地ではカツラなどの渓畔林が出現します。

国有林側も沢筋斜面には伐採が入りトドマツが失われて落葉広葉樹林となっています。尾根部は針広混交林で、緩斜面にはトドマツの植林地があります。

資料２は昭和54年の資料に基づく森林植生一覧(三木　2006)から作成したものです。外来種であるカラマツ以外は、伝統的なアイヌの暮らしで用いられる樹木です(資料３)。

イオルの森は、平取(びらとり)地域イオル再生事業で整備されている森林です。平成21(2009)年には「平取町イオルの森に関する条例」で森林利用について定められています。この森では、樹木や草本などの確保が継続的に可能となる即時利用型の森をつくることを目指しています。択伐(たくばつ)施業を繰り返して、階層構造の複雑な森林へと誘導する試みが継続的に行なわれています。また、不足する樹木や草本の育成技術の確立、森林を維持する要員を養成しています。

資料1　スルクウンコッの伝承

大昔、沙流川がこのスルクウンコッのすぐ下を流れていた時代に、アイヌたちが舟に乗ってその岩山の下を通ると、えたいの知れない者が山の上から毒矢を射てよこした。その毒矢に当って度々アイヌが死ぬことがあったと言うことです。それでこの細く、高く尖った岩山の北側のくぼ地をスルクウンコッ(＝毒のある場所)と名づけられたと聞きました。

(萱野 1984)

資料2　にぶたに湖右岸の森林植生

和名	アイヌ語名(沙流方言)	語意
ミズナラ	シペロニ(si pero ni)	本当の・果実のなる木
コナラ	チカッポペロニ(chikappo pero ni)	小鳥のペロの・木
※ナラ	ペロ(pero)	
イタヤカエデ	トペニ(to pe ni)	乳汁・木
シウリザクラ	シウリ(siw ri)	にがい・木
カラマツ	なし(外来種)	
ハルニレ	チキサニ(chi ki sa ni)	我ら・こする・木
ケヤマハンノキ	ケネ(ke ne)	血(の)・木
ヤナギ	ススsusu)	ナガバヤナギをさす siw siw(にがい・にがい)の意か

アイヌ語名は知里(1953)、※ペロのみ萱野(1996)

資料3　にぶたに湖右岸にみられる樹木の主な用途

ミズナラ(ペロ)	ニス(臼)、アッサプ(櫂)
コナラ	記載なし
※「ナラ」という表現も多いことから、コナラはペロに含んでいたと考えられる。	
イタヤカエデ(トペニ)	イユタニ(杵)、刀類の柄や鞘、細工物
シウリザクラ(シウリ)	アプ(かぎ針)・トゥリ(舟のさお)の柄
カラマツ(アイヌ語名なし)	
ハルニレ(チキサニ)	イキサプ(火起こし)、アレウェマタプリプ(熊手)
ケヤマハンノキ(ケネ)	イヌンペ(炉ぶち)、造血剤、染色剤(赤)
ヤナギ(ス)	イナウ(御幣のようなもの)、ラウォマプ(うけ) スクシチセ(日よけの家)

(萱野 1978)



「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

□文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055−0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828
初　版:2014年6月
第2版:2020年3月

マカウシの滝 -ファミリーランド周辺散策-

47

所在地：平取町字二風谷(にぶたに)94番地8

関連シート：30、43、44、45、46

沙流川の自然散策スポット

二風谷ファミリーランド周辺をめぐる大きな見どころに、５m程の落差をもつ「マカウシの滝」があります(写真)。マカウシは二風谷市街地側(沙流川左岸)の山林を源にカンカンへと注ぐ小河川です(図１)。この川は河口域でポンカンカンとも合流して沙流川に注ぎます。この３本の沢が合流する付近は、沢名でもあるマカウシ(maka usi：開けた・場所)の特徴をみることができます。びらとり温泉からマカウシの滝を巡るフットパスコース(裏面:図２)は約１時間で一周できます。

岩肌がコケのジュータンのようになっているカンカンの緑の渓谷も美しい見どころです。カンカンの沢筋は片道６km程舗装されおり、終点近くには看々富士(俗称)があります。看々富士の左右の山には林道があり、カンカンの分水嶺まで登ると北東側のオタスイ方面や貫気別市街を展望できます。

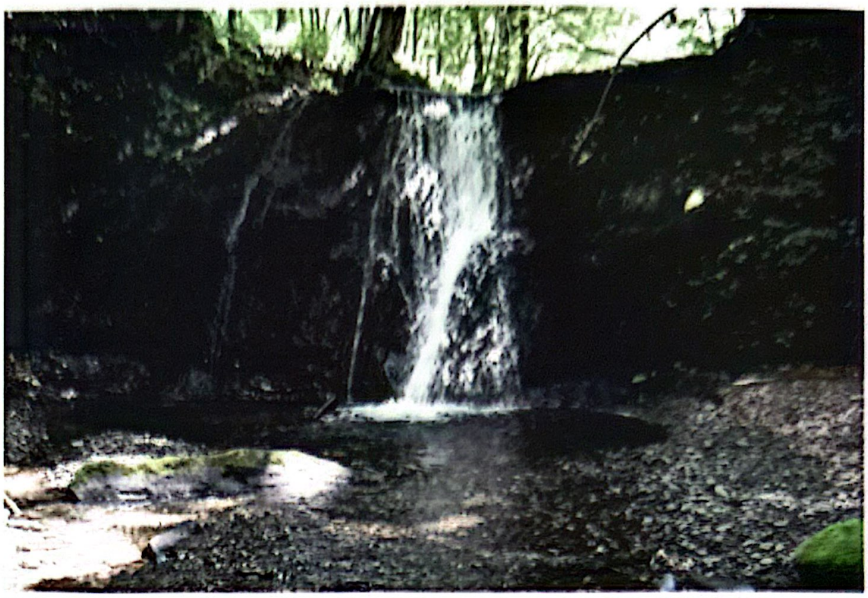


写真　二風谷ファミリーランド内にあるマカウシの滝。落葉広葉樹に覆われた林内に所在し、夏でも涼しい。遊歩道も整備され、滝の近くまで行くことができる(西側から撮影)。

自然観察を楽しみながら

カンカン、マカウシともに山菜シーズンは多くの人で賑わいます。滝の周辺にはアイヌの有用植物であるアハ(ツチマメ)、マタタンプ(マタタビ)、チマキナ(ウド)、アユシニ(タラノキ)、プクサ(ギョウジャニンニク)・トゥレプ(オオウバユリ)などが自生しています。春の山菜の多くは保存するために干します。秋のキノコは干すのと、火棚の上で燻製のようにして防虫効果をもたせる保存方法があります。

川は清流で現在もサケの遡上がみられます。明治・大正期の沙流川流域では、仮小屋を設置してからサケを獲り、身と筋子を別に炙って保存食にしてから馬の背中に背負わせてもち帰る漁法も行われていたそうです(貫気別：明治29年生まれの古老談)。

近世後半の沙流は、沙流川と小沙流川(門別川の意)・ハエ川・ケノマイ川までを含む広大な範囲で、漁をするための家が海にも山にもありました。沙流川にサケが上がってこないときは、宿主別川源流から山を越えて新冠川まで偵察にいったと言われています。

明治・大正時代の開拓者が家畜用フォークでサケを捕るというの

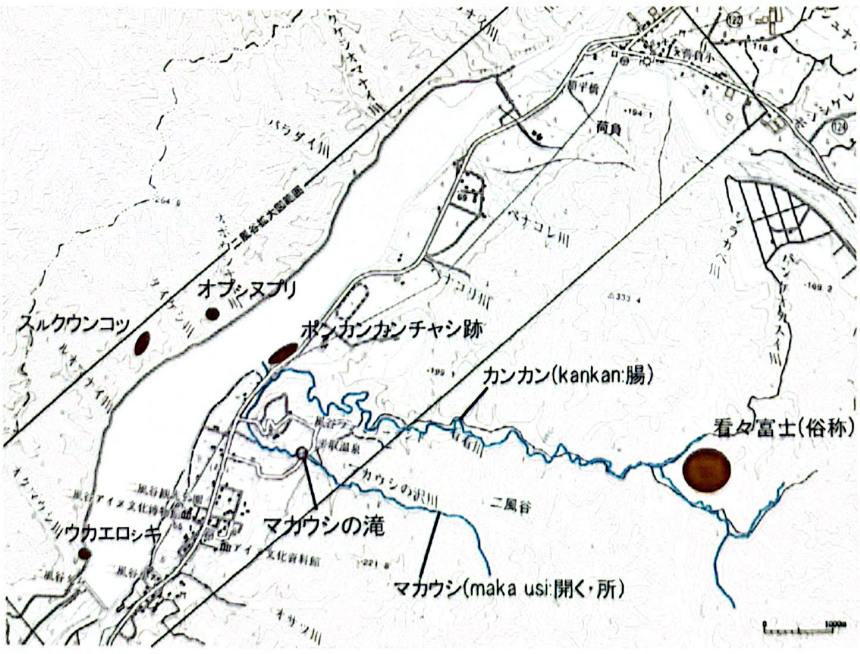


図１　マカウシ、カンカン及びその周辺。二風谷ファミリーランドを起点に自然・歴史散策を行うことができる。マカウシは河口域(カンカン合流部付近)の様子を示す呼称とみられる。

も、食料資源の豊富な沙流だからです。保存食にして祭事でまかれるニシン、シシャモ、クリの実なども、広い沙流の各地で調達されたと伝えられています。

二風谷ファミリーランドについて

昭和53(1978)年５月10日に開園した複合施設です。国道からファミリーランドの高台に上がると、ダム湖の対岸にオプシヌプリ(穴があく・山)、ウカエロシキ(互いに・上・で・立ちあがる：通称クマの姿岩)、スルクウンコッ(毒・ある・跡)を眺望できます。スルクウンコッはマッターホルンに似た尖塔状の崖山です。アイヌ文化の遺跡であるポンカンカンチャシ跡もみえます。広葉樹が散る季節には４本の濠を地表面に確認できます。二風谷ファミリーランド敷地内の駐車場に車を止めれば、こうした見どころ見学を含めた周辺散策を気軽に行うことが出来ます。

山菜採りの際には、カンカンとマカウシのせせらぎを聞きながら自然を満喫できます。オートキャンプ場・バンガロウからは、春のキタコブシの花がみられます。この花がたくさん咲く年は農作物がたくさん実ると言われています。

マカウシの滝周辺(図２)は落葉広葉樹の森になっています。早春はカタクリ、福寿草、エンレイ草の花が咲きます。鳥類ではウグイス、アカゲラ、カッコウ、ミソサザエ、ニューナイスズメ等のさえずりを楽しむことができます。また、ヤマベ、ドジョウ、カジカ、ザリガニもいます。子供たちの川遊びの思い出をつくれる自然が豊富に残っています。



図２　マカウシの滝を巡るフットパスコース。約１時間の散策で沙流川の自然を体感することができる。温泉入浴を兼ねて訪れる愛好者も多い。

資料　フットパスとは

イギリスを発祥とする“森林や田園地帯、古い街並みなど地域に昔からあるありのままの風景を楽しみながら歩く【Foot】ことができる小径(こみち)【Path】”です。

イギリスではフットパスが国土を網の目のように縫い、国民は積極的に歩くことを楽しんでいます。フットパスは、ただ単にウォーキングやハイキングをするだけでなく、季節ごとの植物を観察しながら歩いて歴史を学んだり、一緒に歩く人と会話を楽しみながらコースをめぐる新しい散策路の形です。



「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055－0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828

初　版:2014年6月
第2版:2020年3月

芽生のアイヌ語地名

48

関連シート：5

芽生のアイヌ語地名をみる

芽生地域は、額平川左岸に注ぐ支流であるメム(mem：湧泉池)の周辺域に集落の中心地が形成されています(図)。

芽生という名が示す通り、沢を中心とした一帯は水分が豊富であり、小規模ながらも段丘上で唯一の水田耕作が行われている場所でもあります。

額平川右岸は奥深い峡谷となっており、幾筋もの沢が本流に注いでいます。沢ごとの多岐にわたる特色は、左岸段丘上からの眺望にも一層の彩りを添えるものとなっています。



写真１　芽生地域周辺にみるアイヌ語地名の一例（芽生上空：東側から額平川下流方面を望む）。

アイヌ語地名を読み解く

額平川右岸をみるとアイヌ語地名に度々みられるペンケ（上手）・パンケ(下手)の組み合わせを２セット(4筋)確認することができます。これらの地名は、いずれも芽生の景観を象徴する川の蛇行地帯に集中してつけられています（図参照）。

パンケナイとペンケナイは対の沢名と考えられます。沢口は離れているものの、源流部は近接しており、かつての生活において狩猟・採集、交通路等の共通意図があったことが窺えます。

ペンケラサラ(ra sar：低いところ・ヨシ原、湿地）とパンケヤラ(ya ra：陸、低いところ、ないしはyar：破れる、裂ける等、崩落の意)も対の沢名であることが推定されます。なお、パンケヤラは近代においても、沙流川筋へ行くための交通路として用いられる重要な沢でもありました。

額平川の両岸をみると、ソ(滝)の付く地名が3か所みられます(図)。

左岸側のソウシペッ（so usi pet：滝・ある・川)は、川口近くに大きな滝があり、今日においても通称「三段の滝」と呼ばれる景勝地として親しまれています。右岸側を流れるオソウシ(o so usi：川口・滝・ある)にも滝が確認されています。

一方でソウシペッに隣接するモソウシペッ(mo so usi pet：小さい・滝・ある・川)には、「ソ(so)」と見受けれるような大きな滝がありません。この場合は、ソウシペッを親川として子の意味を表し、滝の有無は関係ないとみられます。地域に生息する動物の分布傾向を教えてくれる地名もあります。シチカプンナイ（si chikap-un nay：オジロワシもしくはクマタカ・いる・沢)、シュプンウシナイ(shupun



写真２　河口付近に大きな滝をもつソウシペッ(北西側から撮影)。平取町を代表する滝の景勝地で、町道総主別旭線の際からみることができる。

usi nay：ウグイ・群がる・沢)、ピパウシ(pipa usi：カワシンジュガイ・いる)などです。

地名探訪の楽しさを知る

シチカプンナイの河口辺りは、急峻な崖になっており、いかにも猛禽類が営巣していそうな雰囲気を醸し出しています。近年行われた付近の鳥類調査においても、オジロワシの飛来、クマタカの営巣が確認されています。

ピパはかつて沙流川流域に多く棲む貝でしたが、現在はみることができません。現代の河川環境を見据えていく上での指標にもなりうる地名といえます。

アイヌ語地名を解き明かしていくためには、語意と現地の状態を照合させることが大事になります。こうした作業を積み重ねが、郷土史の正しい理解と景観保全を進めるための良好な素材につながっていきます。

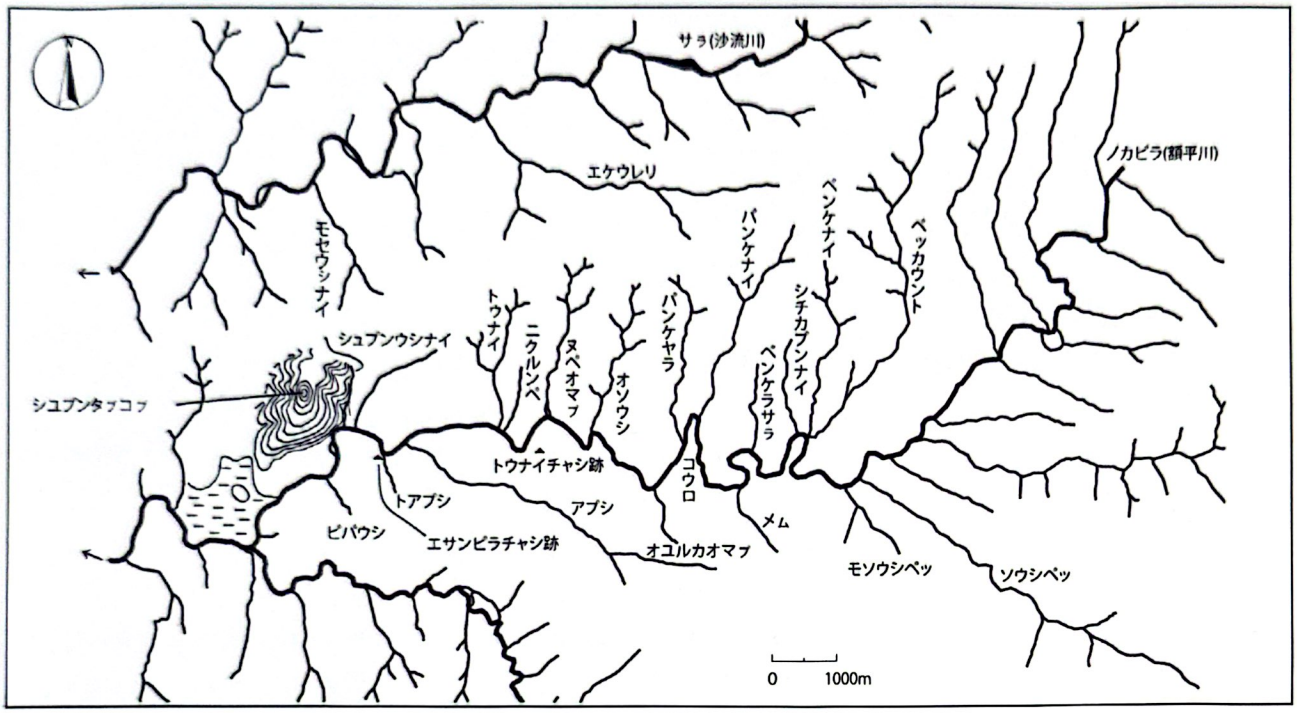


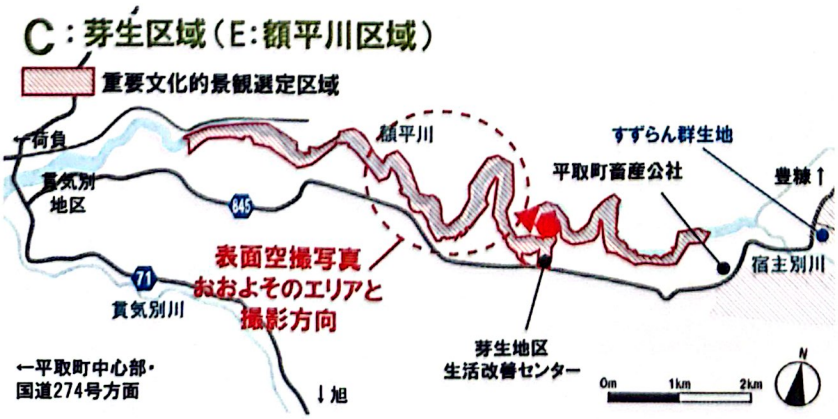
図　明治二十九年製版　陸地測量部　北海道仮製五万分一図（二風谷、貫気別、累標、イワナイヌプリ）をもとに作図。チャシ跡２か所は埋蔵文化財包蔵地カードに基づいて追加。額平川の特徴的な蛇行が明治時代の地図にも明瞭に表わされている。



写真３　猛禽類の存在を彷彿とさせる急峻な崖が続くシチカプンナイ周辺(南側から撮影)。クマタカ等の営巣に適した露岩地となっている。



写真４　アイヌ語地名を解き明かすための様々な文献資料。難解な語意を解釈するためには、多くの説を付け合わせていく必要がある。



「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055－0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828

初　版:2014年6月
第2版:2020年3月

芽生の文化的景観とその魅力

49

関連シート：50、58、59

芽生区域の特性

本区域は、戦後開拓における農地景観の良好な維持を大きな特徴としています。

昭和 20(1945) 年の終戦前後に行われた日本の食料増産・失業解消政策に伴って、大規模な農地化が推し進められ、従来あった平原林からの転換が図られました。

芽生区域の一部から宿主別区域にかけては、明治時代後半以降、軍馬生産を行う牧場として利用されてきました。更に昭和 34(1959) 年以降は、和牛生産のための町有牧野として大規模に草地化されました。

その結果、耕作地（芽生）・牧野（宿主別）・峡谷（額平川）という鮮やかな対照の文化的景観が連なりをもって形成されることとなりました。

３地域はそれぞれ、アイヌ語地名、アイヌ伝承地、チャシ跡などといった北海道らしい特性からも関連付けることができます。先史時代から続く様々な土地利用も、芽生の景観に彩りを添えています。



写真１　急峻な崖が連なる額平川の蛇行(左)と段丘上に広がる耕作地(西側から撮影)。自然の造形と人の営みの対照が際立つ景観をみることができる。

芽生の文化的景観

芽生は北海道の縦横に伸びる主要幹線道路から外れており、商業施設もないため、都市部周辺にみられるような今日的な景観が形成されていません。

集落の中心である高位段丘上と、額平川の河床との高低差が大きいため見晴らしも良く、現在ではあまり見られない大河川の蛇行を眼下に観ることができます。低平地の河畔林、段丘縁の崖面と農村の対照は、北海道の厳しい自然と向き合った暮らしを物語るかのようです。

高位段丘面一帯に広がる耕作地には牧歌的な古い農家建造物が幾つも残っており、農地に佇む木は樹形を際立たせて美しく、入植してきた人の想いを垣間見ることができます。

宿主別方面に向かうと、牧野の造成に深く関連するすずらん群生地が広がっています。開花時期(５月下旬～６月上旬)にはすずらん観賞会が実施され、多くの観光客が訪れます。また奥の豊糠地区は、ポロシリ(幌尻岳)登山の玄関口でもあります。芽生はそうした地域を代表する観光導入路でもあります。



写真２　北海道らしい牧歌的な農村景観(北東側から撮影)。広大な農地の中にあるブロックサイロと畜舎は、近代開拓の象徴的な建造物といえる。

芽生の景観形成プロセス

文化的景観は、地域に住む人たちの歴史の積み重ねです。

芽生に人の居住が確認され始める縄文時代以降、様々な土地利用が繰り返され、現代の姿が形づくられます。現在の芽生の姿は、隣接する額平川区域・宿主別区域と分けがたい関わりでの中で形成されています。

３区域の歴史の重層を解き明かしていくことで、地域の「今」を価値あるものとして理解することができます。



写真３　黒毛和牛の放牧(宿主別区域)。



写真４　炭焼窯の設置(平取町 2002)。



写真５　すずらんの開花(宿主別区域)。

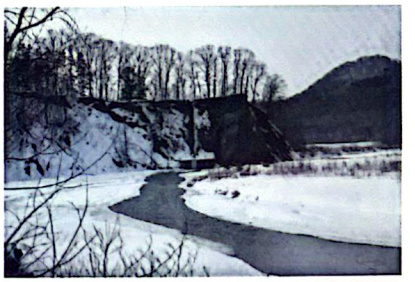


写真６　エサンピラチャシ跡。



写真７　縄文時代の緑色岩製石斧。

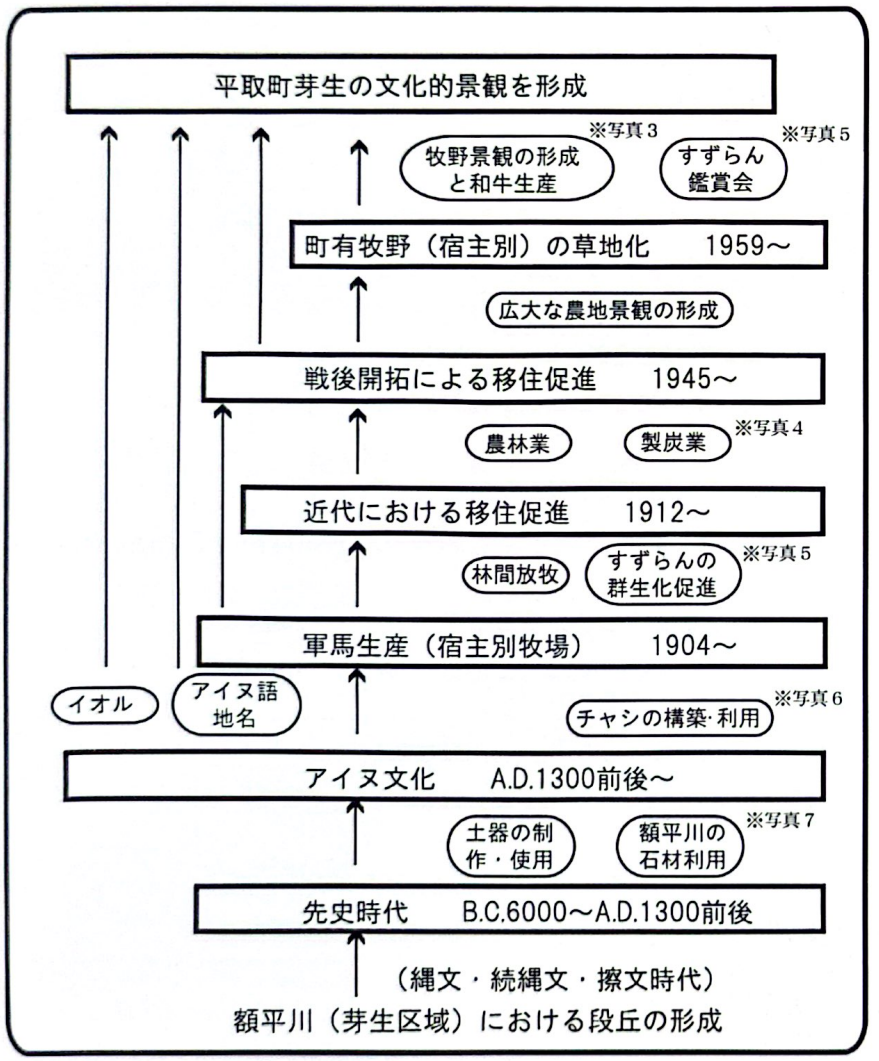
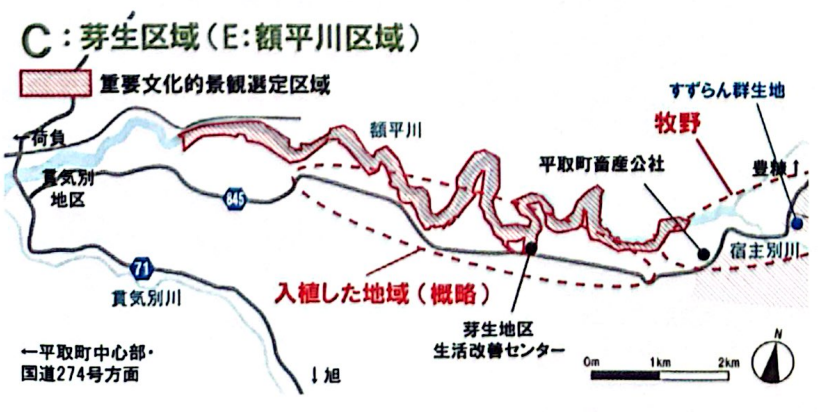


図　芽生及び周辺区域における文化的景観の変遷。



「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055-0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828

初　版:2014年6月
第2版:2020年3月

芽生の開拓史

50

関連シート：49、5、55、57

軍馬生産

日露戦争が開戦した明治37(1904)年以降、国策として軍馬生産が大規模に行われるようになりました。

牧場は平取外八箇村(現在の平取町及び日高町の一部)内の９カ所に設けられ、その内の一つとして貫気別にもつくられました。当時は貫気別と芽生が同じ行政区域として扱われており(昭和48：1973年の字名改正により分離)、宿主別における町有牧野の始まりの頃であったと考えられます。

近代には林間放牧による牛馬生産が一般的に行われており、現在の放牧地のイメージとは異なる牧場景観が広がっていました。



写真１－１　芽生の段丘縁に広がる平原林。草地と異なる牧場景観(林間放牧)があった。
写真１－２　新冠御料牧場での軍馬生産(仲摩編 1930)。

初期集落の形成

戦前の芽生において、開拓を目的とした移住が始まったのは大正元(1912)年とされています。後の大正11(1922)年には、20戸あまりの集落が形成されていました。この頃から昭和初期にかけては炭焼き、造材事業が盛んで、地域全体が活気づく時期でもありました。

そうした中、昭和４(1929)年には地域で初めての雑貨商が営まれ、その２年後には「貫気別尋常小学校芽生特別教授場」(昭和29：1954年に平取町立芽生小学校へ改称)が開設されました。

芽生の集落がある高位段丘上は、小学校からみて宿主別側が乾燥地となっており、ハギや野イチゴが多く生えていた場所でした。



写真２　芽生の馬頭観世音(南東側から撮影)。芽生の戦後開拓を今に伝える貴重な記念碑でもある。

戦後間もなく畑へと変わっていきましたが、付近一帯は牧野開拓とも呼ばれていた場所で、学校の近くには牧野の管理舎もありました。

馬頭観世音について

旧芽生小学校跡地の脇に馬頭観世音が建てられています。昭和23(1948)年７月21日の建立日が刻まれており、馬を生活の糧とする暮らしを今に伝えています。

馬頭観世音の信仰が盛んになるのは、江戸時代後半からとされています。農村に馬が普及し、その役割が大きくなったためで、動物供養塔としての意味合いが強くなっていきました。

平取町内にも各地に馬頭観世音が祀られています。近代に生きた地域住民の牛馬への感謝と供養の念がそれぞれに込められています。

芽生の馬頭観世音は、地域の最盛期(最大人口・世帯数は昭和26：

1951年の412人・80世帯)に近い時期に建てられました。戦後開拓事業における希望の象徴であると同時に、地元の活性化を促す記念碑でもありました。

碑に刻まれる芳名は、建立から半世紀以上たった今日において、先人がこの地に生きた貴重な証になっています。

戦後の芽生

芽生の基幹産業は、戦前の軍馬生産、戦後の食料増産・失業の解消という政府方針によって大きな転換が図られました。そうした中で、昭和20(1945)年の東京開拓団を皮切りに多くの移住者が芽生にやってきて、農業に従事することになりました。

なお造林業は明治後半以降、地域経済を支える主要な産業であり続けましたが、昭和30年代以降は下火になっていきます。

昭和34(1959)年からは宿主別牧野の改良が開始され、大規模な草地化が図られました。

人口は昭和26(1951)年をピークに下がり続け、平成14(2002)年には97人・34世帯となっています。

芽生の今日的な景観形成

芽生の中心街における賑わいの象徴であった小学校の閉校(平成4年3月)は、地域の過疎化を促すと同時に景観の変化をもたらしました。

芽生小学校の裏手は、昭和24(1949)年に「町村の植林五カ年計画」に基づいてカラマツが900本植えられた学校樹栽地でした(写真4)。植林後43年を経過し、伐期が来たことから閉校を期に処分され、売却益金は自治会活動等に活用されました。

閉校後は校舎の解体と合わせて、クリが植樹された広場として整備されました(写真5)。

カラマツは、近現代の北海道の造林業を支えてきた代表的な樹木の一つです。地域の戦後開拓とともにあった樹栽地の処分は、小学校閉校と共に行なわれた郷土史の一幕でもありました。



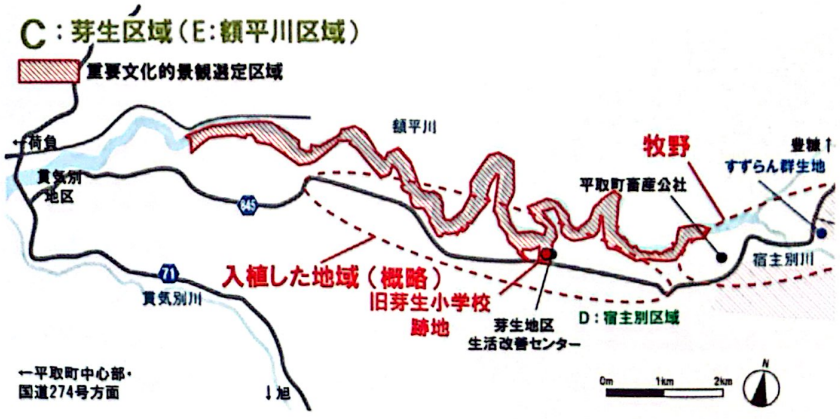
写真3　旧芽生小学校の跡地(南側から撮影)。昭和6(1931)年～平成4(1992)年の61年間にわたり、三百六十余名の卒業生を輩出した。



写真4　旧小学校校舎と背後の学校樹栽地(芽生小学校閉校実行委員会 1992)。



写真5　かつての学校樹栽地は現在、クリが植樹された広場に整備されている。



「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

□文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055-0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828

初　版:2014年6月
第2版:2020年3月

戦後開拓について

51

関連シート：50、55、56、57

戦後開拓の概要

昭和20(1945)年３月９日の東京大空襲、同月11日の大阪大空襲という情勢の中、時の小磯國昭内閣によって「都市疎開者の就農に関する緊急措置要綱」が閣議決定されました。

戦災疎開者の拓殖帰農により、戦力増強を目指すという政府方針が実施の発端でした。そのことを受けて、終戦間近の同年７月に全国から3,419戸もの集団帰農者が北海道へと渡ってきました。

８月14日のポツダム宣言受諾後は、戦災の影響、復員、引き揚げに加えて、大凶作による食料不足という大混乱の状況におちいりました。そうした中、11月９日閣議で「緊急開拓事業実施要綱」が決定されました。全国規模で５カ年にわたり100万戸の帰農を促進し、食料の増産と失業の解消を図ろうという大計画でした。

北海道においては、同年６月の「北海道集団帰農者受入本部」設置に伴い、帰農者の相談が開始されました。翌月には第一次拓北農兵隊(戦後は拓北農民団に改称)が出発し、東京、大阪、神奈川、愛知などから北海道に入植者が渡ってきました。



写真１　芽生の戦後開拓地。段丘上の山すそ(南西側)から芽生小学校方面(北東側)を望む(平取町開拓農業協同組合 1975)。

平取の戦後開拓

『町政要覧』昭和30年版によると、町内の戦後開拓者は、昭和20(1945)年の東京開拓団から始まり、昭和29(1954)年当時で107戸・636名が在住していました。

地区別にみると、川向５戸・32名、荷負３戸・16名、幌毛志11戸・64名、岩知志２戸・11名、芽生23戸・131名、上貫気別(旭)25戸・149名、豊糠19戸・113名、糠平19戸・120名となっています。

営農計画の実績をみると、川向475反、豊糠1,340反、糠平2,092反、芽生1,743反の配当で、いずれもほぼ100%の開墾率でした。

東京開拓団について

当時の平取村(昭和29：1954年に町制施行)に入植した107戸の内、24戸は東京からの戦災都市疎開集団帰農者でした。

東京開拓団は東京の特定の団体ではなく、個人の集合体として結成されました。職業も多種であり、その入植動機も個人による意図が強くはたらきました。

職業は、警察官、都庁職員、彫刻家、宮内庁の庭師、銀行員、一般会社員など様々で、農業経験のある人はほとんどいませんでし



写真２　芽生の耕作地と日高連峰。戦後開拓の景観がほとんど変わらずに残されている(西側から撮影)。

た。

入植動機は、戦災や食料難などのほか、「北海道集団帰農者受入本部」などの宣伝啓蒙による「夢とロマンの地北海道」というイメージづくりに心が動かされたこともあったようです。



写真３　戦後開拓の雰囲気を色濃く残す農家建造物と牧草地(南側から撮影)。

農地景観に入植者の想いをみる

北海道開拓者連盟による『拓土に花は実りて』(田中・佐々木編 1971)に、次のような東京開拓団の逸話が載せられています。

「少女時代を過ごした東京に別れを告げてこの北海道に参りましたのは、昭和二〇年の九月でした。一面焼け野原と化した東京に私どもはなんの未練もなく、ただ広々とした新天地へとばかりに北海道に夢をかけて汽車に乗りました。またすぐ帰れるような軽い気持ちで。

隣組の方々と泣きながら別れ、もう二度と東京の土地は踏めないと深刻な母の気持など全然感じない私達は、あまりにも幼すぎたのかもしれません。(後略)」

平取村に入植した東京開拓団はその後、様々な苦労を重ねながら農業に従事してきました。しかし多くの人たちは離農し、開拓地を去っています。

令和元 (2019) 年現在、芽生地区では１戸のみ東京開拓団出身の農家として営農しています。

開拓農協の設立とその歩み

昭和20(1945)年に平取村へやってきた入植者によって「平取開拓団」が組織されます。更に昭和23(1948)年４月には、この団体を母体とした「平取村開拓農業協同組合」が結成されました(昭和31：1956年より平取町開拓農業協同組合に名称変更)。

昭和34(1959)年には農山漁村電化促進法により芽生地区に電気が導入されます。続いて昭和39(1964)年に芽生トラクター利用組合が設立され、地域の生活が大きく変わっていきました。

こうした生産基盤づくりの促進や開墾補助事業、住宅建設等の資金導入を行ってきた開拓農協も、昭和47(1973)年の一般的な開拓行政の終息に伴い、昭和50(1975)年２月をもって解散し、平取町農業協同組合に合併されました。

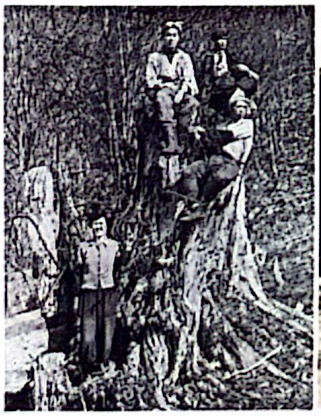
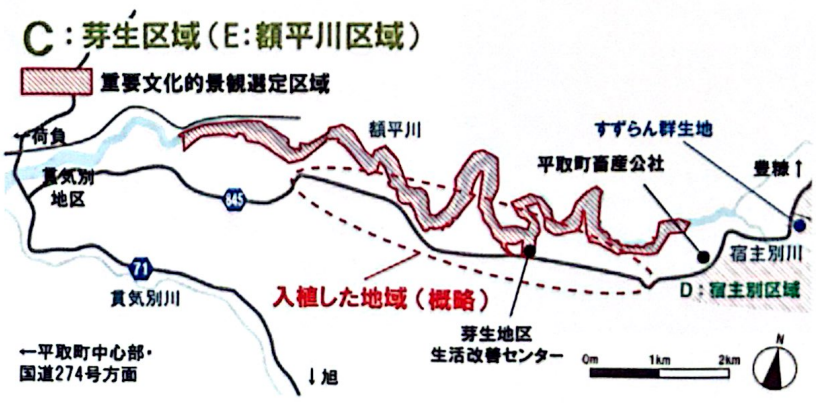


写真４　カツラの切り株に座って記念撮影（平取町開拓農業協同組合 1975)。



写真５　芽生営農機械化センターの倉庫(平取町開拓農業協同組合 1975)。

参考・引用文献：
山本 (1987・1988)
平取町農業協同組合 (1996)



「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

■文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055-0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828
初　版:2014年6月
第2版:2020年3月

開拓農家の家屋

52

関連シート：53、54

開拓期の民家をみる

芽生地区には昭和 10 ～ 20 年代前後に建てられた家が何軒も現存しています。それらをみると、現代的な住宅とは違ういろいろな特徴に気付きます。

古い家の多くには、モルタル等の基礎構造がありません。塚石を埋設してその上に柱を建てています。壁と屋根はもともとは簡易な板張りですが、ほとんどは後にトタンを用いるようになっていきます（写真１・６）。

敷地内は母屋を中心に多くの施設群で構成されています。現代生活でも共通する庭園、納屋のほか、ゴエモン風呂、外便所、外室、畜舎、サイロ、屋敷林（防風林）などが配置されています。



写真１　旧Ｎ氏邸（芽生地区：敷地内は立ち入り禁止）。北海道らしい民家が廃屋として残されている（南側から撮影）。

古い暮らしの知恵

①火棚と囲炉裏（写真２・３）

囲炉裏（写真３）ではよく乾燥させた薪が焚かれます。薪に向いている木はナラ・カシワ等の堅木です。木炭は一酸化炭素を排出したり、眼や喉の痛みにつながるため、人にやさしくありません。囲炉裏の場所はやがて薪ストーブへと移り変わり、煙突で煙が排出されるようになります。

囲炉裏の上1.5m程の場所には、荻で編んだ簀を敷いた火棚が設置されます(写真２)。火棚は物を乾かす効果と、囲炉裏の火の粉が天井に飛ぶことを防ぐ役割があります。ここで乾かした椎茸は、何年たっても虫がわかないとも言われています。



写真２　火棚（旧Ｎ氏宅）



写真３　囲炉裏・炉室（旧Ｎ氏宅）

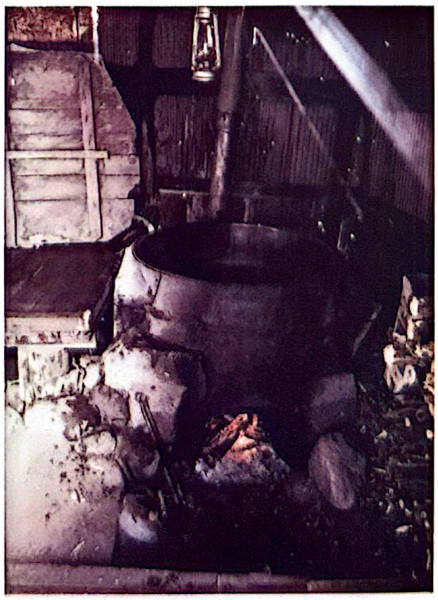


写真４　五右衛門風呂（旧Ｎ氏宅）

②炉室(写真３)

囲炉裏の短辺縁につくられた炉室には、ジャガイモ、大根、ニンジン、長イモなどが収納されています。現代住宅の床下収納に近いもので、厳冬期でも外に行く必要がないという利点があります。

また、囲炉裏の脇にあるので、すぐに焼きイモなどをつくることができます。

③五右衛門風呂(写真４)

住宅外の独立した建物内に設置される鉄製の胴型風呂です。

ヘッツイ(火を燃やす部分)で火を燃やし、入浴する時は底部分に丸型のスノコ板を沈めて入ります。スノコ板がないときは、風呂蓋を兼用していることもあります。また風呂に入るときは「うめ水」を、バケツに二つ程用意し、お湯

が熱くなったときに使います。

④外室(写真５、図)

北海道の冬季食料保存施設である「室」が、近代以降の民家で盛んに使われるようになりました。

沙流川流域で用いられる室は、自家用の食料を主に保管する比較的小型の施設が多いとされています。

また、海岸線などの水はけのよい地域や積雪量の多いところでは、土中保存が行われるの対し、平取町では地上式や堀の浅い半地下式の室がみられるという特徴があります。

室の中にはイモやニンジン、大根などの野菜類のほか、漬物、冬ミカンなどが入れられ、冬期間の凍結を防いでいます。

板張りからトタン張りへ ～外壁構造の移り変わり

板張りによって建てられた民家の多くは、後の改修時にトタンで補強されています(写真１、６)。家を強くし、少しでもすきま風と雪を防ぐための工夫でもあります。



写真５　M氏宅の外室。くり石をコンクリートで固めてから土で覆っている。昭和20(1945)年前後の築造(西側から撮影)。



写真６　現在も居住している古い造りの民家。邸宅内の施設群が良好に現存している（M氏宅、敷地内は関係者以外立ち入り禁止：南側から撮影）。

トタンで屋根と壁を覆った家も近年は少なくなってきましたが、農村地帯では度々見ることができます。本州にみられる瓦屋根とタール塗布の板張りの家とは異なる北海道らしい色合いの景観といえます。

受け継がれる民間信仰

近代の開拓農家にとって、民間信仰は日々の仕事、生活と切り離すことができません。

とりわけ、造林業に携わった人は山神の崇拝をとても大事にします。一般的に山神は女神で、三又の木に宿るとされています。M氏宅(図)では母屋裏のスモモがご神木として崇められ、山神を祀る祠もつくられています。

山神への礼拝は家主によって12月12日と１月12日の夜に女人禁制で行われます。餅、キンキ、酒、塩、米を捧げ、終わったら山神と食事をします。世代が変わり、山仕事を行わなくなっても、大事な儀式として現在も継承されています。

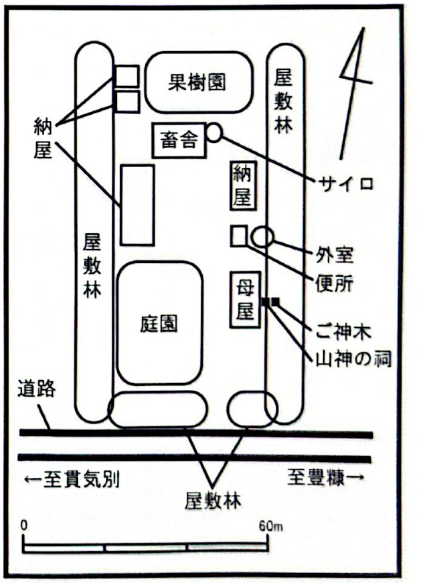
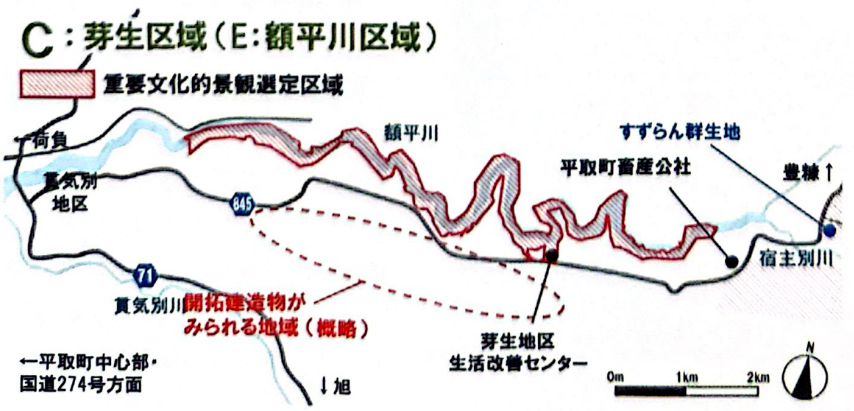


図　開拓民家の一例。昭和17(1942)年に建設されたM氏宅。



「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

■文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055－0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828

初　版:2014年6月
第2版:2020年3月

北海道の開拓建造物 -ギャンブレル屋根-

53

関連シート：40、52、54

ギャンブレル屋根建造物

北海道の農家建造物をみるとき、象徴的なイメージとして定着している畜舎形態があります。

ギャンブレル屋根という将棋の駒のような形の建物で、文化屋根・腰折れ屋根などとも呼ばれています。

明治期に行われた北海道の大規模な農地化に伴い、アメリカから導入された畜舎の建築様式です。主には明治15(1882)年の北海道開拓使廃止後から普及し始め、道内の酪農・牧畜の発展に伴い広く用いられるようになりました(中井・角・小澤・石本 2010)。もともとは、アメリカへの移民初期(17・18世紀)の住宅や農家など小規模の建物にみられる屋根でしたが、牛舎内における換気方法の改良などに伴って、寒地向け畜舎の形態として用いられ始めます。

アメリカでのギャンブレル屋根畜舎の一般化は、欧米式農法を積極的に推進していた明治期の北海道にも大きな影響を与え、間もなく導入されるようになります。

昭和20(1945)年以降の北海道の戦後開拓においても畜舎の一形態であり続け、今でもなお廃れることなく受け継がれています。とりわけ、戦前から昭和40年代位にかけてのブロック、レンガ製サイロは、キャンブレル屋根の畜舎とセットで建築されるのが一般的でした。

ギャンブレル屋根畜舎は、片側に牧草の入り口が付けられ、広大な内部空間を確保できるように出来ており、非常に機能的な構造となっています。

北海道の農村には、開拓期の様相を色濃く残すこうした牛舎が数多く現存し、今も活用されています。



写真１　ギャンブレル屋根の畜舎(南西側から撮影)。ギャンブレル(Gambrel)の名称は、肉屋で丸ごと肉を吊り下げる鉄製の鉤の装置の形状などに由来している。

畜舎の重要性

芽生(めむ)トラクター利用組合(昭和39：1964年)がつくられ、機械化が進められる以前は、農耕馬が農業の必需品でした。どの農家でも最低２・３頭は飼っていたといいます。

また、乳牛の飼育は北海道の畜産農家における重要な収入源でも

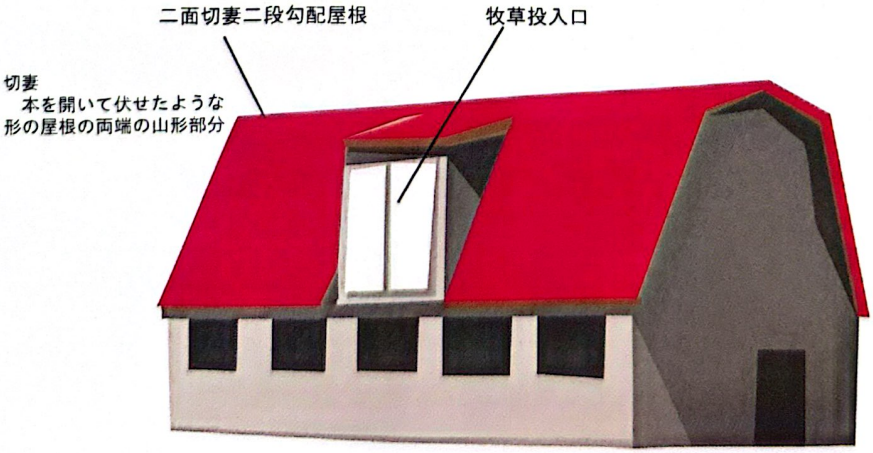


図　ギャンブレル屋根建造物の部位名称。



写真２　明治10(1877)年、札幌農学校に設置された模範家畜房(モデルバーン)。ギャンブレル屋根の普及以前は、切妻屋根の畜舎が使われていた。

あります。しっかりとした畜舎を作ることは、地域に根付いて営農するための必須条件でした。

戦後は、積極的にブロック建造物が推奨され、トタンなどと合わせて畜舎の建設に相次いで用いられるようになります。その一方で、戦前からの板材、土壁等も使われ、徐々に今日的な建築用材へと移り変わっていきます。



写真３　真駒内牧牛場のギャンブレル畜舎(仲摩編 1930)。明治９(1876)年札幌に来たエドウィン･ダンによる指導のもと、原野を切り拓いて広大な牧牛場を築いた場所。開拓使廃止の明治15(1882)年、ダンが去った後に北海道庁種畜場となり、畜産の発展を担った。

土壁の建造物

今はあまり見られなくなった土壁も、古い農家建造物の構造としてたびたび用いられています。倉庫・畜舎等の土壁は、北海道におけるブロック住宅の奨励(昭和20年代以降)によって減りましたが、かつては一般的な家づくりの壁材でもありました。

下地は、木で芯を作って竹やヨシを格子に組み、そこに粘土と藁スサを混ぜて壁に塗りこむというやり方で、日本の土壁づくりの技法として長く受け継がれてきました。

欧米風の住宅にみる ギャンブレル屋根

ギャンブレル屋根が畜舎の建築様式として一般化する一方、一般住宅の屋根として用いられる例もみられます。

昭和８(1933)年に建てられた旧マンロー邸(二風谷(にぶたに))は、医師・アイヌ文化研究者として活躍したN．G．マンロー博士(1867-1943)の住宅兼診療所です。スコットランドから明治38(1905)年に来日したマンローは、同年に日本へ帰化し、晩年の11年間を二風谷で暮らしました。邸宅は二風谷に永住を決めた後に、自らも設計に携わって建てられました。

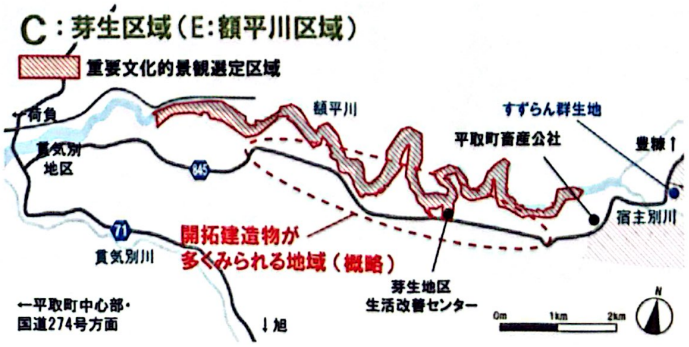
なお、隣接する切妻屋根の建造物は、マンローの診療室兼書庫として用いられていました。耐火性を重視し、当初からコンクリート構造で建設されたものです。



写真４　土壁の廃屋。農家建造物の壁構造がみえる。



写真５　旧マンロー邸。スコットランド風の建築様式を今に伝えている(南西側から撮影)。



「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055-0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828
初　版:2014年6月
第2版:2020年3月

サイロのある景観

54

関連シート：53

北海道開拓とサイロ

明治初期に北海道へ欧米式の近代農法が伝えられて以降、家畜飼料保存のためのサイロが、営農と密着した施設として用いられ続けています。

昭和20(1945)年以前までは木製・石製・レンガ製による建造が主流でしたが、戦後はブロック積み上げサイロの普及が進みました。その発端となったのが、昭和27(1952)年の北海道立ブロック建築指導所設立です(同30:1955年、道立寒地建築研究所へ発展的に移行)。こうした北海道における寒冷地向けの建造物研究のなかで、ブロックを用いた住宅が推奨され、建設が進められました。

高度経済成長期におけるモノの急速な転換は、今日的な北海道の農村が形作られる大きな契機であったともいえます。

なお、戦前に作られた木製サイロは平取町内には現存していません。道内では安平(あびら)町や北斗市に保存されています。同じく石製サイロについては、現時点で町内に１棟確認されています。河原石を積んでコンクリートで固めた背の低いタイプで、戦後とみられる時期にブロックを継ぎ足して高くしています。

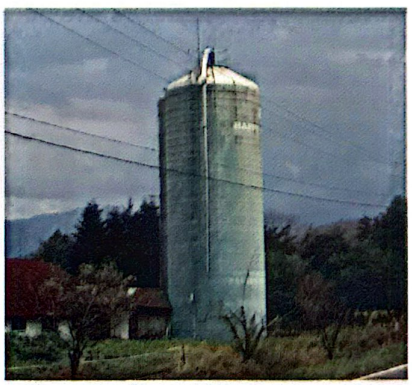


写真２　スチール製の大型サイロ。素朴なブロックサイロの後継機種として用いられた。



写真１　とんがり帽子のブロックサイロは、北海道の戦後開拓を象徴する建造物でもある。昭和40年代の中頃から後継機種へと移り変わっていったが、現在でも多くが当時のまま残されている。

戦後開拓とブロックサイロ

戦後に推奨されたコンクリートブロックは、セメントと火山灰を混ぜて作るもので、基本的には今も同じ工法で生産されています。

火山灰を混ぜることで重量を軽くでき、ブロック自体に断熱効果もあることから、昭和30年代前後から建材として盛んに用いられました。

一時は、戦後の北海道を代表する構造材だったのですが、結露を抑えるための代替素材の研究により、次第に廃れていきました。一般的なブロックサイロは、鉄筋の両側をブロックで挟み、モルタルで充填して積み上げていきます。しかし、なかにはブロックだけで積んでる基礎のないサイロもあります。

内部は縦穴による半地下構造になっており、外観以上の容量を蓄えることができます。

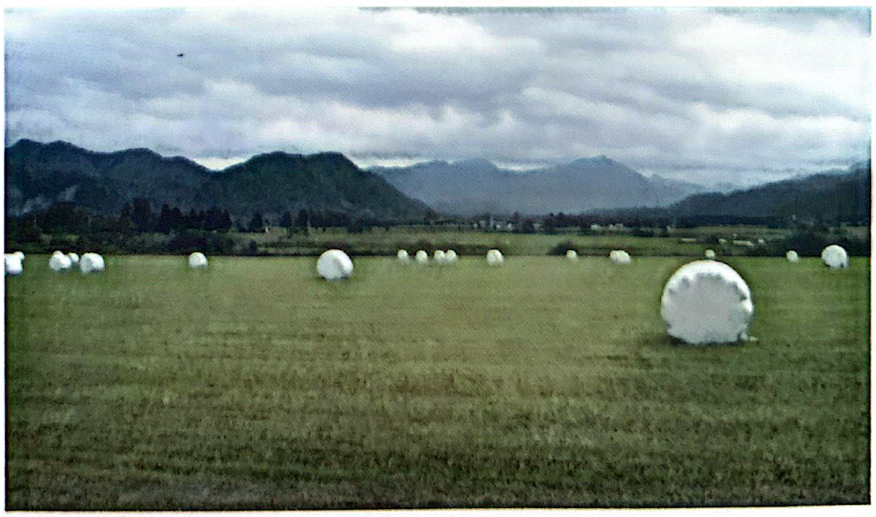


写真３　今日におけるサイロ形態の主流であるロールベールラップサイロ。広大な牧草地に点在するロールは、北海道の酪農産業を彩る景観である(南西側から撮影)。

北海道の酪農史を サイロの変遷から考える

旧K氏宅(芽生(めむ)地域)のブロックサイロと畜舎(写真１)は、昭和30年代に改築されたものです。しっかりとしたブロックの積み上げによる建造物は、昭和30年代後半～40年代に隆盛します。

昭和20年代のものは、ブロックの形や積み方が不均一で強度もあまりないため、多くのサイロは後年に改築されています。

昭和40年代中頃からは、スチール製の大型サイロへの転換が図られました(写真２)。しかし、建設費用がかさむことやサイレージ(サイロにて保存された飼料作物)をつくる際に大きな労力を要すること等により、使用頻度が減少していきます。

牧草生産の今日

近年の農村景観で、丸い形でラッピングされた牧草ロールが頻繁にみられるようになりました(写真３)。

圧縮した牧草を巻き上げてサイレージ化する手段で、ロールベールラップサイロとよばれています。牧草を大型機械で２m程度の円筒形に成形し、ポリエチレンでできた幅広のラップで仕上げます。

サイレージ化するには嫌気性菌(増殖に酸素を必要としない菌)による発酵が必要です。そのため、ラップの複層構造、強度の向上、粘着材の改良等が図られています。

北海道の農村景観とサイロ

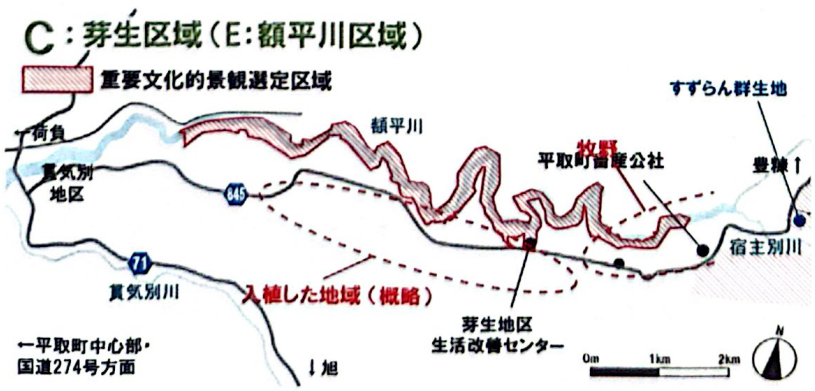
北海道内のいたる所に古いサイロの保存がみられます(写真４)。このことは、多くの人に親しまれる北海道の象徴的な建造物としての証でもあります。

また、ときおり農家の軒先に予備用として積まれたサイロ用ブロックを見かけることもあります(写真５)。

北海道の近現代史を彩る貴重な産業遺産ともいえるのではないでしょうか。



写真４　北海道最古の木製サイロ(安平町。昭和５:1930年建造、戎谷侑男氏撮影)。老朽化により平成27(2015)年に解体されたが、その後「はやきたこども園」内に復元された。



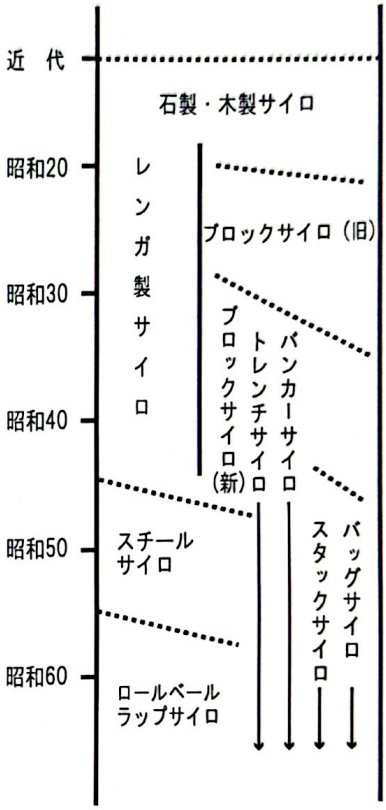


図　北海道におけるサイロの変遷(概略)。昭和中期以降、様々なタイプのサイロが開発、普及されるようになった。



写真５　民家の軒先に置いてあるサイロ用ブロック。

「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

■文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055－0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828
初　版:2014年6月
第2版:2020年3月

芽生の開墾と湿地性植物

55

関連シート：51、56

湿地帯の農地化

東京開拓団のＵ氏が芽生に入植した昭和20(1945)年当時、アブシ川の中・上流域は一面の湿地帯でした(写真１・２)。

谷地坊主やミズバショウ、ヤチゼンマイなどが群生するところで、湿地性植物を燃やしながら十数年の歳月をかけて地道に農地化が進められました(写真３～５)。

当時の道路は湿地に木を敷いてつくるワレハ道路というもので、雨が降ると道路の上を水が流れます。乾いているところは家を建てるのがやっとで、谷地坊主は腰の高さほどまでありました。

開墾の始まりは伐木した跡に火入れをし、焼畑農業を行うことでした。火防線を切り、火入れを行っても風向きが変わりって山林に飛び火し、山火事になりかけたことも度々あったといいます。

この焼畑方式で、一畝一畝開いていき、そこにジャガイモやホウレンソウ、ソバ、トウモロコシなどが蒔かれていきました。



写真１　東京開拓団(Ｕ氏)の入植地。一面の湿地帯を開墾した苦労の想い出がここに詰まっている。場所は写真２の国営排水(明渠)跡を含む一帯(北東側から撮影)。

農地の排水(明渠)工事

東京開拓団入植後の数年間、湿地帯の湧水対策のため、国営かんがい排水の工事が行われました。安定的な開墾の継続が難しかった当時においては、農閑期に現金収入を得る手段でもありました。

今日においても、離農後の荒無地に排水溝の痕跡をみることができます。敗戦後の食料増産政策に携わった人々の想いが込められた現代遺構でもあるといえます。

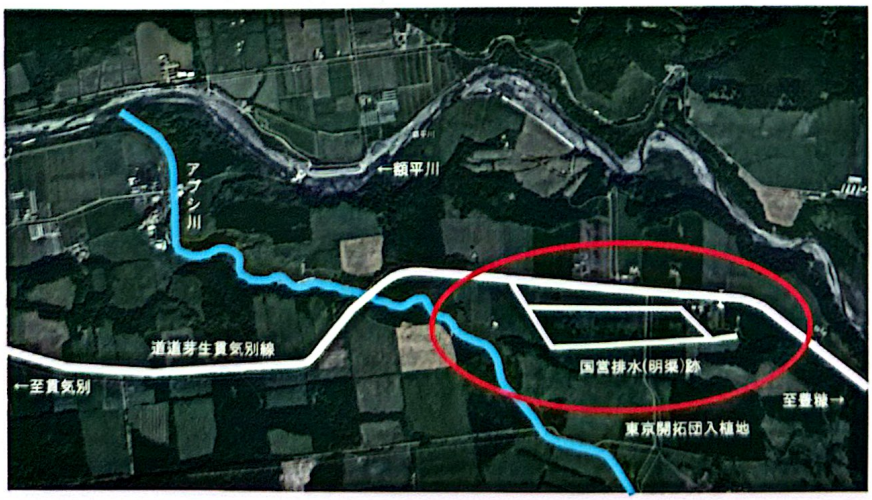


写真２　東京開拓団の芽生入植６世帯が割り当てられた土地。昭和20(1945)年９月、焼け野原となった東京を追われてこの地にやってきた。

谷地の開墾

谷地は水はけが悪いので、小豆などは削り蒔きをしていました。鍬で起こさないで、ごみを寄せるように削り、握り拳くらいの穴が開くようにして、そこへ種を下していく方法です。そうすると、うまく栽培することができました。

しかし、芽が出て今年は良いと思っていたら、大雨で死んでしまうこともありました。

農業の経験がなく、土地の条件も悪いことで、開墾も順調には進みませんでした。

現金収入も僅かであったことから、冬は造材山へ仕事に行く人もたくさんいました。

Ｕ氏が農家の仕事だけで食べていけたのは、50年以上もやって、最後の５年間位だけだったそうです。

谷地坊主とのたたかい

湿地帯の開墾の難しさを物語るＵ氏の苦労話があります。

“木を伐るのは当然、木を伐らな

きゃだめだし、木を伐っても根っこが残るし。だけど、その谷地坊主というのはね、難物なんですよ。植物なんだけどもその芯が二十五センチから三〇センチある。この直立したものを、そのまっすぐ下をすぼっと伐ったんじゃね、用をなさないんですよ。それの周りに下の根がね、どのくらいだろうね。取るときには、それからもう一メーターくらい、とにかくてゆうか、芯から五〇センチは離したところから鍬を入れて、土ごと起こさないと取れないんですよね。それでも残るんですがね。そして、そういうものを、今度はいくつもいくつもっていうか、全部転がして取っといて、ま、それこそ重たいのは五〇キロ以上もあるんじゃないでしょうか。それを全部、今度は集めて、積んで、それで乾かすと、火をつけるんですよ。大きな山があっちにもこっちにもできるんだから。そすと今度は、その火が燃え出したらね、消えないんですよ。消えたような顔して、上は、表面は消えても、中でぶすぶすいってね。今度は風のある時には、それがゴーゴー音立てて燃えるんですよね。”（平取町史編集委員会 2003）

このようにして、U氏が最初に給与された五町歩(約５ヘクタール)の土地をすべて開墾し終えるまで、昭和20(1945)年の入地からおよそ17～18年の歳月が過ぎていたそうです。



写真３　芽生の湿性林。ヤチダモなどの有用樹木が繁茂し、春には林床にミズバショウの群生をみることができる。



写真４　ミズバショウ



写真５　谷地坊主(寺嶋芳郎氏提供)



*アブシ川右岸での開墾作業(写真２の○印近辺)は、こうした湿地性植物を何年もかけて取り除くことから始められた。

「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

□文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055－0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828
初　版:2014年6月
第2版:2020年3月

段丘面に広がる耕作地

56

関連シート：51、55

芽生の農地化とその変遷

芽生地域が本格的に農地化されたのは、開拓事業に伴う移住が始まった大正元(1912)年以降とされています。

地域の語源ともなったメム(mem：湧泉池)周辺から農地が徐々に広がり始め、人の往来も活発になっていきました。

かつて北海道開拓の耕作適地は、チキサニ(ハルニレ)、ピンニ(ヤチダモ)、ケネ(ハンノキ)が繁茂する林床の順であったとされています。メムの辺りはハルニレ林であったことから、一番初めに開かれる土地として選択されたと考えられます。良質な水の確保という意味でも、住みやすい場所であったと思われます。

戦前は造林業が地域の基幹産業で、芽生の山際には炭焼き小屋が点在していました。

戦後は、国の食料増産政策のなかで大規模な露地栽培が行なわれ、現在につながる一面の農村景観が形成されました。日本の近代から現代への政策転換を反映した景観のなかで、今も農作物が生産され続けています。



写真１　早春の耕作地と日高の山なみ。戦後開拓の畜舎とサイロが北海道らしさを際立たせている(南側から撮影)。

芽生の作物

北海道の近代開拓において奨励された農作物が、戦後開拓の食料生産でも主流となりました。

トウモロコシ、ジャガイモ、大豆、小豆、麦、ソバ、テンサイなどで、明治時代以降の栽培ノウハウを応用して、次々と生産されていきました。

昭和20(1945)年以降、日本各地から移住者がやってきたなかで、すぐに農家としての実績を出すのは大変難しいことでもありました。そのため、比較的容易に栽培できるアワ、ヒエ、イナキビなどの雑穀類は大変重宝されました。

昭和34(1959)年以降は、宿主別区域の町有牧野が大規模に草地化され始め、町基幹産業に「和牛生産」が加わりました。そのことに伴って家畜飼料の生産も活発になり、牧草、デントコーンなどの栽培も増えていき、現在に至っています。

稲作については、町内の他地域に比べてあまり盛んではありません。地区の大半が高位段丘上に位置しており、河川からの取水に不向きな土地柄も影響しています。現在は一農家のみ、小規模に水稲を作付けしています。



写真２　段丘一面に造成された耕作地。戦後開拓の雰囲気が今に受け継がれている(北西側から撮影)。

農作物の今日

地域の生業の今日的状況をみると、酪農及び肉牛などの畜産農家も多いという特徴があります。

路地野菜については開拓期以降、一貫して栽培されており、ビート、カボチャ、ジャガイモ、アスパラなどが生産されています。しかし、近年ではシカの食害などにより作付面積は減少傾向にあります。

農地景観に地域の歴史をみる

かつての農地造成において、農耕馬は必要不可欠な存在でした(写真３)。

馬具を装着した馬にプラウなどをくくり付けて、広大な畑が耕される様子は、北海道の春を彩る風物詩でもありました。

農機具の機械化が進んでいない昭和30年代以前は、数頭の馬を飼うための畜舎がどの農家にもありました。芽生の最盛期(80世帯、412人)である昭和26(1951)年には、たくさんの馬が農地を耕していました。

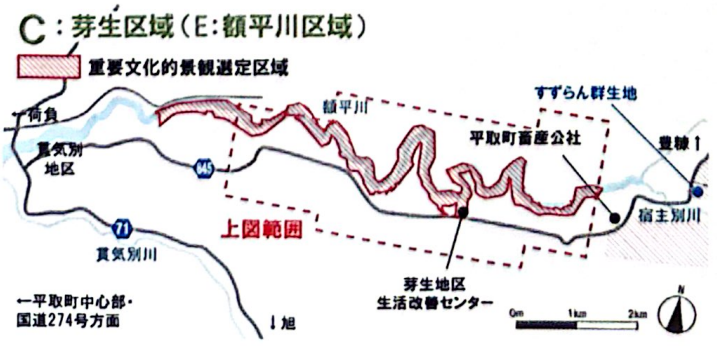
機械化による作業効率の向上は、人と馬との密接な協働関係を大きく変えました。現在ではトラクターを用いた耕作が当たり前に行われ、農業を営む姿も現代的になっています。しかし、戦後開拓で育まれた農地の姿は、大きく変わることなく今に受け継がれています。



写真３　春の耕作と農耕馬の親子(貫気別郷土誌編集委員会 2005)。



写真４　芽生の現況と農地変遷。



「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

■文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055-0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828

初　版:2014年6月
第2版:2020年3月

芽生の樹木をみる

57

関連シート：50，51

芽生の樹木がもつ魅力

北海道の開拓景観を彩るものの１つに、住民が大切にしてきた樹木があります。

地域あるいは個人の御神木、開拓記念の植樹などといった想いの中で残されてきた樹木は、穏やかな農村景観に一層の深みを与えています。

開拓記念樹

民家の建築に伴う庭への植樹は、今も昔も変わらず行われています（写真１）。

樹種はさまざまに選択され、家ごとに個性的な趣をみせています。地元にない木を愛でたいという趣向や可食性の有無なども反映されたことと思います。道外からの移住者にとっては、望郷の念を本州の木にみる想いもあったといいます。

これらの樹木は、住民が地域にしっかりと腰を据えたことの記念碑でもあります。

外来種では、ヨーロッパトウヒ、ストローブマツ、ニオイヒバ、ニホンアカマツなどがよく用いられます。

在来種はハルニレ、ミズナラ、サクラ、ナナカマド、ゴヨウマツ、サラサドウダンなどがみられます。



写真１　開拓民家の記念樹（南東側から撮影）。樹形の良いストローブマツとサクラが景観に彩りを添えている（写真３の１）。

ヤマザクラの文化的景観

旧Ｋ氏宅の裏山は、サクラの名所として知られています（写真２）。

故Ｋ氏は、所有地の裏山に自生するヤマザクラを非常に大事にしていました。

ご子息が幼少の頃、枝を折ったりしたら怒られる程だったそうです。その結果として現在でも５月中旬頃には、群生するサクラの開花を裏山にみることができます。

Ｋ氏は、昭和 20(1945)年に東京開拓団として芽生（めむ）に移住してくる以前は、将来を嘱望された芸術家（専門は塑像（そぞう））でした。農地の開墾で苦労を重ねる一方、サクラが咲き誇る山を守りながら春の色彩を愛でるという感性をもち続けた人でもありました。

美しいサクラはそうした移住者の前向きな想いも私たちに教えてくれます。

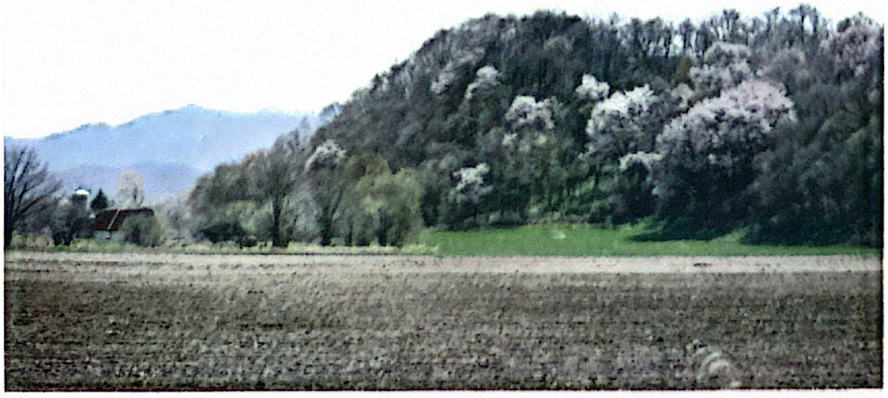


写真２　旧Ｋ氏宅の裏山（南西側から撮影）。一面に咲く美しいサクラが故人の想いを今に伝えている（写真３の４）。

樹木に込められた住民の想い

食用としても価値が高いスモモ、クリなどは、庭木としてよく植えられます。

スモモは大正期における開拓の

奨励作物であったとされており、地域にとってもなじみ深い木であったようです。

クリは自然分布域（平取町本町付近）以北でも、町内では開拓記念樹・庭園木として植樹された個体が連綿とみられます。

屋敷林をみる

旧芽生小学校より奥側（豊糠方面）は、とりわけ風が強い自然環境にあります。そのため、付近に建つ幾軒かの住宅では屋敷林を備えています。

屋敷林の樹種はトドマツを主としてストローブマツ、カラマツ、ニホンアカマツ、ニセアカシア、クリ、エゾヤマザクラ、オオモミジなどで構成されています。

今日では防風のためのしっかりとした屋敷林が少なくなってきました。平取町の人口分布域の多くが、風の穏やかな土地柄であることも要因の一つと考えられます。

今日の農村景観の中にみられる屋敷林も、芽生の厳しい自然と向き合ってきた暮らしの姿といえます。

芽生の昔・今を知る御神木

旧芽生小学校跡地前に巨大な3本群立のハルニレがあります（樹高 23m、幹回り約3m）。

推定樹齢は約 300 年を越えており、17 世紀後半位から芽生の人と文化の往来をみてきた木といえます。

近代における芽生の開拓は、明治37(1904)年以降に軍馬生産の牧野が整備され、大正元（1912）年から開墾を伴う本格的な移住が行われたとされています。

そうした中で「畑がこの木の日陰になり作物がとれないので、3人の山子に伐採を依頼しました。しかし、不思議と3人とも鋸を入れることができませんでした。住民はこれこそ御神木と、その後は一層この木を崇め、大切に保全しています」という逸話が町保存樹解説版に記載されています。

宗教的な習俗・慣習が今日とは比べものにならないくらい重い時代の、巨木への畏敬の念を表わす言い伝えでもあります。

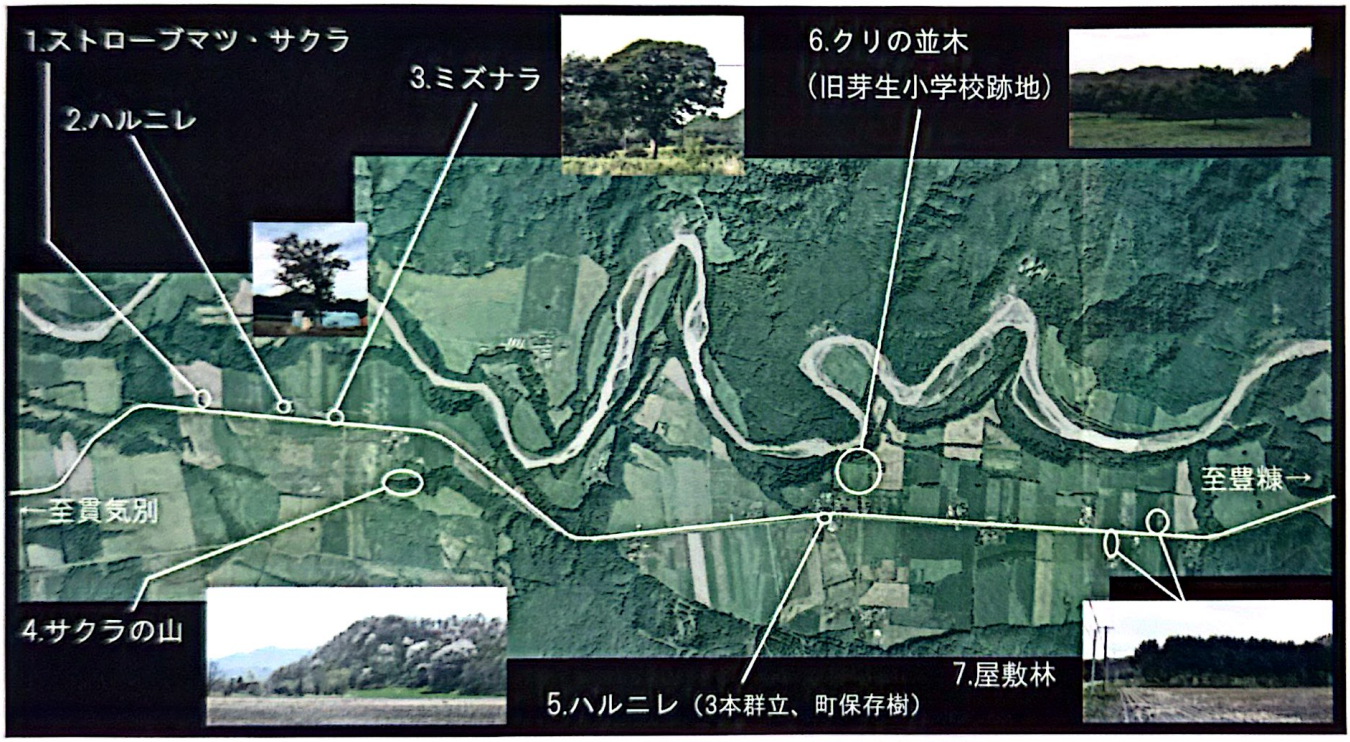
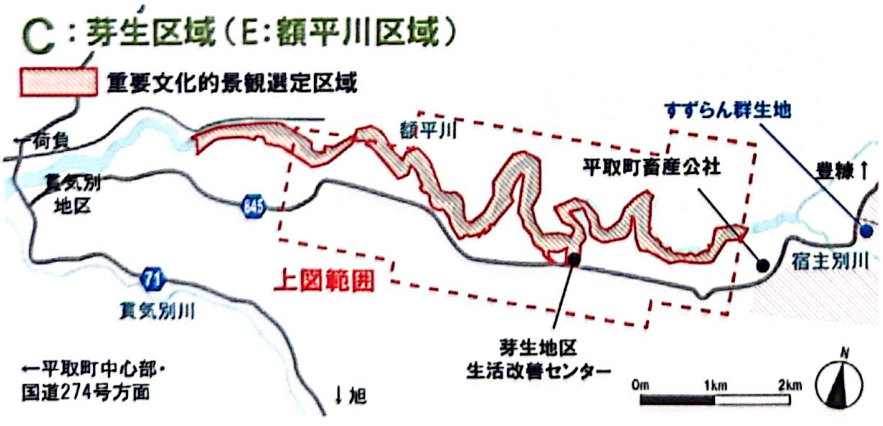


写真3　芽生区域を彩るさまざまな樹木(見学の際は民地への立ち入り禁止)。



「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055-0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828

初　版:2014年6月
第2版:2020年3月

牧野の今・昔

所在地：平取町字芽生（めむ）

58

関連シート：21、28、29、49、59

北海道の牧野

牧野とは家畜の放牧や採草に用いられる場所の総称です。

北海道における牧馬の改良繁殖は、寛政十一（1799）年、馬産のため様似地方に南部馬60頭を配置したのが始まりとされています。

これ以後、日高の自然条件は放牧に適したため、必要に応じて使役する以外は山野に放牧していました。それがいわゆる道産子と呼ばれる種類として固定しました。

馬を飼い養うことは近代化を急ぐ明治政府にとってきわめて重要な課題で、特に軍馬の供給を進めるための適地として、日高、十勝、釧路の太平洋沿岸が選ばれました。

これらの地方に共通するのは雪の少ないことで、放牧期間が長く取れるというメリットがあります。雪の少ない地方においては、馬が食べるミヤコザサが分布することも大きな利点でした。

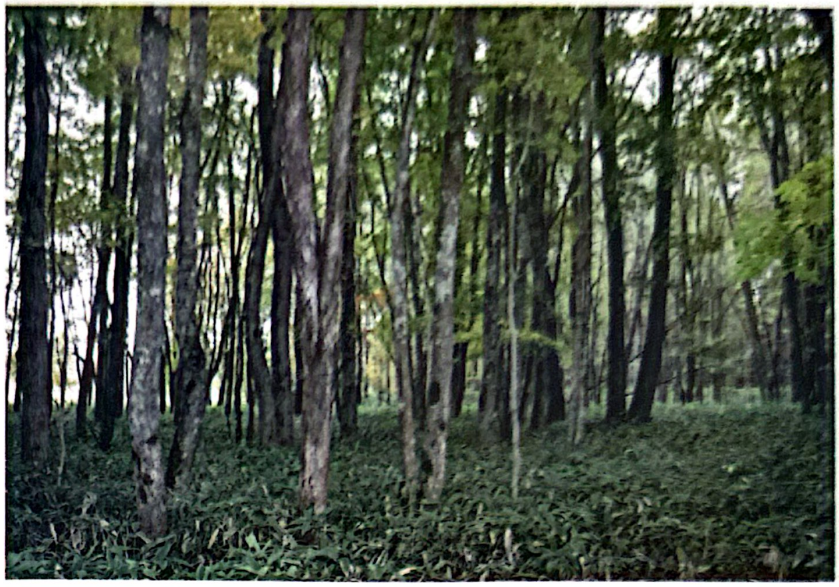


写真１　かつての林間放牧を彷彿とさせる芽生の平原林。林床にはエゾミヤコザサが繁茂する。牧野の草地造成前は、ハルニレやカシワの巨木が生える疎林であったとみられる。

組織的に家畜を飼い養ったのは明治になってからで、明治５(1872)年に北海道開拓使によって静内・新冠・沙流に約７万ヘクタールの牧場が設置(明治21年に新冠御料牧場と改称)されました。

その後、開拓使雇のエドウィン・ダンの設計によりアメリカ式農業の一環として、明治９(1876)年に札幌の真駒内に牧場が設けられ、翌年には新冠牧馬場の再編も行われました。

軍馬生産

明治34(1901)年以降、軍馬生産に国力が注がれるようになりました。日露戦争が開戦した明治37(1904)年には、平取外八箇村の村域内９カ所に4000町にわたる協同牧場が設置され、更にその３年後には宿主別牧場が払い下げられて(国有林の解放)、畜産の改良発達が促されました。

昭和12(1937)年以降は、日中戦争の戦線拡大に伴い、軍馬購買が飼育者の都合によらず強制的に執行されるようになりました。

国家総動員計画法により、馬の生産高などは全て軍事資源機密とされました。また、若者が戦線に送りだされたこともあり、馬の飼育は残された老幼婦女子の手によって行われました。



写真２　新冠御料牧場（北海道大学附属図書館編　1992）。近代における北海道の馬産は、沙流川流域における広大な協同牧場の発展を促した。

牧野林

牧野は基本的に開放空間、すなわち草原です。森林が発達する気候のもとでは、森林を伐採して明るい空間を作らなければ草原は成立しません。

そうした場所で家畜を放牧するため、牧野に林は存在しません。しかし、北海道では牧野林というものが生まれました。これは林間放牧とか混牧林とも呼ばれます。

世界的にみると、イタリア・スペインでブタをナラ林に放牧する例やネパールやブータンの山羊・ヤクの放牧、シベリア東部などのトナカイ放牧などがあります。

しかし基本的には、積極的に林の中に放牧する例はあまりなく、牧野林は北海道に生まれた特異なものだといえます。

かつて根室・釧路地方ではかなり広くみられましたが、今ではほとんど残っていません。日高地方に残っている牧野林は、歴史的にも文化的景観にふさわしいものといえます。

牧野事業

宿主別の町有牧野は、馬を主とした共同放牧地として林間放牧が行なわれいてましたが、昭和 34(1959)年、草地開発整備事業によって 208.5 ヘクタールの牧草地・施設の整備が進められました。

昭和37(1962)年以降、黒毛和牛の導入本格化に伴い、町有牧野(宿主別区域)の業務の中心は肉用牛に移っていきました。

現在、町有牧野の管理、運営は平取町から委託を受けて平取町畜産公社が行っています。

参考文献：辻井(2006)
渡辺・河野(1974)、平取町史編集委員会(2003)

資料_宿主別区域における町有牧野の歩み

明治37(1904)年
日露戦争を契機に軍馬生産に国力が注がれ、同時に産馬による住民の収入増加と生活向上が企図される。紫雲古津、荷菜、平取、二風谷、荷負、貫気別、長知内、フレナイ、イワチシの9箇所4000町にわたり共同牧場が交付された。

明治40(1907)年
宿主別牧場の払い下げ(国有林の解放)を受けて、畜産の改良が促された。

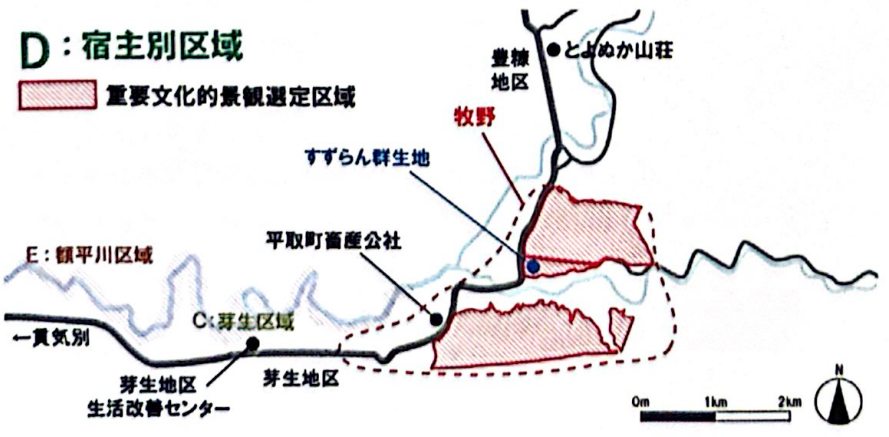
昭和34(1959)年
町有牧野(宿主別)の季節解放(夏山・冬里方式)のために整備が行われる。

昭和37(1962)年
畑作農家の経営改善と畜産振興の一環として、島根県から和牛(肉用)牡54頭を導入。

昭和48(1973)年
有限会社平取町畜産公社を設立。牧野管理、優良牛の生産、肥育事業を実施する。



写真３　町有牧野内に残る牧野林(宿主別区域)。かつて牛馬放牧の一般的な方法であった林間放牧の姿の一部を、牧野内の日陰樹としてみることができる(南西側から撮影)。



「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055-0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828
初　版:2014年6月
第2版:2020年3月

すずらん群生地について

59

所在地：平取町字芽生（めむ）

関連シート：29、49、58

過放牧林とその植生

宿主別に所在する町有牧野は現在、和牛生産のための牧草地となっていますが、戦前は軍馬が林間放牧される牧場でした。

家畜が放牧されている環境下において、植生の回復以上に放牧圧が高まることを、過放牧といいます。過放牧によって生まれる植生は、必然的に家畜の不食草や踏圧に強いもの、有毒植物が多くなります。そうした植物の中にすずらんも含まれます。

すずらんは北海道各地に分布しますが、必ずしも大きな群落を形成するものではありません。カシワあるいはミズナラの疎らな林内などに多くみられます。

もともとは火山灰土壌に多く育成するもので、支笏や樽前の火山灰地である早来の牧場で、古くは昭和天皇がすずらん狩りをされたことも知られています。

昭和 30 年代まではこうした群生を各所にみることができました。

宿主別区域のすずらん群生地は、軍馬生産の下で形成された群落で、その成立には過放牧が大きく働いています。つまり、牧野林（林の中で行う放牧形態）において初めて形成された群落といえます。

その後、家畜のために栄養価のある牧草に転換されたことや馬を飼うことがなくなったこと、エゾミヤコザサの繁茂や大型草本の生育によりすずらんが被圧され、一時は数を減らしていました。

現在では馬の代わりに人が草刈りをしてすずらんの育成を補助しています。



写真１　約15ヘクタールもの広がりをもつすずらん群生地。近代に行われた軍馬生産の林間放牧により、群生化が促されてきた。

すずらんについて

本州中部以北、東北、北海道の高地に多く自生する多年生草本で、「君影草」「谷間の姫百合」という別称もあります。有毒植物で、特に花と根の毒性が強いとされています。春の山菜として人気の高いプクサ(ギョウジャニンニク)に似ていることもあり、過って摂取し中毒症状を起こす例もみられます。

アイヌ語名は地方によって違い、幾つもの呼ばれ方があります（表１）。沙流川流域では、すずらんをセタプクサ、ヌプキナと呼びます。

その理由として、知里(1953)は“葉が似ているくせに食用にならぬというので「犬のギョオジャニ



写真２　美しいベル状の花は6月上旬前後にみることができる。



写真３　プクサ(ギョウジャニンニク)。葉がすずらんに似ているため、注意が必要。

牧野林

牧野は基本的に開放空間、すなわち草原です。森林が発達する気候のもとでは、森林を伐採して明るい空間を作らなければ草原は成立しません。

そうした場所で家畜を放牧するため、牧野に林は存在しません。しかし、北海道では牧野林というものが生まれました。これは林間放牧とか混牧林とも呼ばれます。

世界的にみると、イタリア・スペインでブタをナラ林に放牧する例やネパールやブータンの山羊・ヤクの放牧、シベリア東部などのトナカイ放牧などがあります。

しかし基本的には、積極的に林の中に放牧する例はあまりなく、牧野林は北海道に生まれた特異なものだといえます。

かつて根室・釧路地方ではかなり広くみられましたが、今ではほとんど残っていません。日高地方に残っている牧野林は、歴史的にも文化的景観にふさわしいものといえます。

牧野事業

宿主別(しゅくしゅべつ)の町有牧野は、馬を主とした共同放牧地として林間放牧が行なわれいてましたが、昭和 34(1959)年、草地開発整備事業によって 208.5 ヘクタールの牧草地・施設の整備が進められました。

昭和37(1962)年以降、黒毛和牛の導入本格化に伴い、町有牧野(宿主別区域)の業務の中心は肉用牛に移っていきました。

現在、町有牧野の管理、運営は平取町から委託を受けて平取町畜産公社が行っています。

参考文献：辻井(2006)
渡辺・河野(1974)、平取町史編集委員会(2003)

資料　宿主別区域における町有牧野の歩み

明治37(1904)年
日露戦争を契機に軍馬生産に国力が注がれ、同時に産馬による住民の収入増加と生活向上が企図される。紫雲古津(しうんこつ)、荷菜(にな)、平取(びらとり)、二風谷(にぶたに)、荷負(におい)、貫気別(ぬきべつ)、長知内(おさちない)、フレナイ、イワチシの9箇所4000町にわたり共同牧場が交付された。

明治40(1907)年
宿主別(しゅくしゅべつ)牧場の払い下げ(国有林の解放)を受けて、畜産の改良が促された。

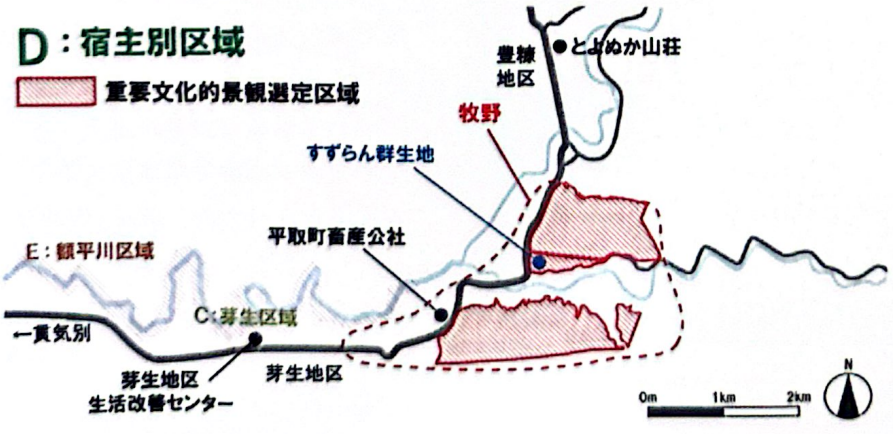
昭和34(1959)年
町有牧野(宿主別)の季節解放(夏山・冬里方式)のために整備が行われる。

昭和37(1962)年
畑作農家の経営改善と畜産振興の一環として、島根県から和牛(肉用)牡54頭を導入。

昭和48(1973)年
有限会社平取町畜産公社を設立。牧野管理、優良牛の生産、肥育事業を実施する。



写真３　町有牧野内に残る牧野林(宿主別区域)。かつて牛馬放牧の一般的な方法であった林間放牧の姿の一部を、牧野内の日陰樹としてみることができる(南西側から撮影)。



「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055-0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828
初　版:2014年6月
第2版:2020年3月

すずらん群生地について

59

所在地：平取町字芽生（めむ）

関連シート：29、49、58

過放牧林とその植生

宿主別に所在する町有牧野は現在、和牛生産のための牧草地となっていますが、戦前は軍馬が林間放牧される牧場でした。

家畜が放牧されている環境下において、植生の回復以上に放牧圧が高まることを、過放牧といいます。過放牧によって生まれる植生は、必然的に家畜の不食草や踏圧に強いもの、有毒植物が多くなります。そうした植物の中にすずらんも含まれます。

すずらんは北海道各地に分布しますが、必ずしも大きな群落を形成するものではありません。カシワあるいはミズナラの疎らな林内などに多くみられます。

もともとは火山灰土壌に多く育成するもので、支笏や樽前の火山灰地である早来の牧場で、古くは昭和天皇がすずらん狩りをされたことも知られています。

昭和 30 年代まではこうした群生を各所にみることができました。

宿主別区域のすずらん群生地は、軍馬生産の下で形成された群落で、その成立には過放牧が大きく働いています。つまり、牧野林（林の中で行う放牧形態）において初めて形成された群落といえます。

その後、家畜のために栄養価のある牧草に転換されたことや馬を飼うことがなくなったこと、エゾミヤコザサの繁茂や大型草本の生育によりすずらんが被圧され、一時は数を減らしていました。

現在では馬の代わりに人が草刈りをしてすずらんの育成を補助しています。



写真１　約15ヘクタールもの広がりをもつすずらん群生地。近代に行われた軍馬生産の林間放牧により、群生化が促されてきた。

すずらんについて

本州中部以北、東北、北海道の高地に多く自生する多年生草本で、「君影草」「谷間の姫百合」という別称もあります。有毒植物で、特に花と根の毒性が強いとされています。春の山菜として人気の高いプクサ(ギョウジャニンニク)に似ていることもあり、過って摂取し中毒症状を起こす例もみられます。

アイヌ語名は地方によって違い、幾つもの呼ばれ方があります（表１）。沙流川流域では、すずらんをセタプクサ、ヌプキナと呼びます。

その理由として、知里(1953)は“葉が似ているくせに食用にならぬというので「犬のギョオジャニ



写真２　美しいベル状の花は6月上旬前後にみることができる。



写真３　プクサ(ギョウジャニンニク)。葉がすずらんに似ているため、注意が必要。

ンニクの葉」とか「キツネのギョオジャニンニクの葉」とか悪口を云ったのである。”と解説しています。

いずれの方言も、ブクサの葉に似るが食べられないという意味に基づいており、その認識の中に美しい花を愛でるという想いをみることはできません。あくまでも毒草を口にしてはいけないという観点が重要だったのでしょう。

ブクサが、重要な食料資源として重宝されることと相反する呼び名でもあります。その背景に、厳しい自然と対峙してきた北海道の歴史を垣間見ることができます。

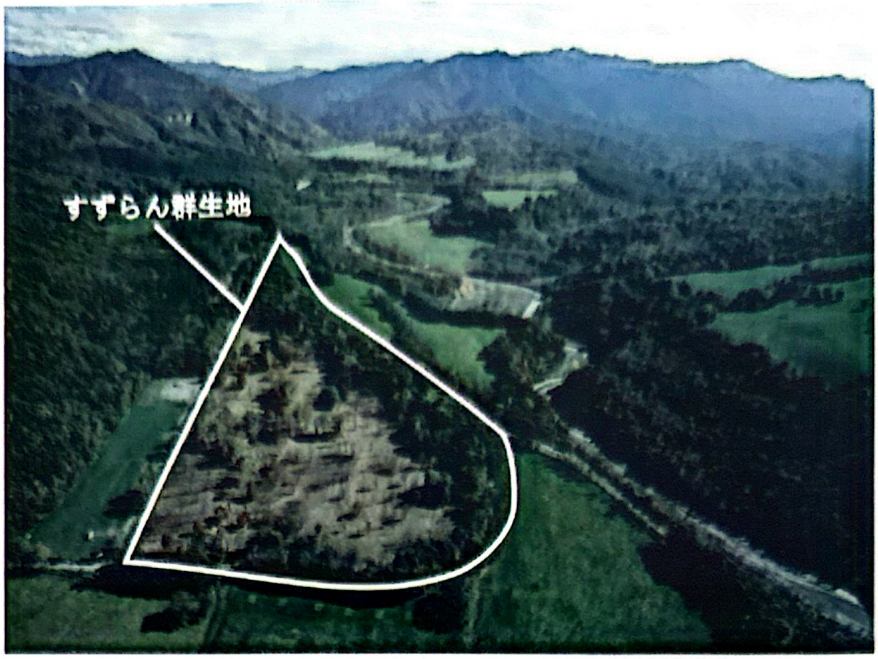


写真４　すずらん群生地(囲い部分)と周辺の町有牧野。現在、群生地は町指定天然記念物、重要文化的景観(国選定)として保護されている(西側から撮影)。

資料　すずらんのアイヌ語名

1、セタプクサ　seta(犬)　pukusa(ギョウジャニンニクの葉)《幌別・沙流》

2、セタキト　seta(犬)　kito(ギョウジャニンニクの葉)《眞岡・白濱※》

3、シキトネカハ　si(自分を)　kito(ギョウジャニンニクの葉)　ne(にならﾗ)　ka(せる)　p(もの)、ギョウジャニンニクもどき《大泊》

4、チロンヌプキナ　chironnup(狐)　kina(草)《十勝》

5、ヌプキナ　nup(野)　kina(草)、おそらくchironnup-kinaがもとの形であろう《沙流》

6、ヌププクサ　nup(野)　pukusa(ギョウジャニンニクの葉)、たぶんchironnup-pukusaがもとであろう《千歳》

※眞岡、白濱、大泊は樺太の地名

(知里 1953)

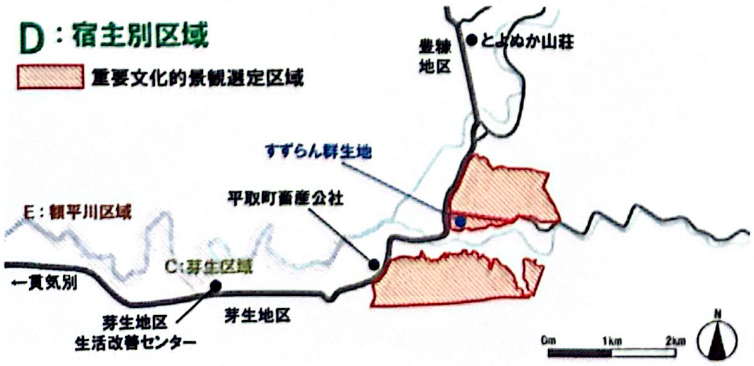
すずらん観賞会について

昭和32(1957)年に第１回が行われて以来、毎年５月末～６月上旬にかけて催されています。

約15ヘクタールに及ぶ宿主別のすずらん群生地を会場に、毎年多くの観光客が集う平取(びらとり)町を代表するイベントです。

当初はすずらん狩りも行われていましたが、車の出入りや乱獲、人の踏み荒らしなどで絶滅の危機に陥ったため、昭和50(1975)年度より一時観賞会が中止されました。その後、観賞用の通路や制限区域を設置して管理し、現在の期間限定による一般公開の形をとって再スタートすることとなりました。

昭和54(1979)年には町花として制定され、後に群生地が町天然記念物(平成８：1996年)及び重要文化的景観(平成19：2007年)となり、さらなる保全拡充が図られるようになりました。



「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

■文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055－0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828
初　版:2014年6月
第2版:2020年3月

オキクルミのチャシとムイノカ

60

所在地：平取町字荷負（におい）

関連シート：10、61、62、64

オキクルミの伝承地について

沙流川流域には地域のウパシクマ（言い伝え）によって受け継がれてきたオキクルミの伝承地が幾つも所在します。オキクルミがどこに降臨してどこに住んでいたのかということや、どんな活躍をした場所なのかということについても、そうした諸記録の所々にみることができます。

オキクルミは、アイヌに様々な生活の方法を教えたカムイとされています。沙流川に降臨してこの土地に住み、いつの日かまたカムイの世界に帰っていったのだと伝えられています。沙流川流域はオキクルミが降臨した土地ということで、この地域に住む人たちは大変誇りに思っているという考え方が近現代にも受け継がれています。



写真１　オキクルミのチャシ（写真中央部にあるこぶ状の山）。５月上旬にはヤマザクラやキタコブシによって彩られる。尾根付近には若干の針葉樹も確認できる（東側から撮影）。

チャシと伝えられる山

かつてオキクルミ夫妻が住んだとされるチャシ（居城）は、額平川河口域の左岸側から上流側に向かってでこぼこに続く丘陵の端にある突き出た岩山にあります。

同じ丘陵のやや額平川下流側には、半月状に欠けた崖面であるムイノカ（箕・形象）が所在します。

チャシとムイノカが所在する丘陵一帯は、平取町を縦断する幹線道路から外れており、民家もありません。伝承地を含む周辺は切り立った山が連なっており、ほぼアイヌ口承文芸で受け継がれるオキクルミ伝承のイメージを損なわない状態が維持されています。



写真２　ムイノカ（写真中央にある半円形の岩面）。10月の落葉前には山林全体が紅葉色に覆われる（北側から撮影）。

地域住民の想い

かつてこの場所は、オキクルミカムイの聖地として崇められ、人が近づいてはいけなかったと言われています。荷負本村や貫気別など近隣の住民が付近を通るときは、頭につけているかぶり物などを取りはずし、また不浄な女の人など通行するときは、わざわざ裏道を歩かされるほど聖地のそばを遠慮しながら通行したと伝えられています。

ムイノカは、オキクルミの妹（アイヌ伝承では妻のことを妹と表現する）がカムイの世界に帰る時に忘れていったムイ（箕）が、岩になって崖面に残ったものとされています。神聖な居城がこの近辺にあったのだという想いを根拠づける象徴としてもみられており、分かり易く具体的な「もの」として高い価値をもっています。

この形象は額平川(noka pira：形象・崖)の語源になったとも言われています。河川名称がどのような変遷の中で付けられてきたのかはまだ検討を要しますが、現在定着している「額平川」は、オキクルミ伝承との関わりの中で地域住民に認識され続けてきた名称とみられます。

オキクルミのチャシ周辺の山林は、夏は深緑、秋は紅葉色、冬は褐色と白といった様々な色合いが奥深く連なっています。道道平取静内線を走りながらこの辺りを観ると、切り立った奥深い山々に神々しさを感じます。地域住民が崇める場所として、何らかの意味合いを込めたことが必然とも思われる雰囲気をもつアイヌ伝承地です。



写真3　平取町二風谷アイヌ語教室による演劇「子どもと遊んだ神」の公演(平成23:2011年)。オキクルミとサマユンクルが登場するウエペケレとして伝えられている。地域住民自らが演劇を行なうことで、沙流川流域のオキクルミ信仰を分かりやすく紹介する機会になった。

オキクルミ伝承を地域一体で考える

地域に住む人たちのオキクルミへの想いは、アイヌ口承文芸の中にいろいろな形で織り込まれています。平取町のアイヌ文化振興にとっても、物語世界・言い伝えの中でどのような内容や規則で語られるものであるかを理解することは非常に重要なことです。

オキクルミが出てくるのは、基本的にカムイユカラ(神謡)の中であるとされています。その場合、主人公は雷神、カジキマグロ、キツネ、ウサギ、アオバトといった他のカムイたちで、そこにオキクルミはサマユンクルとともに登場します。

ある時は良いカムイの言うことにオキクルミは従って幸福になり、サマユンクルは従わずにひどい目にあいます。ある時は悪いカムイのためにサマユンクルがひどい目にあい、オキクルミがその悪いカムイを退治するといったストーリー展開があります。

道東や石狩地方に行くと、オキクルミはオキキリマ、サマユンクルはサマイエクルなどと変わり、関係も逆転してオキキリマがひどい目にあい、サマイエクルが良い役どころになります。

北海道にはサマイエクル信仰とオキクルミ信仰のふたつの流れがあり、それが融合してそれぞれの主神を上位に置く神謡のスタイルが出来上がったと考えられます。こうした内容検討からも、沙流川流域の主神がオキクルミであることを窺うことができます。

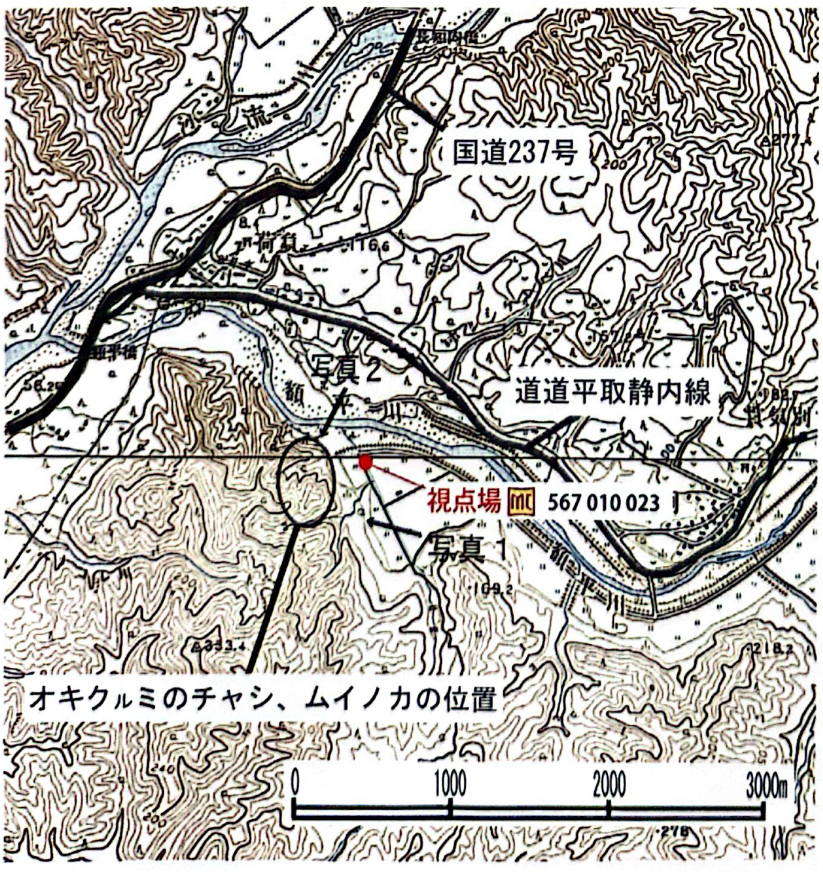


図　チャシとムイノカは、額平川河口域に程近い左岸側の山林にある。

「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

■文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055-0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828
初　版:2014年6月
第2版:2020年3月

オキクルミ伝承にみる植物利用

61

関連シート：6、10、60、64

オキクルミと植物

沙流川流域は人文神オキクルミが降臨した土地として、多くのアイヌ伝承が残されています。オキクルミはアイヌにピヤパ(ヒエ)などの農作物をもたらし、アットゥシ(樹皮衣)の制作、スルク(トリカブト、毒)の用い方を教えたと伝えられています。また、パコロカムイ(疱瘡神)が来襲したときは、ノヤ(ヨモギ)で草人形を作り退けたという伝承もあります。

スルクなどの有用植物は、地域のウパシクマ(言い伝え)に度々登場します(資料１・２)。受け継がれてきたアイヌの暮らしにおける重要性を示していると考えられます。平取町にはトリカブトの採集地と思われるスルクと名のつく地名が幾つかありますが、川向地区(沙流川左岸)には旧小字名としてスルクウンピピ、スルクン、スルクウシ等の地名が広範囲に残っています(図)。

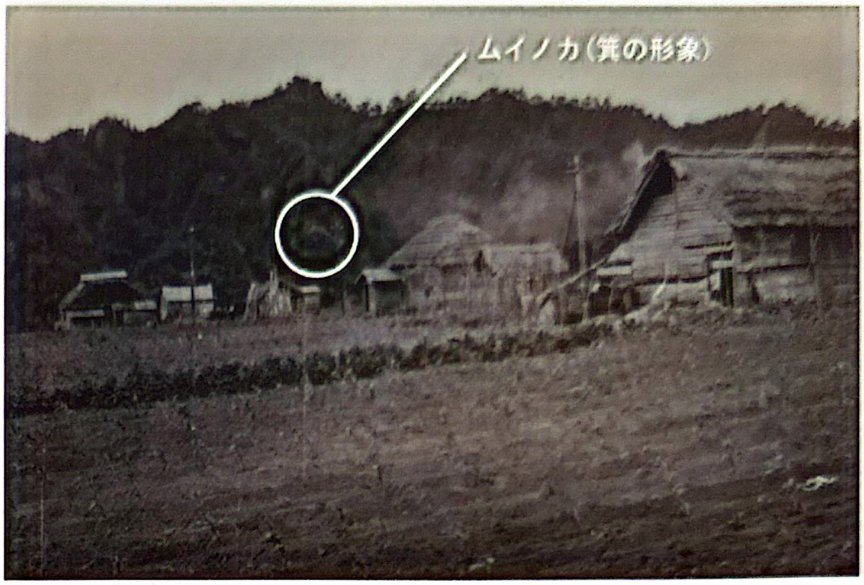


写真１　シケレペコタンとムイノカ(昭和30年代前半の撮影と推定　寺嶋芳郎氏提供)。露地栽培を行いやすい額平川右岸の段丘面に集落が形成されている(北東側から撮影)。

シケレペコタンについて

荷負地区にシケレペという地名があります(資料３)。現在では過疎化によって民家もまばらですが、かつてはペナコリ、ホピポイ、荷負本村と並ぶ荷負村の主要な集落の一つでもありました(平取外八箇村小学校組合會編 1917)。

明治時代の古地図には、ここより山林を通って沙流川へ抜ける古道が記されています。旧小字名ホピポイへ出て、オサチナイ、ポロサルへ向う生活道路がありました。現在もその旧道の一部は残っています。

シケレペコタンからみて額平川の対岸にオキクルミのチャシ(居城)とムイノカ(箕の形象)が所在します(写真１)。シケレペコタンの住民から崇められ、大切にされてきた場所であると伝えられています(荷負自治会郷土誌編集委員会 1988)。

オキクルミとシケレペコタンの関わりが述べられたウパシクマがあります(資料３)。その中に「ヒエのご飯」が登場します。前述し

資料1　スルク(トリカブト)について

アイヌは、この植物の生えている土地によってその毒性に強弱があるものと考え、自分の部落の山野に大量に見出されるにも拘わらず、はるばる他村へそれを採りに出かけたりする。…トリカブトで変死したものがあると、平取の酋長は、トリカブトを使う人々の間を廻ってiramkararpareして(義損金を募って)、それを持って先方の家を見舞うのが常であった。…この植物は、たいていの部落の山野にあったことと思われるのに、或る特別の場所だけがその産地或いは採集地の名を負わされている所以は、その場所のトリカブトの根が特によく効くと考えられたからに他ならない。

(知里 1953)

資料2　アイヌの狩猟(特に大型哺乳類)におけるスルクの利用

アイヌはsurku(矢毒)を矢尻や銛先につけ込んで使用したが、そのつけ込み方や獣ごとの必要な毒の量ついての記録はない。しかし強毒のsurkuは熊や鹿だけでなく鯨も斃せたのである。沙流アイヌのパンタメ翁の話として「熊はトリカブトだけの毒で二時間以内で死に、毒増強物を加えたsurkuは一時間以内に死ぬ。矢に当たった当初熊は暴れるが、徐々に静かになり、ついに気力を失い臥し、四肢硬直死に至る。

(犬飼・門崎 2000)

たオキクルミの降臨伝承と同様、ピヤパ(ヒエ)はアイヌの伝統的な植物利用において重要視されていたことがうかがえます。

またシケレペ(キハダの実)も、食材や薬として用いられる有用植物です。実はブドウのように枝にびっしりとなります(写真２)。熟しすぎてしまうとポロポロこぼれ落ちてしまうので、まだ実が青く、霜が降りないうちに採取します。

乾燥させると保存がきき、アイヌ料理の香辛料としても利用されます。噛んでみると舌がビリビリするような刺激があります。

実には健胃効果もあります。木の幹は、内側の黄色い部分を剥いで乾燥させて、粉にしたものを水で練って患部に当てると湿布薬になります。

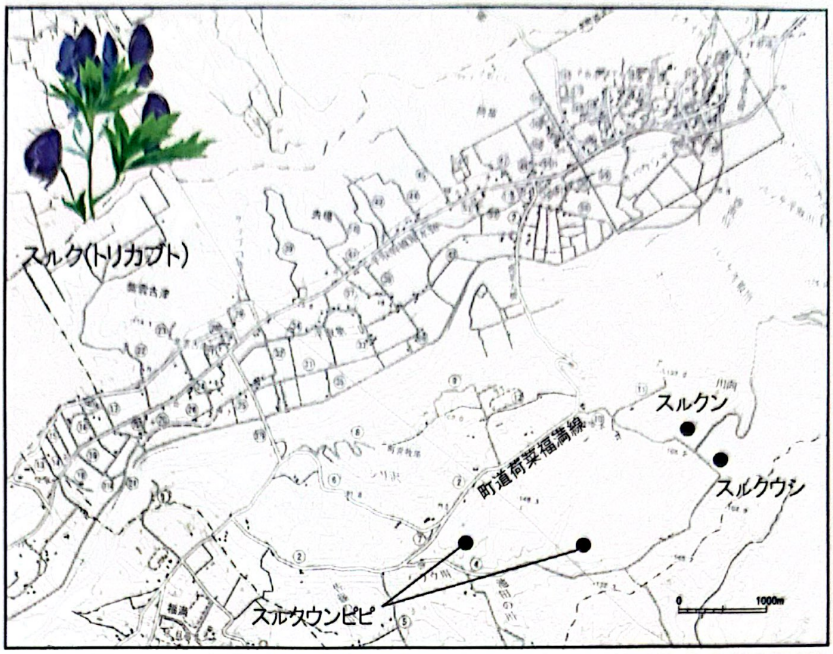


図　川向地区のシラウ川流域にある「スルク」の地名。大型哺乳類などの捕獲においては矢に塗布する良質なスルクが欠かせない。

アイヌ文化継承との関わり

現在、平取地域イオル再生事業の水辺空間(平取町本町)では、ピヤパ(ヒエ)やシプシケプ(イナキビ)などが栽培され、収穫や伝統料理体験が行われています。

アットゥシアミプ(樹皮衣)の原料であるオヒョウの木、仕掛け弓に用いるスルク(トリカブト)など、アイヌの有用植物のことを知ると、オキクルミの伝承地めぐりやアイヌ民具、アイヌ口承文芸を知る楽しみが増します。



写真２　シケレペ(キハダの実)は、ラタシケプ(煮物)等の具材になり、薬用効果も高い。

資料3　シケレペコタンのウパシクマ(言い伝え)

オキクルミカムイがシケレベのチャシを根拠に、アイヌモシリ(北海道)各地のアイヌ達に暮しの仕方を教えて歩いていた頃、この沙流川地方が物凄い豪雪に見舞われたということであります。一夜にしてコタンの家々も雪に埋もれ、鹿の群れも雪の下にとじこめられて死んでしまい、平和なコタンも壊滅状態になったということであります。

春になって雪が消えて、あれほど沢山いた鹿も全滅してしまって、川水も汚れるほどに腐った死体が累々と重なっていたということでありますが、鹿肉を主食にしていたアイヌ達も食べるものが無くなり、コタンの人々は餓死寸前に追い込まれたのでした。

このアイヌ達の窮状をしったオキクルミカムイは、自分の食べるものを削ってアイヌ達を救うことを考え、自分の妻にいいつけて、アイヌ達に食べ物を贈り続けた、とのことです。

オキクルミカムイの妻は、シケレベコタンの家々を毎夜のように訪れて、上座の窓からアサマリイタンキというお椀にひえのご飯を山盛りにしたのを、一軒一軒配って歩きました。アイヌ達にお椀を差しのべる、美しい手だけが見えて、姿の見えない女神からの贈り物を人々は感謝しながら受け取っていました。

ところがコタンには、あまり精神のよくない若者がいて、お椀を差し出すあの美しい手を一度でいいから握ってみたい、と考えていました。或る夜のこと、いつものように美しい手でお椀をすうっと差し出されました。待ちかまえていた若者は、お椀をとらずその美しい手をつかまえたのです。そのとたん、天地をゆるがす大爆発音が響きわたり、家の屋根も若者も一遍に吹き飛ばされてしまいました。

怒ったオキクルミカムイは、妻を連れて天上界の神の国へ帰ってしまった、ということです。

(荷負自治会郷土誌編集委員会 1988)

「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

■文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055-0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828
初　版:2014年6月
第2版:2020年3月

ニオイチャシ跡とその周辺

62

所在地：平取町字貫気別(ぬきべつ)183番地

関連シート：８、13、60、63、65

沙流川流域史調査団による調査

昭和34(1959)～39(1964)年の６カ年にわたり、早稲田大学によって沙流川流域史の調査が行われました。昭和36(1961)年６月には「沙流川流域史調査団」が早大文学部内に設けられ、４カ年の考古学・歴史地理学的調査(第一次～四次)が実施されています(桜井 1967)。

ニオイチャシ跡(写真１・図１・資料１)は第一次調査でアイヌ伝承の調査、第二～四次で考古学的調査が行われています。

発掘調査の結果(資料３)、山刀、スルクキㇰスマ(surku kik suma：毒・叩く・石：矢毒臼)とみられる擦り石の存在から戦闘用のチャシで、年代は火山灰の堆積から1660年代以前(樽前火山灰ｂ層：1667年降灰)、戦闘などの緊急な場合だけに使われた場であると結論づけられました。

トパットゥミと交戦したチャシという伝承(資料２)と合致する調査結果は、ウンチャシが祭祀用であったという伝承の裏付けにもなりました。



写真１　中央がニオイチャシ跡。孤島のようにも見えるが、背後の丘陵から額平川に向かって舌状に伸びる地形となっている(西側から撮影)。安政五(1858)年に当地を調査した松浦武四郎によるスケッチも残されており、「チャシコッ」(シート65参照)と表記されている。

アイヌ秘史

荷負本村の古老であるＥ.Ｋ氏(1911-1990)は幼少の頃、祖父から乗馬で額平川筋のチャシを教えてもらったそうです。現在、チャシ跡として登録されている８カ所(エサンピラ、トウナイ、トウラシ、ニオイ、モアシパケ、ペッカントウ、スケレペ、ウン)の場所を特定した方です。

ニオイチャシ跡を中心に直径10km程を案内して歩く古老は、熊の冬眠穴がどこにあるかということや、鹿を落す崖、伝染病の遺体が葬られた場所という悲話もします。古老はこの辺を松前から拝領した土地だと教えられています。

オキクルミ伝説(シート60)やローソク岩伝説(シート63)・雨乞いの場など(資料４)、古老は祖父から伝え聞いた話を教えてくれました。その成果の一部は『平取町

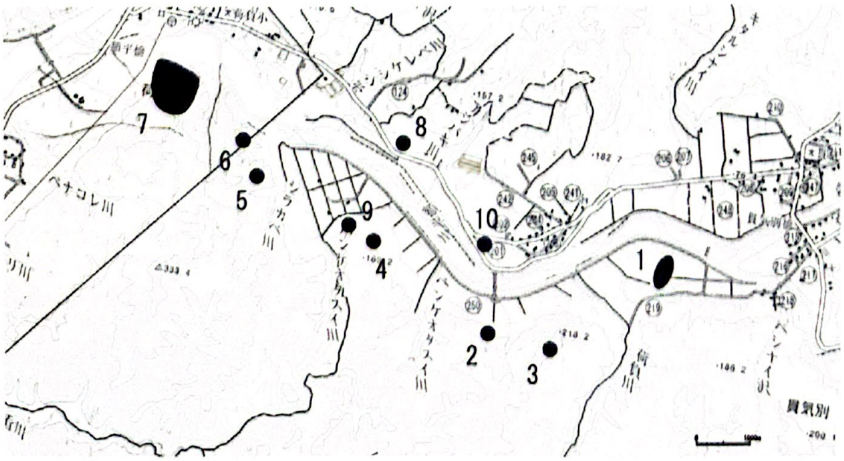


図１　ニオイチャシ跡近辺のアイヌ伝承地・チャシ跡。２・３はペクンチの伝承地として、雨に関わる逸話が残されている。

資料１　荷負本村周辺のアイヌ伝承地及びチャシ跡

	名称	伝承内容
1	ニオイチャシ跡	資料２
2	ウンチャシ跡	資料２
3	雨乞いの場(Ⅰ)	資料４
4	雨乞いの場(Ⅱ)	不明
5	オキクルミのチャシ	シート60
6	ムイノカ	シート60
7	イムチトヌプリ	シート63
8	スケレペチャシ跡	シート13
9	ペッカントウチャシ跡	不明
10	モアシパケチャシ跡	不明

史』(渡辺、河野 1974)に掲載されています。

古老は春の花見を兼ねて、度々松前町へ墓参に行っておられました。墓石は国指定史跡内にあり移設できないため、住職が絵本を残してくれています。

先祖は嘉永年間(1848-1853：幕府が松前に蝦夷を命ずるころ)に墓が建立されています。苗字帯刀の許可をえている士族だから松前藩の墓所に葬られたと伝えられています。

その子供に先祖伝来の品が家宝のように受け継がれました。金飾され葵の御紋が漆塗りされたシントコです(写真３)。座敷にシントコを置くと金屏風を開いたような華やかさです。ある絵師がシントコの模写をした際に、緊張のあまり体や手が震えたと伝えられる程の逸品です。





写真２　ニオイチャシ跡の出土遺物(沙流川歴史館　2004)。1667年以前からチャシ周辺の集落でクリを用いた露地栽培を行ない、多くの植物性食料を自給していたとみられる。また、当時すでに喫煙習慣が一般に広まっていたと考えられる。



写真３　K家に受け継がれたシントコ(行器)。金飾の鮮やかさ、重厚感ともに他のシントコにはない存在感を放っている。現在は、平取アイヌ協会に譲られて平取地域イオル再生事業のポロチセに納められている。

資料2　ニオイチャシとウンチャシの伝承

この地方にかつてトパットゥミ(十勝地方のアイヌで、沙流地方で武力的略奪行為をしたもの)が侵入してきて、火矢をチャシコッに射込んできたためこれが燃えはじめた。そこでチャシコッの人間であったアペクンチ(火を意味する)がウン・チャシの神ペークンチ(水を意味する)に助けを求めたところ、一天にわかにかきくもり、豪雨となってチャシコッの火を消し止めた。それで今でもウン・チャシに雲がかかると雨となる。

荷負本村　木村勘太郎氏外からの聞き取り
(沙流川流域史調査団 1962)

資料3　ニオイチャシ跡の発掘調査で得られた遺物

第二次調査　タシロ(山刀)、キセルの雁首、鉄片、胴片、うるし、永楽通宝、鋭利な刃物で切られたシカの骨、スルクキゥスマ(すり石)。
第三次調査　約75cm程と考えられる反り身の刀の部分、マキリ(小刀)、クワ先、装飾品と思われる骨製品、陶器、クマの骨、ピパ(淡水の二枚貝)、植物種子50～60粒。

(1963年5月8日付　毎日新聞)

資料4　雨乞いの場(ペクンチの伝承地)

荷負本村の額平川対岸で、高さ218mの山頂付近に5mほどの岩山が雨乞いを祈る所です。荷負本村の古老E.K氏(1911-1990)はこの場を「ペクンチ」と呼んでいました。

雨不足を感じると、祖父がしてきた雨乞いに基づき1人でその山に登ります。30分ほどたつと焚火の煙が上がります。数日後に雨がふると、おかげさま参りもします(荷負本村　E.K氏からの聞き取り)。



「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定



オキクルミの投げ槍伝承

63

所在地：平取町字貫気別(ぬきべつ)・荷負(におい)・二風谷(にぶたに)

関連シート：10、44、62

沙流川流域を彩る オキクルミ伝承地

ウパシクマ(言い伝え)の景観がストーリーで結ばれて、今現在良い状態で見ることが出来るセットが沙流川にいくつもみられます。

オキクルミの投げ槍伝承に出てくるペンケチトゥカンピラとイムチトヌプリ、オプシヌプリ(図１)は、親しみやすく見ることができる代表的な例といえます。



写真１　ペンケチトゥカンピラ(西側から撮影)。貫気別川左岸の支流であるペンケセタナイの河口域に所在する。尖塔状の岩山であることを示す別称もある(資料２)。

資料1　文化神の投槍が破った山

文化神オキクルミが沙流川の支流貫気別川の奥のエマニチヌプリ(焼串山)の上を居城にしていたとき、そこから額平川の支流トゥレプンナイ(うばゆりある沢)の山を目標にして、投槍の練習をしていると、槍がトゥレプンナイの山にあたらずにそれて、沙流川の川向いのオプシヌプリ(そこを破った山)という山を突き抜いて大穴をあけてしまった。その穴は地震のために上が崩れ落ちて、今はへこみにしか見えていない[二風谷　二谷一太郎伝]。

(更科 1971)

ペンケチトゥカンピラについて

伝承内容(資料１)をみると「貫気別の奥のエマニチヌプリ(焼串山)の上を居城にしていた」とあります。この一節にはオキクルミが貫気別川流域に、一時期住んでいたという認識が含まれています。

あるときは「オキクルミのチャシ」(荷負)や「ハヨピラ」(平取町本町)であったり、居住場所に関する多様な認識が流域住民にあることが分かります。

エマニチヌプリ(焼串山)のエマニチは、イマニッ(i-ma-nit：焼串)のなまりであろうとみられます。従ってイマニッヌプリは焼串山と解釈することができます。

イマニッヌプリは、古地図同定や住民からの聞き取りにより、ペンケチトゥカンピラ、ローソク岩と呼ばれていることも判明しています(資料２：本シートではペンケチトゥカンピラの呼称を主に採用)。

特徴的な形をした岩で、視点を変えて見ると違った形をしています。そういった変化も見ながら、オキクルミ伝承の世界を堪能するのも面白いかと思います。11月以降に見に来ると、樹木の葉が落ちてきれいな三角の尖った岩に見えます。



図１　オキクルミが槍を投げた方向。各場所を訪れることで、貫気別川から額平川、沙流川沿いに投げたという一連のストーリーを実感できる。

槍を投げた方向をみる

ペンケチトゥカンピラ(イマニッヌプリ)からオキクルミが槍を投げてイムチトヌプリ(トゥレ



写真２　イムチトヌプリ(北西側から撮影)。額平川河口左岸側に所在。伝承内容の把握と語源解釈にあっては「チトゥカン」が重要なキーワードになる。



写真３　オプシヌプリの現況(南東側から撮影)。ペンケチトゥカンピラから直線距離で約10km西側に離れた沙流川右岸の山林に所在する。

プンナイの山)を越えたのだとされています。先人はこのような方角(ほぼ貫気別川・額平川(ぬかびら)と沙流川沿い)でオキクルミの活躍を想い描いていたことが分かります。

イムチトヌプリは額平川河口左岸側にあり、地域住民には荷負富士と呼ばれています。イムチトヌプリの脇にトゥレプンナイがあります。額平川と沙流川の合流点にある額平橋附近はこの山が良い形で見えるポイントです。

「チトゥカン」について

古地図でアイヌ語地名をみていると、稀に「チトゥカン」とつく地名を発見することがあります。知里真志保はこの場所をアイヌ文化の祭祀に関係がある地名と解説しています(資料３)。ペンケチトゥカンピラにみるオキクルミ伝承も、祭祀に関わる場所として用いられる中で徐々に形作られていったと推察されます。

貫気別川から沙流川を一連のストーリーとしてつないだ想像力を今に伝える景観です。写真１～３のオキクルミ伝承地は、市街地から外れた山林などに所在しています。いずれもオキクルミ伝承のイメージを損なわない良い状態が維持されいます。

資料2　オキクルミの投げ槍伝承にかかるアイヌ語地名

アイヌ語地名(※M29記載)	語源解釈
1. ペンケチトゥカンピラ(penke ci=tukan pira)	上の方・我ら・射る・崖
別称1　イマニッヌプリ(i ma nit nupuri)	それを・焼く・木、串(焼き串)・山
別称2　ローソク岩(和語)	
2. イムチトヌプリ(i muy ci=tukan nupuri)	その・山頂・我ら・射る・山
別称1　トゥレプンナイヌプリ(turep un nay nupuri)	オオウバユリ・ある・沢・の山
別称2　荷負(におい)富士(和語)	
3. プイヌプリ(puy nupuri)	穴・山
別称　オプシヌプリ(opus nupuri)	穴があく・山

※M29は明治二十九年製版北海道仮製五万分一図の略

資料3　チトゥカン(ci=tukan)のアイヌ語地名について

「われら・射る」の意。古くアイヌは狩や漁や戦に出る時、弓占を行った。そうゆう場所に「チと゜カヌシ」(chi-tukan-us-i「われらがいつも矢を射るところ」)、「チと゜カヌシナイ(chi-tukan-us-nay「われらがいつも矢を射る沢」)、「チと゜カンピラ」(chi-tukan-pira「われらがいつも矢を射る崖」)、「チと゜カイシュマ」(chi-tukay-suma「われらいつも矢を射る岩」)などの地名が残っている。そういう所に古く部落の祭場があったと見られる。

(知里 1956)



「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055－0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828

初　版:2014年6月
第2版:2020年3月

額平川のアイヌ語地名と河岸段丘

64

関連シート：3、5、60、61、67

ヌカピラ川の語源

道道平取・静内線沿いに荷負から貫気別へ向うと荷負市街地のはずれにシケレペ(sikerpe：キハダの実)という旧小字名があり、現在でも何軒かの民家が所在しています(シート61参照)。

松浦武四郎による安政五(1858)年の沙流川来訪が収められている『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』(以下、戊午日誌とする)には「其名義黄蘗が多きより号しなりと、…人家六軒有」と書き記されています。

シケレペからみて右手額平川の対岸には、人文神オキクルミの居城と伝えられるオキクルミのチャシを始め、ムイノカ(muy noka：箕・の形象)などの一連の山並みがみえます。

そのノカピラ(noka pira：形象の・崖)の裾を流れる川を額平川と名付けたと考えられます。なお、額平川にはオキクルミ伝承との関わりが考えられるノカピラ以外にも、幾つかの呼び名が伝えられています(資料１)。



写真1　額平川河口域から上流方向を望む(西側から撮影)。向かって左手(右岸側)に旧小字名シケレペが、同右手(左岸側)にオキクルミのチャシ及びムイノカが所在する。

資料1　額平川の語源及び別称

1	ノカピラ	noka pira(形象の・崖)
2	リコマンペッ	rik oman pet(高い所=幌尻岳・へ行く・川)
3-1	ヌプキペッ	nupki pet(オギ・の川)
3-2	ヌプキペッ	nupki pet(濁り水・の川)

武四郎は戊午日誌の中で、〝ヌツケヘツの部　此巻はサル川すじの支流ヌツケヘツ川すじを誌るすが故に…。「ヌツケペツフト」ヌカピラフトとも云り、前巻に志るすヘテウコヒの事なり。…〟と記しています。

つまりヌツケペツフト＝額平川の川口で、ペテウコピ＝二股のことを述べており、額平川はヌツケヘツとも呼ばれていたことが示されています。

沙流地方ではオギのことを「ヌプキ」とも言います。額平川右岸の支流に、キタルウシナイ(ki ta ru us i nay：荻・刈りに・通う道の・所の・沢)等が在るように、額平川沿いはカヤが茂り、刈り場として豊かな自然に恵まれていたと考えられます。

現在のヌプキペッは、額平の支

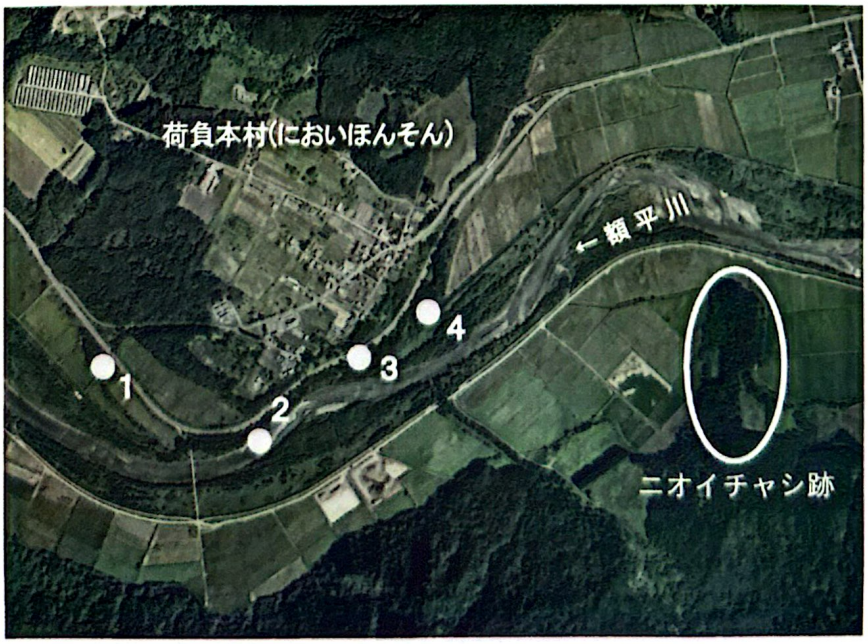


写真２　荷負本村及びその周辺の現況。特徴的な小字名(１～４：資料２に対応)が幾つも残る土地柄で、周辺域にはアイヌ伝承地やチャシ跡も多い。

流である貫気別川を指します。語源としてnaypo-pet(湧き水・の川)とする説もあります。湧き理由については「幹状岩質地帯に降った雨が、やや乳白色の湧き水を貫気別川に注ぎ、湧れるところからこの名が付きます。大雨になると、粘土質地帯が濁流水になって流れた水が問寒別に注ぎます」(貫気別郷土誌編集委員会 2005)とされています。

かつての生活を語る景観

沈午日誌に「川の北岸(右岸)二丁許も行、六七十間の坂を上る数人家九軒有」とあります。これが現在の荷負本村です。

このコタンから南方に額平川へ下る辺りはテシコンルと名付けられています(写真2、資料2・3、図)。住民が漁労に用いるテシ(とめ)へ向かうための通い道です。集落から坂道を下りた所の道道平取静内線上がフレサンケです。また、ポンピラタルカの旧小字名があり、知里(1955)はこのような地名を、古代の祭場であると解説しています(資料4)。そのほかもチセエルシキという興味深い地名も残されています。

これらを総合すると、フレサンケの平坦の地は、ポロシリやオキウルミのチャシ等を望み、地域の祭場となる崩高な場であったと考えられます(写真2)。

資料2 荷負本村の旧小字名とその語源推定

旧小字名	語源(意味)
1. テシコンル	テシコウンル(tes ko un ru:とめ・に向って・ある・道)
2. フレサンケ	フレサンケ(hure san ke:土が崩れて赤い地肌が露出している・棚のような平山・の所)
3. ポンピラタルカ	ポンピラテレケウシ(pon pira terke us i:小さな・崖・いつもそこで踊る所)
4. チセエルシキ	カムイチセエロシキイ(kamuy chise e roski i:カムイ・の家・そこに・建てる・所)

資料3 テシについて

川の岸から岸へ約2尺おきにクイを打ちならべ、幾本も横木を結わたして柵をつくり、さらにそれへ竹のすだれを編んで立てかけ、鮭がぜんぜん遡上できないようにする。この施設を「テシ」(tesh)と称し、土地の日本人の方言では「とめ」(止)と言っていた。この「とめ」の下手に「やな」をかけ、「とめ」のために上へ登れない魚がそれに入るようにする。「やな」に入らずそこらをうろうろしている魚は、「マレㇷ゚」(かぎもり)で突いてとる。「とめ」を架設することを、「テシカル」(tes-kar とめを・つくる)という。この施設は、鮭の遡上を阻止するので、個人がかってに架設することは許されず、かならず村の人々が皆で相談しあって架設するのである。

(知里 1959)

資料4 アイヌの舞踊について

「テレケウシ」(Terke-us-i)という地名も、語原は「いつもそこで皆が踊る場所」という意味であり、これも古代の祭場だったと見て差し支えないのであります。

(知里 1955)



図 平澤屏山「アヌ漁図」(市立函館図書館蔵)。近世後半のテシが描かれている。タモ網、魚叩き棒、カマスが用いられている。



写真3 荷負本村のコタン(昭和30年代前半の撮影と推定 寺崎秀一郎氏提供)。チセ(家)の壁がかやから板材へ変わっている。



「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2017(平成29)年7月26日、重要文化的景観(第文化財)に選定



額平川中流域の農村景観

65

関連シート：3、23、25、37、70

近代開拓の産業景観

明治時代の入植者である八田満次郎は、明治21(1888)～30(1897)年に国から土地貸付をうけ平取の幌去や貫気別で農業・畜産業・クロム鉱山を起業します。

開拓当時の悩みは道路難で、馬足でも難儀します。しかし、大正10年頃になると、沙流川筋も額平川筋にも馬車が通える道路が整えられていきます。

馬車で運ばれるクロムは仁世宇から山越えで振内、そして幌毛志から長知内へ運ばれます。糠平鉱山のクロムも馬車で豊糠、芽生、貫気別、荷負へ運ばれます。幌去も貫気別もナラの巨木が伐られたあとにクロム輸送用の道路になります。

松浦武四郎による幕末の筆絵(図１)には、そうした産業道路をみることはできません。当時の集落の遠景と畑、河川沿いの水場などが描かれており、近世から近代に至る生活の移り変わりを読み取ることができます。

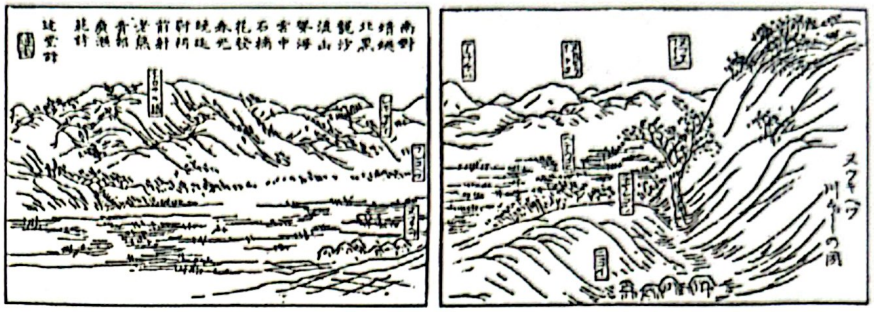


図１　松浦武四郎の描いた幕末の額平川(『東蝦夷日誌』より)。ヌツキベツ集落の下流側にある格子目は耕作地と考えられる。「チャシコッ」を挟んでニオイの集落も所在する。

低平地の水田耕作(写真１)

明治時代初頭に寒地農業における稲作禁止の沙汰があり、その後まもなく田畑勝手づくりが許されるという時代のひずみがありました。しかし、明治９(1876)年にエショロカン沢(現日高町平賀地区)の水を溜めて温める方法で、初めての水田が沙流川で成功します。

寒さに強いバレイショやソバは収穫も安定した作物でしたので、木の枝払いと削り蒔きによる畑づくりも多く行われました(図２)。

額平川筋(荷負～豊糠・旭)の造田は低平地を選び、沢水で稲や湧き水を温めて小規模に行われていました。

大正13(1924)年以降、額平川や貫気別川を利水するようになると、取水設備が必要になり、土功組合(大正２:1913年設立)を前身とする土地改良区(沙流土地改良区、二風谷土地改良区・池売土地改良区)の力(協働)が必要になっていきました。

国は戦後の食糧難解消のために食糧増産を続けてきましたが、次第に国民の所得向上等による食の変化がみられるようになってきました。

また、昭和42(1967)年の全国的な豊作を機に米の在庫が目立つようになりました。結果、昭和45(1970)年以降は休耕政策がとられることとなり造田が禁止されました。

昭和５(1930)年頃に自作農家となった方の多くは、現在三代目としてトマト栽培などの新しい農業に取り組んでいます。



写真１　貫気別市街地近くに広がる水田地帯。現在も良質な米が生産され続けているが、昭和45(1970)年以降の減反政策により耕地面積は減少している(南側から撮影)。

高位段丘上の農業

開拓当初の農業は、冬に木を伐って大地に陽が当たるようにし、カッチャくわで耕地にして大豆を蒔く方法で行われました(図2)。小豆も畝に蒔き、夏までに秋大根を一本でも多く植えられるように耕地を拡大していきます。

年数が経つと耕地が増えて馬の動力が必要になります。馬を飼うとえんばくを蒔いて飼料用の畑もつくります。ここまでくると野菜全般が栽培可能になります。

高位段丘の芽生や旭では、農業開拓者のほかにも戦後の国策である食料緊急開拓団が入植し、火薬抜根や冬の明渠(めいきょ)排水国営事業が実施されました。

さらに高台にある平地にはパイロット事業が行われて耕地が広げられました。町有の広大な林地は軍馬生産時代の馬、有畜農業時代の牛と移り変わり、現在はぴらとり和牛(黒毛牛)の放牧地として利用されています。

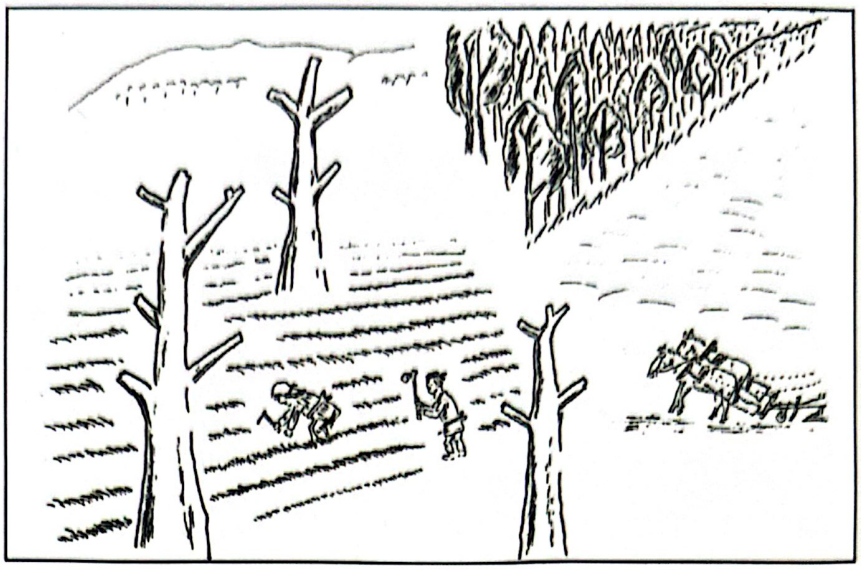


図2　開拓初期に行われていた削り播きの様子(貫気別郷土誌編集委員会　2005)。耕地の拡大にあたって、農耕馬の動力が大きな役割を果たした。

川洲畑の景観

アイヌ文化に伝わる伝統的な農法に、ピクタトイ(pikuta toy:川洲・畑)があります。河川沿いの肥沃な低平地にアワなどの雑穀を蒔くというやり方です。

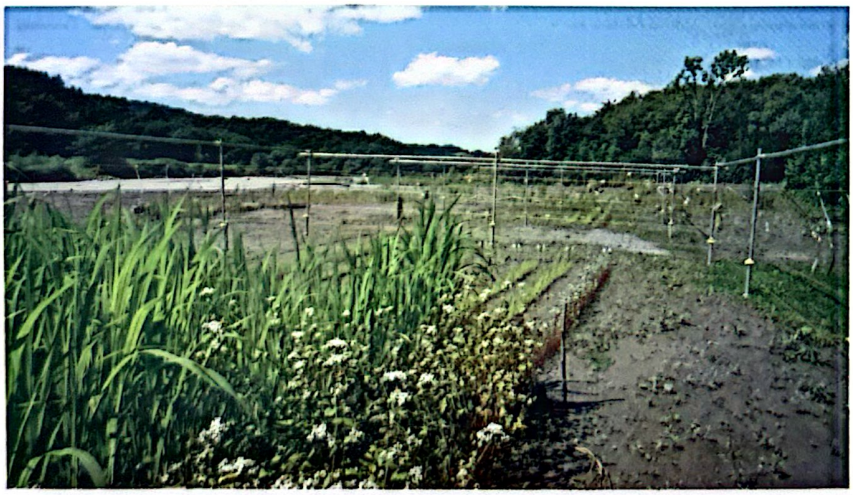
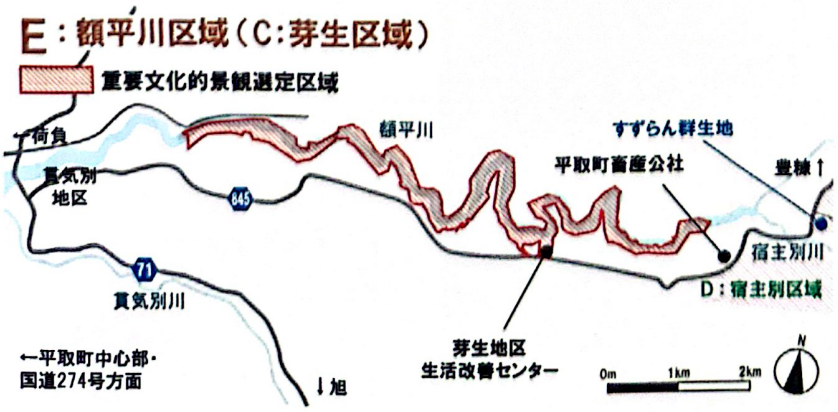


写真2　額平川の河川敷で栽培される雑穀等(平取町アイヌ文化環境保全調査にて実施)。川洲畑を試験的に行ない、伝統農法の今日的継承のあり方が検討されている。



貫気別の古老(明治29:1896年生まれ)も同様の畑を懐かしく語っていました。

大水の後で川原にでて、泥溜まりを見つけて小枝を刺して親に伝えると、そこがわが家の畑になり親はヒエを蒔いたそうです。その場所は「小盆地・どろだまり」とも言いました。土地は肥沃で30俵のヒエを収穫した事を覚えているとのことです。

このように雑穀を簡易的に栽培する方法のほか、近世後半には露地野菜の栽培も行われていたとみられます。

武四郎の筆絵(図1)にも耕作地とみられる格子目が、ヌキベツコタン近くの低平地に描かれています。同時期のポロサルコタンでは、カボチャ、キュウリ、ジャガイモなどの栽培が記録されていることから、貫気別でもそうした野菜が作られていたと考えられます。

「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

■文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055－0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828
初　版:2014年6月
第2版:2020年3月

チプサンケ

66

場所：二風谷地区（伝統的作法）、沙流川二風谷ダムの下流域　時期：毎年8月第3または第4日曜日

チプの文化を継承していく

毎年８月20日前後の日曜日に、沙流川を会場にチプサンケ（cip sanke：舟・下ろす　舟下ろしの儀式）が行われています（写真１）。

昭和40年代以降、沙流川を彩る夏の風物詩として、地域に受け継がれる恒例行事です。

近代以前は主要な交通手段、漁労道具などとして生活の中にあったチプも、道路の整備や生業の変化とともに徐々にその数を減らしていきました。今日において、沙流川の日常でチプの行き来を目にすることはありません。

今日的なアイヌ文化の継承を考える上で、古いものづくりの技や知恵は重要なキーワードになります。

チプ自体は、素性のよい丸太が１本あれば作ることができます。これにトゥリ（さお）、アッサプ（かい）、ワッカケプ（あか汲み）などを組み合わせることで、進水できる状態になります。



写真１　チプサンケに備えて度々チプづくりが行なわれる一方で、儀式当日は地域の若者が乗船技術を習得する場にもなっている。一般参加者がチプに乗れる貴重な日でもある。

比較的河川の近くで採取できるスス（ヤナギ）などは、チプを制作、利用する上で重宝されました。川べり（舟着き場）で作ることで水になじみ、舟体のバランスもとりやすかったといわれています。大きくて重い材料を遠くまで運ぶ必要がないことも、作業効率の向上につながったと考えられます。

今日行われているチプづくりは、樹木の搬出、加工など、多くの面で現代的な手法が取り入れられています。その一方で、よい樹木を重宝し、特性を知ることやカムイノミを通した畏敬の念はイオル再生事業など、さまざまに行われているアイヌ文化の継承に応用していくことができます。

平成初期以前のチプサンケは、現在の二風谷アイヌ文化博物館付近（当時の渡船場）で行われました。当時はチプの下に丸太を入れて転がし、皆で引いて川まで降ろしたそうです。そこでカムイノミを行い、約１kmの川下りを行いました。

その後クレーンやトラックでチプを運搬できるようになると、川の上流（気候や水流の条件などで、舟を下ろす場所は変わる）まで運んで、長い距離の川下りを楽しむようになりました。



写真２　チプサンケ当日の午前中に行なわれる「縁結び石」のカムイノミ（萱野茂二風谷アイヌ資料館前）。厳粛な儀式と祭りとしての賑わいが様々に組み合わさる。

地域に活力を与える行事

チプサンケは今日的なアイヌ文化継承としての意味合いと同時に、地域振興のお祭りとしても賑わいをみせています。

当日の午前中は、萱野茂二風谷アイヌ資料館にある「縁結び石」の前に設置された祭壇でカムイノミが行われ(写真２)、その後チプの安全を祈願する礼拝及びアイヌ古式舞踊が披露されます。

沙流川での進水儀式後には、皆で川下りを楽しみます。昔ながらのチプはバランスをとることが難しく、転覆してしまうこともあります。しかしライフジャケットを貸し出して、夏の暑い盛りに川遊びが出来るということで、毎年多くの人が乗りに訪れます。

また近年では、ウトムヌカラ(結婚式)、語り部によるユカラ(英雄叙事詩)やウパシクマ(言い伝え)の披露、アイヌ文様の彫刻体験なども行われるようになりました。

とりわけ、ウトムヌカラを行うためにやってくる新郎新婦と、儀式の挙行に携わる関係者の姿は、前夜祭にふさわしい感動的なものでもあります。今後も継続的に行っていくことで、本祭との相乗効果も益々増していくと考えられます。町民主体で行われる２日間の催しは、地域の想いや熱意、北海道の暮らしの多様性を発信する大事な機会にもなっています。

チプサンケについて

チプの進水式を意味するアイヌ語で、直訳するとチプ(舟)、サンケ(出す)となります。

チプづくりの継承、新造舟への礼拝、乗舟の貴重な機会として、数十年にわたり二風谷を中心に開催されています。

チプは通常、丸木舟を指しますが、地域によっては海用のイタオマチプ(板付け舟)、湖沼用のヤラチプ(樹皮舟)といった種類もあります。

主な材料としてはスス(ヤナギ)、ランコ(カツラ)、スンク(エゾマツ)などが用いられます。ピンニ(ヤチダモ)やチキサニ(ハルニレ)などの重い木は操作が難しく、岩などに激突して怪我をしやすいため、「ケユプチプ(ケウ＝しかばね、ウㇰ＝取る、チプ＝舟)」(萱野 1978)と呼ばれ嫌われていました。

昭和10年代初めの頃、二風谷にはポロチプ(大きい舟)、ポンチプ(小さい舟)、アタプチプ(転覆舟)と呼ばれる３艘のチプがあったと伝えられています。

資料　舟の種類

チプ	cip	舟、丸木舟(ci:私たち　o:乗る　p:物　チオプがチプになった)
イタオマチプ	ita oma cip	板付け舟
ヤラチプ	yar cip	樹皮舟(シコロの木の皮を使う)

(萱野 1996)



写真３　二風谷アイヌ文化博物館のチプ。アイヌ文化の樹木利用を象徴する民具で、館内展示物としては最大。その圧倒的な存在感から、多くの見学者の関心を引いている。



「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055－0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828
初　版:2014年6月
第2版:2020年3月

ペテウコピの景観

67

関連シート：３、64

ペテウコピとは

額平川は幌尻岳の北カールを源とする沙流川左岸の大きな支流の一つであり、荷負地区で沙流川と合流します。その合流地(二股)はアイヌ語でペテウコピと呼ばれています。pet e u ko hopi i(川が・そこで・互・に・捨て去る・所)など幾つかの語源分解が行われています(資料１)。

にぶたに湖のペナコリ管理橋から上流を見ると、沙流川と額平川の二股を見ることができます(写真１)。気温や天候などの条件で変わってきますが、水の流れが二層になって分流しているのが分かります。



写真１　沙流川と額平川による広大なペテウコピ。かつて、このすぐ下流左岸側にペナコリコタンが所在した(現在のペナコリ集落の主体部は高位段丘上に移動している)。幕末に当地を訪れた松浦武四郎によって、川の幸の豊富さが記録されている。

海から山へ上る川

額平川には、リコマンペッ(rik oman pet：高い所【幌尻岳】・に登って行く・川)という古名があります。

常識では川は山から海へ下るものですが、古人は主として狩漁に向かうにも川や沢を路として山に入ります。サケやマスも海から遡上します。これらのことから、このような世界観が生まれたと、知里真志保は『地名アイヌ語小辞典』(1956)で解説しています。多くのアイヌ語研究者が述べている「川が分かれていく所」(資料１)という概念は、下流側から上流側を意識した見方でもあります。

また、川は生き物とみられていたことから(資料２)、大河川の分岐点は重要な部分として敬意が払われています(資料３)。

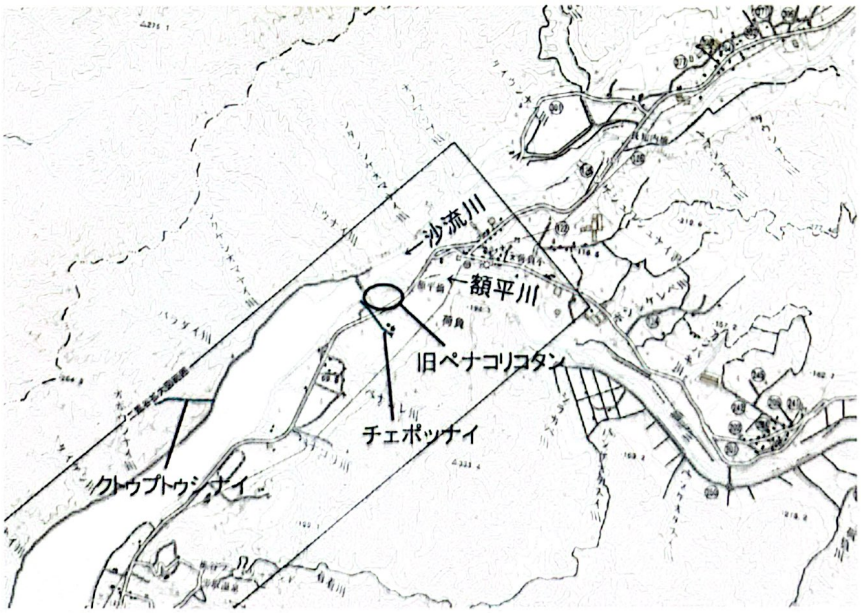


図１　沙流川と額平川の合流部は、流域最大のペテウコピである。この場所に対する畏敬の念が、地域住民の間に語り継がれている(資料３)。

武四郎がみたペテウコピとペナコリ

松浦武四郎は安政五(1858)年の沙流川来訪を記した『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』で、ペテウコピを「二股の事也。左り本川ホロサル通り、右ヌカヒラ、ニヲエ、ヌツケヘツ通り也。其川少し本川の方ひろし・・・」と書き留めています。

額平川に至る手前にペナコリコタンがあり(図１)、武四郎は次の如く記しています。「東岸平地なり。此処小川有。其名義は昔しより此村は男女とも子供の育ちがよいによって此名有りといへり。人家十二軒・・・」。

またコタンの沙流川対岸には、「クトホウシナイ」があります。武四郎はその語意について「此小川にて藁を以て雑喉を取る処と云よし也」と記しています。その説明に従って解釈するとクトゥプトゥシナイ(kutu put usi nay：や

な・河口・に付ける・沢)となります(図２)。

コタンの下手には「チェホツナイ」があり「此処魚類多きよりして此名有るなり」と説明されています。このことから、チェポッナイ(cep ot nay：魚・多くいる・沢)の意であろうと考えられます。

武四郎の日誌に、ペテウコピ付近の恵まれた生活の様子が感じられます。なお、ペナコリとは(pe na ko ru i：川上の方へ・向う・道・の所)と解されます。

川への畏敬の念

地域住民の間にはこのような大河川の合流部に対し、狩猟に来た時や舟を出す時などにカムイノミをすると伝えられています(資料３)。

先人がこの二股を見て何を感じていたのか、思いを馳せてみるのも沙流川巡りの醍醐味といえます。

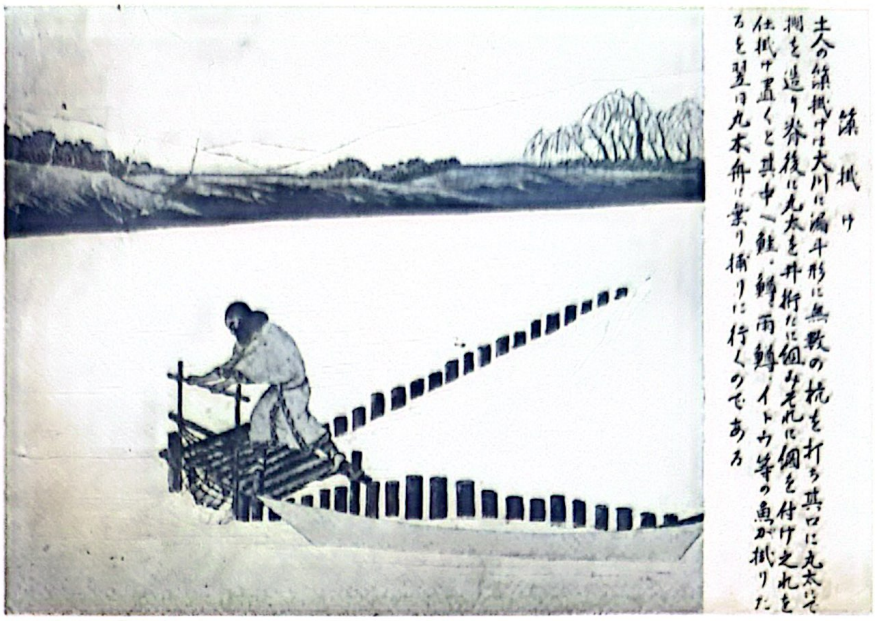


図２　アイヌの暮らしに受け継がれるクトゥ(やな)。別称ウライとも呼ばれる。文中説明ではサケ、マス、アメマス、イトウ等を捕る仕掛けとされる(西川 1941)。

資料１　ペテウコピの語意一覧

永田(1891) peteukopi, pet eukopi = 二股。直澤川ノ別レ元来合流スル所ナレドモ土人ハ之レヲ川ノ別レト云フナリ。

知里(1956) 川の合流点；落合；ふたまた。pet－e－u－ko－hopi－i(川が・そこで・互・に・捨て去る・所)。

山田(1971) 沙流川は、平取市街から十キロ余りの上流で、東に大支流額平川を分つ。その分岐点(分流点)ペテウコピ「Peteukopi ← Pet－e－u－ko－hopi－i 川が、そこで・互い・に・捨て去る所(知里小辞典)」は川の二股の称で、またPetukopiとも略称する。方々の二股にこの名前があった。

北海道教育庁生涯学習部文化課編(1992) pet－e－ ukopi 合流点 川がそこで別れていく所。

萱野(1996) pet－e－u－kot－hi 川が繋がった所 ペッ＝川、エウコッ＝繋がる、ヒ＝所。

資料２　川は生き物

アイヌは川に対して特別の考え方を持っていた。まず、それは人間同様の生き物に考えられていた。だからそれは人間と同じ部位を持つ。水源は「川の頭 = pet－kitay」、中流は「川の胸 = pet－rantom」、川口は「川の陰部 = pet－o」である。支流は「川の腕 = pet－aw」、曲り角は「ひじ = sittok」であり、幾重にも蛇行していると「小腸 = kankan、yospe」である。「夏痩せ = sattek」「死に = ray」もする。

(知里 1956)

資料３　ペテウコピへの畏敬の念

１　ペテウコピのように川と川がぶつかる場所は"昔、年寄り達は、額平川と宿主別(しゅくしゅべつ)川のぶつかる所(合流点)で、７月に入ってカムイノミをしてからそれぞれ宿主や糠平にマタギに入った"、"具体的な場所は分からないが、川と川がぶつかる場所はお祈りする対象だということがあったようだ。"というように、祈りの対象だといわれています。

(アイヌ文化環境保全対策調査委員会編 2006)

２　川が合流するところは大事な場所だ。今は現場まで行ってお祈りをするが、昔は川の神に祈る(ペッカムイノミ petkamuynomi)時でも家の中でカムイノミ kamuynomi「祈る」した[幕別　安東ウメ子氏]。

(北海道教育庁生涯学習部文化課編 1998)



「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

□文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055－0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話：01457－2－2892
FAX：01457－2－2828
初　版：2014年6月
第2版：2020年3月

物質循環のインターフェイス

68

関連シート：2

アイヌの伝統が生きづく地域

平取町本町の対岸を流れる沙流川支流の亜別川奥に、クチャウンペッ、イウォロウトゥロマプ、カシコトゥンナイ等の枝沢があります(図１)。kucha un pet(狩小屋・在る・沢)、iworo utur oma p(狩場の・中に・入る・もの【沢】)、kasi ko tun nay(仮小屋・へ向っている・谷川)と解され、イウォロとしての存在を示しています。

この沢の源は深く、プウシナイ、シケレペ、オサッ、カンカン、ペンケオタスイ、ニオイ、パンケセタナイ等の沢(図１参照)はそれぞれがアベツに繋がる道であったとみられます。その沢沿いの道はビラトリ、ニブタニ、ニオイ、ヌキベツ等のコタンの人々が利用したと考えられます。それぞれの集落で人文神オキクルミの伝承があることもアベツの重要性を物語っています(写真１)。

それらの道は現在アベツ、セタナイ間の林道となっています。カンカン、ペンケオタスイ間に開削された林道と合わせ、地域の農林業にとって重要な役割をもっています。

春から秋にかけては山菜やキノコ採り、冬にはハンターがエゾシカ猟に出かける、古からのイウォロです。

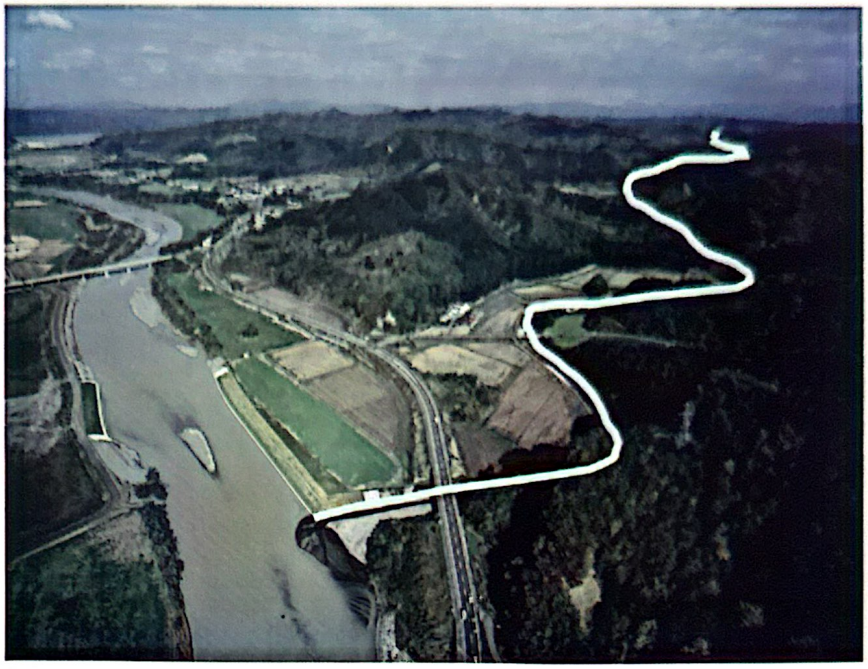


写真１　沙流川と左岸側支流の亜別川(南側から撮影)。非常に奥深く入り込んだ沢で、地域の土地利用の指標となるアイヌ語地名が細かく付けられている。

沙流川が育む生命の循環

サラ(sar：ヨシ原)、シキ(si ki：オギ)の付く地名が沙流川流域には多くあります。また、キナウシ(kina us i：キナ・多くある・所)という地名は日高町富川に１ヵ所みられます。通常はキナ＝草ですが、地名に使われているときのキナはござに織る草(エゾスゲ、ガマ、ハマニンニク等)を指すと言います。

サラキ(ヨシ)、シキ(オギ)、ススキは多く屋材として利用されました。また、ラペンペ(rapempe：カヤ、ススキ)の語がつく地名もあります(知里 1953)。

ノヤ(noya：ヨモギ)を始め薬草、食用等の植物、建築、暖房用となる多くの草木を育む沙流川のほとりには多くの生命の循環があります。

にぶたに湖右岸の水際には、ツルヨシ、サラキ、ス(ヤナギ)類等が群生し、山地のペロ(ミズナラ)、トペニ(エゾイタヤ)、ニペシニ(シナノキ)を主体とした広葉樹林へと

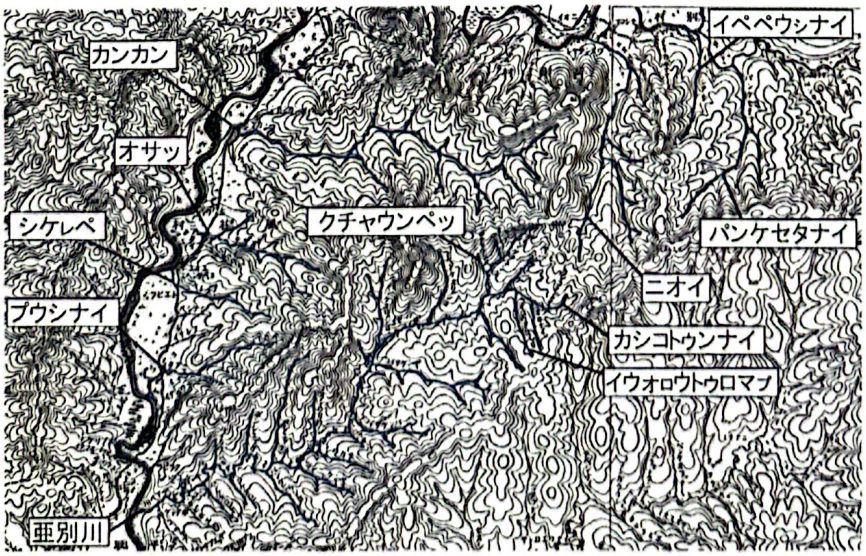


図１　亜別川とその周辺域(明治二十九年製版北海道仮製五万分一図)。毛細血管のように張り巡らされた沢の広がりに、暮らしの中の重要性をみることができる。

至ります。

左岸は集落地ですが、湖岸(河畔)に沿った平坦部際と崖面には、人造湖形成以前からの樹林帯が細長く続く部分もあります。

二風谷ダム下流域の河岸や中洲には、河岸にヤナギ高木や低木群落の姿が多くみられ、同じ沙流川でも場所によって違った景観を見せてくれます。

ここではマガモ、アオサギなどの水鳥、ハヤブサ、カパチリ(クマタカ)等の猛禽類、オオハクチョウやクイトプ(ガン)・コペチャ(カモ)類等の鳥類が飛び交ったり、水面を泳ぐ光景も見られます。

河原や河畔林のエリアは、多様な植物、動物たちが生息し、その生活がこの区域の中で営まれ、生物どうしの生命の循環が現在も見られる場所です。こうした海ー川、川ー山あるいは水ー空の物質循環のインターフェイス(※)として重要なところであると位置づけらます。

※インターフェイス(interface)
「情報・ものごとの間に立って、ものごとを仲介するもの。」



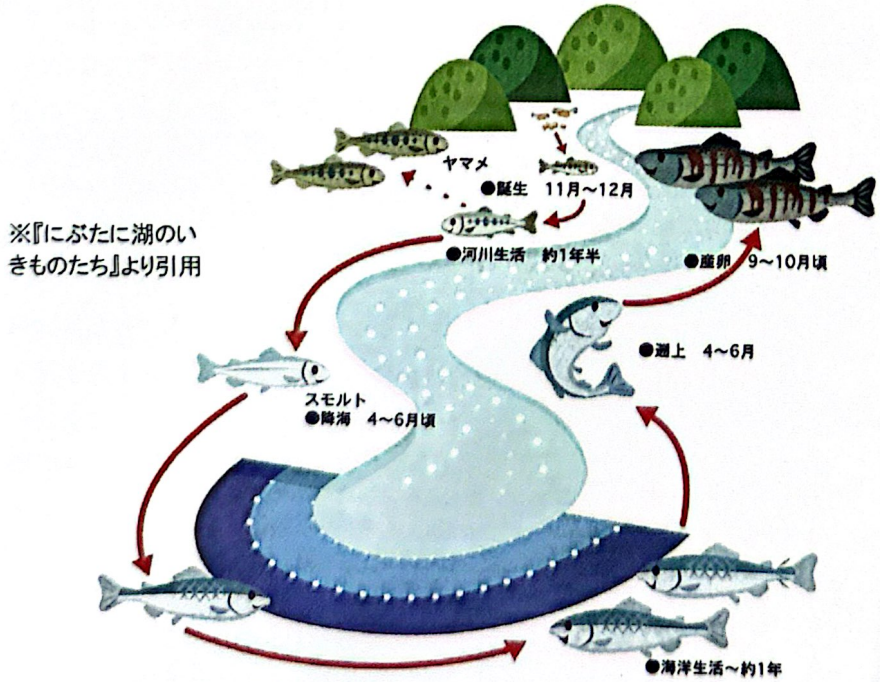
写真２　カムイチェプ(サケ)の重要性は地域のアイヌ語地名の所どころに表されている。物質循環のインターフェイスを象徴する生物といえる。

カムイチエプのめぐみ

カムイチェプ(kamuy-cep：神・魚【鮭の総称】)と呼ばれるサケは、ipe=イペ(ipe：魚【鮭】)とも呼ばれます(知里　1963)。海から遡上するサケは人々にとっては重要な食糧のひとつです(写真２、図２)。

干鮭にして保存し、すぐに迎えなければならない冬への貯蔵を行います(図３)。二風谷ダム右岸にオクマウシ(o kuma us i：そこに・いつも・魚乾し棚・ある・所【沢】)と言う地名があります。

また、額平川(ぬかびら)左岸の貫気別には、イペペウシナイ(ipe pe us nay：魚【鮭】・いつもごちゃごちゃいる・沢)があります(図１)。同じく額平川右岸にシュプンナイ(supun (us) nay：ウグイ・【いる】・沢)のほか、さしかけ、簗(やな)の場所を示す地名が残り、暮らしの中における漁獲の大切さが地名に現われています。



※『にぶたに湖のいきものたち』より引用

図２　サクラマスは冬に孵化した稚魚が１年～２年後の春、海へ降りてゆき、約１年後に遡上する。やがて内陸部に住む人や哺乳類の大切な食糧になり、産卵後は大地に栄養を与える。

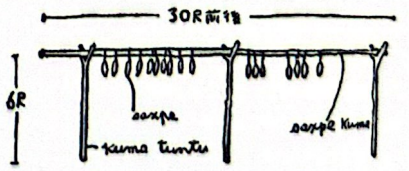


図３　クマ(物干し)のイラスト(知里1973)。かつてオクマウシ河口に設置され、サケの処理が行われていたと推定される。

「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

■文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055-0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828
初　版:2014年6月
第2版:2020年3月

流送の歴史 -沙流川流域の造材-

69

関連シート：36

流送とは

木材を山で伐って山土場に集材し、春の雪どけ水を利用して下流へ運ぶ運材方法を流送といいます(写真１)。北海道では近代の造林業に伴って行われるようになります。沙流川は明治37年頃から谷崎昆次郎による自営木工場の用材買受けで始められたことが記録されています。

日高一の長流である沙流川では、延長104kmを数日かけて流します。それを海で集めて船で運び角材(資料)を東京でさらにインチ材にして輸出されました。

製紙原木用としてはマツ材が伐られて流送されます。外に特殊用材として白楊樹(ドロノキ)、アオダモ、アサダ、カツラなどが、マッチ軸木・枕木・野球バット材・鉛筆軸・船材・建築材・スキー材として伐られ、昭和29(1954)年まで流送されます。

北海道内では11の大河川で筏流の流送が行われていました。



写真１　流送は、川土場にまき立てられた材を融雪期に堤流(鉄砲堰を築いて一気に解放)する方法で行われた。川べりに残された干上がり材は、流送人夫たちによって水に戻される(坂本木材株式会社 1995)。



写真２　沙流川の中間網場(模型)。平取本町のオユンベ・小平間で流送材をせき止め、筏(いかだ)にして流し直す作業が行われていた(沙流川歴史館常設展示より)。

資料　角材の語源について

広葉樹は針葉樹と形状が異なり、根元が扇状に広がっています。そのままの形状だと、転がすのも車に乗せるのも筏に組むのも難しいので、その部分を切り落としました。

裾の方から見ると角に見えるため、角材と呼ばれるようになりました。角材にするのは広葉樹だけです。つまり角材は広葉樹の木材を指す呼称となります。

沙流川の造材

宝暦三(1753)年の記録に、木材商の飛騨屋久兵衛がサル場所に大船を入れてエゾマツを伐り移出したとあります。

明治40(1907)年になると三井の造材が始まり、本格的な流送が始まります。角材が建築材や枕木、インチ材にするため本州に送られました。

造材範囲はハヨピラ(平取町本町)から日高山脈の裾野までで、昭和初期まで続きます。三井物産は木材運搬のために苫小牧から鵡川間に軌道を敷設します。

明治42(1909)年には王子製紙が針葉樹の伐り出しを開始し、事業請負人の坂本竹次郎が沙流川で流送を取り仕切るようになります。

三井と王子は合同で馬鉄を蒸気機関車にするなど、明治43(1910)年までに造材の新時代が築かれていきます。

平取の中間網場

アバは網場、網羽とも書かれます。アバコ(浮木)が羽のように

見えるからです(写真２)。

浮木は網場に張られるワイヤーの親綱を浮かせるために約700mほど連結され、この親綱の弛みをなくするため姫綱が親綱に結ばれます。

右左岸には太いクイが８本打たれて、親綱を親ころしという結び方で固定します。網場は平取大橋上流側の、オユンベと小平(こびら)の間にワイヤーが張られ設けられました。オユンベ側に人夫の宿泊する大きな飯場がありました。

流送には筏流とバラ流し(散流)があります。角材は材質が重く沈むので散流はできません。針葉樹と組み合わせて筏流を行います。針葉樹は筏流と散流を行うことができます。

中間網場の設置目的は、従来散流していた針葉樹の材木を筏流にし、河岸(堤防や農耕地)の破壊を防ぐためのものです。それは下流域の農耕地が飛躍的に拡大したこと、筏流で新時代の運材を行おうとするといった時代の趨勢のように出現しました。中間網場まで散流された木材はワイヤーでいかだに組まれ、富川(最終網場)で陸あげされます。

林業の隆盛による地域人口の増加は、大正11(1922)年の沙流軌道の敷設(昭和26年廃止:写真３)に繋がっていきます。その後、沙流川本流での流送は、電源開発のため昭和29(1954)年で終了し、道路網の整備によるトラック運材へと移り変わります。



写真３　地域の近代産業(林業・鉱業)は、就業人口の拡大と物流の活発化を促した。沙流軌道の敷設は、そうした時代の流れを反映したものであった(平取村開村五十年史編纂委員会　1952)。

地域産業と人々のくらし

山頭(やまがしら)さんが「秋じまい」が済んだ農家で、冬の造材仕事(人も馬も)に来ないかと誘います。

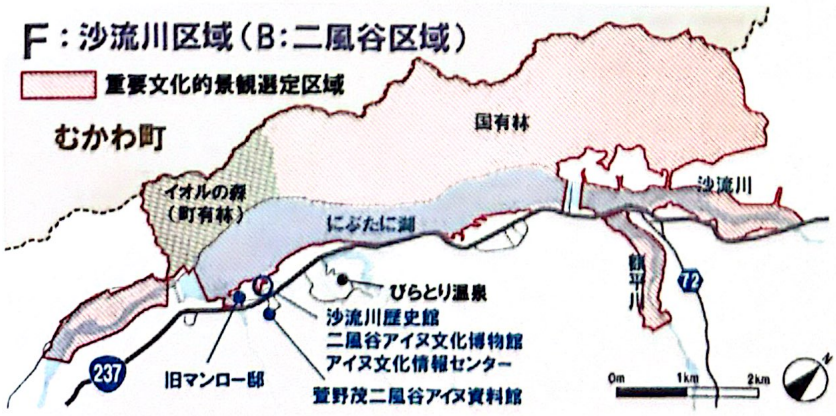
平取は木の街であるため、山には伐倒や山土場の仕事があり(写真４)、市街地には木工場もあります。山頭が人を集めるのは人海作戦といわれ、おびただしい数の人が必要になります。アイヌ語ノート(鉈で半分にしたポケット版)を片手に、言葉の壁を超えて集人したと言われています。

造材飯場や流送飯場は「百人飯場」といわれて活気づきます。街ではオガ(大鋸)屑ストーブ、オガタン(大鋸炭)、ベニヤなどの新商品が次々と現れました。木工場は地域の基幹産業として次々と創業(石井、石崎、八田、南、菅原、佐藤、表谷、五十嵐、奥野)されました。

衣類では木の街らしい王子毛布(王子製紙工場の機械に使われる布)があり、防寒衣や乗馬ズボンに使われていました。



写真４　奥深い山林で伐倒された材木は、馬ソリで土場まで運ばれる。バチというソリを２台連結して大量運搬する方法を「バチバチ搬出」という(坂本木材株式会社 1995)。



「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

■文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055-0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828
初　版:2014年6月
第2版:2020年3月

沙流頭首工

所在地：平取町字二風谷(にぶたに)

70

関連シート：65

近代における治水の歴史

沙流川流域の水田耕作は、明治９(1876)年にエショロカン沢(現日高町平賀)で稲作が成功したことに端を発します。

造田熱は大正２(1913)年の土功組合の設立に繋がり、同５(1916)年にはかんがい溝(水路)を用いた水田が飛躍的に発展します(図)。

このかんがい溝の水を川から取り入れるところが頭首工です(写真１)。沙流頭首工からのかんがい溝は15kmあり途中の小沢から流入する水も計算され、河口に行くと幅が狭くなります。

水の管理は５月から10月の稲に実が入るまで必要で、天候次第で水量を調整します。水の浸食作用で地盤がゆるむ箇所、急流や水がぶつかる所には、とりわけ注意が払われます。水稲は八十八日の手間をかけると稲穂が育ち「米」になるとされています。朝、夕、晴れの日も雨の日も水の管理はかかせません。



写真１　沙流頭首工(南西側から撮影)。二風谷ダムの完成に伴いその役割を終え、現在は頭首工のみが保存されている。二風谷ダム堤体下流の沙流川右岸に所在。

米生産の重要性と米の安定供給

北海道に米がまだない頃、幕府から松前藩に米(酒田米)が届きます。その米は主食にし、俵は解いてワラジにされます。北海道のムンチロ(アワ)、ピヤパ(ヒエ)は、濁酒(どぶろく)を醸すのに使われました。

病弱者を健康にするためには、穀物の中でも米は腹持ちがよくて一級品といわれました。一日三度の摂取で済みます。麦やそばでは、腹持ちが悪くて二時間(いっとき)で腹が空きます。

米の重要性は寒地という自然条件も克服します。植物学的には日本の米の北上は奇跡とされ、それは万人が認める重要なものといえます。

安定供給は現在では普通ですが一昔前はそのこと自体、豊作と喜ばれました。平取の耕地面積が1000ヘクタール(昭和38：1963年の面積)で安定供給になるようです。昭和45(1970)年になると米が過剰生産になり生産調整が行なわれ、トマト栽培が開始されます。

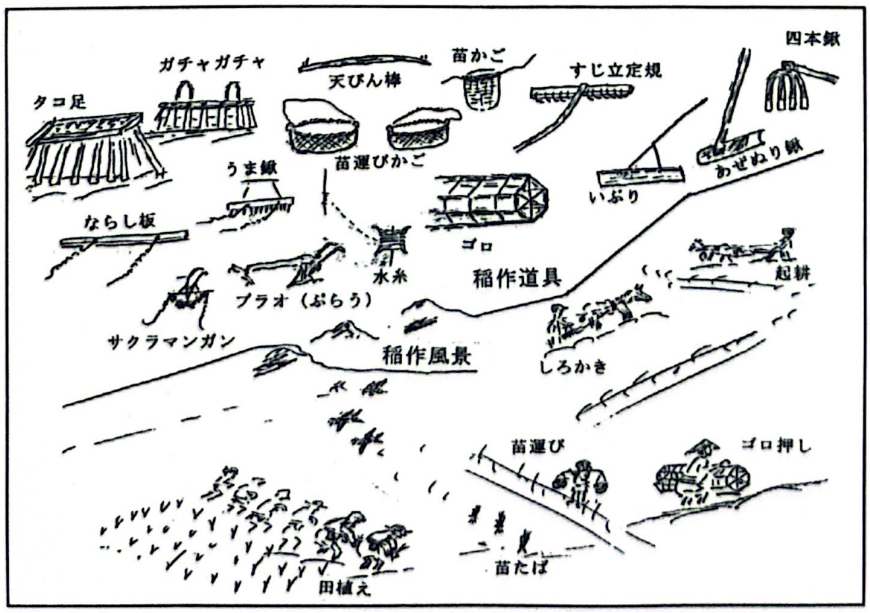


図　近代の造田(貫気別郷土誌編集委員会　2005)。急速に水田が増えた大正末期から昭和10年代までは、タコ足またはガチャガチャによる籾の直播が行われた。昭和10年代後半から23年頃までは水苗の手植えに切り替えられるなど、試行錯誤が続けられた。

現在の農業用水

二風谷（にぶたに）ダムから頭首工まで導水管が敷設され、平成９(1997)年から通水が始まりました。地域の低平地には自然流下方式の頭首工と、電力と揚水機の取水施設10カ所があり、各取水施設の近くには水神が祀られ、例年通水時に安全と豊作が祈願されています(写真２)。

頭首工として大きな水門の大任を終えた施設は現在、農業の近代史を伝える産業遺産として保存されています。

お米だけの真っ白いご飯を食べたいという夢が叶う前は、８列トウキビを引き割りにして、米と混ぜて食べる時代もありました。戦後はカボチャ・ジャガイモ・ニンジン・ダイコン・トウキビ等を自家用栽培(農機具がない農家)されてもいました。水田に水が入ると青い空を映して鏡のようになります(写真３)。安定的に米が生産される豊かな時代の象徴といえる景観です。

栄養失調になるバチェラー

明治10年、キリスト教宣教師のジョン･バチェラー(英国人:写真４)が、香港で罹患したマラリヤの療養のため函館に渡来します。当時、氏は白いご飯に白い塩をかけたおにぎりが食べられませんでした。

日本語とアイヌ語を函館で聞いたバチェラーは語学を学びます。函館から平取に入地するのはアイヌ語研究が主たる目的ですが、チセ(家)では煙りに馴染めず、冬はインクが凍って書けなくなり、食では栄養失調で函館へ運ばれる事態がおきます。

アイヌ語の言語学的研究は10年間行なわれ『蝦和英三対辞書』が完成します。初版は明治22(1889)年で、増補版(第四版)が明治38(1905)年に刊行されます。辞典発行までの10年は、アイヌ語の語学研究ということで平取に入ることが許されていました。

明治13(1880)年の平村ペンリウク宅では、米のほかに鶏小屋を作って卵を提供したり、書斎の増築を行います。辞典完成後は学園や施療病室をつくり、アイヌの学業や健康維持にも貢献します。

次第に米という食文化の違いにもなれ、言葉の違いもバチェラーは克服しました。



写真２　取水施設脇に設置される水神碑。田の神(稲作の豊穣をもたらす神)と結びついて、田のそばや用水路沿い等に近くなどに祀られる。



写真３　沙流川流域(平取本町)の水稲耕作。昭和45(1970)年以降の減反政策により、造田面積は減少している。かつては、町の低平地全体が水鏡のようになるほど一面の水田が広がっていた。

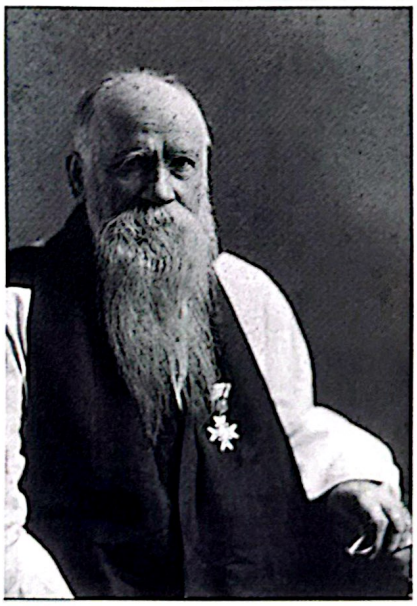
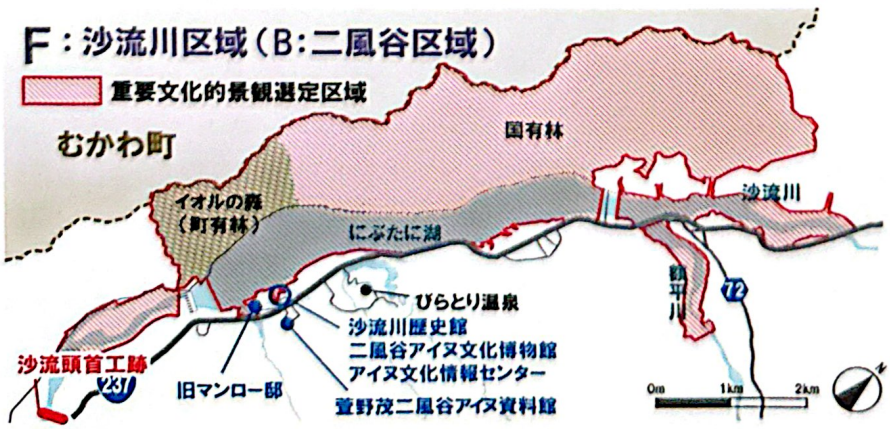


写真４　ジョン･バチェラー(1854-1944)。イギリス教会宣教会(CMS)の信徒伝道者として平取を訪れ、ペンリウクからアイヌ語を学んだ(北海道大学北方関係資料総合目録)。



「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055-0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2823
初　版:2014年6月
第2版:2020年3月

二風谷アットゥシについて

71

関連シート：41、42

二風谷アットゥシとは

アイヌの暮らしで培われてきた樹皮製の織物・着物をアットゥシと言います。腰機で織られる平織の反物で、アッ(オヒョウニレの樹皮)、ニペシ(シナノキの樹皮)が素材として用いられます。繊維の品質がやや劣るニカプ(ハルニレの樹皮)等が使われたという記録もあります。

平取町二風谷は、近現代に至ってもアットゥシの制作に力が注がれてきた地域です。今日においても主要なアイヌ工芸品として受け継がれ、後継者の育成や素材となる樹木の植栽が行われています。

平成25年3月には「二風谷アットゥシ」として北海道初の伝統的工芸品に指定され、販路拡大に向けた全国規模のＰＲが行われるようになりました。



写真１　「二風谷アットゥシ」を織っている様子。素材採取から衣服等の製品（写真２）の完成まで、熟練者であっても数ヶ月の歳月を要する。北海道の伝統的工芸品としてしっかりと価値を高め、安定的な後継者の確保へと繋げていく必要がある。

近世・近代のアットゥシ制作

アイヌ社会において対和人を主とした工芸品作りの需要が高まってくるのは、18世紀代以降とされています。

“中世までは「交易の地」であった蝦夷地は、幕藩権力によって十七世紀末時点を以てその活動を制限され、十八世紀後半には「商品生産の場」へとその経済状況が変化した”（海保1985)という人とモノの変遷が、他者への贈与・販売・交換を意図した工芸品の制作へ繋がっていきます。

近世の交易に関する文書の中にもアットゥシに関する記述(資料１)が現れるようになり、幕吏による蝦夷地調査報告にも、アットゥシ制作の詳細が記録(資料２)されていきます。

こうした古記録を読み解いていくと、アットゥシの産地が道内まんべんなく分布していたわけではないことが見えてきます(資料３)。また、斜里や沙流などの地域は海産物の多くない地理的環境である反面、そのことが手工芸の発達を促す側面をもっていたことが窺えます(資料４)。

明治時代以降、北海道の近代化に伴う社会資本整備が急速に進められていく中にあっても、沙流のアットゥシ作りは途切れることなく継承されます。1878(明治11)年に現平取町本町を訪れたイザベラ・バードは、日常の中での生き生きとした制作工程

資料1　宗谷場所におけるアイヌと和人との交易の交換比率(八升入りの米一俵)
寛政四(1792)年　反アツシ3枚　手幅付アツシ2枚(串原1792)
安政二(1855)年　反アツシ2枚　手幅付アツシ(平軸)1枚
(網走市史編纂委員会 1958)

資料2　幕末の蝦夷地調査にみるアットゥシ制作の詳細(一部抜粋)
「アツトシを製するには蝦語にヲピウといへる木の皮を剥てそれを糸となし織事なりまたツキシヤニといへる木の皮を用る事あれとも衣になしたるところ軟弱にして久しく服用するに堪さるゆへ多くはヲピウの皮のみをもちゆる事也･･･此ヲピウといへる木は海辺の山にはすくなくして多く深山窮谷の中にあり夷人これを尋ね求る事もつとも艱難のわさとせり」(村上島之允･間宮･村上貞助著、河野･谷澤解説 1990)
※オピウ＝オヒョウニレ(樺太東海岸の白浦方言：知里 1953)
ツキシヤニ＝チキサニ(ハルニレ)

資料3　『入北記』(安政四年)の「土人交易ノ品調」「交易品直段調」等にみられるアットゥシの産地
ハママシケ(浜益)、マシケ(増毛)、ルヽモツベ(留萌)、ソウヤ(宗谷)、西トンナイ(樺太南西部)、シヤリ(斜里)、トカチ(十勝)、サル(沙流)、ホロベツ(幌別)、モロラン(室蘭)、ウス(有珠)、アフタ(虻田)、ヤムクシナイ(渡島東部･噴火湾沿い)
(玉蟲著･稲葉解読 1992)

を観察して記録に納めています(資料５)。また、1918(大正７)年に札幌で開催された「開道五十年記念北海道博覧会」に、平取のアットゥシが出品(河野選 1985)されたり、1923(大正12)年の東京勧業博覧会で二風谷のアットゥシ製カロプ(煙草用具入れ)が販売される(二風谷部落誌編纂委員会編 1983)など、沙流のアットゥシが広く知られるようになっていきます。

また近代は、日本国内のみならず、欧米の人類学者によるアイヌ民具調査が体系的に行われた時代でもあります。1901(明治34)年にアメリカの医師･民族学者ヒラー(財団法人アイヌ文化振興･研究推進機構　2008)が、1912(大正元)年にはロシアの民族学者ヴァシーリエフ(荻原・古原・ゴルバチョーヴァ 2007)ら、多くの研究者が来訪し沙流川流域のアットゥシや機織り機具を収集しています(写真２)。

二風谷のアイヌ工芸振興

近代から現代に至る中で、平取町のアイヌ工芸品の制作・販売拠点が二風谷へと定まっていきます。1953(昭和28)年頃には萱野茂が「茶托やお盆の製作に着手し、その後の二風谷アイヌ民芸、アイヌ観光の先鞭をつけた」(二風谷部落誌編纂委員会編 1983)とされています。

同じ頃、二風谷で作られたアットゥシに多くの注文が来るようになり(資料６)、昭和30年代後半以降の民芸品ブームへと繋がっていきます。旭川の民芸社によるアットゥシの買いつけは、戦後間もないこの当時に商品として供給しうる産地として二風谷が広く認知されていたことを示しています。「これといった現金収入がなかった村では…」(資料６)の記述に、近代以降も大きく都市開発される土地柄でない二風谷のモノ作りと住民の想いを窺うことができます。

二風谷は日本列島における戦後のグローバル化の中にあっても、伝統的な手工芸を今の生活に結びつけてきた地域です。近年は北海道の地域振興の中で再評価され、平取町の貴重な財産として発信されています。

資料4　近世古文書にみられるアットゥシの産地

萱場所(現斜里町近辺)

「萱領(西は網走に接し、東は根室領メナシに至り、南はクスリの山と堺す)は、此地海産少しと云ども男夷は彫刻の細工に精妙なり。女夷またアツシを織、蝦夷全州萱場所の如き良品を産するなし。是等の産は毎く運上屋に出して交易す。…」(「第一纔　北辺要話」『加賀家文書』 齋藤 1994)

佐留場所(現日高町・平取町近辺)

「夷人業は春は海辺へ出うへ釣物をなし、夏は生海鼠を引、昆布を刈、秋に至千年川鮭漁出稼致し食糧を貯へ、余分は干立て荷物に出し、冬は山家へ帰り漁船又は網を拵へ、楢縄をなひ、女は厚しを織、キナ筵を編み、男女共春より秋迄漁業手透の節は粟、稗を作り、或は茎立の草　同根を刈取魚へ交て食糧資とす。一体夷人大勢にて産物乏しき場所故。」

(「佐留場所大概書」『東蝦夷地各場所様子大概書』 北海道編 1969)

資料5　イザベラ・バードが見た平取のアットゥシ(一部抜粋)

「女たちには、暇な時が少しもないようである。彼女たちは朝早く起きて、縫い物や織物をやり、樹皮を裂く。彼女たちは、自分たちや亭主にとても破れそうもないような衣服を着せてやるためばかりではなく、物々交換のためにも織らなければならない。アイヌ人が丹精こめて作った衣服を日本人の下層階級が着ているのを、いつも見かけるのである。」(イザベラ著・高梨訳 2000)

資料6　二風谷のアットゥシ制作・販売について(戦後)

「専業に織って販売網を広げたのは、貝沢はぎ、貝沢みさをで、昭和20年代末からは旭川市の民芸社が大量の買いつけをするようになってきた。
やがて昭和30年代後半から民芸品ブームが起こり、造りさえすれば何でも売れる時代が来た。これといった現金収入がなかった村では今まで女の仕事だったシナ皮取りが男の仕事になり、糸をつむぐもの、織る者と二風谷を中心にアットゥシ織が大量生産され、婦女子は夜も寝ないで働いた。二風谷の暮らしがよくなった基礎は、アットゥシと婦女子の力によるといっても過言ではない。」

(二風谷部落誌編纂委員会編 1983)

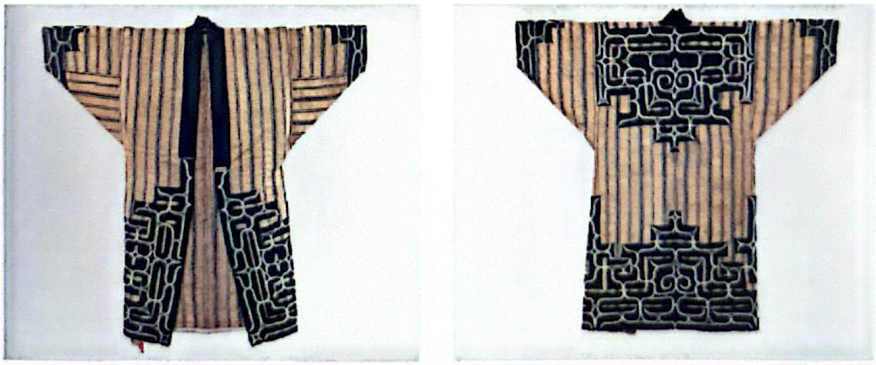


写真２　ヴァシーリエフが1912年に平取で収集したアットゥシ(現在、ロシア民族学博物館所蔵)。収集から１世紀以上を経た今日においても、色あせることのない卓越した女性の手仕事が見て取れる。

「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

■文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055-0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828
初　版:2015年7月
第2版:2020年3月

沙流の水辺とペカンペ（ヒシの実）

72

関連シート：20，37

水辺空間の形成とその利用

2015年８月、にぶたに湖右岸の沙流川支流であるオホフネトゥシ(沢口・が深い・生木の・さしかけ・[漁獲の足場]・あるところ)の沢口付近で水辺の野草を観察したところ、水面に白い小さな花を咲かせているペカンペ(ヒシの実)の群生が見つかりました(図１及び写真)。夏の渇水期に安定度の高い湖沼が形成されたことと、著しい増水がなかった年であったことが群生を促した要因のひとつと考えられます。



図１及び写真　ペカンペは「ヒシの実」の意で［pe(水)ka(の上)un(にある)pe(もの)］(知里　1953)と解釈されている。葉柄が浮き袋となって水面に菱形三角形の葉が放射状に浮かんでおり、葉を裏返すと鋭い稜角をもった堅い果実が３・４個根元についている。

ペカンペは１年生の水草で栄養の多い沼地に生育します。秋に熟した果実は水底に沈んで冬を越し、春になると発芽して根をおろし茎が水面に向かって伸びていきます。

社会資本整備が行き届く以前の沙流川流域(図２)をみると、ペカンペにとって四季をとおした良好な生息環境の広がりを見て取れます。沙流地方の生活誌を読み解いていくと、食材や生活用材を採取する主要な場所であるサㇻ(sar:ヨシ原、湿地)が重要なキーワードになっています。アイヌ語地名やウパシクマ(言い伝え)と合わせて古地図を見ていくことで、地域の植物利用の理解を一層深めていくことが出来ます。

また、こうした自然環境はかつて道内のいたるところでみられた特徴であったと考えられます。ペカンペにかかるウパシクマの多くは道東部に残されている(資料１)ほか、世界的にも珍しいといわれる野生植物への祭礼であるペカンペ祭(更科　1976)が標茶町塘路で伝えられています。

その外にもシコッ(現千歳市：松浦著 1972)、問寒別(現幌延町：松浦著・正宗編　1978)、十勝(吉田　1955)、旭川(財団法人アイヌ文化振興･研究推進機構　2001)など、様々な地域でも食材としての利用が記録されています。

資料１　アイヌ伝承にみられるペカンペ

１．北海道釧路・川上郡標茶町塘路・女

アイヌたちは天候が順調なのにペカンペの実りが悪く、鮭や鱒が川をさかのぼって湖水の入り口まで来ては引き返すので、「冬は餓死するものが出る」と心配する。村おさが心配し、川の岸に立ってぼんやりしていると、チッパキカムイ(魚を司る神)とチワシコロカムイ(川を司る神)が「人間は汚れた物を湖水で洗ったり、アシンル(便所)を川岸に建てたりするので懲らしめのため魚はやれぬ」と話している。村おさは便所を移し、カムイノミ(献酒祈願)して水を汚さぬようにしたので、神の怒りが解け、ペカンペは実り、鮭や鱒やその他の魚も湖に入るようになった。

(稲田・小澤編 1989 pp.9-10)

２．平賀サダモさん(日高町福満出身)からの聞き取り　1955年9月録音

菱の実…日本語で言うと「ペカンペ祭」という，菱の実の神様の，お蔭で生きた昔々，釧路じゅうが飢饉になって，食べ物もない，鹿も熊も獲ることができず，魚もいない，何も食べるようなものがない時に，ただそれだけたべものとしてあったもの…‥。

そして湖上いっぱいに，すごく湖上いっぱいにあったものが菱の実だ，そしてそればかり毎日毎日舟で，皆で一生懸命頑張って，子どものいる人，老人のいる人，食べさせたい人は競い合って，湖も見えないくらいに(乾くくらいに)舟を造って，舟でそれこそ，菱の実を競い合って採った。そしてそれを，実を(ツルから)(振り)取って，ゆでて干してそれから，実を取って，それをいろいろ，油をつけたり，それでラタシケプを作ったり，(菱の実の)団子を作ったり，いろいろして，そのお蔭で，村が復興した。

(早稲田大学語学教育研究所編 1984 p.27)

ペカンペのウパシクマと水辺環境の保全

ペカンペにかかる様々なアイヌ伝承(資料１外)をみると、水を汚すことへの戒め、塘路湖に群生する由来、植物神・飢饉のときの大事な食材としての敬い等が主題になっています。総じてペカンペをとおして自然食材の重要性や感謝を含む暮らしの

教訓が語られており、その一つ一つが近代のペカンペ祭に繋がる考え方になるとみられます。

道東部に伝わる数々のウパシクマは、北海道の近・現代史における自然環境の著しい変化の中でも釧路湿原一帯の水辺環境が良好に保たれていたことを示しています。塘路湖及びその周辺域では、ペカンペの食文化を育む良好な湖沼景観が今も広がっています。



図２　明治二十九年製版　陸地測量部　北海道仮製五万分一図「二風谷」の一部。当時の沙流川の蛇行や水辺、沖積地、河畔林、荒地、本流へ行き着く前に土地に浸透する小支流などが表されている。こうした情報からペカンペの群生する様子を読み取ることができる。

ペカンペの収穫とその利用

ペカンペの採集は実が熟して湖底に沈む前の９月頃、主に行れます。

食べ方はオハウ(汁)、ラタシケプ(煮物)、サヨ(お粥)の具材となる外、混ぜご飯や煮たり焼いたりした実をおやつとして食べたり、トノト(濁り酒)やシト(団子)の原料にもなりました。

天日で乾燥させると保存食になり、冬期間の食材としても重宝されました。その年の天候や水質などによる出来の善し悪しもあったようです(資料２-２)。

今後に向けて

水辺の資源利用と地域の暮らしの兼ね合いは、時代を超えて受け継がれる重要な課題です。

河川を管理するための堤防は、今日における重要な治水対策である一方、水辺環境の多様性が失われる側面をもっています。結果、とりわけ昭和20年代以降は多くの水場が失われ、ペカンペが食材として利用されなくなっていきました。

2015年ににぶたに湖で確認されたペカンペの群生地も、同年10月の降雨とダムの水量調整によって消失しました。しかし良い発芽環境さえ整えば湖底に残った種子が実るかもしれませんし、ヒシクイや白鳥などの野鳥も群生を促してくれます。

忘れかけていた食文化や味覚を復活させる試みは、生き生きとしたアイヌ文化を発信する地域振興の素材でもあると考えられます。

資料2　沙流川流域のペカンペ利用

1. 鳩沢ふじのさん(1890-1961　福満出身　アイヌ名ワテケ　文中W)
　平賀サダモさん(1895頃-1972　福満出身　アイヌ名サタモ　文中S)
　S:(ペカンペは ※編者追記) ここに(この)私たちの村にもある，ポント《小沼》に…
　W:ああなるほど，小さい時あったものだったけれど今は沼も干されて，田んぼにされているものだから，そのペカンペさえ，全くみられなかったけれど，釧路にばかり沢山あり，今でも沢山あるのだというよ。
(早稲田大学語学教育研究所編 1984 p.29)

2. 黒川セツさん(1926-2015　荷負出身)
　ペカンペ:実を煮て食べました。ほくほくしておいしい年と、水っぽくてだめな年があります。　(アイヌ民族博物館HP　アイヌと自然デジタル図鑑より)

3. S.Kさん(1932-　二風谷出身)
　ウカエロシキ(u ka e roski=互いに・上で・立ち上がる:通称クマの姿岩)の下に小沼が有り、その傍に親は畑を耕していました。その沼から親たちが秋になるとペカンペを採ってきて、焼いたり茹でたりして食べさせてくれました。　(2015.9.11聞き取り)

4. T.Hさん(1933-　二風谷出身)
　タイケシ(tay kes i=森、林・の端れ・のもの〈沢〉)より少し下手に沼が有り、その傍に我が家の畑がありました。親たちは長い棒を使い、浮いているヒシを手繰り寄せてペカンペを採り、焼いたり茹でたりして食べさせてくれました。小学生頃までの記憶です。
(2015.9.11聞き取り)

5. 鍋澤保さん(1936-2018　紫雲古津出身)
　自分が少年の頃(戦前)までは紫雲古津の沼でペカンペやトゲウオなどをよく採りました。しかし戦後になると干拓事業が進められたため、いなくなってしまいました。
ペカンペはデンプン質でトゥレプシト(オオウバユリの団子)に似ています。祖母たちが殻をつぶしてシトにしたものをよく食べました。食べ方はプクサ(ギョウジャニンニク)やユクカム(鹿肉:あばらのぶつ切り)などのオハウに混ぜました。
(2015.12.3聞き取り)

6. Y.Sさん(1939-　去場出身)
　我が家のそばを流れるヌペルンナイ(nup e ru un nay=原野・へ向かう・道・ある・沢)には子どもの頃、春にはミズバショウ、エゾノリュウキンカが咲き、夏には水面にペカンペの葉が浮いていました。時期になると親が実を採ってきて食べたものです。
(2015.9.27聞き取り)

「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055-0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828
初　版:2016年3月
第2版:2020年3月

ブロニスワフ・ピウスツキのみた平取

73

ピウスツキとアイヌ研究

ブロニスワフ・ピウスツキ(1866-1918)は、ポーランドを代表する近代のアイヌ研究者です。

氏は明治20(1887)年以降、数十年をかけてアイヌの調査･研究に取り組んでいきますが、その発端はロシア皇帝暗殺未遂事件容疑によるサハリンへの流刑でした。その後もウラジヴォストクのアムール地方研究会(OIAK)博物館に採用されてサハリン、北海道へ長期出張するなど、地に足をつけた成果を蓄えていきました。

ピウスツキのフィールドワークでは、当時まだ珍しかったカメラとエジソン式蝋管蓄音機が用いられました。最新の科学機器で現地調査を行ったことで、明治後半代のアイヌ語音声や写真資料が今に残されることになりました。

明治36(1903)年8月～9月初頭に行われた北海道調査直後の9月下旬には、サハリンのアイ(ai)コタンに住むアイヌ女性チュフサンマと結婚し、その後2児をもうけます。長男木村助造氏(1971年に富良野市で逝去)のご子息は現在、当代ピウスツキ家の正統な当主として日本に在住しています。

平取への来訪（図及び資料1）

ピウスツキが平取コタンへ訪れる契機になったのは、ヴァツワフ・シェロシェフスキからの書簡で要請された北海道アイヌの共同調査です。

明治36(1903)年7月8～10日に函館へ到着したピウスツキは、同地の路上で白老コタンのノムラ・シパンラム(野村芝蘭)と偶然知り合う機会に恵まれ、その友好関係を元に白老での調査を実施します。

その後の平取までの移動は、白老駅から早来駅までが鉄道で、平取までは乗馬となります。途中、鵡川河畔のコタンで宿泊しますが、この来訪はJ.バチェラーから住民に予め知らされており、調査団は「プロテスタント派のキリスト教に改宗したアイヌたち」(シェロシェフスキ著・井上訳 2013)から歓待されます。明治後半代にキリスト教の布教活動が盛んだった土地柄から、この集落は鵡川下流域のチンコタン(現むかわ町汐見)かその周辺域と推定されます。



ピウスツキの肖像写真。1866年ロシア帝国ヴィルノ県ズーウフ(現リトアニア領ザラヴァス)にて出生。第三子で長男、ポーランド貴族の家系であるピウスツキ家の嫡嗣。弟のユゼフはポーランド第二共和国(1918-1939)の初代国家元首。

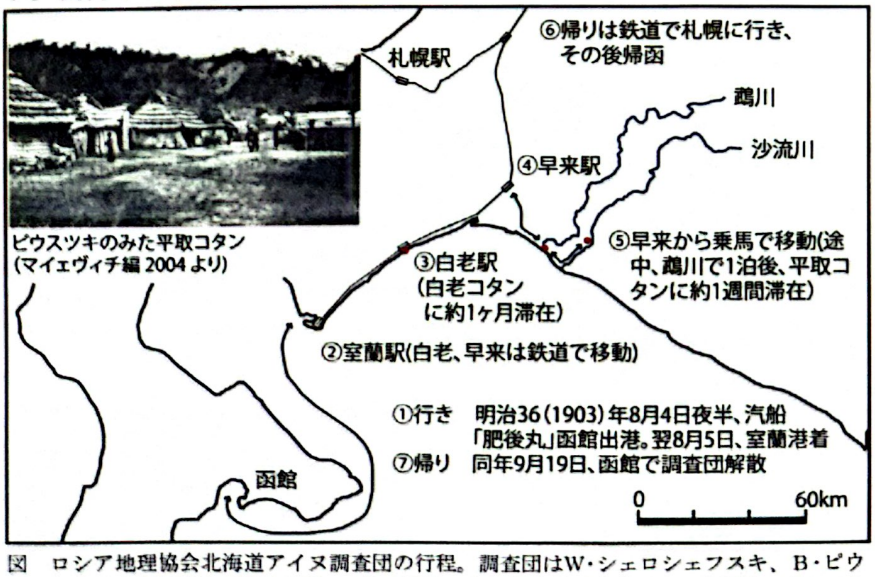


図　ロシア地理協会北海道アイヌ調査団の行程。調査団はW･シェロシェフスキ、B･ピウスツキと日本語通訳の千徳太郎治の3名で組織。主な調査地は白老コタンと平取コタンの2カ所。その後、道東部も調査予定であったが、ロシア大使館からの中止命令により断念。

調査隊は翌日出発し、昼下がりには沙流川の岸辺に出ます。そこで「大放牧地が延々と連なり、そこで初めて、われらは馬群や赤牛の群れを目にした」(同シェロシェフスキ文献)という景観の広がりを記録します。広大な放牧地の連なりは、沙流川下流域を指しているとみられます。つまり調査隊はチンコタン近辺を出発後に海沿いの街道を移動して佐瑠太(現日高町富川)に達し、沙流川沿いに北上して平取へ向かったと考えられます。

平取コタンでは、一週間あまりの滞在の中で「頗る多くの信仰・伝説・古謡」(同シェロシェフスキ文献)が調査された外「土人の熊送り、舞踊の類を活動寫眞に撮影」(『小樽新聞』2900号　1903[明治36]年9月17日付：井上 2010)といった実り多い成果が得られます。実際、ピウスツキの学術論文では「平取で聴取した情報にかなり言及」(井上 2013)されています。平

取滞在の半ばには、スパイ疑惑に端を発するロシア大使館からの調査中止命令が伝えられ、急遽札幌経由で函館に戻り、調査団が解散されます。

その後、明治43(1910)年6月初め～翌年1月にはロンドンに滞在し、日英博覧会の「アイヌ村」で10名の沙流アイヌ(門別村２名、平取村１名、二風谷村７名)と会い、50以上の物語を採録します。

結果としてピウスツキが手がけた北海道アイヌの研究資料は、その多くが沙流地方からの収集であったことが分かります。

研究の成果

ピウスツキが録音したアイヌ語音声の蝋管レコードは、総数200-300本位あったと推定されています(大半は未発見)。その内、65本が昭和58(1983)年に北海道大学へ持ち込まれ、当時の科学技術を駆使した再生作業が行われました。結果、この音声資料に19編の北海道方言による口承文芸が確認されました(言語・音楽班 1987)。明治36(1903)年の北海道及びその後の日英博覧会での調査から、この蝋管レコードには少なからず沙流アイヌの音声が含まれていると推定されます。

その外、ピウスツキ研究を札幌から発信する共同研究も行われており『Pilsudskiana de Sapporo』という逐次刊行物が出版されています。また、同名のホームページも公開中です。

北海道調査で収集されたアイヌの民具は、ロシア科学アカデミー・ピョートル大帝記念人類学民族学博物館及びロシア民族学博物館(ロシア：サンクトペテルブルク)、ライプツィヒ民族学博物館(ドイツ)などに納められています(荻原2013)。邦文の民具図録も幾つか刊行されており(Spbアイヌプロジェクト調査団編 1998など)、どのような収集資料があるのかを閲覧することもできます。

ピウスツキをとおした文化交流

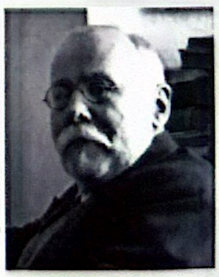
平成25(2013)年10月に、ピウスツキのブロンズ胸像がポーランド共和国文化･民族遺産省から白老町のアイヌ民族博物館へ寄贈されました。第１号記念碑は1991年11月にユジノ・サハリンスクのサハリン州郷土誌博物館に建立されており、白老は世界で2カ所目の設置になります。

また、平成28(2016)年1月からはポーランド南部のジョーリ市博物館において、B・ピウスツキを顕彰する常設展示が設けられています。ピウスツキのアイヌ文化研究とゆかりの深い白老町、平取町と連携しながら設置された展示で、今後、北海道とポーランドの文化交流の架け橋にもなっていくと考えられます。

資料1 ピウスツキによる北海道調査(ロシア地理協会北海道アイヌ調査団)

明治36(1903)年6月6日 コルサコフでシェロシェフスキからの手紙に接する。内容はロシア地理協会による北海道アイヌ調査の同行依頼。その後すぐに樺太アイヌのタロンデ(千徳太郎治)を日本語通訳として雇い入れる。
7月8～10日頃 函館港に到着したと推定。
8月2日頃 函館の路上で白老アイヌのノムラ･シパンラム(野村芝蘭)と出会う。
8月4日夜半 肥後丸に乗船して室蘭港へ向かう。5日早朝に到着し、鉄道で白老に至る。その後、8月末前後までシパンラムらの協力で同地に逗留し、調査を行う。
8月末前後の正午 白老駅から早来駅へ列車で移動。到着後、乗馬数頭と道案内を雇い小さな旅籠に1泊。翌日、早来から鵡川まで乗馬で移動し、同地で1泊。
翌々日(9月初旬と推定) 沙流川の河岸に達し、同日午後には平取コタン着(約1週間滞在し、長老ペンリウクの協力により調査を進める)。平取調査後は道東方面に移動する予定であったが、ロシア大使館からの調査中止命令により断念。
9月10日頃 騎乗で平取を出発。最寄りの鉄道駅(早来駅と想定)に至る。一両日中には札幌に到着。その後、札幌のバチェラー宅に2･3日宿泊する。
9月15日早朝(?) 札幌駅から室蘭へ移動後、連絡船に乗って同日中に函館へ到着
9月19日 ロシア地理協会調査団が函館で解散。24日にピウスツキと千徳がコルサコフに帰着。

資料2 ヴァツワフ･シェロシェフスキ(1858-1945)について



ポーランドの小説家。20代前半に社会主義運動に参加して12年間ヤクート地方に流刑となる(1879-91)。これを契機としてヤクート族やツングース族を扱った小説や民族学的研究を発表。明治33(1900)年にはワルシャワで起こった労働者デモを組織した嫌疑で再逮捕される。その際、イルクーツク流刑の代案として出されたのが北海道アイヌの調査である。
その後、明治36(1903)年に来日し、B･ピウスツキとともにアイヌ研究を手がけた。



「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定



沙流の動物相とアイヌ文化継承

74

関連シート：68

コタン（集落）の景観に地域の動物をみる

二風谷アイヌ文化博物館の屋外展示にヘペレセッ（仔グマの寝床：写真1）があります。冬山で行う穴熊猟のときに捕獲したヘペレ（生まれて1年以内の仔グマ）を育て、イヨマンテ（イ＝それ、オマンテ＝行かせる：飼いグマ送り）に備えるための大切な施設です。また、かつてはタヌキ、キツネといったほ乳類も動物送り儀礼のために育てられたと伝えられています（萱野1978）。

近世～近代の資料を読み解いていくと、さまざまな動物送りの様子を見て取ることが出来ます。幕吏近藤重蔵の蝦夷地巡検に同行した医師木村謙次による日誌（木村著・山崎編1986）には、シマフクロウ（「皃鵰　蝦夷名島梟」と記載）、オオワシ？（「飛蒼鷹蝦夷名」）と仔グマ（「熊児」）それぞれのカムイを送るイオマンテが、寛政10（1798）年11月にピラカコタン（平賀）で行われたと記されています。また、明治45（1912）年2月にはヌプキ・ペッ・コタン（貫気別）でキツネ送りと鳥送りが行われたという記録もあります（吉田 1957）。



写真１　二風谷アイヌ文化博物館屋外展示のヘペレセッ（仔グマの寝床：写真左）とプ（高床式倉庫：写真右）。ヘペレセッはイヨマンテに関わる重要施設で、プはネズミなどの小動物の侵入を防ぐために高床にし、普段ははしごを外していたと伝えられている。こうした施設に地域の動物との関係性や配慮をみることができる。

アイヌ口承文芸や古式舞踊にも、アイヌモシリの様々な動物世界が垣間見えます。ヒグマ、エゾシカのほか希少種のフクロウ、絶滅種とみられるオオカミ、カワウソ等の生き生きとした姿が表現されています（久保寺編 1977）。

地域に受け継がれるアイヌ文化継承の姿をみると、多彩な表現のなかに住民と動物の関係性や尊敬の想いをみることができます。

近代における北海道の動物研究

アイヌ文化の動物観を解き明かしていくには、明治前半代からの科学的な動物研究の成果を合わせみていく必要があります。その中でも、トーマス・ライト・ブラキストン（1832-1891：写真2）の調査・研究は高い重要性をもっています。

氏は文久3（1863）年の函館居住以降、10数年にわたる鳥類研究を経て、明治16（1883）年2月に東アジア協会の例会で「大陸と日本列島の古代における結びつきを示す動物学上のあらわれ」を発表します。北海道にはヒグマ、シマリス、エゾヤマドリ、シマフクロウ、エゾアカガエル、シベリアオオカミなど、シベリ

資料1　シマフクロウのアイヌ語名（知里 1963）

(1)kamuycikap（カむイチカプ）　神・鳥　神である鳥《ホロベツ》
(2)kamuy cikappo（カむイチカッポ）　敬愛する神鳥《ホロベツ》
(3)kamuy-ekasi（カムイエカシ）　神・翁《ホロベツ；サル》雅語
(4)kotan-kot-cikap（コタンコッチカプ）　村・所有する・鳥　村を守護する鳥《ビホロ》
(5)kotan-kox-cikax（コタンコホチカハ）〔〈kotan-kor-cikap〕《ニイトイ》
(6)kotan-koro-cikax（コタンコロチカハ）〔〈kotan-kor-cikap〕《シラウラ》
(7)kotan-kor-kamuy（コタンコルカムイ）　村・所有する・神　村を守護する神
《ホロベツ；サル；クッシャロ；ビホロ》
(8)mosir-kor-kamuy（モシリコルカムイ）　国土・を所有する・神《ホロベツ》雅語
(9)eturus（エとルシ）〔〈？〕《トンナイ；シラウラ；タラントマリ》
(10)niyas-kor-kamuy（ニヤシコロカムイ）〔〈ni-has-kor-kamuy〕　木・条・もつ・神
(11)ya-un-kontukai
(12)ya-un-kotchange-gusu
※10～12はJ・バチェラー 1938『アイヌ・英・和辞典』（第四版）による。



写真２　T. W. ブラキストンの肖像写真（市立函館博物館蔵）。北海道の動物研究で多くの功績を残した外、明治17（1884）年には平取コタンを含む北海道の調査旅行記をまとめている（ブラキストン著、高倉校訂 1979）。

ア大陸系の動物が多い一方で、本州にはキジ、ヤマドリ、カモシカ、イノシシ、トノサマガエル、サルが生息し、津軽海峡が動物分布上の境界線になっているという主張です。

この発表を受けて津軽海峡の動物分布境界線を「ブラキストン・ライン」と呼ぶ提案がなされました。ブラキストン・ラインの設定が世界的な支持を受ける中、その後の八田三郎による提唱(八田ライン:宗谷海峡)も含め、学術的な見地による生物境界線設定が活発に議論され、北海道らしい動物相を解明する発端になっていきました。

シマフクロウについて

ブラキストンの名は、津軽海峡の生物境界線であるブラキストン・ライン及びシマフクロウの学名として、北海道の動物研究史に深く刻まれています。

シマフクロウ(Blakiston's Fish Owl)には「*Ketupa blakistoni blakistoni*」の学名が付けられています。その元となったのはイギリスの大英博物館に収められているシマフクロウの模式標本です。この資料はブラキストンによる採集で、この標本を用いたイギリスの鳥類学者ヘンリー・シーボームにより*blakistoni*の種小名が献名されました。ブラキストンによる明治前半代の鳥類採集とその目録づくりは、後に行われていくシマフクロウの生態把握と保護活動に繋がる出発点にもなりました。

一方、シマフクロウのアイヌ語は地域や文脈により様々な名称が伝えられています(資料1)。その語源や地域のフクロウ信仰(資料2)、シマフクロウの彫刻意匠(写真3･4)等から、地域住民にとって深い畏敬の念をもって接する存在であることが窺えます。

資料2　アイヌ伝承にみられるフクロウ

①梟はカムイ・チカプともいってコタン・コル・カムイともいうのだ。梟をコタン・コル・カムイということ、コタン・コル・カムイとしてイナウを上げることは、このコタンにも、昔からの風であるが、その由来はわからない。このコタンではポロ・シリはコタン・コル・カムイのいる処としてイナウ、オミキなどをあげる。(明治44･5･29、ポロ・サル、テコンナウク)　(吉田 1957)

②シマフクロウの起源に就いて...「創造者たる神は初に楽園に此を造り暫くして人の園に送り神と人間の仲介者とした。此の故に此の名がある。又彼を名付けて僕と云ふは狩猟の際に人を助けるのみならず鳴聲で人に警告し且健康を助けるからである。彼が人里又は人家に近く来て高聲に叫ぶのは不幸の凶兆で、其の聲の柔らかく且穏なのは繁栄と幸運とを示す吉兆である。」(バチェラー 1925)

③コタンカラカムイ＝国造りの神が、国を造り終えて神の国へ帰る前に、天国からフクロウ神を呼び、草とか樹木の種、ヒエやアワなどすべての穀物を預け、村中や国中にまくように言いつけた。種物を預かったフクロウ神は、夜も昼もなく国中を飛び回り、隅々まで種をまいてくれた。そのおかげでアイヌは食べ物に困らない。そのお礼にアイヌはフクロウを大事な神として祭るのですよ……、と。

※昭和37年10月4日　木村こぬまたんによるウパシクマ「フクロウが神と崇められるわけ」　(萱野 2003)



写真3　シマフクロウの彫刻作品(貝澤守作:エンジュ製)。カムイとして崇められる鳥類である(資料2)一方、北海道における今日的な自然保護を象徴する生物でもある。



写真4　サパンペ(冠)に彫刻されるシマフクロウの意匠(平取町紫雲古津：個人蔵)。沙流に受け継がれるカムイへの崇拝が、重要な祭祀具の中に表現されている。

平取地域イオル再生事業と地域の森づくり

平取町ではイオルの森及び国有林、民有林(重要文化的景観選定区域)と連携し、アイヌ文化継承のための植栽･育成補助や針広混交林の保持に配慮した造林業等を行い、沙流川流域ならではの森林保全活動を進めています。

階層構造の複雑な森林植生を目指す取り組みは、沙流川流域のアイヌ文化を育んだ生物の多様性保持にも繋がっていきます。今後、地域振興･教育普及のキーワードとして一層重要性が高まっていくと考えられます。



「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055－0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828

初　版:2016年7月
第2版:2020年3月

ジョン・バチェラーと平取聖公会

75

所在地：平取町本町65-1

関連シート：31、70

北海道のアイヌ伝道の始まり

平取聖公会の教会堂とバチラー保育園*(写真１・２)が所在する平取町本町は、かつてピラウトゥルコタン(平取村)と呼ばれ、近代の北海道におけるアイヌの大規模集落地として広く知られていました(バチェラー 1884等)。そうした土地柄の中で明治時代初頭以降、幾人もの宣教師やアイヌ研究者が訪れて貴重な記録が残され、同時にキリスト教布教の一拠点としての整備が進められていきました。

日本国内でキリスト教が解禁(資料1)された翌年の明治7(1874)年、英国聖公会宣教師ウォルター・デニング司祭(1846-1913)が函館を来訪し、北海道における聖公会の宣教が開始されます。同地を伝道活動の拠点とし、明治9(1876)年に平取を訪問して首長ペンリウク(1833-1903)からアイヌ語を学び、伝道対策の研究をしました。この出来事は北海道におけるアイヌ伝道の始まりとされています(日本聖公会北海道教区歴史編纂委員会編 1966)。

バチェラーの平取来訪

ジョン・バチェラー(1854-1944)は函館在住時の明治12(1879)年に信徒伝道者に任命され、同地を拠点にアイヌへの伝道活動を始めます。同年9月には初めて平取コタンを訪れ、その後幾度にもわたってペンリウク宅でアイヌ語やアイヌ文化を学びます(写真3･4)。

また、たびたび函館までペンリウクを招聘して集中的にアイヌ語研究に打ちこみ、明治22(1889)年に出版される『蝦和英三対辞書』という大きな成果へと結びついていきます。この初版本は「ほとんど日高の平取のアイヌ語だけが納められている」(田村　1981)もので、明治前半代の平取コタンの暮らしを知る上でも貴重な記録といえます。

バチェラーは明治24(1891)年に函館から札幌に拠点を移し、明治28(1895)年に建てられる平取初の教会堂建設に尽力します。明治39(1906)年には有珠出身のアイヌの向井八重子(1884-1962:後のバチェラー八重子)を養女として迎えます。八重子はその後札幌のアイヌ保護学園や幌別教会(現登別市幌別)での勤務を経て、昭和2(1927)年から昭和6(1931)年まで平取教会で

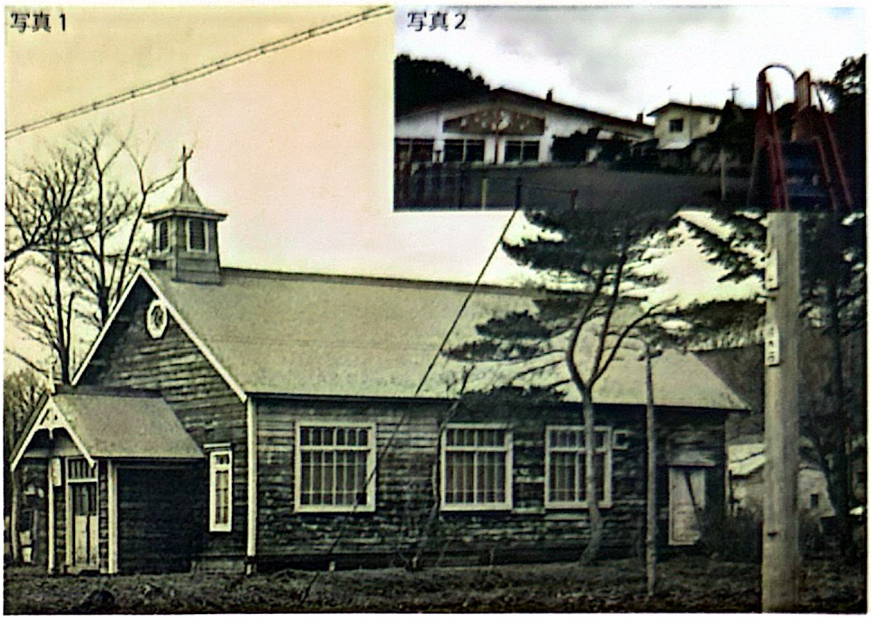


写真1・２　明治28(1895)年に竣工された平取聖公会(写真１は昭和8[1933]に改築された後の教会、遠藤裕昭氏提供)。昭和41(1966)年には現在の教会堂が新築され、バチラー保育園(昭和24年開設・同47年現施設へ改築:写真２)とともにキリスト教伝道の拠点的施設として地域に受け継がれている。

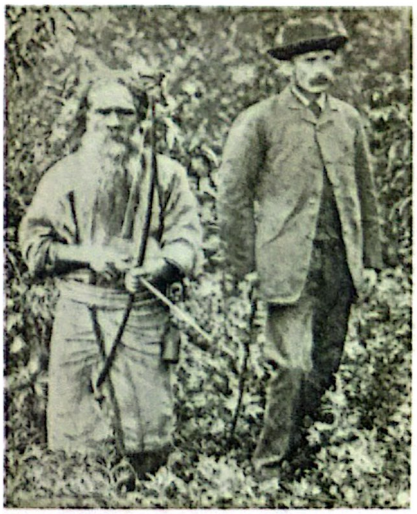


写真3　J･バチェラー(右)とペンリウク(バチェラー 1928)。バチェラーによるアイヌ研究の知識は、その多くがペンリウクとの交流の中で培われた。

資料1　明治時代初頭におけるキリスト教の解禁

維新直後に公布された「五榜の掲示(高札)」(慶応4[1868]年)によって、明治政府は徳川幕府に引き続きキリスト教を禁教することを明示した。江戸時代以上に苛酷なキリシタン弾圧も行なわれ、キリスト教解禁を迫る外国公使団はこれに対して強い抗議を繰り返した。一方、明治初年以来、不平等条約(日本が欧米列強と結んだ条約)の改正は政府の最重要課題であった。条約改正せずに信教の自由を認めさせたい諸外国と、条約改正はしたいがキリスト教を解禁したくない日本政府との間で、キリスト教問題は取り引きの材料になる。このせめぎあいを経て諸外国からの圧力が高まり、岩倉使節団が訪欧中の明治6(1873)年2月24日、政府はキリシタン禁令を含む高札を撤去した。(参考：ビジュアル・ワイド明治時代館 2005)

働き、地域住民への布教活動を行いました(掛川 1988)。

バチラー保育園の開設

大正12(1923)年に、当時の北海道ではまだ珍しい幼児施設である平取幼稚園（バチラー保育園の前身)が設けられました。昭和3(1928)年に財政難で廃園になりましたが、昭和22(1947)年にはバチェラーらによるアイヌ伝道の重要性を受け継ぐための記念事業が計画され、その一環として昭和24(1949)年に教会前の消防会館を買い取ってバチラー保育園が開設されました(日本聖公会北海道教区平取聖公会 2009)。

その後、現在に至るまで園ではキリスト教精神に基づいた幼児保育が行われています。また園内に掲げられている肖像写真によって、園児は幼少期からバチェラーの存在を知る環境にあります。

バチェラーの功績と平取町本町の今

バチェラーは明治・大正・昭和期の北海道に生き、地域住民へキリスト教を伝道する一方で、アイヌ語の保存、慈善活動など多彩な功績を遺してきました。北海道で大水害があった明治31(1898)年には平取地方に米を配給し、大正2(1913)年の水害時にも北海道各地のアイヌの救済にあたるなど、幾度にもわたる災害支援を行いました(横田編 1954)。また、明治23(1890)年には幌別に「愛隣学校」を設立したのをはじめ、札幌に「アイヌ保護学園」(明治23[1890]年)、「アイヌ・ガールズ・ホーム」(明治31[1898]年)を設立するなど、北海道内の各地でアイヌ子弟の教育活動にも力を注いでいます(バチェラー著・仁多見・飯田訳編 1993)。



写真4　ペンリウクの家。バチェラーが平取コタンでアイヌ語研究を進める拠点となった家。現義経神社の鳥居前辺りに所在した。明治14(1881)年には、バチェラーが下宿するための新室(2.7×1.8m)を建てて滞在の便宜を図った(この年は4月～秋まで逗留)。(スター 1904)

資料2　聖公会について

カンタベリー大主教を精神的指導者とするイングランド教会を母体に、世界160カ国に広がる教会(信徒6500万人)。ローマ・カトリックとプロテスタントに大別される西方キリスト教会の中で、聖公会は両者の要素を兼ね備え、その中間に位置しているといわれています。聖公会の信仰は、東アジアには18世紀から19世紀にかけて、英国と米国の両聖公会から伝えられました。日本には安政6(1859)年、米国聖公会から二人の宣教師が渡来、今日の礎を築きます。キリスト教禁令が廃止された後は英国、カナダ聖公会の宣教師団も伝道に加わり、明治20(1887)年に「日本聖公会」が創設されました。(参考:リーフレット「聖公会」[北海道教区])

資料3　J.バチェラーの略歴

安政元(1854)年	英国サセックス郡アックフィールド村に生まれる。
明治 9(1876)年	ロンドンにある神学校を卒業、勉学のために香港に渡るが、マラリアにかかる。
明治10(1877)年	転地療養のため香港出港、函館渡来。以後、函館を活動拠点とする。
明治12(1879)年	デニング同伴で平取コタン初訪問。
明治17(1884)年	初の著書『蝦夷今昔物語』を出版。その後、数々のアイヌ関連著書を世に出す。
明治24(1891)年	函館から札幌に移転、出国するまでの活動拠点とする。
明治28(1895)年	平取聖公会竣工、開堂。
大正11(1922)年	平取幼稚園開設(後のバチラー保育園)。
昭和15(1940)年	最後の平取訪問、その後日本を出国し、カナダへ向かう。
昭和19(1944)年	満90歳、故郷アックフィールド村の生家にて逝去。

(横田編 1954、バチェラー著・仁多見・飯田訳編 1993)

バチェラーがキリスト教の教えを説き実践した平取町本町では、現在も変わることなく平取聖公会とバチラー保育園に老若男女が集っています。現在営まれるこうした施設群は、バチェラーの博愛精神と住民の信頼関係の証といえます。



＊固有名詞であるバチラー保育園以外の表記は、英語の「Batchelor」の発音により近い「バチェラー」の表記とさせて頂きます。

「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

□文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055－0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828
初　版:2016年7月
第2版:2020年3月

久保寺逸彦 1971「沙流アイヌのイナウに就いて」『金田一京助博士米寿記念論集』 三省堂
久保寺逸彦編 1977『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』 岩波書店
言語・音楽班 1987「B. ピウスツキ蠟管の録音内容」『国立民族学博物館研究報告別冊』5号 国立民族学博物館
河野本道選 1985『アイヌ史資料集(第二期) 第六巻 阿部正己文庫編(三)』 北海道出版企画センター

さ 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 2001『アイヌ文化再現マニュアル 食べ物 秋から冬へ』
財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 2008『アイヌ民族:歴史と現在 -未来を共に生きるために』
財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 2008『アイヌの工芸 -ペンシルバニア大学考古学人類学博物館ヒラーコレクション-』
財団法人北海道埋蔵文化財センター 1986『ユオイチャシ跡・ポロモイチャシ跡・二風谷遺跡』(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第26集
齋藤玲子 1994「北方民族文化研究における観光人類学的視点(1) -江戸～大正期におけるアイヌの場合-」『北海道立北方民族博物館研究紀要』第3号 北海道立北方民族博物館
坂倉源次郎 1739『蝦夷随筆』(寺沢一ほか編 1985『蝦夷・千島古文書集成:北方未公開古文書集成』1 教育出版センター、冬至書房新社)
桜井清彦 1967『アイヌ秘史』 角川書店
更科源蔵 1955『北海道伝説集・アイヌ篇』 楡書房
更科源蔵 1971『アイヌ伝説集』 北書房
更科源蔵、更科光 1976『コタン生物記 I 樹木・雑草編』 法政大学出版局刊
沙流川流域史調査団 1962「北海道沙流川流域史調査概報(第一次)」『史観』63・64合冊 早稲田大学史学会
沙流川歴史館 2004『沙流川歴史館だより』14 沙流川歴史館
ジョン・バチェラー 1884(1938年再版)『蝦夷今昔物語』 尚古堂書店
ジョン・バチェラー 1889『蝦和英三対辞書』
第一版 1889『蝦和英三対辞書』北海道庁(ジョン・バチェラー著、惣郷正明解説 1975『蝦和英三対辞書』 国書刊行会)
第二版 1905『アイヌ。英。和辞典及アイヌ語文典』 教文館
第三版 1926『アイヌ。英。和辞典』 教文館
第四版 1938『アイヌ・英・和辞典』 岩波書店(1981 第二刷刊行)
ジョン・バチェラー 1901 The Ainu and Their Folk-Lore. The Regious Tract Society. London.(ジョン・バチェラー著 安田一郎訳 1995『アイヌの伝承と民俗』 青土社)
ジョン・バチェラー 1925『アイヌ人と其説話』 富貴堂
ジョン・バチェラー著、仁多見巌・飯田洋右訳編 1993『わが人生の軌跡 ジョン・バチラー遺稿』 北海道出版企画センター
坂本木材株式会社1995『坂本木材100年のあゆみ』

た 武隈徳三郎 1918『アイヌ物語』 富貴堂
橘南谿 1795～1797『東遊記』(橘南谿、蠖庭篁村1909『東遊記:諸国奇談』 富山房)
田中忠義、佐々木みき編 1971『拓土に花は実りて:戦後開拓婦人文集(体験記)』 北海道開拓者連盟
玉蟲佐太夫1857『入北記』(玉蟲佐太夫著・稲葉一郎解読 1992『蝦夷地・樺太巡検日誌 入北記』 北海道出版企画センター)
田村すず子 1981「バチラーの辞典について」『アイヌ・英・和辞典』(第四版第二刷) 岩波書店
田村すず子 1996『アイヌ語沙流方言辞典』 草風館
著者不詳 1739頃『蝦夷商賈聞書』(松前町史編集室編 1979『松前町史』資料編3)
著者不詳 1791『東蝦夷地道中記』
著者未詳 1808「佐留場所大概書」『東蝦夷地各場所様子大概書』(北海道編 1969『新北海道史』第七巻)
知里真志保 1951『アイヌ語地形語彙』(郷土研究叢書第一輯) 北海道郷土史研究会
知里真志保 1953『分類アイヌ語辞典 第1巻 植物編』〔日本常民文化研究所彙報 第64〕 日本常民文化研究所(知里真志保 1976『知里真志保著作集』別巻I 平凡社)
知里真志保 1955「アイヌ(総説・宗教・言語・文学・舞踊」『世界大百科事典』1 平凡社(知里真志保 1973『知里真志保著作集』3 平凡社)
知里真志保 1955「斜里郡内アイヌ語地名解」『斜里町史』 斜里町役場(知里真志保 1973『知里真志保著作集』3 平凡社)
知里真志保 1956「地名アイヌ語小辞典」『にれ双書』II 楡書房(知里真志保 1973『知里真志保著作集』3 平凡社)
知里真志保 1959「アイヌの鮭猟 -幌別における調査-」『北方文化研究報告』14 北海道大学(知里真志保 1973『知里真志保著作集』3 平凡社)
知里真志保 1963『分類アイヌ語辞典 第2巻 動物編』〔日本常民文化研究所彙報 第89〕 日本常民文化研究所(知里真志保 1976『知里真志保著作集』別巻I 平凡社)
知里真志保 1973「樺太アイヌの生活」『知里真志保著作集』第3巻 平凡社
辻井達一 2006「牧野と牧野林」『北海道平取町文化的景観保護推進事業第1年次報告書(事業中間報告)』 平取町教育委員会
伝えたい物語実行委員会 2010『オプシヌプリの伝説』 総北海
津田命子 2006「アイヌ文様・その変遷と技法について」『アイヌ文様の美 線のいのち、息づくかたち』 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構

鶴丸俊明編 1989『北海道平取町 イルエカシ遺跡』 平取町遺跡調査会
徳井由美 1989「北海道における17世紀以降の火山噴火とその人文環境への影響」『お茶の水地理』30
トーマス・ライト・ブラキストン著・高倉新一郎校訂 1979『蝦夷地のなかの日本』 八木書店

な 中井和子・角幸博・小澤丈夫・石本正明 2010「開拓史後のギャンブレル屋根畜舎の導入に関連する洋書について」『日本建築学会技術報告集』16-33
中川裕 1995『アイヌ語千歳方言辞典』 草風館
仲摩照久編 1930『日本地理風俗体系』 新光社
永田方正 1891『北海道蝦夷語地名解』 北海道総合教育会
荷負自治会郷土誌編集委員会 1988『郷土誌におい -ダムに沈む沙流川のほとりで-』 荷負自治会
西川北洋 1941『天然生活と資源の活用 アイヌ風俗の絵巻』 トミヤ出版部
二風谷部落誌編纂委員会編 1983『二風谷』 二風谷自治会
日本聖公会北海道教区平取聖公会 2009「平取聖公会宣教百三十周年記念誌 主に愛されて生きる」 日本聖公会北海道教区平取聖公会
日本聖公会北海道教区歴史編纂委員会編 1966『教区90年史:日本聖公会北海道教区』 日本聖公会北海道教区
ニール・ゴードン・マンロー著、小松哲郎訳 2002『アイヌの信仰とその儀式』 国書刊行会
二六堂 1919『開道五十年記念神社仏閣名勝写真帖』
貫気別郷土誌編集委員会 2005『郷土誌貫気別』 貫気別自治会
野沢謙庵 1692『蝦夷記』(続群書類従完成会 1906『続々群書類従』第九・地理部二 国書刊行会)

は 服部四郎編 1964『アイヌ語方言辞典』 岩波書店
パラサムレック述・鳥居龍蔵譯 1895「オキクルミの話」『東京経済雑誌』778 経済雑誌社
平取町 2002『語りつぐ平取』 第一法規出版
平取町 2004『クラスターズ・アイヌ文化学習帳』 平取町立二風谷アイヌ文化博物館
平取町開拓農業協同組合 1975『平取町開拓農協 解散記念写真集』
平取町教育委員会編 1996『平取町カンカン2遺跡』
平取町教育委員会編 2000『平取町亜別遺跡』
平取町教育委員会 2003『国指定重要有形民俗文化財報告書 北海道二風谷及び周辺地域のアイヌ生活用具コレクション』
平取町史編集委員会 2003『平取町百年史』 平取町
平取町農業協同組合 1996『新たなる挑戦 -平取町農業協同組合合併20周年記念誌-』
平取町役場町民課編 1955『平取町町政要覧 昭和30年版』 沙流郡平取町役場
平取外八箇村小学校組合會編 1917『平取外八箇村誌』 平取外八箇村戸長役場
平取村開村五十周年史編纂委員会 1952『平取村開村五十年史』 平取村役場
平村上男 2006 「ペンケ・パンケと昔の暮らし」『北海道平取町文化的景観保護推進事業第1年次報告書〈事業中間報告〉』 平取町教育委員会
平村幸雄編 1951『北國の神秘を語るアイヌ寫眞帳 -日高國沙流川流域を中心とせる-』 社団法人北海道アイヌ協会
深田久弥 1964『日本百名山』 新潮社
振内郷土史編集委員会 2010『郷土誌ふれない』 振内自治会
北海道教育庁社会教育部文化課編 1985『昭和59年度 アイヌ民俗文化財調査報告書(アイヌ民俗調査Ⅳ) 北海道教育委員会
北海道教育庁社会教育部文化課編 1988『昭和62年度 アイヌ民俗文化財調査報告書(アイヌ民俗調査Ⅶ) 北海道文化財保護協会
北海道教育庁生涯学習部文化課編 1991『平成2年度 アイヌ民俗文化財調査報告書(アイヌ民俗調査Ⅹ) 北海道文化財保護協会
北海道教育庁生涯学習部文化課編 1992『平成3年度 久保寺逸彦 アイヌ語収録ノート調査報告書(久保寺逸彦編 アイヌ語・日本語辞典稿)』 北海道教育委員会
北海道教育庁生涯学習部文化課編 1993『平成4年度 アイヌ民俗文化財調査報告書(アイヌ民俗調査ⅩⅡ) 北海道教育委員会
北海道教育庁生涯学習部文化課編 1996『平成7年度 アイヌ民俗文化財調査報告書(アイヌ民俗調査ⅩⅤ) 北海道教育委員会
北海道教育庁生涯学習部文化課編 1997『平成8年度 アイヌ民俗文化財調査報告書(アイヌ民俗調査ⅩⅥ) 北海道教育委員会
北海道教育庁生涯学習部文化課編 1998『平成9年度 アイヌ民俗文化財調査報告書(アイヌ民俗調査ⅩⅦ) 北海道教育委員会
北海道大学附属図書館編 1992『明治大正期の北海道』 北海道大学出版会
北海道日高振興局 2011『軽種馬生産を巡る情勢』(北海道日高振興局HPより)
北海道日高振興局 2012『ひだかの農業 2012(平成23年版)』
北海道立近代美術館、アイヌ文化振興・研究推進機構編 2006『アイヌ文様の美 線のいのち、息づくかたち』 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構
北海道立アイヌ民族文化研究センター 2001『ポン カンピソシ7 芸能』 アイヌ文化紹介冊子

ま 松浦武四郎 1850『初航蝦夷日誌』

松浦武四郎 1850『再航蝦夷日誌』
松浦武四郎 1850『三航蝦夷日誌』(松浦武四郎著　吉田武三校注 1970･1971『三航蝦夷日誌』上･下　吉川弘文館)
松浦武四郎 1856『竹四郎廻浦日記』(松浦武四郎著　高倉新一郎編 1978『竹四郎廻浦日記』上･下　北海道出版企画センター)
松浦武四郎 1859『丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌』(松浦武四郎著　秋葉実解読　高倉新一郎校訂 1982『丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌』上･下　北海道出版企画センター)
松浦武四郎 1859『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』(松浦武四郎著　秋葉実解読 1985『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』上･中･下　北海道出版企画センター)
松浦武四郎 1859『東西蝦夷山川地理取調図』(高倉新一郎編 1983『東西蝦夷山川地理取調図』 IK企画)
松浦武四郎 1859『蝦夷漫画』(松浦武四郎著 1972『蝦夷漫画』 国書刊行会)
松浦武四郎 1869『東蝦夷日誌三編』(松浦武四郎著　正宗敦夫編 1978「東蝦夷日誌三編」『覆刻　日本古典全集　多氣志樓蝦夷日誌集　三』 現代思想社)
松浦武四郎 1912『近世蝦夷人物誌』(松浦武四郎著　更科源蔵･吉田豊訳 2002『アイヌ人物誌』 平凡社ライブラリー423)
松前廣長 1781『松前志』(寺沢一ほか編 1985『蝦夷･千島古文書集成：北方未公開古文書集成』1　教育出版センター、冬至書房新社)
松宮観山 1710『蝦夷漫筆記』(高倉新一郎編 1969『日本庶民生活史料集成』4　三一書房)
三木昇 2006「沙流川流域の自然景観について -平取町文化的景観関連調査報告：自然と文化の相互作用の観点から-」『北海道平取町文化的景観保護推進事業第1年次報告書〈事業中間報告〉』 平取町教育委員会
三木昇 2007「自然植生景観の変遷 -平取町の植生を中心に-」『北海道平取町文化的景観保護推進事業第2年次報告書〈平取町文化的景観保存計画書･関連資料〉』 平取町教育委員会
村上島之允･間宮林蔵･村上貞助 文政六年(1823)『蝦夷生計図説』(河野本道･谷澤尚一解説 1990『蝦夷生計図説』北海道出版企画センター)
芽生小学校閉校実行委員会 1992『萌芽　平取町立芽生小学校閉校記念誌』

や
山田悟郎･柴内佐知子 1997「北海道の縄文時代遺跡から出土した堅果類 -クリについて-」『北海道開拓記念館研究紀要』25
山田秀三 1969「北海道のアイヌ語地名」『アイヌ民族誌』 第一法規出版(山田秀三 1995「北海道のアイヌ語地名十二話」『アイヌ語地名の研究』1　草風館)
山田秀三 1969「ユックチカウシ物語 -狩猟のアイヌ地名-」『北海道の文化』17　北海道文化財保護協会(山田秀三 1995『アイヌ語地名の研究』1　草風館)
山田秀三 1971『北海道の川の名』 北海道土木部河川課(山田秀三 1995『アイヌ語地名の研究』2　草風館)
山田秀三 1984『北海道の地名』 北海道新聞社
山田秀三 1986「平取と平尾鳥」『アイヌ語地名を歩く』 北海道新聞社(山田秀三 1993『東北･アイヌ語地名の研究』 草風館)
山田秀三 1990「チノミシリの意味」『ウエネウサラ』7(山田秀三 1995『アイヌ語地名の輪郭』 株式会社草風館)
山本融定 1987「日高地方の戦後開拓 -平取の東京開拓団」『北海道の文化』57　北海道文化財保護協会
山本融定 1988「日高地方の戦後開拓(二) -平取の東京開拓団」『北海道の文化』59　北海道文化財保護協会
横田良輔編 1954『神学博士ジョン･バチェラー生誕百年記念』 バチラー保育園
吉田巌 1913「アイヌの英雄神話 -アイヌラックルの説話-」『人類学雑誌』29-3(河野本道選 1984『アイヌ史資料集(第二期) 第二巻　吉田巌著作編(二)』 北海道出版企画センター)
吉田巌 1955『愛郷誌料　東北海道アイヌ古事風土記資料』 帯広市社会教育叢書1
吉田巌 1956『日新随筆〈東北海道アイヌ古事風土記資料〉』 帯広市社会教育叢書2
吉田巌 1957『愛郷譚叢〈アイヌ古事風土記資料〉』 帯広市社会教育叢書3

わ
早稲田大学語学教育研究所編 1984「会話Ⅰ」『アイヌ語音声資料1 -ワテケさんとサダモさん-(沙流方言) 会話･単語』
早稲田大学語学教育研究所編 1985「平賀の長者の話」『アイヌ語音声資料2　ワテケさんの昔話(沙流地方)』
早稲田大学語学教育研究所編 1985「夜襲」『アイヌ語音声資料2　ワテケさんの昔話(沙流地方)』
渡辺茂･河野本道 1974『平取町史』 平取町

英
Bronisław Piłsudski. Edited by MAJEWICZ, Alfred. F. 2004. The Collected Works of Bronisław Piłsudski Volume3, Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore Part2. In Cooperation with Majewicz Elizbieta. De Gruiter Mouton.

「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」
2007(平成19)年7月26日、重要文化的景観(国文化財)に選定

■文化的景観についてのお問い合わせ
平取町立二風谷アイヌ文化博物館
Nibutani Ainu Culture Museum
〒055-0101
北海道沙流郡平取町字二風谷55番地
電話:01457-2-2892
FAX:01457-2-2828
初　版:2014年6月
第2版:2020年3月